國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

阿含部十

林五邦譯

本緣部一

岡教邃譯

目次

（本丁）（通頁）

增壹阿含經（自卷第四十六 至卷第五十二）……〔七九三——九一三〕……一

卷の第四十六……〔七九三——八一三〕……一

放牛品第四十九第四分の別誦……一

卷の第四十七……〔八一三——八三四〕……二一

放牛品第四十九今分品……二一

卷の第四十八……〔八三五——八六〇〕……四五

禮三寶品第五十……四五

卷の第四十九……〔八六一——八八三〕……六九

非常品第五十一……六九

卷の第五十……〔八八四——八九六〕……九二

大愛道般涅槃品第五十二……九二

卷の第五十一……〔八九七——九一三〕……一〇五

大愛道般涅槃分品第五十二……一〇五

雜寶藏經解題……（一――二）……一二三
雜寶藏經……（一――一八四）……一二五
卷の第一……（一――二三）……一二五
一　十奢王の緣……一二五
二　王子肉を以て父母を濟ふの緣……一二七
三　鸚鵡子盲父母を供養するの緣……一三一
四　老を棄つる國の緣……一三二
五　佛忉利天上に於て母摩耶の爲に說法の緣……一三五
六　佛往昔の母迦旦遮羅を說くの緣……一三六
七　慈童女の緣……一三八
八　蓮華夫人の緣……一四一
九　鹿女夫人の緣……一四三
卷の第二……（二四――四六）……一四八
一〇　六牙白象の緣……一四八
一一　兎自身を燒き大仙に供養する緣……一四九
一二　善惡獼猴の緣……一五一

一三　佛智水を以て三火を滅するの縁……一五一
一四　波羅㮈國一長者の子と共に有るを天神感じて王孝を行ふの縁……一五三
一五　迦尸國王の白香象が盲父母を養ひ幷に二國を和せしの縁……一五五
一六　波羅㮈國の弟徴しく兄を諫めて遂に相承を徹し王を勸めて天下を教化するの縁……一五七
一七　梵摩達夫人妬み忌みて子の法護を傷くるの縁……一五八
一八　駝驃比丘謗らるゝの縁……一五八
一九　離越謗らるるの縁……一五九
二〇　波斯匿王の醜女頼提の縁……一六〇
二一　波斯匿王の女善光の縁……一六三
二二　昔王子兄弟二人國を驅り出さるの縁……一六四
二三　須達長者の婦佛を供養して報を獲るの縁……一六五
二四　婆羅那比丘が惡生王の爲に苦惱せらるゝの縁……一六六
二五　内官の犍せんとする牛を贖ひ男根を得たるの縁……一六八
二六　二内官の道理を諍ふの縁……一六九

卷の第三

……〔四七——七一〕……一七一
二七　兄弟二人倶に出家するの縁……一七一
二八　仇伽離が舍利弗等を謗るの縁……一七三
二九　龍王偈の縁……一七五

三〇　提婆達多が佛を毀傷せんと欲せし因縁……一八四
三一　共命鳥の縁……一八五
三二　白鵝王の縁……一八六
三三　大龜の因縁……一八七
三四　二輔相詭媾の縁……一八八
三五　山鷄王の縁……一八九
三六　吉利鳥の縁……一九〇
三七　老仙の縁……一九一
三八　二估客の因縁……一九二
三九　八天次第に法を問ふの縁……一九五
卷の第四……〔七三——八七〕……一九六
四〇　貧人麨團を以て施し現に報を獲るの縁……一九六
四一　貧女兩錢を以て布施し卽ち報を獲るの縁……一九八
四二　乾陀衞國の畫師罽那は食を設けて報を獲るの縁……二〇〇
四三　罽夷羅夫婦自ら賣りて會を設け現に報を獲るの縁……二〇一
四四　沙彌が蟻子の水災を救ひて長命の報を得たるの縁……二〇三
四五　乾陀衞國王の故き塔寺を治して延命を得たるの縁……二〇三
四六　比丘寺の壁孔を補ひ延命の報を獲たるの縁……二〇三
四七　長者の子佛を見て長命を求むるの縁……二〇四

四八　長者の子客作して會を設け現報を獲るの縁……二〇五
四九　弗那佛鉢に食を施して現報を獲るの縁……二〇六
五〇　大愛道が佛に金縷に織り成せる衣を施し幷に穿珠師の縁……二〇七

卷の第五

卷の第五……〔八八——一〇六〕……二一三
五一　天女本華鬘を以て迦葉佛に供養せしの縁……二一三
五二　天女本蓮華を以て迦葉佛塔に供養せしの縁……二一五
五三　天女八戒齋を受持し生天の縁……二一四
五四　天女本燈を然し供養するを以て天に生るゝの縁……二一六
五五　天女本車に乘り佛を見歡喜するを以て道を避くるの縁……二一七
五六　天女本華を以て佛に散じ化して華蓋となるの縁……二一八
五七　舍利弗摩提が佛塔を供養せし縁……二一八
五八　長者夫婦浮圖を造作し生天せし縁……二二〇
五九　長者夫婦信敬して佛を禮し生天せし縁……二二一
六〇　外道婆羅門の女佛弟子に學びて齋を作し生天せし縁……二二一
六一　貧女人氎を以て須達に施し生天せし縁……二二三
六二　長者の女三寶を信せず父金錢を以て雇ひ五戒を受持せしめ生天の縁……二二五
六三　女地を掃き佛を見るに由りて歡喜を生じ生天するの縁……二二三
六四　長者舍を造り佛を請し供養し舍を以て布施し生天するの縁……二二四
六五　婦甘蔗を以て羅漢に施し生天するの縁……二二四
六六　女人香を以て佛足に塗り生天するの縁……二二五

六七 須達長者の婢三寶に歸依し生天するの緣……二三六
六八 貧女佛より乞食して生天するの緣……二三七
六九 長者の婢が主の爲に食を送るに佛に値ひ卽ち施し報を獲て生天するの緣……二三七
七〇 長者の佛の爲に講堂を造り報を獲て天に生ずるの緣……二三八
七一 長者が王の造塔を見て亦復塔を造り報を獲て生天するの緣……二三九
七二 賈客が舍を造り佛を供養し報を獲て生天せし緣……二三九
卷の第六……〔一〇七―一二二〕……二三一
七三 帝釋事を問ふの緣……二三一
七四 阿若憍陳如等を度せし往日を說くの緣……二三九
七五 差摩子目を患ひ三寶に歸依して眼淨きことを得たるの緣……二三九
七六 七種施の因緣……二四一
七七 迦步王國天旱し佛を浴して雨を得るの緣……二四二
七八 長者舍利弗・摩訶羅を請するの緣……二四三
卷の第七……〔一二三―一三七〕……二四七
七九 婆羅門如意珠を以て佛に施し出家得道するの緣……二四七
八〇 十力迦葉實言を以て佛足の血を止むるの緣……二四八
八一 佛菩提樹下に在り魔王波旬來り佛を惱さんと欲すの緣……二四九
八二 佛諸比丘の爲に利養の災患を說くの緣……二五〇
八三 賊殺さるゝに臨み遙に佛を見歡喜して生天するの緣……二五一
八四 手足を刖せられし人佛恩を感念して生天を得るの緣……二五二
八五 長者好蜜漿を以て行人に供養し生天を得るの緣……二五一

八六　波斯匿王の人を遣し佛を請し王使を爲すに由り生天する縁……三五三
八七　波斯匿王勸化乞索の時貧人あり氎を以て王に施し生天せし縁……二五三
八八　兄常に弟を勸め三寳を奉修せしむるも弟敬信せず兄は生天を得るの縁……二五四
八九　父は子の得道を聞き歡喜し卽ち生天を得るの縁……二五五
九〇　子其父の爲に逼られ出家し生天の縁……二五五
九一　羅漢祇夜多惡龍を驅りて海に入るの縁……二五五
九二　二比丘の祇夜多を見て生天を得るの縁……二五八
九三　月氏國王の阿羅漢祇夜多を見る縁……二五九
九四　月氏國王三智臣と善親友と作る縁……二六〇

卷の第八……〔一三八——一五三〕……二六二

九五　拘尸彌國の輔相夫婦は佛に惡心なりしが佛卽ち化導し須陀洹を得る縁……二六一
九六　佛弟の難陀佛の爲に逼られ出家得道するの縁……二六四
九七　大力士曠野の群賊を化する縁……二六八
九八　輔相法を聞きて欲を離るゝの縁……二七二
九九　尼乾子火聚を投じて佛の爲に度せらるゝの縁……二七三
一〇〇　五百の白雁、法を聽きて生天せし縁……二七五
一〇一　提婆達多の護財醉象を放ちて佛を害せんと欲する縁……二七八

卷の第九……〔一五四——一七〇〕……二七八

一〇二　迦栴延惡生王の爲に八夢を解くの縁……二七八

一〇三　金猫の因縁……二八二
一〇四　惡生王五百の鉢を得るの縁……二八三
一〇五　毘摩天を求め大富を得んことを望む縁……二八五
一〇六　鬼子母子を失ふ縁……二八六
一〇七　天祀主の縁……二八六
一〇八　樹神を祀る縁……二八七
一〇九　婦女欲を厭ひ出家するの縁……二八七
一一〇　不孝の子苦報を受くるの縁……二八八
一一一　難陀王、那伽斯那と共に論ずるの縁……二八八
一一二　不幸の婦其の姑を害せんと欲して反て其の夫を殺す縁……二九〇
一一三　波羅奈王塚間の喚を聞くの縁……二九一
一一四　老比丘四果を得る縁……二九三
一一五　女人の至誠道果を得る縁……二九四

卷の第十……〔一七一——一八四〕……二九五

一一六　優陀羨王の縁……二九五
一一七　羅睺羅の因縁……二九九
一一八　老婆羅門諂僞を問ふ縁……三〇三
一一九　婆羅門の婦が姑を害せんと欲する縁……三〇五
一二〇　烏梟怨を報ずるの縁……三〇七
一二一　婢の羊と共に闘ふの縁……三〇八

◇　◇

索引……卷末

卷の第四十六

放牛品第四十九[一]　第四分の別誦

一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し[三]放牛兒にして、十一法を成就せば、牛群終に長益せず、亦復其の牛を將護すること能はじ。云何が十一と爲すや。是に於て放牛人、亦其の色を別たず、其の相を解せず、[四]摩刷す應くして摩刷せず、瘡痍を覆護せず、時に隨つて[五]放烟せず、良田茂草の處を知らず、安隱之處を知らず、亦復牛を渡すの處所を知らず、時宜を知らず、若しは[六]犖牛の時遺餘を留めず、盡く取りて之を犖る。是の時諸の大牛の任用す可き者、時に隨つて將護せず。是れを比丘、若し牧牛人にして、此の十一法を成就せば、終に其の牛を長養し、其の身を將護すること能はじと謂ふなり。

今此の衆中の比丘も亦復是の如くんば、終に長益する所有ること能はじ。云何が十一と爲すや。是に於て比丘、其の色を別たず、其の相を曉らず、摩刷す應くして摩刷せず、瘡痍を覆護せず、時に隨つて放煙せず、良田茂草の處を知らず、渡處を知らず、亦復安隱之處を知らず、時宜に食することを知らず、遺餘を留むることを知らずば、諸の長老の比丘をも亦敬待せじ。云何が比丘色を知らざるや。是に於て比丘、四大及び四大所造の色有るも、皆悉く知らず。是の如きの比丘、其の色を別たざるなり。云何が比丘其の相を別たざるや。是に於て比丘、[七]行愚を知らず、亦[八]行智を知らず、實の如くに知らず、是の如きの比丘、其の相を別たざるなり。云何が比丘、摩刷す應くして摩

【一】放牛品以下十一法を明す。

【二】A. XI. 18 Gopāla (1) 及び M.33. Mahā Gopālaka S. (大牧人經)に該當し、漢譯雜阿含經卷四十七、第九經、及び後秦代鳩摩羅什譯の放牛經はその異譯である。

【三】放牛兒・放牛人 (Gopālaka)

【四】巴利中阿含には、「蠅の卵(Āsāṭika)を除き去らず」とあり。

【五】蟲などを驅除するため、隨時燻すこと。

【六】犖牛の時とは乳をしぼり取る時をいふ。

【七】行愚　(八)行智とは比丘の行ひの上に智・愚の別あること。巴利文には Kammalakkhaṇo bālo (業用の愚かなもの) Kammalakkhaṇo paṇḍito (業相の賢れたもの) とあり。

刷せざるや。是に於て比丘、若し眼、色を見れば便ち色想を起して、諸の亂念有り、又且眼根を守護せず、以て善く念を攝して、衆の殃釁を造らず、眼根を守護せず。是の如く比丘にして、若しは耳に聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、意法を知れば、諸の亂想を起し、亦意根を守護せず、其の行を改めず。是の如きの比丘、摩刷す應くして摩刷せざるなり。

云何が比丘にして瘡を覆護せざるや。是に於て比丘、欲想を起して捨離せず、亦其の念を除去せず、若しは瞋想・殺害想を起し、諸の惡不善の想を起して、終に之を捨てず。是の如きの比丘、瘡を覆護せざるなり。云何が比丘、時に隨つて煙を起さざるや。是に於て比丘、諷誦する所の法を、時に隨つて人に向つて說かず。是の如きの比丘、時に隨つて放煙せざるなり。云何が比丘、良田茂草の處を知らざるや。是に於て比丘、四意止を知らず、實の如くに知らず。是の如きの比丘、良田茂草の處を知らざるなり。云何が比丘にして渡處を知らざるや、是に於て比丘、賢聖八品道を別たず。是の如きの比丘、渡處を知らざるなり。云何が比丘、愛する所を知らざるや。是に於て比丘、十二部契經・祇夜・授決・偈・因緣・本末・方等・譬喩・生經・說・廣普・未曾有法に於てなり。是の如く比丘、愛する所を知らざるなり。云何が比丘にして時宜を知らざるや。是に於て比丘、便ち輕賤の家、博戲の家に往くなり。是の如く比丘、時宜を知らざるなり。云何が比丘にして、遺餘を留めざるや。是に於て比丘、有信の梵志・優婆塞、往いて之を請ず。然るに諸比丘飲食に貪著して止足を知らず。是の如きの比丘、遺餘を留めざるなり。云何が比丘にして、長老の諸高德の比丘を敬はざるや。是に於て比丘、恭敬の心を起して、諸の有德の人に向はず。是の如きの比丘、多く所犯有るなり。是れを比丘にして長老を敬はずと謂ふなり。若し比丘有りて十一法を成就せば、終に此の法中に於て、饒益する所多きこと能はじ。

若し復牧牛人にして、十一法を成就せば、能く其の牛を擁護して、終に時を失はず、饒益する所

有らん。云何が十一と爲すや。是に於て牧牛人、其の色を知り、其の相を別ち、摩刷す應くして摩刷し、瘡痍を覆護し、時に隨つて煙を起し、良田茂草の處を知り、要處を渡すを知り、其の牛を愛し、時宜を分別し、亦性行を知り、若し犢牛の時は遺餘を留むるを知り、亦復時に隨つて將護し、任用す可き者を知る。是の如く牧牛人は牛を將護するなり。是の如く比丘、牧牛人にして此の十一法を成就して、時節を失はずば、終に沮壞す可からざるなり。

是の如く比丘にして、若し十一法を成就せば、此の現法中に於て饒益する所多からん。云何が十一法なるや。是に於て比丘、色を知り、相を知り、摩刷を知り、瘡を覆護するを知り、煙を起すを知り、良田茂草の處を知り、愛する所を知り、道を擇ぶ行を知り、渡處を知り、食するに止足を知り、長老の比丘を敬奉し、時に隨つて禮拜するを知るなり。云何が比丘にして色を知るや。是に於て比丘、四大の色を知り、亦四大所造の色を知る。是れを比丘にして色を知ると謂ふなり。云何が比丘にして相を知るや。是に於て比丘、愚相を知り、智相を知り、實の如くに之を知る。是の如きの比丘、相を知るなり。云何が比丘にして摩刷を知るや。是に於て比丘、若し欲想起らば、念じて捨離を知り、亦殷勤せず、永く欲想無けん。若しは恚想・害想及び諸の惡不善の想起らば、念じて捨離を知り、亦殷勤せず、永く恚想無けん。是の如きの比丘、摩刷を知ると爲すなり。

云何が比丘にして瘡を覆護するを知るや。是に於て比丘、若し眼色を見るも、色想を起さず、亦染著せずして眼根を淨め、愁憂惡不善の法を除去し、心貪樂せず、中に於て眼根を護る。是の如く比丘、若しは耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、意法を知るも識想を起さず、亦染著せずして意根を淨む。是の如きの比丘、瘡を覆護することを知るなり。云何が比丘にして、煙を起すことを知るや。是に於て比丘、從つて聞く所の法を、廣く人の與に說く。是の如きの比丘、煙を起すことを知ると爲すなり。云何が比丘にして、良田茂草の處を知るや。是に於て比丘、賢聖

八品道を實の如くに之を知るなり。是れを比丘、良田茂卓の處を知ると謂ふなり。云何が比丘にして愛する所を知るや。是に於て比丘、若し如來所說の法寶を聞かば、心便ち愛樂す。是の如きの比丘、愛する所を知ると爲すなり。云何が比丘にして道を擇びて行ずるや。是に於て比丘、十二部經に於て、擇びて之を行ず。所謂契經・祇夜・授決・偈・因緣・本末・方等・譬喩・生經・說・廣普・未曾有法なり。是の如きの比丘、道を擇びて行ずるを知るなり。

云何が比丘にして、渡處を知るや。是に於て比丘、四意止を知る。是れを比丘にして渡處を知ると謂ふなり。云何が比丘にして、食するに止足を知るや。是に於て比丘、有信の梵志・優婆塞來つて請ぜば、飲食を貪らず、能く自ら止足す。是の如きの比丘、止足を知ると爲すなり。云何が比丘、時に隨つて長老の比丘を恭奉するや。是に於て比丘、恒に身・口・意に善行を以て、諸の長老の比丘に向ふ。是の如きの比丘、時に隨つて長老の比丘を恭奉するなり。是の如く若し十一法を成就せば、現法中に於て饒益する所多からん」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

牧牛にして放逸ならずんば　其の主其の福を獲ん　六牛六年中に展轉して六十牛ならん　比丘にして戒成就せば　禪に於て自在を得ん　六根寂然として　六年に六通を成ぜん

「是の如く比丘、若し人有りて能く此の惡法を離れ、後の十一法を成ぜば、現法中に於て饒益する所多からん。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘にして十一法を成就せば、必ず能く成長する所有らん。云何が十一と爲すや。是に於て比丘、戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就し、諸根寂靜にして、飲食

に止足を知り、恒に共法を修行し、亦其の方便を知り、其の義を分別し、利養に著せず。是の如く比丘にして、若し此の十一法を成就せば、長養するに堪任せん。然る所以は、一切諸行に正しく十一法有ればなり」と。

爾の時阿難、世尊に白して言さく、「何を以ての故に、正しく十一法有りて、出づる者有ること無きや。云何が十一と爲すや」。「所謂阿練若・乞食・一處坐・一時食・正中食、家を擇ばずして食し、三衣を守り、樹下に坐し、閑靜之處に露坐し、補納衣を著け、若しは塚間に在り。是れを比丘、人有りて此の十一法を成就せば、便ち能く所至有りと謂ふなり。我今復重ねて汝に告げん。若し人有りて十一年中、此の法を學ばば、卽ち現身に於て阿那含を成じ、轉身して便ち阿羅漢を成ぜん。諸比丘、且く十一年を捨てゝ、若しは九・八・七・六・五・四・三・二・一年此の法を學ばゞ、便ち[八]二果、若しは阿那含、若しは阿羅漢を成ぜん。且く十二月を捨てゝ、若しは能く一月之中、其の法を修行せば、彼の比丘、必ず二果、若しは阿那含、若しは阿羅漢を成ぜん。然る所以は、十二因緣皆十一法中に出づ、所謂生・老・病・死・愁・憂・苦・惱なり。我今諸比丘に教へん。當に迦葉比丘の比の如くなるべし。設し人有りて[九]謙苦之法を行ぜば、此の行及び難けん。然る所以は、迦葉比丘は此の十一法を成就すればなり。當に知るべし、過去の[一〇]多薩阿竭成等正覺も亦、此の十一の苦法を成就せり。今の迦葉比丘は、皆一切の衆生を愍念せり。若し過去の諸の聲聞を供養せば、後に身方に乃ち報ひを受くることを得當し。設し迦葉を供養せば、現身に便ち其の報ひを受けん。設し我無上等正覺を成ぜずば、後當に迦葉に由りて等正覺を成ずべし。此の因緣に由るが故に、迦葉比丘は過去の諸の聲聞に勝るゝなり。其れ能く迦葉比丘の如くんば、此れ則ち上行なり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

【八】二果とは阿那含果、阿羅漢果をいふ。

【九】謙苦之法とは苦を嫌ふ法のこと。

【一〇】多薩阿竭 (Tathāgata) は如來と譯す。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國[二]祇樹給孤獨園に在しき。爾の時佛、無數の衆生の與に前後に圍遶せられて、爲に法を說きたまひき。爾の時舍利弗、衆多の比丘を將ひて經行し、大目乾連及び大迦葉・阿那律・離越[三]・迦旃延[四]・滿願子・優波離・須菩提・羅云・阿難比丘、各各衆多の比丘を將ひて、自ら相娛樂み、提婆達兜も亦復衆多の比丘を將ひて、自ら經行しき。

爾の時世尊、諸の神足の弟子の、各、其の衆を將ひて、自ら經行するを見たまひぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「人の根・情・性は各各相似たり。善なる者は善なると共に幷り、惡なる者は惡なると共に幷ること、猶し乳の乳と相應し、酥の酥と相應し、糞の屎尿と各自相應するが如し。此れも亦是の如く、衆生の根源に行ずる所の法は、則ち各自相應す。善なる者は善なると相應し、惡なる者は惡なると相應す。汝等頗ふらくは、舍利弗比丘の諸比丘を將ひて經行するを見る乎」と。諸比丘、佛に白して言さく、「唯然り、之を見る」と。佛、比丘に告げたまはく、「此の如く諸人は皆智慧之士なり」と。又比丘に告げたまはく、「汝等頗ふらく、目連比丘の諸比丘を將ひて經行するを見る乎」と。諸比丘、佛に白して言さく、「唯然り、之を見る」と。佛、之に告げて曰はく、「此の諸比丘は皆是れ神足の士なり」と。又問ひたまはく、「汝等迦葉の諸比丘を將ひて經行するを見る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り之を見る」と。佛之に告げて曰はく、「此の諸の上士は皆是れ[五]十二頭陀行法之人なり」と。又問ひたまはく、「汝等阿那律比丘を見るや不乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と、佛之に告げて曰はく、「此の諸賢士は皆天眼第一なり」と。又問ひたまはく、「頗ふらくは離曰比丘を見るや不乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。佛、比丘に告げたまはく、「此の諸人は皆是れ入定之士なり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは迦旃延比丘を見るや不乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。佛、之に告げて曰はく、「此の諸上士は皆是れ義理を分別するの人なり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは、滿

【一】 S. 14. 15 Kamma.

【二】 巴利文には王舍城耆闍崛山の說法となれり。

【三】 離越(Revata)は離曰に同じ。阿含部八の通頁四五を見よ。

【四】 迦旃延(Kaccāyana)佛弟子中分別布演第一と稱せらる。于禪尼國王の輔師の子。巴利語文典の祖と稱せらる。

【五】 十二頭陀行法、阿含部八、通頁四五、頭陀の註を見よ。

願子比丘を見るや不乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り之を見る」と。佛、比丘に告げたまはく、「此の諸賢士は皆是れ說法之人なり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは優波離の諸比丘を將ひて、經行するを見る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。佛之に告げて曰はく、「此の諸人は皆是れ禁律を持つ之人なり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは須菩提比丘を見るや不乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。佛之に告げて曰はく、「此の諸の上人は皆是れ解空第一なり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは羅云比丘を見るや不乎」と。諸比丘佛に白して言さく、「唯然り、之を見る」と。佛、之に告げて曰はく、「此の諸賢士は皆是れ戒具足の士なり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは、阿難比丘を見るや不乎」と。諸比丘佛に白して言さく、「唯然り、之を見る」と。佛諸比丘に告げたまはく、「此の諸賢士は皆是れ多聞第一にして、受くる所を忘れざるなり」と。又問ひたまはく、「汝等頗ふらくは、提婆達兜比丘の諸人を將ひて經行するを見る乎」と。諸比丘、對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。佛之に告げて曰はく、「此の諸人は惡を爲すの首にして、善本有ること無し」と。爾の時世尊便ち斯の頌を說きたまはく、

惡知識と　愚なると共に從事すること莫かれ　當に善知識と　智者と交通すべし　若し人本惡
無きも　惡人に親近せば　後必ず惡因を成じ　惡名天下に遍からん

と。

爾の時提婆達兜の弟子三十餘人、世尊の此の偈を說きたまふを聞き已つて、便ち提婆達兜を捨てゝ佛の所に來至し、頭面に足を禮し、重罪を改めんことを求め、又世尊に白さく、「我等愚惑にして、眞僞を識らず、善知識を捨てゝ惡知識に近づけり。唯願くは世尊、當に原恕せ見るべし。後更に犯さじ」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝の悔過を聽さん、往を改めて來を修し、復更に犯すこと勿れ」と。爾の時提婆達兜の弟子、世尊の教誡を承け、閑靜之處に在りて妙義を思惟し、已に剋ちて

法を行じ、族姓子の鬚髮を剃除し、出家學道せし所以の、無上の梵行を修せんと欲しぬ。爾の時諸比丘、皆阿羅漢を得たり。「比丘、當に知るべし、衆生の根源は皆、自ら相類す、惡なる者は惡なると相ひ從ひ、善なる者は善なると相ひ從ふ。過去將來の衆生の根源も、亦復是の如く、類を以て相從ふこと、猶し淨は淨と與なるを以て相應し、不淨なる者は不淨と相應するが如し、是の故に比丘、當に淨と相應することを學び、不淨を去離すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、[16]拘留沙[17]法行城中に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時象舍利弗、還つて法服を捨て、[18]白衣の行を習ひぬ。爾の時阿難、衣を著け、鉢を持し、城に入りて乞食し、漸漸に[19]象舍利弗の家に至りぬ。爾の時象舍利弗、兩女人の肩上に憑れり。阿難遙に見已つて、便ち愁憂不歡之想を懷きぬ。象舍利弗、阿難を見已つて、極めて慚愧を懷き、獨處して坐しぬ。

爾の時阿難、乞食周く訖り、還つて城を出で、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時阿難、佛に白して言さく「向に城に入つて乞食し、漸漸に象舍利弗の家に至りしに、兩婦人の肩上に扶りしを見ぬ。之を見し時に當り、甚だ愁憂を懷きぬ」と。世尊告げて曰はく「汝見已つて、何の意を生ぜしと爲すや」と。阿難、佛に白して言さく「我念ずらく『象舍利弗は精進多聞にして、性行柔和なり、長く諸の梵行之人の與に、說法して厭足無かりしに、云何が如今還つて法服を捨てゝ、白衣の行を習ふや』と、時に我見已つて甚だ愁憂を懷きぬ。然して此の象舍利弗は大神力有りて威德無量なり。自ら念ずらく『我昔曾て釋提桓因と共に論ぜしを見しに、云何が今日欲を習ひて惡を爲すや』」と。世尊告げて曰はく「是の如し、阿難、汝の言ふ所の如し、但阿羅漢に非ればなり。夫れ阿羅漢なれば、終に還つて法服を捨てゝ、白衣の行を習はざるなり。但し今

【一六】　拘留沙(Kuru)　阿含部八、通頁二五〇註句留を見よ。沙(su)文法上複數の於格を表す語尾。

【一七】　法行城は拘留の一邑劍磨瑟曇(Kammāsadhamma)のこと、同註を見よ。

【一八】　白衣の行とは在家生活のこと。出家は黃衣を纏ひ、在家のものは白衣を纏えり、黃衣を纏ふ出家に對して在俗のものを白衣といふ。

【一九】　象舍利弗(Hatthi Sāriputta).

阿難、愁悒を懷くこと勿れ。象舍利弗は却後七日にして、當に此の間に來至し、有漏を盡くして、無漏行を成ずべし。然して此の象舍利弗は、〔二〇〕宿行の牽く所の故に、此れを致す耳。今行具に滿ちて、當に有漏を盡すべし」と。

爾の時象舍利弗、却後七日にして、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、須臾にして退いて坐し、佛に白して言さく「唯然り、世尊、末行に在ることを聽したまへ、沙門の行を修せん」と。爾の時象舍利弗比丘、卽ち沙門と作ることを得、尋いで座上に於て阿羅漢を得たり。

爾の時象舍利弗、衣を著け、鉢を持して城に入り、乞食す。時に梵志有り、便ち斯の念を生ずらく「此の諸の〔二一〕釋種子、處として有らざるは無く、處として遍からざるは無し。又我等の所行の呪術を遏絕せり。吾今當に城中の人民に向つて、此の沙門の瑕舋を說くべし」と。爾の時此の梵志、城中の人民に語げて曰く「汝等諸人、頗ふらくは象舍利弗を見る乎。昔日自ら稱して言く『是れ阿羅漢なり』と。中(頃)還つて法服を捨てゝ白衣の行を習ひ、五欲と與に相娛樂み、今復更に沙門と作り、家家に乞食し、佯つて貞廉を現じ、諸の婦人を觀て欲情の想ひを興し、還つて園中に至り、女色を思惟して、心首を去らず、亦乏驢の負駄に任へず、寂然として臥して住するが如く、此の釋種子も亦復是の如し。佯つて乞食を現じ、諸の女色を觀て思惟し挍計せり」と。

爾の時象舍利弗、此の梵志の惡聲の響有るを聞き、便ち此の念を生ずらく「此の人極めて愚癡爲り、嫉妬の心を興し、他の利養を得るを見て慳嫉の心を起す。若し己利養を得ば、便ち歡喜を懷き、白衣の家主に至りて誹謗を行ぜん。吾今當に制して惡を爲さゞら令め、此の人をして、罪を受くること無量なら令むること無かるべし」と。爾の時象舍利弗、空中に飛在して、梵志に告げて曰く、

眼無く巧便無く　意を興して梵行を謗り　自ら無益の事を造りて　久しく地獄の苦しみを受けん

〔二〇〕宿行は宿業に同じ。

〔二一〕釋種子とは釋迦族の子の意。

と。爾の時象舍利弗、此の偈を說き已つて、便ち自ら退還して所在に還歸りぬ。

是の時城中の人民、梵志の誹謗を聞き、又象舍利弗の偈を說くを聞き、各〻斯の念を生ずらく、「若し當に梵志の語の如くなるべくんば、然る後に神足を現ずるも及び難く、又我等還つて法衣を捨てゝ、白衣の行を習ふを見ん」と。是の時衆多の人民、各各相將ひて象舍利弗の所に至り、頭面に足下を禮し、一面に在りて坐せり。爾の時衆多の人民象舍利弗に問ふて曰く、「頗ふらくは、阿羅漢にして、法服を捨てゝ白衣の行を習ふこと有りや」と。象舍利弗報へて曰く、「阿羅漢にして、還つて法服を捨てゝ、白衣の行を習ふこと有ること無し」と。是の時諸の人民、象舍利弗に白して言く、「阿羅漢は頗ふらくは本緣に由りて戒を犯す乎」と。象舍利弗報へて言く、「已に阿羅漢を得ば終に戒を犯さじ」と。諸の人民復白して言く、「學地に在るの人、本緣に由るが故に戒を犯す乎」。象舍利弗報へて言く、「若し學地に住するの人有らば、本緣に由るが故に、禁戒を犯さん」と。時に諸の人民、復白して言く、「尊者は先に已に是れ阿羅漢なりしに、後復法服を捨てゝ白衣の行を習ひ、五欲に於て自ら相娛樂み、今復出家學道せり。本先に神足有りしに、今何の故に乃ち爾るや」と。爾の時象舍利弗、便ち此の偈を說けり。

世俗の禪に遊ぶも　至竟して解脫せず　滅盡の跡を得ず　復五欲を習へり　薪無くんば火は燃えず　根無くんば枝は生ぜず　石女は胎有ること無く　羅漢は漏を受けず

と。

爾の時諸の人民復、象舍利弗に問ふて曰く、「尊は先に羅漢に非らざりし乎」と。象舍利弗報へて曰く、「我先に羅漢に非らざりしなり。諸の居士、當に知るべし。五通と六通とは各々差別あり、今當に十一通を說くべし。夫れ五通の仙人は、欲愛已に盡く、若し〔三〕上界に生ぜば、復來つて欲界に墮せん。六通の阿羅漢如來の弟子は、漏盡通を得ば、即ち無餘涅槃界に於て般涅槃せん」と。時に

【三】上界とは色界・無色界をいふ。

諸の人民復白して言く、「我等象舍利弗の所說を觀察するに、世間に阿羅漢にして、還つて法服を捨てゝ、白衣の行を習ふもの有ること無し」と。時に象舍利弗報へて曰く、「是の如し、汝の言ふ所の如く、阿羅漢にして、還つて法服を捨てゝ、白衣の行を習ふ者有ること無し。十一法の阿羅漢にして習はざる所の者有り。云何が十一と爲すや、漏盡阿羅漢は終に法服を捨てゝ、白衣の行を習はず。漏盡阿羅漢は終に不淨行を習はず。漏盡阿羅漢は終に殺生せず、漏盡阿羅漢は終に盜まず。漏盡阿羅漢は食して終に遺餘を留めず。漏盡阿羅漢は終に妄語せず。漏盡阿羅漢は終に群類相佐けず。漏盡阿羅漢は終に惡言を吐かず。漏盡阿羅漢は終に狐疑有らず、漏盡阿羅漢は終に恐懼せず。漏盡阿羅漢は終に餘師に受けず。又更に〔二三〕胞胎を受けず。是れを諸賢士、漏盡阿羅漢は終に十一之地に處らずと謂ふなり」と。爾の時諸の人民、象舍利弗に白して言く、「我等、尊者の所說を聞き、外道異學を觀ずるに、空瓶を觀ずるが如くして、所有無し。今內法を察するに蜜瓶に如似て甘美ならざるは靡し。今如來の正法も亦復是の如し。今彼の梵志罪を受くること無量ならん」と。爾の時象舍利弗、虛空に飛在し、結跏趺坐して便ち此の偈を說きぬ。

　彼此の要を解らず　外道の術を習ひ　彼此にして鬪亂するは　智者の行ぜざる所なり

と。

　爾の時拘留沙の人民、象舍利弗に白して言く、「所說過多にして、實に及び難しと爲すこと、猶し盲者の眼を得、耳聾者の聽くことを得るがごとし。今尊者の所說も亦復是の如く、無數に方便して法教を說く、我等今日自ら如來の法及び比丘僧に歸せん、唯願くは尊者、聽して優婆塞と爲せ、〔二四〕形壽を盡して復殺生せじ」と。爾の時象舍利弗、諸の人民の與に微妙の法を說き、歡喜の心を發さ令め、各々座從り起ち、足を禮して去りぬ。

　爾の時尊者阿難、梵志の象舍利弗を謗るを聞くも、然も至る所無し。尙象舍利弗を熟視すること

〔二三〕胞胎を受けずとは再生せざることをいふ。

〔二四〕形壽を盡くすとは生命のあらん限り、生涯をいふ。

能はず、況んや與共に論ぜんをや。卽ち世尊の所に往き、此の因緣を以て、具さに如來に白せり。
爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「夫れ平等の阿羅漢を論ぜんには、當に象舍利弗是れを說くべきなり。然る所以は、今象舍利弗は已に阿羅漢を成ぜり。昔傳ふる所の羅漢の名は今日已に獲たり。世俗の五通は眞實の行に非らず、後必ず還つて失はん。六通は是れ眞實の行なり。然る所以は、此の象舍利弗は先に五通有りて、今六通を獲たり。汝も亦當に學んで象舍利弗に及ぶべし。此れは是れ其の義なり、當に念じて奉行すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[二五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今當に因緣之法を說くべし。善く之を思念して、其の行を修習せよ」と。諸比丘、佛に白して言さく、「唯然り、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受けぬ。世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて因緣之法と爲すや。所謂無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六入を緣じ、六入は[二六]更樂を緣じ、更樂は[二七]痛を緣じ、痛は愛を緣じ、愛は受を緣じ、受は有を緣じ、有は生を緣じ、生は死を緣じ、死は憂・悲・苦・惱を緣じて稱計す可からず。是の如く此の五陰之身を成ずるなり。
彼云何が名けて無明と爲すや。所謂苦を知らず、集を知らず、[二八]盡を知らず、道を知らず。此れを名けて無明と爲すなり。彼云何が名けて行と爲すや。所謂行とは三種有り、云何が三と爲すや。所謂身行・口行・意行、是れを行と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて識と爲すや。所謂六識身是れなり。云何が六と爲すや、所謂眼・耳・鼻・舌・身・意識、是れを六と爲すと謂ふなり。云何が名けて名と爲すや。所謂名とは痛・想・念・更樂・思惟、是れを名と爲すなり。彼云何が色と爲すや。所謂四大身及び四大身所造の色なり。是れを名けて色と爲すと謂ふなり。色異り、名異るが故に名色と曰ふなり。彼云何が六入・內の六入と名くるや、云何が六と爲すや。所謂眼・耳・鼻・舌・身・意入、是れを六入と謂ふ

【二五】 S. 12. 2 Vibhaṅga M. 9 Sammādiṭṭhi S の後半。
【二六】 更樂は觸に同じ。
【二七】 痛は受に同じ。
【二八】 盡とは滅に同じ。

なり。彼云何が名けて更樂と爲すや。所謂六更樂身なり。云何が六と爲すや、所謂眼・耳・鼻・舌・身・意更樂、是れを名けて更樂と爲すと謂ふなり。彼云何が痛と爲すや。所謂三痛なり。云何が三と爲すや、所謂樂痛・苦痛・不苦不樂痛、是れを名けて痛と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて愛と爲すや、所謂三愛身是れなり。[二九]欲愛・[三〇]有愛・[三一]無有愛、是れを愛と爲すと謂ふなり。云何が受と爲すや、所謂[三二]四受是れなり。云何が四と爲すや、所謂欲受・見受・戒受・我受、是れを四受と謂ふなり。彼云何が有と爲すや、所謂三有なり。云何が三と爲すや、欲有・色有・無色有、是れを名けて有と爲すなり。彼云何が生と爲すや。所謂生とは等しく出處を具し、諸有を受け、五陰を得、諸入を受く、是れを生と爲すと謂ふなり。彼云何が老と爲すや、所謂彼彼の衆生、此の身分に於て、齒落ち髮白く、氣力劣竭して諸根純熟し、壽命日に衰へて復本識無し。是れを老と爲すと謂ふなり。云何が死と爲すや、所謂彼彼の衆生、展轉して形を受け、身體溫無く、無常變易して五親分張し、五陰の身を捨つれば命根斷壞す。是れを死と爲すと謂ふなり。比丘當に知るべし、故に名けて老病死と爲し、此れを名けて因緣之法と爲し、遍く其の義を分別し、諸佛如來の施行して大慈哀を起す應き所を、吾今已に辨ぜり。當に念じて樹下露坐に在り、若しは塚間に在るべし。當に念じて坐禪して、恐難を懷くこと勿るべし。今精勤せずんば、後悔するも益無けん」と。

爾の時阿難、世尊に白して言さく、「如來は諸比丘の與に甚深の緣本を說きたまへり。然るに我觀察するに甚深之義無し」と。世尊告げて曰く、「止みなん、止みなん、阿難、此の意を興すこと勿れ。然る所以は、十二因緣は極めて甚深爲り、是れ常人の能く明曉する所に非らず。我昔未だ此の因緣の法を覺らざりし時、生死に流浪して出期あること無かりき。又復阿難、但今日のみにあらず、汝の因緣を甚深ならずと言ふこと、昔日已に來つて甚深ならずと言ひしなり。然る所以は、乃ち昔過去世の時、須焰阿須倫王有りて、竊に此の念を生じ、日月を捉へんと欲し、大海水を出して化身し、

【二九】 欲愛(Kāmataṇhā)とは欲情をいふ。
【三〇】 有愛(bhavataṇhā)とは生存に對する欲望。
【三一】 無有愛(abhavataṇhā)とは生存を否定する厭世欲をいふ。
【三二】 四受とは四取のこと。阿含部八、通頁三二三の註を見よ。

極めて大にして、海水腰に齊し。爾の時彼の阿須倫王に兒有り、拘那羅と名く。自ら其の父に白さく、『我今海水に於て沐浴せんと欲す』と。須焰阿須倫報へて曰く、『海水中に樂しみて浴すること莫れ。然る所以は、海水極めて深く、且廣く、終に海水中に浴するに堪任せざればなり』と。時に拘那羅白して言く、『我今水を觀るに、大王の腰に齊し。何を以ての故に復甚だ深しと言ふや』と。是の時阿須倫王卽ち兒を取りて、大海水中に著けぬ。爾の時阿須倫兒の足水底に至らず、極めて恐怖を懷きぬ。爾の時須焰、其の子に告げて曰く、『我先に汝に勅して、「海水甚だ深し」と、汝苦しみ無しと言ふや。唯我能く大海水に在りて洗浴す、汝の能く洗浴する所に非らず』と。爾の時の須焰阿須倫とは、豈異人ならん乎、是の觀を作すこと莫かれ。然る所以は、須焰とは卽ち我身是れなり。爾の時の阿須倫兒とは卽ち汝の身是れなり。爾の時海水甚だ深きに、汝苦しみ無しと言へり。今復十二因緣を甚深之法と言ふに、汝復是れ甚深無しと言へり。其れ衆生有りて、十二緣法を解らずば、生死に流轉して出期有ること無く、皆悉く迷惑して行本を識らず、今世より後世に至り、後世從り今世に至り、永く五惱の中に在りて、出づることを求むるも甚だ難し。我の如きは初め佛道を成じ、十二因緣と思惟して魔の官屬を降伏し、以て無明を除きて慧明を得、諸闇永く除きて復塵垢無し。又我阿難、三轉十二して此の緣本を說きし時、卽ち覺道を成ぜり。此の方便を以て知る、十二緣法は極めて甚深爲り、常人の能く宣揚する所に非らず。是の如く阿難、當に念ずること甚深にして、此の十二因緣之法を奉持すべし。當に念じて是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[三三] 聞くこと是の如し。一時佛、[三四]羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時羅閱城中に梵志有り、名けて[三五]施羅と曰ひ、備く諸術を知り、外道異學の[三六]經籍の記する所、天文

【三三】 M. 92. Sela S. Sutta-nipāta P. 02. Selasutta.
【三四】 巴利文には千二百五十の比丘衆とともに、アングッタラーパ(Aṅguttarāpa)を遊行し、アーパナ村(Āpaṇa-gama)に滞在とあり。
【三五】 施羅(Sela)。
【三六】 經籍とは典籍のこと。

地理に貫練せざるは靡く、又復五百の梵志童子を教授せり。又彼の城中に異學の士有り、名けて翅[三七]寗と曰ひ、多く知る所有りて、頻毘娑羅王の爲に愛敬せ所れ、時に隨つて供養し、梵志に所須の施を給與せり。

爾の時如來の名稱遠布し、「如來・至眞・等正覺・明行成・善逝爲り・世間解・無上士・道法師・天人師・佛・衆祐と號し、人を度すること無量にして、世間に出現したまへり」と。是の時翅寗梵志、此の念を興さく、「如來の名號甚だ聞き難しと爲す。今我往いて問訊し、親近禮敬せんと欲す」と。是の時翅寗梵志、便ち佛所に往いて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時梵志、世尊に白して言さく、「沙門瞿曇は姓を何等と爲すや」と。佛梵志に告げたまはく、「吾姓は刹利なり」と。梵志問ふて曰さく、「諸の婆羅門各此の論有り、『吾姓は最豪にして、出づる者有ること無し』と。或は言く、『姓は[三八]白なり』と、或は言く、『姓は黑なり』と、婆羅門自ら稱して言く、『梵天の所生なり』と、今沙門瞿曇は何等を論說せんと欲するや」と。佛之に告げて曰はく、「梵志、當に知るべし、其れ婚姻嫁娶有れば、便ち當に豪貴之姓を求むべし。然るに我正法之中には、高下是非の名姓有ること無きなり」と。梵志復白して言さく、「云何が瞿曇、生處清淨にして、然る後に法清淨を得るや」と。佛、梵志に告げたまはく、「汝法清淨を用つて、生處清淨と爲す乎」と。梵志又曰さく、「諸の婆羅門各此の論を興せり、『吾姓は最も豪にして、出づる者有ること無し』と、或は言く、『姓は白なり』と、或は言く、『姓は黑なり』と、婆羅門自ら稱して言く、『梵天の所生なり』」と。

佛梵志に告げたまはく、「若し當に刹利の女、婆羅門の家に適きて、設し男兒を生まば、當に何の姓に從ふべきや」と。梵志報へて曰さく、「彼當に婆羅門種と言ふべし。然る所以は、父の遺形に由るが故に此の兒有ることを得たればなり」と。佛梵志に告げたまはく、若し復婆羅門の女、出でゝ刹利の家に適きて男兒を生まば、彼當に何の姓に從るべきや」と。梵志報へて曰さく、「彼の人當に

【三七】翅寗(Koṇiya)

【三八】白・黑は善・惡の異名。

是れ刹利種なるべし。然る所以は、父の遺形に由るが故に此の兒有ることを得ればなり」と。佛、梵志に告げたまはく、「熟に自ら思惟して、然る後に吾に報へよ。汝の今の所說は、前と後と皆相應せず。云何が梵志、設し驢、馬に從ひ後駒を生まば、當に是れ馬と言ふべきや、是れを驢と爲すや」と。梵志報へて曰さく、「此の如き之類は當に驢馬と言ふべし。然る所以は、驢の遺形に由るが故に、此の駒を得たればなり」と。佛、梵志に告げたまはく、「汝熟に思惟して、然る後に吾に報へよ、汝の今の說く所、前後相應せず。汝の前に說きし所は、刹利の女出でゝ婆羅門の家に適き、若し兒を生まば、便ち婆羅門種と言ひ、今驢、馬を逐ふて駒を生まば、便ち驢馬と言ふ、將た前語に違せざる乎。設し復梵志、若し馬、驢を逐ひて駒を生まば、之を名けて云何ん」と。梵志報へて曰さく、「當に名けて馬驢と爲すべし」と。佛之に告げて曰はく、「云何が梵志、馬驢と驢馬と豈復異り有らん乎。若し復人有りて、寶一斛と言ひ、復人有りて、一斛の寶と言ふ。此の二義豈異り有らん乎」と。梵志報へて曰さく、「此れは是れ一義なり。然る所以は、寶一と一寶とは此の義異らざればなり」と。佛、梵志に告げたまはく、「云何が馬驢と驢馬と、此れ一義に非らず乎」と。梵志報へて言さく、「今沙門瞿曇は斯の言有りと雖も、然も婆羅門は自ら稱して言く、『吾姓は最も豪にして、出づる者有ること無し』」と。佛、梵志に告げたまはく、「汝先に其の母を稱譽して、後復其の父を歎說せり。若し復父も亦是れ婆羅門種、母も亦是れ婆羅門にして、後二兒を生み、彼の時其の中の一兒は諸の技術多く、事として覽ざるは無く、第二子の者、了りて所知無し。是の時父母、何者を敬待すと爲んや、當に有智の者を敬待すべしと爲んや、當に所知無き者を敬待すべしと爲んや」と。梵志報へて曰さく、「其の父母は當に高德にして聰明の者を敬待す應し、智有ること無き者を敬待す應からず。然る所以は、今此の一子は、事として了らざるは無く、事として聞かざること無ければ、正しく此の子を敬待す應く、無智の子を敬待す應からざるなり」と。

佛、梵志に告げたまはく、「若し彼の二子、一の聰明の者は、便ち復意を興して殺・盜・淫泆の十惡之法を作し、彼の一子の不聰明の者、身・口・意行に十善之法を守護し、一は犯す所無くば、彼の父母當に何れの者を敬待す應きや」と。梵志報へて曰さく、「彼の父母は當に十善を行ずる之子を敬待すべし。彼の不善を行ずる之人復敬待爲んや」と。佛、梵志に告げたまはく、「汝先に其の多聞を歎じ、後に其の戒を歎ぜり。云何が梵志、若し復二子有りて、一子は父專正にして、母專正ならず、一子は父專正ならずして、母專正なり。彼の子若し母正しくして、父正しからずば、事として聞かざるは無く、博く經術を知る。第二子は父正しくして母正しからずば、既に博學ならざるも、但十善を持つ。然して其の父母は何れの者を敬待す應きや。當に母淨にして父不淨なる者を敬待すべしと爲んや、當に父淨にして、母不淨なる者を敬待すべしと爲んや」と。梵志報へて曰さく、「當に母淨之子を敬待す應し。然る所以は、經書を知り、諸の技術を博くするに由るが故に、所謂第二子は父淨にして、母は淨ならず、復戒を持つと雖も智慧無く、竟に何んぞ至る所(あらん)。聞有らば則ち戒有らん」と。佛梵志に告げたまはく、「汝前に父の淨なるを歎說して、母の淨なるを歎說せず、今復母の淨なるを歎說して、父の淨なるを歎說せず、先に聞の德を歎じて、後に禁戒を歎ぜり。復戒を歎說して、後に方に聞を說けり。

云何が梵志、若し彼の二梵志の子、其の中一子は多聞にして博學、兼ねて十善を持ち、其の第二子は既に智慧有り、兼ねて十惡を行ず。彼の父母は當に何れの者を敬待す應きや」と。梵志報へて曰さく、「當に父淨にして、母不淨之子を敬ふ應し。然る所以は、其の諸經を博覽し、諸の技術を曉るに由ればなり。父淨なるに由つて生みて此の子を得、兼ねて十善を行じて觸犯する所無く、一切諸の德本を具足するが故に」と。佛之に告げて曰はく、「汝本其の姓を說き、後其の聞を說いて其の姓を說かず。後復戒を說いて聞を說かず。後復其の聞を說いて其の戒を說かず。汝今父母聞戒を歎

說す、豈前言に違せざる乎」と。梵志佛に白して言さく、「沙門瞿曇、斯の言有りと雖も、然も婆羅門自ら稱して言く、『我姓は最も豪貴にして、出づる者有ること無し』」と。

世尊告げて曰はく、「諸有の嫁娶之處、則ち姓を論ず。然るに我法中此の義有ること無し。汝頗ふらくは、邊國遠邦及び餘の邊地の人を聞く乎」と。梵志報へて曰さく、「唯然り、之を聞く、此の諸人有り」と。世尊告げて曰はく、「彼の土の人民に二種之姓有り、云何が二と爲すや、一には人、二には奴、此の二姓亦復定まらず」と又問ひまつらく、「云何が不定なるや」と。世尊告げて曰はく、「或は先に人と作り、後に奴と作る。或は先に奴と作り、後に人と作る、然も衆生之類、盡く同一類にして若干無し。若し復梵志、天地敗るゝ時世間皆空なり。是の時山河石壁草木之徒、皆悉く燒盡し、人も亦命終す。若し天地還つて成ぜんと欲する時、未だ日月年歲之限有らず。爾の時光音天此の間に來至す。是の時光音天の福德稍盡きて、復精光無く、展轉して相視、欲想を興起す。欲意偏多の者は便ち女人を成じ、欲意少き者は男子を成じ、展轉交接して便ち胞胎を成ず。此の因緣に由るが故に最初に人有り、轉じて四姓を生み、天下に流布す。當に此の方便を以て知るべし。人民盡く刹利種より出づ」と。

爾の時梵志、世尊に白して言さく、「止みなん、止みなん、瞿曇、僂者の伸ぶることを得、盲者の眼目を得、冥者の明を見ることを得るが如し。沙門瞿曇も亦復是の如く、無數の方便もて我與に法を說きたまへり。我今自ら沙門瞿曇に歸しまつらん。唯願くは我與に法を說き、優婆塞爲ることを聽させたまへ」と。爾の時梵志復世尊に白さく、「唯願くは如來、當に我請を受けたまふべし。諸の比丘衆を將ひて、當に我家に至りたまふべし」と。爾の時世尊、默然として請を受けたまひぬ。是の時梵志、佛の默然として請を受けたまひしを見、即ち座從り起ち、頭面に足を禮して便ち退いて去り、還つて家中に至り、飮食を辦具し、諸の座具を敷き、香汁を地に灑ぎ、並に自ら叶言すら

く、「如來は當に此に於て坐したまふべし」と。
爾の時施羅梵志、五百の弟子を將ひて、翅䦶梵志の家に至り、遙に彼の家を見るに、好座具を敷けり。見已つて翅䦶梵志に問へり。「汝今男女の與に嫁娶せんと欲してや、摩竭國頻毘娑羅王を請ぜんと欲するが爲に乎」と。翅䦶梵志報へて曰く、「我亦頻毘娑羅王を請ぜず、亦嫁娶之事無し。我今大福業を施設せんと欲してなり」と。施羅梵志問ふて曰く、「願くは其の意を聞かん、何の福業を施さんと欲するや」と。爾の時[三九]（翅䦶梵志、施羅梵志に報へて曰く）、「當に知るべし、釋種子有り、出家學道して無上至眞等正覺を成ぜり。我今佛及び比丘僧を請ぜり。是の故に種種の座具を辨ずる耳」と。是の時施羅梵志、翅䦶梵志に語ぐらく、「汝今佛と言ひし乎」と。報へて曰く、「吾今師と言へり」と。又問ふ、「甚だ奇なり、甚だ特なり、今乃ち佛の音響を聞く。如來は竟に所在爲るや、吾之を見たてまつらんと欲す」と。翅䦶報へて曰く、「今羅閱城外の竹園中に在し、五百の弟子を將ひて自ら相娛樂みたまふ。往いて見たてまつらんと欲せば、宜しく是れ時を知るべし」と。

時に此の梵志卽ち五百の弟子を將ひ、佛の所に往至し、到り已つて共に相問訊し、一面に在りて坐しぬ。爾の時施羅梵志、便ち此の念を生ずらく、「沙門瞿曇は極めて端正爲り、身黄金色を作したまふ。我等の經籍にも亦斯の言有り、『如來出世之時は實に遇ふ可からざること、猶し優曇鉢花の時時に乃ち現ずるが如し。若し[四〇]三十二相八十種好を成就せば、當に二處に趣くべし。若し在家ならば當に轉輪聖王と作るべし。七寶具足せん。若し出家學道せば、必ず無上道を成じ、三界の世祐と爲らん』と、我今佛の三十二相を觀んと欲す」と。爾の時梵志唯三十相を見て、二相を觀ず、狐疑猶豫を起せり。廣長舌と陰馬藏とを見ず。爾の時施羅梵志、卽ち偈を以て問ひて曰さく、

吾聞く三十二　大人之相好を　今二相を見たてまつらず　竟に何れの所に在りと爲んや　貞潔
の陰馬藏　其の相甚だ喩へ難し　頗ふらくは廣長舌の　耳を舐めて面を覆ふこと有りや不や

【三九】元本明本による。

【四〇】三十二相、阿含部八、通頁六九の註を見よ。

願くば廣長舌を出して　我をして狐疑無から使めたまへ　又我をして之を見せ使めて永く疑結の網の無からんことを

と。

増壹阿含經卷第四十六

卷の第四十七

放牛品第四十九今分品

爾の時世尊、卽ち舌を吐き、左右して耳を舐め、還つて復之を縮めたまへり。爾の時世尊卽ち三昧に入り、彼の梵志をして陰馬藏を見せ使めたまひぬ。時に梵志、佛の三十二相八十種好を見、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。爾の時施羅梵志、佛に白して言さく、「我今婆羅門にして、沙門は剎利種なり。然も沙門婆羅門は皆同一道にして、一解脫を求む。唯沙門、我等同一道を得ること有るを聽したまふ乎」と。佛、梵志に告げたまはく、「汝此の見有りや」と。梵志報へて白さく、「我斯の見有り」と。佛梵志に告げたまはく、「汝當に意を興して一解脫に向ふべし。所謂正見是れなり」と。梵志、佛に白して言さく、「正見は卽ち是れ一解脫なりや、復更に解脫有り乎」と。世尊告げて曰はく、「梵志、更に解脫して涅槃界を得ること有り、其の事に八有り、所謂正見・正治・正語・正業・正命・正方便・正念・正定、是れを梵志八種之道、涅槃に至ることを得と謂ふなり」と。

爾の時梵志、佛に白して言さく、「頗ふらくは此の衆生、此の八種道を知ること有り乎」と。世尊告げて曰はく、「一百千に非らざるなり。梵志當に知るべし。無數百千の衆生、此の八種之道を知るなり」と。梵志佛に白して言さく、「頗ふらくは、復此の衆生にして、此の八種之道を解せざること有り乎」と。世尊告げて曰はく、「此の衆生にして、其の解せざる者の有ること、一人に非らざるなり」。梵志佛に白して言さく、「頗ふらくは復衆生の此の法を得ざるもの有り乎」と。佛之に告げて曰はく、「此の衆生にして道を得ざるもの有り。此の如き之人十一種あり、云何が十一と爲すや、所謂姦僞にして惡語のもの、諫め難く、反復無し。憎惡を好むの性にして、父母を害し、阿羅漢を殺し、善根善事を斷ち、反つて惡を爲し、我有りと計し、惡念を起して如來に向ふ。是れを梵志、十

一之人此の八種之道を得る能はずと謂ふたり」と。此の八種道を說きたまふ時に當り、是の時彼の梵志、諸の塵垢盡きて眼淨を得たり。

爾の時施羅梵志、五百の弟子に告げて曰く、「汝等各ゝ好む所の者は、各自ら誦習せよ。吾如來の所に於て、善く梵行を修めんと欲す」と。諸弟子白して曰く、「我等も亦復出家學道せんと欲す」と。爾の時梵志及び五百の弟子、各各長跪して、世尊に白して言さく、「唯願はくは世尊、出家學道することを聽させたまへ」と。佛諸の梵志に告げたまはく、「善來比丘、如來の所に於て、善く梵行を修め、漸く苦の原を盡くせよ」と。如來の此の語を說きたまふ時、五百の梵志卽ち沙門を成じぬ。爾の時世尊、漸く五百人の與に、微妙の論を說きたまへり。所謂論とは「施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、出要を樂と爲す」と。諸佛世尊の常に說法したまふ所の法、苦・集・盡・道なり。爾の時世尊、廣く諸人の與に之を說きたまひぬ。時に五百人、諸漏永く盡きて上人の法を得たり。

爾の時翅寗梵志又白さく、「時到れり、唯願はくは神を屈したまへ」と。爾の時世尊、施羅等五百の比丘に告げたまはく、「汝等各衣を著け、鉢を持せよ」と。千比丘圍遶して城中の梵志の所に至り、座に就いて坐しぬ。爾の時翅寗梵志、五百の婆羅門皆沙門と作りしを見、卽ち之に告げて曰く、「善い哉、諸人、道に趣く之要は復、是れに過ぐるは莫し」と。爾の時施羅比丘、翅寗の爲に此の偈を說いて曰く、

此の外更に法の　能く此の要に勝る者は無し　此の如き之比像　善き者の是れに過ぐるは無し

と。

爾の時翅寗梵志、世尊に白して言さく、「唯願はくは世尊、小しく神を留めて時を待ちたまへ。正しく、爾らば、更に飲食を辦ぜん」と。世尊告げて曰はく、「辦ずる所の飮食、但時に之を晋げ、足らざることを懼るゝことを勿れ」と。是の時翅寗梵志、歡喜すること無量にして、躬自ら食を行き、佛

【一】善來とは善くぞ來れりの意、入團許可の最も簡單な形。

【二】比像とはかたどり比らべること。

及び比丘僧に供養しぬ。爾の時世尊、飲食已に訖つて食器を除去し、若干種の華を以て、佛と比丘僧との上に散じ、前んで佛に白して言さく、「唯願はくは世尊、男女大小盡く優婆塞と作ることを求めん」と。爾の時梵志婦懷妊せり。婦人、佛に白して言さく、「我娠むこと有り、亦是れ男なるや、是れ女なる耶を知らず。亦復自ら如來に歸しまつる。優婆夷爲ることを聽させたまへ」と。爾の時如來、諸大衆の與に微妙の法を說き、卽ち座上に於て此の偈を說きたまはく、

快い哉斯の福の報ひ　所願必ず果を得ん　漸く安隱處に至り　永く憂厄の患ひ無からん　死しては天上に生るゝことを得ん　設使諸魔天も　亦復福を爲す者をして　罪に墮せ使むること能はじ　彼も亦方便を求め　賢聖之智慧　當に苦の本を盡くして　長く八難を離去すべし

と。爾の時世尊、此の偈を說き已つて、便ち座從り起ちて去りたまひぬ。爾の時翅寧梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

三 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我恒に一坐して食せば、身體輕便にして、氣力强盛なり。汝等比丘も亦、當に四一食すべくんば、身體輕便、氣力强盛にして、梵行を修むることを得ん」と。爾の時五跋提婆羅、世尊に白して言さく、「我一食に堪任せず。然る所以は、氣力弱劣なればなり」と。佛之に告げて曰はく、「若し汝檀越の家に至らば、一分は之を食し、一分は持して家に還えれ」と。跋提婆羅、佛に白して言さく、「我亦此の法を行ずるに堪えず」と。世尊告げて曰はく、「汝に齊を壞ることを聽さん。通日にして食せよ」と。跋提婆羅、佛に白して言さく、「我亦此の法を施行するに堪任せず」と。爾の時世尊、默然として報へたまはざりき。

爾の時六迦留陀夷、暮れて日入るに向ひ、衣を著け、鉢を持して城に入りて乞食せり。爾の時極

【三】 M. 65 Bhaddāli S. M. 66 Laṭukikopama S. 漢譯中阿含第百九十四經跋陀和利經中阿含第百九十二經迦樓烏陀夷經。

【四】 一食(ekāsanabhojana)

【五】 跋提婆羅(Bhaddāli)。

【六】 迦留陀夷(Kaludāyi)は佛弟子中在俗に喜ばるゝ第一のものと稱せらる。迦維羅城の大臣の子にして、佛成道の後、淨飯王の命により、釋尊をして歸城せしむ。その名を優陀夷(Udāyi)といひ、容貌黑きが故に黑優陀夷(Kāludāyi)と呼ばる。

めて闇冥爲り、時に迦留陀夷、漸漸に長者の家に至れり、又彼の長者の婦懷妊せり。沙門の外に在りて乞食するを聞き、即ち自ら飯を持して出でゝ、之に恵施す。然るに優陀夷の顏色極めて黑し。又彼の時天降雨せんとして處處に掣電す。爾の時長者の婦、門を出でゝ沙門の顏色の極めて黑きを見、即時に驚怖し、乃ち「是れ鬼」と呼び、自ら便ち稱喚すらく、「咄、我鬼を見たり」と、即時に胎を傷め、兒尋いで命終せり。是の時迦留陀夷、尋いで精舍に還えり、愁憂ひて歎ばず。坐して自ら思惟し、悔ひるも及ぶ所無し。爾の時舍衛城中に此の如きの惡聲有り、「沙門釋種子は呪して他子を墮せり」と。其の中の男女各相謂ひて言く、「今諸の沙門の行ひ節度無し、食するに時を知らず。在家白衣の如くして、何等の異り有りや」と。

爾の時衆多の比丘、諸の人民の各此の理を論ずるを聞けり。「沙門釋種子は節度を知らず、行來に忌むこと無し」と。其の中の持戒の比丘にして、戒の完具する者は、亦自ら怨責すらく、「實に我等之宜しきに非らざるなり。食に禁限無く、行くに時節無し。實に是れ我等之非なり」と。各共に相將ひて佛所に至り、頭面に足を禮し、此の因緣を以て、具に世尊に白せり。爾の時佛、一比丘に告げたまはく、「汝往いて迦留陀夷を喚び來ら使めよ」と。是の時彼の比丘、佛の教へを受け已つて、即ち往いて優陀夷を喚べり。時に優陀夷、佛に呼ば見しを聞き、即ち世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時世尊、優陀夷に問ひて曰はく、「汝審し、昨日暮に城に入りて乞食し、長者の家に至りて、長者の婦をして胎墮せ使めし乎」と、優陀夷、佛に白して言さく、「唯然り、世尊」と。佛、優陀夷に告げたまはく、「汝何故に時節を別たず、又復觸らんとして城に入りて乞食せしや。此れ汝宜しきに非らず。然も是れ族姓子の出家學道して食に貪著するなり」と。爾の時優陀夷、即ち座從より起ち、世尊に白して言さく、「今自り之後、敢て復犯さじ、唯願くは世尊、懺悔を聽受したまへ」と。

【七】優陀夷(Udāyi)上の〔六〕を見よ。

爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「速に犍椎を打ちて諸比丘を集め、普會講堂に在れよ」と。阿難佛の教へを受け已つて、即ち諸比丘を集め、講堂の前に集在し、佛に白して言さく、「諸比丘已に集まれり。世尊、宜しく是れ時を知りたまふべし」と。爾の時世尊、即ち講堂に往き、中央に在りて坐し、諸比丘に告げたまはく、「過去久遠の諸佛世尊は皆、一坐して食し諸の聲聞等も亦一坐して食せり。正使將來の諸佛及び弟子の衆も亦、當に一坐して食すべし。然る所以は、此れは是れ行道之要法にして、當に一坐して食す應し。若し能く一坐して食せば、身體輕便にして、心開解を得ん。心已に解ることを得ば、諸の善根を得ん。已に善根を得ば、便ち三昧を得ん。已に三昧を得ば、如實にして之を知らん。云何が實の如くして之を知るや。所謂苦諦を實の如くして之を知り、苦集諦を實の如くして之を知り、苦盡諦を實の如くして之を知り、苦出要諦を實の如くして之を知る。汝等族姓子、已に出家學道して、世の八業を捨てゝ時節を知らずんば、彼の貪欲之人の如きと、何の差別有らんや。梵志には別に梵志之法有り、外道には別に外道之法有り」と。

是の時優波離、世尊に白して言さく、「過去の如來、將來の諸佛、皆一坐して食したまはん　唯願くは世尊、當に諸比丘と與に、時を限りて食したまふべし」と。世尊告げて曰はく、「如來も亦此の智有り、但し未だ犯さざるは、要は眼前に罪有ればなり。乃ち當に制限すべき耳」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我専ら一坐して食す、汝等も亦當に一坐して食すべし。今汝日中にして食して、時を過ぐることを得ざれ。汝等も亦當に乞食之法を學ぶべし。云何が比丘は乞食之法を學ぶや。是に於て比丘、食は以つて命を支へ、得るも亦喜ばず、得ざるも亦憂へず、設し食を得し時は、思惟して食し、貪著之心有ること無く、但此の身趣の形を存することを得使めんと欲し、舊痛を除去して、更に新しきを造らず、氣力をして充足せ使めよ。是の如きを比丘、名けて乞食と爲すなり。汝等比丘、當に一坐して食す應し。云何が比丘、一坐して食するや。起てば則ち食を犯し

て、更に食す應からず。是の如きを比丘、名けて一坐して食すと爲すなり。汝等比丘も亦、當に食を得て之を食す應し。云何が比丘、得て之を食するや。是に於て比丘、以つて食を得已つて、更に復此れを齊つことを爲すこと有り乎、以て食し更に得ば復食す應からず。是の如く比丘、食を得て之を食するなり。汝等比丘も亦、當に三衣を著く應く、應に樹下に坐し、閑靜處に坐すべく、應に露坐し苦行すべく、應に補納衣を著くべく、塚間に在る應く、弊惡之衣を著く應し。然る所以は、少欲之人を歎說すればなり。我今汝等に教へん、當に迦葉比丘の如くなるべし。然る所以は、迦葉比丘は自ら頭陀十二法を行じ、亦復人に此の要法を行ずることを教へばたり。我今汝等に教誡せん。當に面王比丘の如くなるべし。然る所以は、面王比丘は弊壞之衣を著け、校飾を著けざればなり。是れを比丘、我之教誡と謂ふなり。當に念じて修習すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時跋提婆羅、三月を經るに及ぶも、世尊の所に至らず。爾の時阿難、三月に臨むの初め、跋提婆羅比丘の所に至りて、之に告げて曰く、「今諸の衆僧皆衣裳を補納せり。是の如く如來は當に人間に遊行したまふべし。今往かずんば後悔するも益無けん」と。是の時阿難、跋提婆羅を將ひて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、並に復佛に白して言さく、「唯然り、世尊、我懺悔を聽させたまへ、今自り已後更に之を犯さじ。如來は禁戒を制したまひしに、然も我之を受けざりき。唯願くは恕しを垂れたまへ」と。是の如きこと再三なり。是の時佛告げて曰はく、「汝の悔過を聽さん、後復犯すこと莫かれ。然る所以は、我自ら念ずるに、生死無數にして、或は驢・騾・駱駝・象・馬・猪・羊と作り、草を以て此の四大形を養ひ、或は地獄の中に在りて、熱鐵丸を以て之を噉ひ、或は餓鬼と作りて、恒に膿血を食ひ、或は人形と作りて、此の五穀を食ひ、或は天形と作りて、自然の甘露を食ひ、無數劫中に形命共に競ひ初めて厭足無し。優波離當に知るべし、火は薪を獲て初めて厭足無

【八】 面王比丘（Mogharāja）盧王と譯す。漢譯に面王とせしは、原語を Mukharāja と見しもの）婆羅門の出にして、佛弟子中弊衣第一と稱せらる。初め師の命によつて、佛陀の如何なる人なるやを見んとして、遂に佛陀の弟子となりしもの。

きが如く、大海水は流を呑みて足ること無きが如し。今凡夫之人も亦復是の如く、食を貪りて厭足無きなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

　生死は斷絕せず　皆貪欲に由るが故に　怨憎其の惡を長ずるは　愚者之習ふ所なり

是の故に跋提婆羅、當に少欲知足を念じて、貪りの想ひを起して、諸の亂念を興すこと無かるべし。是の如く優波離、當に是の學を作すべし」と。

　爾の時跋提婆羅、如來の教誡を聞き已つて、閑靜之處に在りて自ら剋責し、族姓子の出家學道する所以の無上の梵行を修め、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて、更に復有を受けず、實の如くして知り、爾の時跋提婆羅、卽ち阿羅漢を成ぜり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我弟子中第一の聲聞にして、飮食多き者は、所謂吉護比丘是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

　[九]聞くこと是の如し。一時佛、[一〇]鴦藝村中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諸の人民皆汝等を稱して沙門と爲せり。設し復汝等に、『是れ沙門なり乎』と問はば、汝等も亦是れ『沙門なり』と言はん。吾今汝に告げん、[一一]沙門之行と　[一二]婆羅門之行と、汝等當に念じて修習すべし。後必ず果を成ぜんこと、實の如くして異らじ。然る所以は、二種の沙門有り、習行沙門有り、誓願沙門有り。彼れ云何が名けて習行沙門と爲すや。是に於て比丘、行來・進止・視瞻・容貌・衣を著け、鉢を持する、皆悉く法の如くして、貪欲・瞋恚・愚癡に著せず、但持戒精進して、非法を犯さず、等しく諸戒を學ぶ。是れを名けて習行沙門と爲すと謂ふなり。彼云何が誓願沙門と名くるや。是に於て或は比丘有り、威儀・戒律・出入・進止・行步・容貌・視瞻・擧動皆悉く如法にして、有漏を盡くして無漏を成じ、現法中に於て身に證を得て自ら遊化し、生死已に盡き、梵行已に

【九】 M. 39 Mahā assapura S. 漢譯中阿含百八十二經馬邑經、
【一〇】 鴦藝村(Anga) 巴利文には鴦伽國の馬邑村 (Assapura nigama)の滯在とせり。
【一一】 沙門之行 (samaṇakaraṇa)。
【一二】 婆羅門之行(brāhmaṇakaraṇa)。

立ち、所作已に辨じて、更に復有を受けず、實の如くに之を知る。是れを名けて誓願沙門と謂ひ、是れを比丘二種の沙門と謂ふなり」と。

爾の時阿難、世尊に白して言さく、「彼れ云何が名けて沙門の法行、婆羅門の法行と爲すや」と。佛阿難に告げたまはく、「是に於て比丘、飲食に足るを知り、晝夜經行するに時節を失はず、諸の道品を行ずるなり。云何が比丘諸根寂靜なるや、是に於て比丘、若し眼色を見るも想著を起して、諸の亂念を興さず、中に於て眼根清淨を得、諸の惡念を除き、不善之法を念ぜず。若しは耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、意法を知るも、想著を起して諸の亂念を興さず、意根に於て清淨を得、是の如く比丘、六根清淨を得るなり。云何が比丘、飲食に足るを知るや。是に於て比丘、腹を量りて食し、肥白を求めず、但此の身趣をして存せ使めんと欲し、已に故痛を除去し、新しきは生ぜず、梵行を修むることを得ること、猶し男女身の瘡痍を生ぜんに、時に隨つて膏を以て瘡に塗り、常に瘡をして愈や使めんと欲するが如きが故に。今此の比丘も亦復是の如く、腹を量りて食するなり、膏を以て車を膏す所以の者は、遠きを致さんと欲するが故に、比丘、腹を量りて食するは、趣命を存せんと欲するが故なり。是の如く比丘、飲食に足るを知れ。

云何が比丘、恒に警寤を知るや。是に於て比丘、初夜・後夜に恒に警寤を知り、三十七道品之法を思惟し、若し晝日に經行せんに、惡念諸結之想を除去し、復初夜後夜に於て經行せんに、惡結不善之想を除去し、復中夜に於て右脇を地に著け、脚を以て相累ね、唯明に向ふ之想あり、復後夜に於て出入經行せんに、不善之念を除去す。是の如く比丘、時を知りて警寤す。是の如く阿難、此れは是れ沙門の要行なり。

彼れ云何が婆羅門の要行と名くるや。是に於て比丘、苦諦を實の如くに之を知り、苦集・苦盡・苦出要を實の如くして之を知り、後此れを解するを以て、欲漏心・有漏心・無明漏心にし解脫を得、

已に解脱を得ば便ち解脱智を得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じて、更に復胎を受けず、實の如くに之を知る。此れを名けて婆羅門の要行之法と爲すなり。阿難當に知るべし、此れを名けて要行之義と爲すなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

沙門を息心と名く　諸惡永く已に盡くればなり　梵志を淸淨と名く　諸の亂想を除去すればなり

是の故に阿難、沙門の法行、婆羅門の法行は、當に念じて修行すべし。其れ衆生ありて、此の諸法を行ぜば、然る後に乃ち稱して沙門と爲すなり。復何を以ての故に名けて沙門と爲すや。諸結永く息むが故に名けて沙門と爲すなり。復何を以ての故に、名けて婆羅門と爲すや、盡く愚惑之法を除くが故に名けて梵志と爲すなり。亦名けて刹利と爲す。復何を以ての故に刹利と名くるや。其れ婬・怒・癡を斷ずるを以ての故に、名けて刹利と爲すなり。亦名けて沐浴と爲す、何を以ての故に名けて沐浴と爲すや。其れ二十一結を洗ふを以ての故に、名けて沐浴と爲すなり。亦名けて覺と爲す。何を以ての故に名けて覺と爲すや、其れ愚法慧法を覺了するを以ての故に名けて覺と爲すなり。亦名けて彼岸と爲す、何等を以ての故に名けて彼岸と爲すや、其れ此岸從り彼岸に至るを以ての故に、名けて彼岸と爲すなり。阿難、能く此の法を行ぜば、然る後に乃ち名けて沙門婆羅門と爲すなり。此れは是れ其の義なり、當に念じて奉行すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

〔三〕聞くこと是の如し。一時佛、釋翅迦毗羅越尼拘留園中に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時提婆達兜王子、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時提婆達兜、佛に白して言さく、「唯然り、世尊、我道次に沙門と作ることを得ることを聽させたまへ」と。佛、提婆達兜に告げたまはく、「汝宜しく家に在りて分檀惠施すべし。夫れ沙門爲ること、實に易からずと爲

【三】 Cv. 7.3-4; Dhp. A. I. p. 138

せばなり」と。是の時提婆達兜、復再三佛に白して言さく、「唯然り、世尊、未行に在ることを聽させたまへ」と。佛復告げて曰はく、「汝宜しく家に在るべし。出家して沙門の行を修す宜からず」と。爾の時提婆達兜、便ち此の念を生ずらく、「此の沙門は嫉妬の心を抱けり。我今宜しく自ら頭を剃りて、善く梵行を修むべし。何ぞ是れ沙門を用ふと爲んや」と。是の時提婆達兜、即ち自ら退き歸へり、自ら鬚髪を剃り、袈裟を著け、自ら稱して言く、「我は是れ釋種子なり」と。

爾の時一比丘有り、修羅陀と名く。頭陀行乞食し、補衲衣を著け、五通清徹せり。是の時提婆達兜、彼の比丘の所に往至し、頭面に足を禮し、前んで白して言く、「唯願くは尊者、當に我與に教へを說きて、長夜にして安隱を獲せ使むべし」と。是の時修羅陀比丘、即ち與に威儀禮節を說けり、「此の法を思惟し、此れを捨てゝ彼れに就けよ」と。是の時提婆達兜、彼の比丘の教への如くして漏失せず。是の時提婆達兜、比丘に白して言く、「唯願くは尊者、當に我與に神足通を說くべし。我能く此の道を修行するに堪任せん」と。爾の時比丘復與に神足之道を說き、「汝今當に心意の輕重を學ぶべし。已に心意の輕重を知れば、復當に四大地・水・火・風之輕重を分別すべし。已に四大の輕重を知ることを得ば、便ち當に自在三昧を修行すべし。已に自在三昧を行ぜば、復當に勇猛三昧を修すべし。已に勇猛三昧を行ぜば、復當に心意三昧を修行すべし。已に心意三昧を行ぜば、復當に自戒三昧を行ずべし。已に自戒三昧を修行せば是の如く久しからずして、便ち當に神足道を成ずべし」と。爾の時提婆達兜、師の教へを受け已つて、自ら心意の輕重を知り、復四大の輕重を知り、盡く諸の三昧を修して漏失する所無く、爾の時久しからずして、便ち神足之道を成じ、是の如く無數に方便して變を作すこと無量なり。爾の時提婆達兜の名聲四遠に流布しぬ。

是の時提婆達兜、神足力を以て、乃至三十三天の種種の優鉢蓮花・拘牟頭華を採取し、阿闍世太子に奉上し、又之に告げて曰く、「此の花は是れ三十三天の出す所、釋提桓因遣はし來つて太子に

奉上せり」と。爾の時太子、提婆達兜の神足を見ること是の如く、便ち時に隨つて供養して、其の所須を給せり。太子復是の念を作さく、「提婆達兜の神足極めて及び難しと爲す」と。時に提婆達兜復自ら形を隱つて、小兒の身を作し、王太子の膝の上に在り。時に諸の婇女、各斯の念を作さく、「此れは是れ何人ぞや。是れ鬼爲る耶、是れ天爲る耶」と。語言未だ竟らざるに、便ち復身を化して還えること、復故の如し。是の時王太子及び諸の宮人、皆稱して言く、「此れは是れ提婆達兜なり、卽ち所須を給與せよ」と。又此の言を傳ふらく、「提婆達兜の名德具に記す可からず」と。

爾の時衆多の比丘、聞き已つて世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、佛に白して言さく、「提婆達兜なる者極めて大神足あり、能く衣裳・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を得」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝等此の意を興すこと勿れ、提婆達兜は利害に著せり、又彼の神足之力を欽羨すること莫かれ。彼の人は卽ち當に此の神足を以て、三惡道に墮墜すべし。提婆達兜の獲る所の利養、及び其の神足は、當に復耗盡すべし。然る所以は、提婆達兜は自ら當に身・口・意行を造るべし」と。爾の時復此の念を興せり、「沙門瞿曇は神足有り、我も亦神足有り、沙門瞿曇は所知有り、我も亦所知有り、沙門瞿曇の姓は貴し、我も亦姓貴し。若し沙門瞿曇にして、一神足を現ぜば、我當に二を現ずべし。沙門二を現ぜば、我當に四を現ずべし。彼れ八ならば我十六、彼十六ならば、我三十二、其の沙門の所現の變化に隨つて、我當に轉信すべし」と。爾の時衆多の比丘、提婆達兜の此の語有るを聞き、五百餘の比丘、提婆達兜の所に至り、到り已つて是の時提婆達兜及び五百の比丘、太子の供養を受けぬ。

時に舍利弗・目乾連、自ら相謂ひて言く、「我等共に提婆達兜の所に到り、彼の說法を聽かん、何なる論說を爲すかを」と。卽ち共に相將ひて提婆達兜の所に至りぬ。爾の時提婆達兜、遙に舍利弗・目乾連の來るを見、卽ち諸比丘に告ぐらく、「此の二人は是れ【一四】悉達の弟子なり」と、甚だ歡悅を懷き、

【一四】悉達とは釋尊の幼名。

到り已つて共に相問訊し、一面に在りて坐しぬ。爾の時諸比丘、各此の念を興さく、「釋迦文佛の弟子、今盡く來つて提婆達兜に向へり」と。爾の時提婆達兜、舍利弗に語げて言く、「汝今諸比丘の與に說法するに堪任する乎。吾小しく息まんと欲す、又脊痛を患ふ」と。是の時提婆達兜、脚を以て相累ね、右脇に臥し、其の歡喜の心を以ての故に、便ち睡眠せり。爾の時舍利弗・目乾連・提婆達兜の眠りしを見、卽ち神足を以て諸比丘に接し、空中を飛在して去りぬ。

是の時提婆達兜、覺寤せしに諸比丘を見ず、極めて瞋恚を懷き、幷せて斯の言を吐けり。「吾若し怨みを報ひずば、終に名けて提婆達兜と爲さゞるなり」と。此れは是れ提婆達兜、最初に[一五]五の逆惡を犯せるなり。提婆達兜適比丘の念を生ずるや、卽時に神足を失へり。

爾の時衆多の比丘、世尊に白して言さく、「提婆達兜比丘は極めて神足有りて、乃ち能く聖衆を壞せり」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「提婆達兜は但今聖衆を壞せず、乃ち過去世の時、恒に聖衆を壞せり。然る所以は、乃往過去の時も亦聖衆を壞せばなり」と。復惡念を興さく、「我要らず當に沙門瞿曇を取りて、之を殺すべくんば、三界に於て佛と作り、獨尊にして侶無けん」と。

是の時提婆達兜、阿闍世王に語ぐらく、「古昔は諸人の壽命、極めて長かりしも、如今は遂に短し。王太子をして一日命終せ使めしかば、則ち唐しく世間に生ぜしなり。何ぞ父王を取りて之を害し、聖王の位を紹がざるや、我當に如來を取りて之を害すべし、當に作佛を得ば、新王新佛、亦快からず哉」と。

爾の時阿闍世王、卽便ち守門の人を差して、父王を取りて牢獄に閉在し、自ら立ちて王と爲り、人民を治化せり。時に諸の群庶各相謂ひて言く、「此の子は未だ生まれざるに則ち是れ怨家之子なり。因つて以て名けて阿闍世王と爲すなり」と。爾の時提婆達兜、阿闍世王の父王を撿せしを見已つて、復此の念を興さく、「吾要らず當に沙門瞿曇を取りて、之を害すべし」と。爾の時世尊、耆闍

【一五】五の逆惡。阿含部九、通頁一五四を見よ。

崛山の一小山の側に在しき。爾の時提婆達兜、耆闍崛山に到り、手に大石の長さ三十肘、廣さ十五肘なるを擎げて世尊に擲ちぬ。是の時山神〔一六〕金毘羅鬼、恒に彼の山に住し、提婆達兜、石を抱きて佛を打つを見、卽時に手を伸べて餘處に接著しぬ。爾の時石碎けて、一小片の石、如來の足に著し、卽時に出血したまへり。爾の時世尊、見已つて提婆達兜に語げて曰はく、「汝今復意を興して、如來を害せんと欲するや」と。此れは是れ第二の五逆の罪なり。

爾の時提婆達兜、復自ら思惟すらく、「我今竟に此の沙門瞿曇を害することを得ず、當に更に方便を求めて、卽ち捨て去るべし」と。阿闍世王の所に至り、王に啓白して曰く、「黑象に飲まして醉は使め、沙門を害せ使む可し。然る所以は、此の象凶暴なれば、必ず能く此の沙門瞿曇を害せん。若し當に沙門にして、一切智有るべくんば、明日必ず來つて、城に入りて乞食せざらん。若し一切智無くんば、明日城に入つて乞食せんに、必ず當に此の惡象の爲に害せ所るべし」と。爾の時阿闍世王、卽ち醇酒を以て象に飲まして醉は使め、國中の人民に告令して曰く、「其れ自ら安ぜんと欲し、己の命を惜しむ者は、明日復城中に行來すること勿れ」と。爾の時世尊、時到つて衣を著け、鉢を持し、羅閱城に入つて乞食したまふや、國中の男女大小四部之衆、阿闍世王の酒を以て象に飲まし、如來を害しまつらんと欲するを聞き、皆共に相將ひて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言さく、「唯願くは世尊、羅閱城に入りて乞食したまふこと莫かれ。何を以ての故に、王阿闍世、象に飲まして醉はしめ、如來を害しまつらんと欲せばなり」と。佛、諸の優婆塞に告げたまはく、「夫れ等正覺は終に他人の爲に害せ所れざるなり」と。

爾の時世尊、斯の言を聞きたまふと雖も、猶故に城に入りたまひぬ。爾の時惡象、遙に世尊の來りたまふを見、瞋恚熾盛にして、如來に奔趣して之を害しまつることを得んと欲す。然るに佛、象の來るを見、卽ち斯の偈を說きたまはく、

【一六】金毘羅鬼（Kumbhira）王舍城の守護神なる夜叉、屢〻佛陀の危難を救へり。

象龍を害すること莫かれ　龍象の出現難ければなり　龍を害するを以ての故に　善處に生する
ことを得ざらん

と。爾の時彼の象、如來の此の偈を說きたまふを聞き已つて、卽ち前んで長跪して如來の足を舐めぬ。爾の時彼の象、卽ち以て過ちを悔ひ、心自ら寧らず、卽便ち命終して三十三天に生ぜり。

爾の時王、阿闍世、及び提婆達兜、象の已に死せしを見、慘然として悅ばず、提婆達兜、王に語げて曰く、「沙門瞿曇は已に象を取りて殺せり」と。王之に報へて曰く、「此の沙門瞿曇は大神力有り、諸の技術多し、乃ち能く此の龍象を呪して之を殺せり」と。時に王阿闍世、復是の說を作さく、「此の沙門は必ず威德具足せり。竟に惡象の爲に害せ所れず」と。提婆達兜報へて言く、「沙門瞿曇に幻惑之呪有りて、能く外道異學をして、皆悉く靡伏せ使む。何に況んや畜生之類を乎」と。是の時提婆達兜復是の念を作さく、「我今阿闍世王を觀察するに、意變悔を欲せり」と。爾の時提婆達兜、愁憂ひて樂しまずして羅閱城を出でぬ。

爾の時法施比丘尼、遙に提婆達兜の來るを見、提婆達兜に語げて曰く、「汝の今、造る所極めて[一七]過差爲り、今悔ひるは猶易し、恐らく復將に難からん」と。時に提婆達兜、此の語を聞き已つて、倍す復瞋恚り、尋いで之に報へて曰く、「禿婢、何の過差有らん、今易く、後に難からん耶」と。法施比丘尼報へて曰く、「汝今惡と共に、幷せて衆の不善之本を造る」と。爾の時提婆達兜、熾火洞然として、卽ち手を以て比丘尼を打ち殺しぬ。

爾の時提婆達兜、以て眞人を害し、已の房に往至して、諸弟子に告ぐらく、「汝等當に知るべし、我今以て意を興して沙門瞿曇に向へり。然るに其の義理應ぜず、羅漢を以て復惡意を興し、還えつて羅漢に向へり、吾今宜しく彼に向つて懺悔す可し」と。是の時提婆達兜、此れを以て愁憂ひて樂しまず。尋いで重病を得たり。提婆達兜、諸弟子に告ぐらく、「我に此の力無し。往いて沙門瞿曇を見る

【一七】過差とはたがふて合はざること。

ことを得ん、汝等當に我を扶けて、沙門の所に至るべし」と。爾の時提婆達兜、毒を以て十指の爪の中に塗り、諸弟子に語ぐらく「汝等我を舁ぎて彼の沙門の所に到れ」と。爾の時諸弟子、即ち舁ぎて將に世尊の所に至らんとせり。

爾の時阿難、遙に提婆達兜の遠くより來るを見、即ち世尊に白して言さく「提婆達兜今來れり、必ず悔心有りて、如來に向ひまつりて、過を改悔することを求めんと欲してや」と。佛、阿難に告げたまはく「提婆達兜は終に世尊の所に至ることを得ざらん」と。爾の時阿難、再三復佛に白して言さく「今此の提婆達兜は、已に來至して其の悔過を求めんと欲してや」と。佛阿難に告げたまはく「此の惡人は終に如來の所に至ることを得じ、此の人は今日命根已に熟せり」と。爾の時提婆達兜、世尊の所に來至し、諸弟子に語ぐらく「我今宜しく臥して如來を見たてまつるべからず。宜しく當に床を下りて、乃ち見たてまつるべき耳」と。提婆達兜、適ま足を下して地に在るや、爾の時地中に大火風有りて起り生じ、提婆達兜の身を遶ぐりぬ。爾の時提婆達兜、火の爲に燒か所ゝや、便ち悔心を發し、如來の所に於て、正しく南無佛と稱へんと欲し、然も究竟せずして、適ま南無と稱へ得て、便ち地獄に入りぬ。

爾の時阿難、已に提婆達兜の地獄の中に入りしを見、世尊に白して言さく「提婆達兜は今日已に命終を取りて、地獄の中に入りし耶」と。佛之に告げて曰はく「提婆達兜は滅盡して究竟處に至ることを爲さず、今此の提婆達兜は惡心を興起して、如來の身に向ひ、身壞命終して阿鼻地獄の中に入りしなり」と。爾の時阿難、悲泣涕涙して自ら勝ふること能はず。佛、阿難に告げたまはく「汝何すれぞ悲泣を爲すこと乃ち爾るや」と。阿難、佛に白して言さく「我今欲愛心未だ盡きず、未だ欲を斷ずること能はず、故に悲泣する耳」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

人自ら行を造るが如く　還えつて自ら本を觀察せんに　善者は善報を受け　惡者は其の殃ひを

受けん　世の人惡行を爲さば　死して地獄の苦を受けん　設し復善行を爲さば　身を轉じて天
祿を受けん　彼れ自ら惡行を招き　自ら地獄に入ることを致す　此れは佛の怨咎に非らず　汝
今何をか悲しみと爲すや

と。爾の時阿難、世尊に白して言さく、「提婆達兜は身壞命終して、何處に生ぜしと爲んや」と。佛、阿難に告げたまはく、「今此の提婆達兜は、身壞命終して阿鼻地獄の中に入れり。然る所以は、其れ五の逆惡を造りしに由るが故に、斯の報ひを致せり」と。爾の時阿難、復重ねて佛に白さく、「是の如し、世尊、聖尊の教への如くなり。已に身惡を爲して現身に地獄に入れり。我の今悲泣し、涕涙する所以の者は、其れ提婆達兜、名號姓族を惜しまざりしに由るが故に、亦復父母尊長の爲に爲す、諸の釋種を辱かしめて、我等の門戶を毀りぬ。然して提婆達兜は現身に地獄に入れり、誠に其れ宜しきに非らず。然る所以は、我等の門族は轉輪聖王の位より出づればなり。然して提婆達兜は、身王種より出でたり。現身に地獄の中に入る應からず。提婆達兜は當に現身に、有漏を盡くして無漏を成じ、心解脫し、慧解脫し、此の現身に於て證果を受くることを得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、實の如くに之を知り、眞人の跡を習ひて阿羅漢を得、無餘涅槃界に於て般涅槃す應かりしに、何んぞ圖らんや、此の現身を持して地獄の中に入りき。提婆達兜は在時に大威神有り、極めて神德有りて、乃ち能く三十三天に往至し、變化自由なりき。豈斯の人にして復地獄に入ることを得ん乎。不審なり、世尊、提婆達兜は地獄の中に在りて、幾許の年歲を經歷すと爲んや」と。佛、阿難に告げたまはく、「此の人は地獄の中に在ること、一劫を經歷せん」と。是の時阿難、復重ねて佛に白して言さく、「然るに劫に兩種有り、大劫小劫有り、此の人何れの劫に應ずと爲んや」と。佛阿難に告げたまはく、「斯の人は當に大劫を經歷すべし。所謂大劫とは卽ち[一八]賢劫是れなり。劫數を盡せば、行盡きて命終し、還つて人身に復するなり」と。阿難、

【一八】 賢劫 (bhadda-kappa)。阿含部八、通頁二二一の註を見よ。

佛に白さく、「提婆達兜は人根を盡喪して、遂に復成就せん。然る所以は、劫數長遠なればなり。夫れ大劫は賢劫に過ぎざるなり」と。

爾の時阿難、倍す復悲泣、哽咽して樂しまず。復重ねて佛に白さく、「提婆達兜は阿鼻地獄從り出でゝ當に何處に生ずべきや」と。佛阿難に告げたまはく、「提婆達兜は彼に於て命終して、當に四天王上に生ずべし」と。阿難復問ひまつらく、「彼に於て命終して、當に何處に生ずべきや」と。佛阿難に告げたまはく、「彼に於て命終せば、展轉して當に三十三天・焔天・兜率天・化自在天・他化自在天に生ずべし」と。阿難復問ひまつらく、「彼に於て命終して、當に何處に生ずべきや、佛、阿難に告げたまはく、「是に於て提婆達兜は地獄從り終に善處天上に生じ、六十劫中を經歷して三惡趣に墮せず、天人を往來して、最後に身を受け、當に鬚髮を剃除し、三法衣を著け、信堅固を以て出家學道し、辟支佛を成じて、名けて南無と曰ふべし」と。爾の時阿難、前んで佛に白して言さく、「是の如し、世尊、提婆達兜は其の惡報に由つて、地獄の罪を致せしに、何の德を造りしが爲に、六十劫生死を經歷して、苦惱を受けず、後復辟支佛を成じ、號名して南無と曰ふや」と。佛、阿難に告げたまはく、「[一九]彈指之頃に善意を發すも其の福喩へ難し、何に況んや提婆達兜は古を博くし、今を明にし、誦習する所多く、諸法を總持して、所聞忘計せず。彼の提婆達兜は、昔怨讎せ所れて殺害心を起して、如來に向へり。復曩昔の因緣の報ひに由るが故に、喜悅心有りて如來に向へり。此の因緣の報ひに由るが故に、六十劫中、三惡趣に墜墮せざるなり。復提婆達兜は、最後の命終之時、和悅心を起して南無と稱へしに由るが故に、後辟支佛と作り、號名して南無と曰ふなり」と。爾の時阿難、即ち前んで佛を禮し、重ねて說を自陳すらく、「唯然り、世尊、神の所敎の如し」と。

是の時大目乾連、前んで佛に白して言さく、「我今阿鼻地獄の中に至り、提婆達兜の與に、要行を說きて、慰勞し、慶賀せんと欲す」と。佛、目連に告げたまはく、「汝宜しく之を知るべし。復卒暴な

【一九】彈指之頃とは、指を彈きてぱちんと鳴らす間の一瞬をいふ。

ること勿れ、專心正意にして亂想を興すこと無かれ。然る所以は、極めて惡行の衆生は調へ難く、成じ難く、然る後乃ち阿鼻地獄の中に墮し、又彼の罪人は、人間の音響、言語往來を解せざればなり」と。爾の時目連、復佛に白して言さく、「我今解する所の六十四の言語開通せり、我當に此の音響を以て、往いて彼の人に語るべし」と。佛、目連に告げたまはく、「汝宜しく是れ時を知るべし」と。是の時阿難、斯の語を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。

時に大目連、前んで佛足を禮し、佛を遶ること三匝して、即ち佛前に於て、猶し力士の臂を屈伸するが如き頃に、即ち阿鼻地獄の所に往至しぬ。爾の時大目連、阿鼻地獄の上、虛空中に在るに當り、彈指して覺して「提婆達兜」と曰へり。爾の時提婆達兜、默然として應へず。時に諸の獄卒、目連に語げて曰く、「汝今何者を喚んで提婆達兜と爲すや」と。獄卒復白さく、「此の間には亦拘樓孫佛の時の提婆達兜、拘那含牟尼佛の時の提婆達兜、迦葉佛の時の提婆達兜有り、亦在家の提婆達兜、出家の提婆達兜有り、汝今比丘、正しく何者を提婆達兜と命くるや」と。目連報へて曰く、「吾の今命づくる所は、釋迦文佛の叔父の兒なる提婆達兜なり。故に相見んことを欲す」と。是の時獄卒、手に鐵叉を執り、或は火焰を執りて彼の身を燒炙して、覺寤せ使令む。爾の時提婆達兜の身體、火焰熾燃として高さ三十肘なり。諸の獄卒告げて曰く、「汝今愚人、何んで眠寐爲るや」と。爾の時提婆達兜、衆苦に逼め所れ、之に報へて曰く、「汝等今日何をか教勅する所ぞ」と、獄卒復語ぐらく、「汝今仰いで空中を觀よ」と。尋いで彼の語に隨ひ仰いで虛空を觀、大目連の結跏趺坐して、寶蓮華に坐すること、日の雲を披らすが如きを見る。提婆達兜見已つて便ち斯の偈を說けり。

是れ誰ぞ天光を現はすこと　日の雲を披して出づるが如き　猶し金山の聚まれるが如く　永く
塵穢汚無し

と。爾の時目連、復偈を以て報へて曰く、

我は是れ釋師の子　瞿曇之族の末にして　是れ彼の次聲聞　名けて大目連と曰ふなり
と。爾の時提婆達兜、目連に語げて曰く、「尊者目連、何に由るが故に此の間に屈せしや。此の間の衆生は、惡を造ること無量にして、開化すべきこと難し。善根を作さずして、命終之後此の間に來生せしなり」と。目連報へて曰く、「我は是れ佛の使の故に、此に來適せり。相愍念して苦の元本を拔かんと欲してなり」と。爾の時提婆達兜、佛の音響を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、幷せて此の言を吐くらく、「唯願くは尊者、時を以て敷演せよ、如來世尊は何らの言教有りたまひしや。更に惡趣之元を記說したまはざりし乎」と。目連報へて曰く、「提婆達兜、恐怖を懷くこと勿れ。地獄の極苦斯の處に過ぐるは無し。彼の釋迦文佛・如來・至眞・等正覺は、一切の蜎飛蠢動をも、愍念したまふこと、母の子を愛するが如く、心に差別無し。時を以て義を演べんに、終に叙を失はず、亦類に違せず、演ぶる所過量なり。今神口の記したまふ所は、汝本惡念を興起して、世尊を害しまつらんと欲せり。復餘人を教將して、惡源に趣か使めたり。此の緣報に由りて阿鼻地獄の中に入り、當に一劫を經歷すべく、終に出期無し。其の劫數を盡くし、行盡きて命終せば、當に四天王の上に生ずべく、展轉して當に三十三天、焰天、兜率天、化自在天、他化自在天に生ずべく、六十劫中惡道に趣かず、人天之間を周流して、最後に身を受け、復人形に還えり、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、信堅固を以て出家學道して、當に辟支佛を成じ、號名して南無と曰ふべし。然る所以は、汝初め死し、命斷ぜんとするに臨みし時、南無と稱へしが故に、斯の號を致すなり。今彼の如來は此の善く、南無と言ひしを觀じたまふが故に、名號を說いて六十劫中辟支佛と作らん」と。

爾の時提婆達兜、斯の語を聞き已つて、歡喜踊躍して善心生ぜり。復目連に白さく、「如來の所說の言教、必ず然り、疑ひまつらず、群生を愍念して濟ひたまふ所無量なり。大慈大悲に兼ねて愚惑

を化したまふ。設し我今日、右脇を以て阿鼻地獄の中に臥さば、一劫を經歷するも、心意專正にして、終に勞倦無けん」と。爾の時目連復提婆達兜に告げて曰く、「汝今云何ん、苦痛增損すること有り叵き乎」と。提婆達兜報へて曰く、「我身の苦痛遂に增して損すること無かりしも、今如來の名號を投け見れしを聞き、痛み猶小らく損せり。蓋し言ふに足らず」と。目連問ふて曰く、「汝今患ふ所の苦痛之原は、何れの類に像たりと爲すや」と。提婆達兜報へて曰く、「熱鐵の輪を以て我身を轢き壞り、復鐵杵を以て我形を咬咀し、黑暴象有りて我身を蹋蹈し、復火山有りて、來つて我面を塡め、昔日の袈裟化して銅鍱と爲り、極めて熾燃爲るもの來つて我體に著するの苦痛之原、其の狀斯の如し」と。目連報へて曰く、「汝頗ふらくは、自ら罪過の元本を知りて、斯の苦惱を受くるや不乎。吾今一一分別せんに、卿聞かんと欲する耶」と。提婆達兜白して言く、「唯然り、時に說け」と。爾の時目連、便ち此の偈を說きぬ。

汝本最勝所　比丘僧を壞亂せるは　今熱鐵の杵を以て　汝の形體を咬擣せり　然り彼之大衆
第一の聲聞者の　比丘僧を鬪亂せるは　今熱輪を以て轢けり　汝本王に　醇酒を飲みし黑象を
放つことを敎へしかば　今群黑象を以て　汝の形體を蹋蹈せり　汝本大石を以て　遙に如來の
足に擲ちしかば　今火山の報ひを以て　汝を燒きて遺餘無し　汝本手拳を以て　彼の比丘尼を
殺せしかば　今熱銅鍱を被むり　捲燋して伸ぶることを得ず　行報終に敗らず　亦復空に住ま
らず　是の故に當に勸勉して　此の諸惡の元を離るべし

汝本提婆達兜の造りし所の元本は、正しく斯れを謂ふ耳。當に自ら意を專らにして、佛如來に向ふべくんば、長夜之中に福を獲ること無量ならん」と。爾の時提婆達兜、復目連に白さく、「今目連に寄せて、頭面に世尊の足を禮し、興居輕利にして、遊步康强なるや」と。亦復尊者阿難を禮拜せり。爾の時尊者大目乾連、大神足を放ちて、阿鼻地獄の苦痛をして休息せ使めぬ。爾の時復斯の偈

を說けり

皆南無佛と稱へよ　釋師は最勝者なり　彼れ能く安隱を施して　諸の苦惱を除去したまはん

と。爾の時地獄の衆生、目連の此の偈を說くを聞き已つて、六萬餘人の行盡き、罪畢り、卽ち彼(處)に命終して四天王の上に生ぜり。

爾の時目連、卽ち神足を攝め、還つて所在に至り、世尊の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時目連、世尊に白して曰さく、「提婆達兜は問訊敬奉しまつること無量なり、『興居輕利にして遊步康强なるや』と。亦復阿難を問訊し、並に是の說を作せり『如來に六十劫中に辟支佛を成じ、號名して南無と曰ふと記せ見れたり。設し我右脇を以て阿鼻地獄の中に臥せば、終に勞を辭せじ』」と。爾の時世尊、告げて曰はく、「善い哉、善い哉、目連、饒益する所多く、潤及する所多く、群盲を愍念し、天人安きを得、諸の如來の聲聞をして、漸く滅盡涅槃之處に至ら使めん。是の故に目連、常に當に勤加して三法を成就すべし。然る所以は、若し當に提婆達兜にして、善法、身三・口四・意三を修行すべくんば、彼の人終身利養を貪らず、亦復五逆罪を造りて、阿鼻地獄の中に入らざらん。然る所以は、夫れ人にして利養を貪る者は亦、恭敬之心有ら(ず)、三寶に向ふも亦復禁戒を奉持せず、身・口・意行を具足せざれば、當に意を專らにして、身・口・意行を念ずべし。是の如く目連、當に是の學を作すべし」と。爾の時目連、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

一〇

[一〇] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「若し衆有りて[一一] 慈心解脫を修行して、廣く其の義を布き、人の與に演說せば、當に此の十一の果報を獲べし。云何が十一と爲んや。臥するも安らかに、覺むるも安らかにして惡夢を見ず、天護り、人愛して、毒せず、兵せず、水火盜賊終に侵枉せず、若し身壞命終せば、梵天上に生ぜん。是

【一〇】 A. XI. 10 Mettā 及び宋求那跋陀羅譯十一想思念如來經。
【一一】 慈心解脫(mettā ceto-vimutti)。

れを比丘、能く慈心を行ぜば、此の十一之福を獲と謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を説きたまはく、

若し慈心を行ずる有らば　亦放逸の行無く　諸結漸漸に薄くして　轉じて道跡を見ん　能く此の慈を行ずるを以て　當に梵天上に生ずべく　速疾に滅度を得て　永く無爲處に至らん　殺さず害心無く　亦勝負の意無く　慈を行じて一切に普からんには　終に怨恨の心無けん

是の故に比丘、當に方便を求めて、慈心を行じ、廣く其の義を布くべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と、爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第四十七

卷の第四十八

禮三寶品第五十

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し善男子、善女人にして、如來の神寺を禮拜せんと欲せば、當に十一法を行じて、如來の寺を禮すべし。云何が十一と爲すや、勇猛の意を興すは堪ふる所有るが故に、意錯亂せざるは、恒に一心なるが故に、當に念じて意を專らにすべきは、諸の止觀の故に、諸念永く息むは、三昧に入るが故に、意無量に及ぶは、智慧に由るが故に、意觀察し難きは、其の形に由るが故に、意淡然として靜なるは、威儀に由るが故に、意流馳無きは、名稱を以ての故に、意想像無きは、其の色に由るが故に、梵音及び難きは、柔軟響に由るが故に、諸比丘、若し善男子、善女人にして、如來の寺を拜せんと欲せば、當に此の十一法を具して、如來の神寺を禮すべくんば、長夜之中に福を獲ること無量ならん。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し善男子、善女人にして、法を禮することを行ぜんと欲せば、當に十一事を念じて、然る後に法を禮すべし。云何が名けて十一と爲すや。慢有らば當に慢を除くべし。夫れ正法の者は、欲に於て渴愛の想を除く。夫れ正法の者は欲に於て欲を除く。夫れ正法の者は能く生死の淵流を斷ず。夫れ正法を行ぜば平等の法を獲、然も此の正法は諸の惡趣を斷ち、此の正法を尋ねて、善處に至ること

を得、夫れ正法の者は能く愛の網を斷ち、正法を行ずる者は、有從り無に至り、正法を行ずる者は、明にして照らざるは靡く、夫れ正法の者は涅槃界に至る。若し善男子、善女人にして、法を禮せんことを行ぜんと欲せば、當に此の十一法を思惟すべし。然る後に便ち福を獲ること無量にして、長夜之中に福を受くること限り無けん。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し善男子、善女人にして、僧を禮せんことを修むる者は、當に十一法を專らにすべし。然る後に乃ち當に僧を禮すべし。云何が十一と爲すや。如來の衆は正法成就し、如來の聖衆は上下和合し、如來の僧は法法成就し、如來の聖衆は戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就し、如來の聖衆は能く三寶を掌護し、如來の聖衆は能く外道異學を降伏し、如來の聖衆は是れ一切衆生の良友福田なり。若し善男子、善女人にして、僧を禮せんと欲する者、當に此の十一法を思惟すべくんば、長夜之中に福を獲ること無量ならん。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、天・龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・迦留羅・甄陀羅・摩休勒・天及び人民、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[一]聞くこと是の如し。一時婆伽婆、摩竭國[二]蜜喋羅城の東、[三]大天園中に在止し、大比丘僧千二百五十人と俱なりき。爾の時世尊、食後に起ちて阿難と共に、樹園中に於て經行し、佛便ち笑みたまひぬ。阿難、心に念ずらく、「如來・無所著・等正覺は妄りに笑みたまはざるに、今何を以て笑みたまひしや、必ず當に意有るべし。我當に之を問ひまつるべし」と。阿難衣服を整へ、右膝を地に著け、

【一】 M. 83. Makhādeva S. 漢譯中阿含第六十七經大天捺林經、增壹阿含經序品 Jātaka 9.

【二】 蜜喋羅（Mithila）。古代印度十六國の一なる跋耆（Vajji）國の毘提訶（Videha）族の首都。

【三】 大天園（Makhādevavana）。

叉手して佛に問ひまつらく、「如來・無所著・等正覺は妄りに笑みたまはざるに、今何を以て笑みたまひしや、必ず當に意有るべし。願くは笑ひの意を聞きまつらん」と。佛阿難に語げたまはく、「我當に汝の爲に說くべし。過去賢劫の初め、此の中間に於て轉輪聖王有りて、四天下を主りぬ。名けて大天と曰ひ、長壽無病にして、端正勇猛なりき。治むるに正法を以てし、人民を枉げず、自然の七寶有り、何等か七と爲すや。一には輪寶、二には象寶、三には馬寶、四には珠寶、五には王女寶、六には、主藏寶、七には典兵寶なり」。佛阿難に語げたまはく、「此の大天王、童子爲りし時、八萬四千歲、太子と作りし時八萬四千歲、聖王の位に登りて八萬四千歲なりき」と。

阿難、佛に問ひまつらく、「云何が輪寶と爲すや」と、佛、阿難に語げたまはく、「月の十五日、月盛滿する時、王沐浴淸淨にして、婇女と與に東の樓上に上り、東向して視しに、千輻金輪有り、輪の高さ七仭を一多羅となし、[四]多羅とは獨挺樹、樹を以て限りと爲し、高さ七多羅なり。純ら紫磨金を以て輪と爲す。王輪を見已つて、心に念ずらく、『此の輪は好輪なり、願くは之を捉ふることを得ん耶』と、念じ已れば、輪卽ち王の左手に就けり。便ち擧げて右手の中に移し、王此の輪に語げて曰く、『諸の伏せざる者は、我爲に之を伏せよ。我地に非らざる者は、我爲に之を取れ。法の如くして、不如法に非らざれ』と。語竟れば輪還つて空に住まり、[五]輞東向し、[六]轂北向せり。王左右に勅して四種の兵を具し、兵を具し已つて、卽ち兵衆を將ひ、輪を逐ひて空に立ち、輪の東引するに隨つて巡行して東界を盡くし、暮るれば則ち王、兵衆と與に輪下に宿るや。東界の諸の小王、皆來つて朝覲し、貢ぐ所皆以て金鉢に銀粟を盛り、銀鉢に金粟を盛り、『善くぞ來れり、大王、此の東界の土地、珍寶、人民盡く是れ王の有なり。願くは當に駕を停めて此に住したまふべし。我等當に天敎を稟承すべし』と。大天王、諸の小王に答へて曰く、『汝等我敎へを承けんと欲せば、各〻本國に還えり、十善を以て民を敎へて、枉橫を行ずること勿れ』と、誡勅已に訖れば、輪卽ち海上に於て迴轉し、

【四】多羅（Tāla）。一多羅樹の高さの量、高さを計るに用ふ。

【五】輞とは車の輪のこと。

【六】轂、車のこしきのこと。

雲に乘りて行く。海中自然に道を開くこと、廣さ一由延なり。王四種の兵と與に、輪に隨つて前の如く南界を巡行せば、南界の諸の小王も亦、來つて朝覲し、皆以て金鉢に銀粟を盛り、銀鉢に金粟を盛り、貢上して曰さく、『善くぞ來れり、大王、此の南界の土地、珍寶、人民は盡く是れ王の有なり、願くは王、駕を停めて此に住したまへ、我等當に天命を稟承すべし』と。大天、諸王に答へて曰く、『汝等我命を承けんと欲せば、各本土に還えり、十善を以て民を教へて、枉橫を行ずること勿れ』と、誡勅已に訖れば、輪則ち西に廻りて西界を按行せば、西界の諸王の貢獻勸請すること、南方の如く、已に訖れば、輪復北に廻りて北界を巡行す。北界の諸王も亦皆朝覲し、貢獻勸請すること、盡く前の法の如し。周遊すること四日にして、閻浮提四海を遍くし、本の蜜喉羅城に還えり、宮門前の虛空中に於て住まること高さ七多羅にして、輞東向す。王便ち宮に入りぬ」と、佛、阿難に語げたまはく、「大天の輪寶を得しこと此の如し」と。

阿難復佛に問ひまつらく、「大天の象寶を得しこと、復云何ん」と。佛、阿難に語げたまはく、「大天以後十五日、月盛滿する時、沐浴清淨にして、諸の婇女を從へ、東の樓上に上り、東向して空中を觀見せしに、白象王有り、滿呼と名く。虛に乘りて來りぬ。七肢平跱にして、口に六牙有り、頭上に金冠の寶を瓔珞と爲し、眞珠を以て其の體を交絡し、左右に金鈴を佩べり。象に神力有り、形を變ふること自在なり、大天之を見て、心に自ら念じて曰く、「我此の象を得て可なり耶、當に所爲有ら使むべけんや」と。念じ訖れば、象便ち空中に、王の前に立てり。王卽ち教ふるに五事を以てせり。王復念じて曰く、『當に此の象を試むべし。能ふと爲すや不や』と、明日日出に至り、王此の象に乘り、須臾之間に四海を周遍し、還つて本處に到り、宮門の東に於て、東向して立ちぬ。阿難、大天の得し所の象寶は此の如し」と。

阿難、復佛に問ひまつらく、「大天の得し所の馬寶、復云何ん」と。佛、阿難に語げたまはく、「大

【七】增一阿含には于娑賀(Uposatha)といふ。

天、後十五日、月盛滿する時に到り、沐浴清淨にして、諸の婇女を從へ、西の樓上に上り、西向して視見しに紺王有り、婆羅舍と名く。空に乘りて來行して、身を動ぜず。頭上に金冠の寶を瓔珞と爲し、披珠交絡して、左右に鈴を垂れ、馬に神力有りて、形を變ふること自在なり。大天之を見て、自ら念言すらく、「此れを得て、之に乘ること可なり耶」と、念じ訖つて王の前に至る。王便ち乘りて之を試みんと欲せり。明日日出づるに至り、王乘りて東行し、須臾之頃に四海を周遍し、還えつて本國に至り、宮門の西に住まり、西向して立ちぬ。阿難、大天の獲し所の馬寶は此の如し」と。

阿難、佛に問ひまつらく「大天の得し所の珠寶復云何ん」と。佛、阿難に語げたまはく、「大王復十五日、月盛滿する時に至り、沐浴清淨にして、諸の婇女を將ひ、東の樓上に上り、東向して視見るに神珠有り。珠の長さ一尺六寸、八楞有り、紺琉璃の色を作し、空に乘りて來り、高さ七多羅なり。大天之を見て、心に念じて曰く、『此の珠を得て之を觀じて可なり耶』と。念ぜし如く之を獲、王便ち之を試みんと欲し、夜半に至り、四種の兵を合し、珠を以て幢頭に懸け、城を出でて遊びしに、珠辟方を照らすこと十二由延なり。兵衆相見ること晝の如くして異り無し。珠光の及ぶ所、人民驚き起きて、皆『天明けたり』と言へり。王卽ち宮に還えつて幢を以て之れを宮內に竪てしに、內外常に明かなること晝と異らず。阿難、大天の獲し所の珠寶此の如し」と。

阿難、佛に問ひまつらく、「大天の得し所の玉女寶復云何ん」と。佛、阿難に語げたまはく、「大天十五日、月盛滿せし時に至り、沐浴清淨にして、諸の婇女を從へ、東の樓上に上り、東向して視見しに、刹帝利女寶有り、曼那呵利と名く。端正にして比ひ無く、姝妙嚴淨にして、不長・不短・不麁・不細・不白・不黑なり。冬は則ち溫煖く、夏は則ち淸凉にして、身の毛孔中より栴檀香を出し、口より優鉢蓮花香を出し、亦女人の衆惡の姿態無く、情性調和して、先に意旨を承け、虛に乘りて來還

【八】婆羅舍(Vaiśākha?)。

して王の所に至りぬ。阿難、大天の獲し所の玉女寶は是の如し」と。

阿難、佛に問ひまつらく、「大天の得し所の主藏寶とは復云何ん」と。佛、阿難に語げたまはく、「大天、十五日、月盛滿する時に至り、沐浴清淨にして、諸の婇女を將ひ、北の樓上に上り、北向して、觀見しに主藏臣(あり)、阿羅咃呟と名く、端正姝妙にして、不長・不短・不肥・不瘦なり。身は黃金色にして、髮は紺青色、眼は白黑分明にして、又能く地に伏藏する七寶を視見、主有らば爲に之を護り、主無くば取りて、王の用に供す。聰明にして智慧善く方謀有り、虛に乘りて來還し、王の前に詣りて、王に謂ひて曰く、『自今已往、王快く自ら樂しむ可し、復憂愁ふること勿れ、我當に王に寶を給し、乏しきこと有ら令めざるべし』と。王便ち藏臣を試み(んと欲し)、之と與に船に乘り、獨り共に海に入る。王藏臣者に謂ひて言く、『吾金銀財寶を得んと欲す』と、藏臣者王に白さく、『還えつて岸邊に至り、當に財寶を給すべし』と、王曰く、『吾水中の寶を得んと欲す、岸上の者を用ひず』と、主藏臣者便ち座從り起ち、衣服を整へ、右膝を跪き、又手して水を禮せしに、水中卽ち自然に金鋌を出し、大さ車轂の如く、須臾にして船に滿ちぬ。王曰く、『止む可し、復金を上すこと勿れ、船將に沒せんと欲す』と、阿難、大天の獲し所の典寶臣は此の如し」と。

阿難復佛に問ひまつらく、「大天の得し所の典兵將軍とは復云何ん」と、佛、阿難に語げたまはく、「大天、十五日、月盛滿する時に至り、沐浴清淨にして、諸の婇女を將ひ、南の樓上に上り、南向して視見しに、南方に大將軍比毘那有り、端正姝好にして、髮は眞珠色の如く、身猶し綠色のごとくして、不長・不短・不肥・不瘦なり。眼能く徹視して他人の心念を知り、軍策・變旐・進退に時を知る。虛に乘りて來還して王所に詣り、王に謂ひて曰く、『願くは王、自ら恣に快樂して、天下を憂ふること莫かれ。四方を征伐したまはんこと、臣自ら之を辦ぜん』と。王之を試みんと欲し、半夜に思惟すらく、『四種の兵を合せんと欲す』と、念じ訖りて四兵盡く集まりぬ。王復念じて東引せ使めん

と欲せば、軍卽ち東引し、王は中央に在り、將軍前に在りて四兵圍遶す。王念じて往かんと欲せば卽ち往き、王念じて還えらんと欲せば卽ち還えりぬ。阿難、大天の獲し所の典兵將軍寶は是の如し」と。佛阿難に語げたまはく、「大天の獲し所の七寶は此の如し」と。

佛阿難に語げたまはく、「大天王、天下を治むるや遂に久し。便ち【九】梳頭の侍者の【一〇】劫比と名くるに語ぐらく、『若し白髮有らば、便ち拔きて我に示せ』と。劫比、髮を視ること遂に久しくして、一白髮有るを見、便ち王に白して曰さく、『前に勅したまふ所の者、今已に白現ぜり』と、王曰く、『拔き來つて我に示せ』と。劫比卽ち金鑷を以て、白髮を拔き取りて王の手中に置きぬ。王白髮を捉へて、便ち斯の偈を說きぬ。

我身の首の上に　此の毀莊を生ぜり　身をして來り召さ使むるにや　道に入るの時到れり

と。王心に念じて曰く、『我已に人の五欲を極めたり、今當に出家して、鬚髮を下し、法服を被るべし』と。太子【一一】長生を召し、告げて曰く、『童子、吾頭に已に白髮有り。世間の五欲を出でん、吾已に之を厭へり。今天の所欲を求めんと欲す。我今鬚髮を剃り、法服を著け、出家して道を爲さんと欲す。汝當に國政を領し、長を立てゝ太子と爲し、好養して、劫比をして白髮を伺は使め、白髮出づれば國を以て太子に付し、我の出家して鬚髮を下し、法服を被しが如くすべし』と。王、太子に告ぐらく『我今此の聖位を以て慇懃に汝に累ねん。當に聖位をして世世相紹ぎて、種をして斷た使むること莫かるべし。種斷ぜば、便ち邊地の人爲らん。若し善行を斷たば、便ち無法處に生れん』と、大天王誡勅し已つて、便ち國を以て太子長生に付し、劫比に田業を給せり」と。佛阿難に語げたまはく、「大天王は此の城に於て、此の園に於て、此の地に於て、鬚髮を下ろし、法服を著けて道に入り、此の處に於て八萬四千歲、四梵行、慈・悲・喜・護を行じ、是に於て壽終つて梵天に生ずることを得たり。大天出家して七日の後、女寶命終しぬ。

【九】梳頭の侍者とは理髮師。
【一〇】劫比(Kappaka)、
【一一】長生(Dīghāyu)。

長生位に登り已つて、十五日、月盛滿する時に至り、諸の婇女を將ひ東樓上に上り、東向して視見しに、玉女の端正なる有り、前の如く虚に乘りて來る。長生還えつて七寶を服す。王長生、已に國政を領し、四天下を統べたり。長生復劫比に語ぐらく、『今從り已去、我爲に頭を梳り、時に若し白髪を見ば、輒ち來つて我に白うせ』と、聖王の位に登りて、遂に八萬四千歲を經て、白髪復生ぜり。劫比王に白さく、『素髪已に生ぜり』と、王曰く『拔き來つて吾掌中に著けよ』と、劫比卽ち金鑷を以て拔き、王の手中に置きぬ。王白髪を執りて卽ち偈を說いて曰く、

我身の首の上に　此の毀莊を生ぜり　身をして來り召さ使むるにや　道に入るの時到れり

と。王心に念じて曰く『我已に人の五欲を極めたり、今當に出家して鬚髮を下ろし、法服を被るべし』と、卽ち太子冠髻を召して告げて曰く『童子吾已に頭白し、世間の五欲吾已に之を厭へり。當に天の欲を求むべし。我今出家して道を爲し、鬚髮を剃除し、法服を被著せんと欲す。汝當に國政を領し、長を立てゝ太子と爲して好養し、劫比をして白髪を伺は使め、白髪出づれば、國を以て太子に付し、我出家して鬚髮を下ろし、法服を被しが如くなるべし』と。王太子に告ぐらく『我今此の聖王の位を以て、慇懃に汝に累ねん。當に聖王の位をして、世世相紹が使めて、種をして斷た使むることゝ莫かるべし。種斷たば便ち邊地の人爲らん。若し善行を斷たば、便ち無法處に生ぜん』と。長生王誡勅し已つて、卽ち國を以て太子冠髻に付し、劫比に田業を給しぬ」と。佛阿難に語げたまはく、「長生王も亦、此の城、此の園、此の地に於て、鬚髮を下ろし、法服を著けて道に入りぬ。此の處に於て八萬四千歲、四梵行、慈・悲・喜・護を行じ、是に於て壽終りて、梵天に生ずることを得たり」と。

佛阿難に語げたまはく、「王長生出家之後七日之中、七寶自然に化し去りぬ。冠髻王憂愁ひて樂しまず。諸臣、王の悅ばざるを見て、便ち王に問ふて曰く、『天王、何を以て悅ばざるや』と、王諸臣

に答へて曰く、『七寶化し去りしを以ての故なり』と。諸臣王に白さく、『王、憂ひを爲すこと勿れ』と、王曰く、『何ぞ憂へざるを得ん耶』と、臣等啓曰さく、『父王梵行して、近く園中に在せり、往いて諮り承く可し。必す當に王に寶を致す之法を誨へたまふべし』と。王即ち勅すらく、『嚴駕せよ』と、諸臣便ち嚴駕し訖つて、便ち王に白せり。王群臣と與に七寶の車に乘り、五物を以て幟と爲し、寶冠、羽蓋、劍、扇、寶履なり。左右に臣從ひ、進んで園所に詣り、則ち車を下り、五物を廢却し、歩みて園門に入り、前んで父王に至り、稽首して足を禮し、却いて一面に住し、叉手して白して言く『王の所有の七寶、今皆化し去れり』と、父先づ座を定め、啓白す所を聞き、頭を仰いで答へて曰く、『童子、夫れ聖王の法は、父之所有を恃まざるなり。汝自ら法を行じて之を求めよ』と。王復問ひて曰さく『轉輪聖王は何の法を以て化するや』と、父便ち答へて曰く『法を敬ひ、法を重んじ、法を念じ、法を養ひ、法を長じ、法を熾んにし、法を大にす、此の七法を行ぜば、便ち聖王の治なる應し。以て寶を致す可きなり』と。王復問ひて曰さく『云何が法を敬ひ、乃至法を大にするや』と。父答へて曰く『當に貧窮に給賜し、民に二親に孝養することを敎へ、四時八節に時を以て祭祠し、誨ふるに忍辱を以てし、婬泆癡行を除くことを學ぶべし。此の七法は乃ち聖王の法たる應きなり』と。王即ち敎へを受け、辭して退却き禮し、遶ること七匝し已つて、便ち引いて還歸りぬ。是に於て王、輒ち父の命を承け、七法を奉行し、遠近に宣令して、祇いに王の敎を崇めぬ。王便ち藏を開きて貧窮に給賜し、孤老を侍養し、四方之民、奉承せざるは莫し。是に於て王、十五日月盛滿する時を以て、沐浴清淨にして、諸の婇女を將ひ、東樓の上に上り、東向して視見しに、千輻紫磨金の輪有り、輪の高さ七多羅にして、地を去ることも亦七多羅なり。虚に乘りて來り、空中に住まりぬ。王心に念じて曰く『願くは此の輪を得て可なり乎』と、輪即ち下りて王の左手に至り、復之を右手に移し、王此の輪に語ぐらく『諸の伏せざる者、我爲に之を伏し、我地に非らざる者、我爲

に之を取り、如法にして、不如法に非らざれ』と。王便ち手を以て輪を投じて之を虛空に還えし、宮門の東に於て、輞東向し、轂北向して空中に住まりぬ。輪の後に次いで白象有り、次に紺馬有り、次に神珠有り、次に玉女有り、次に主藏有り、次に將軍有り、此の七寶の出でしこと大天王の如く、比試むるに亦是の如し。八萬四千歲を經竟つて、王劫比に賜ひ、幷せて太子に勅して國事を付し、出家入道せしこと皆前王の法の如し』。佛阿難に語げたまはく、「此の冠髻王は、此の城の園地に於て、鬚髮を下ろし、法服を被、八萬四千歲、四梵行、慈・悲・喜・護を修め、是に於て壽盡きて亦梵天に生ぜり」と。

佛阿難に告げたまはく、「大天王の子孫相紹いで乃ち八萬四千歲に至り、轉輪聖王の位、善種斷ぜず、最後の聖王を[一二]荏と名け、治するに正法を以てし、人と爲り聰明にして審諦忘れず、相三十二有りて、色は猶し紅蓮花のごとく、好んで布施を喜び、沙門婆羅門を供養し、孤老を侍養し、貧窮を賑給し、四の城門及び城の中央に於て、庫藏を置設し、金銀・雜寶・象・馬・車乘・衣服・床褥・病瘦の醫藥・香華・飲食、諸の孤獨の者に皆妻婦を給し、種種の惠施人の欲する所に隨ひ、王[一三]六齋之日に於て、具に內外に勅すらく『皆[一四]八關を持てよ』と。斯の日に於て首陀舍天當に悉く來下して、其れ八戒を授くべし。帝釋・三十三天、皆其の國の人民を歎ずらく、『快い哉、善利なり、乃ち斯の法王に値ふ耶。種種の惠施、民の所欲を恣にし、又能く清潔にして、齋戒闕くること無し』と。天帝釋諸天子に告ぐらく、『荏王を見ることを得んと欲するや不や』と、咸言く、『見んと欲す。此に來至せ使む可し』と。釋提桓因卽ち窮鼻尼に勅すらく、『天女、汝、蜜喋羅城に詣り、荏王に告げて曰へ、「卿は大に善利を得たり。此の間の諸天、皆卿の功德の巍巍たるを歎じ、吾爲に問ひを致すこと慇懃なり。此の諸天子、甚だ相見んことを思へり、暫く意を屈して來至す可し」』と、此に於て窮鼻尼、敎へを受けて便ち下り、人の臂を屈伸するが如き頃に、忽然として、王殿の前の虛空中に在りて立

【一二】荏（Nimi）。增壹阿含に尼彌とす。

【一三】六齋之日とは一月を白分黑分の二に分ち各分の八日十四日十五日の三日に布薩會を行ひ、八齋戒を持つ。一月に六回行はるゝが故にこれを六齋日といふ。

【一四】八關。阿含部九、通頁二七三の八關齋法の註を見よ。

ちぬ。王一婇女を侍らし、殿上に於て坐して世間を思念すらく、『一切をして皆、安隱を得て、衆の苦患無から使めんと欲す』と。窮鼻尼、空中に於て彈指して之を覺ます、王頭を擧げて殿上を見るに、光明其の聲を聞いて曰く、『我は是れ釋提桓因の侍者なり。故に我を遣して王に詣りしなり』と。王答へて曰く、『不審なり、天帝、何の約勅する所ぞ』と、天女答へて曰く、『天帝は意を致すこと慇懃なり。此の諸の天子、卿の功德を讃め、預じめ相見んことを思へり。暫く意を屈す可し』と。王默然として之を許しぬ。天女便ち還つて天帝に白して曰く、『已に宣命を達せり。當に馳せて詣るべきを許せり』と。天帝即ち侍御に勅すらく、『七寶の飛行の馬車を嚴駕し、下りて蜜締羅城に到りて荏王を迎へよ』と、侍御、敎へを受け、即ち馬車を駕し、忽然として便ち下る。王群臣と與に都に會して坐せり。車王の前に當り、空中に於て止まりぬ。御者告げて曰く、『天帝は今車を遣して相迎へり、諸の天子は儼然として相待てり、便ち車に上る可し。復顧戀すること勿れ』と。諸臣の大小、王の當に去るべきを聞き、僉然として悅ばず、皆起ちて立ち、叉手して白して言く、『王去る之後、馬等何れの所にか命を承けん』と。王答へて曰く、『卿等憂ふること勿れ、吾去る之後、施惠齊戒して民を養ひ、國を治むること、吾在りし時の如かれ、我還えりの比ること久しからじ』と、王誡勅し訖れば、車即ち地に下り、王便ち車に上りぬ。侍御、王に問はまく、『當に何れの道從りすべきや』と、王曰く、『此の言は何の謂ひぞや』と、侍御答へて曰く、『夫れ行くに兩道有り、一には惡道、二には善道なり。惡を行ずる者は惡道從り苦處に到り、善を修する者は、善道に遊びて樂處に至る』と、王曰く、『今日道を行くに、善惡皆之に從はんと欲す』と。御者之を聞き、久しくして乃ち悟りて曰く、『甚だ善し、大王』と、御者便ち引いて兩道之中に在りて、善惡悉く覩つゝ、遥三十三天に詣れり。天帝及び諸天子、遙に王の來りしを見、釋提桓因曰く、『善くぞ來れり、大王』と、命じて共に坐せ令めぬ』と。佛、阿難に語げたまはく、『王便ち天帝の座に就くに、王と帝釋と相貌・被服・

音聲一揆なり。諸の天子、心中に念言すらく、『何れが帝釋にして、何れが王と爲すや』と、又復念じて曰く、『人の法として當に眴くべきに、倶に眴かず』と、各愕然を懷き、以て之を別つこと無し。天帝、諸天の疑心有るを見、復念言すらく、『我當に王を留めて住せ使め、然る後に乃ち寤むべき耳』と、帝釋、諸天子に謂ひて(曰く)、『卿等我をして、王を留めて此に住せ使めんと欲するや不や』と。諸天子曰く、『實に住せ使めんと欲す』と、天帝、荏大王に謂ひて(曰く)、『此に住まる可きや不や、我當に五欲を供給すべし』と、是れに因つて諸天乃ち人王を識りぬ。王天帝に白して曰く、『正に爾り、便ち給賜を爲し已れ、願くは諸天子の壽命極まり無く、賓主請讓せん』と、是の如く三(たび)に至る。帝釋、王に謂ひて曰く、『何を以て住まらざるや』と、王答へて曰く、『我當に出家して修道すべし。今天上に在りて學道に緣ること無し』と。天帝曰く、『胡ぞ爲に道を作すや』と、王曰く、『父王の遺令を被むれり。若し白髮生ぜば、法として當に出家すべし』と。天帝遺令もて道に入るを聞き、默然として對へず。王天上に於て、須臾之間に、五欲自ら恣にせり。之を世間に方つれば、已に十二年なり。王將に別れんと欲し、諸天子の與に審諦の法を說きぬ。帝釋、侍御に勅すらく、『汝荏王を送りて本國に還えせ』と、侍御教へを受け、卽便ち嚴駕し、駕し訖つて王に白して曰く、『王、車に上る可し』と、是に於て王、便ち帝釋及び諸天子と告別し、卽ち車に上り、本道に循ひて歸へり、蜜絺羅宮に到り、侍御卽ち天上に還えりぬ。王下りて數日、復劫比に勅すらく、『若し白髮を見ば、便ち我に白せ』と、數日之中に頭上に白髮生ぜり。劫比、金鑷を以て白髮を拔き、王の手中に置きぬ。王見已つて便ち偈を說いて曰く、

我身の頭上に　此の毀莊を生ぜり　身をして來り召さ使むるにや　道に入るの時到れり

と。王心に念ずらく、『我已に人の五欲を極めたり。今當に出家し、鬚髮を剃りて法服を被るべし』と、王卽ち太子善盡を召し、告げて曰く、『吾白髮已に出でたり。世間の五欲は吾已に之を厭へり。

當に天の欲を求むべし。當に鬚髮を下ろし、法服を被て、出家して道に入るべし。童子、今國事を以て汝に付せんに好養せよ、劫比、若し白髮出づれば、國を以て太子に付して、出家して道に入れ、童子、今此の聖王の位を以て、汝に累ねん。種をして斷ぜ使むること莫かれ。種斷せば、便ち邊地の人爲らん』」と。佛阿難に語げたまはく、「荏王は卽ち太子に國政を付し、劫比に田業を給し已り、此の城の園地に於て鬚髮を下ろし、法服を被、出家修道せり。修道之後七日中に於て、輪珠化し去り、象馬玉女長者將軍皆悉く無常なり。王園中に於て八萬四千歲、四梵行、慈・悲・喜・護を行じ、命終して梵天に生ぜり。

其の後善盡王、父業を承けず、正法替廢せり。是れに由つて七寶復來應せず、善行繼がず、五減遂に至り、人民短命にして、色を薄くし、力を少くし、多病にして無智なり。五減已に至れば、轉じて復貧困し、困窮して竊盜相糺し、王に詣りて啓して曰く、『此の人與へざるに取れり』と、王卽ち外に勅して刑を行ふ。國人與へざるに取り、王輒ち之を殺せりと聞き、皆其の惡を憾み、各利刀を興せり。刀此れ自り始めて造り、是れに由つて殺生此れ從り起りぬ。便ち兩惡の出づる有り。次に復婬りに他の妻を犯し、夫主共に諍ひ、自ら言く、『我便ち四惡を成ぜず』と。兩舌遘鬪是れを五惡と爲す、鬪へば則ち相罵る、是れを六惡と爲し、言至誠ならず、是れを七惡と爲し、他の和合を嫉む、是れを八惡と爲し、忿りを含みて色變ず、是れを九惡と爲し、心疑亂を懷く、是れを十惡と爲す、十惡已に具り、五減轉た增しぬ」と。

佛阿難に語げたまはく、「爾の時の大天王の賢劫の初に在りて興りし者を知らんと欲するや不や。則ち我是れなり。阿難、爾の時八萬四千年の王、荏と名け、治政して枉者無きを知らんと欲せば、則ち汝是れなり。爾の時の最後の善盡王と名け、暴逆不道にして、聖王の種を斷ちし者を知らんと欲せば、[一五]調達是れなり。阿難、汝往時に於て、大天轉輪聖王の善嗣を承繼し、其の紹をして立てゝ

【一五】 調達。提婆達多のこと。

絕えざら使めしは汝之功なり。如法にして不如法に非らざるなり。阿難我今是れ無上の法王なり、今我無上の善法を遺して慇懃に汝に囑累せん。汝是れ釋種の子、邊地の人と作ること莫かれ。種を斷ずるの行を爲すこと莫かれ」と。阿難、佛に問ひまつらく、「何を以ての故に、當に種を斷ずるの行を作すべきや」と、佛、阿難に語げたまはく、「大天王は善法を行ぜしと雖も、未だ漏盡を得ず、未だ世間を出でず、未だ得度せず、未だ欲を斷ずることを得ず、未だ二十一結を破ることを得ず、[六]六十二見未だ除かず、三垢未だ淨からず、未だ神通を得ず、未だ解脫眞道を得ず、未だ涅槃を得ざりき。大天の行ぜし所の善法は、梵天に生ぜしに過ぎざりき。阿難、我今法を明にし、無爲を究竟し、眞際天人之上に到ることを得たり。我法は無漏・無欲・滅度・神通・解脫・眞沙門にして涅槃に至れり。阿難、我今是の無上の道法を以て、慇懃に汝に囑累せんに、我法を增減すること莫かれ。邊地の人と作ること莫かれ。若し現行の聲聞有りて、阿難說し、此の法を斷ずる有らば、便ち邊地の人と爲すなり。若し能く此の法を興す者は、便ち佛の長子と爲り、卽ち眷屬成就すと爲すなり。阿難、汝當に眷屬を成就すべし。滅族の行を作すこと莫かれ。阿難、我前後の所說の法は、盡く汝に囑累せん。汝當に是れを學ぶべし」と。佛是れを說き已り、阿難歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「四大泥黎之人有り、云何が四と爲すや、所謂末佉利罪人、帝舍比丘、是れ大罪人なり。提婆達兜、是れ大罪人なり。瞿波離比丘、是れ大罪人なり、末佉梨罪人は身火光を出すこと、長さ六十肘なり。帝舍罪人は身火光を出すこと長さ四十肘なり。提婆達兜罪人は身火光を出すこと長さ三十肘なり。瞿波離罪人は身火光を出すこと、長さ二十肘なり。比丘、當に知るべし。末佉梨は無數の衆生に敎へて、邪見顚倒之想を行ぜ使め、有無之想を計し、帝舍愚人は、諸の聖衆の[七]應器の遺餘を斷ち、

【六】六十二見とは釋尊時代に於ける外道異學の諸見を六十二に分類せしもの、長阿含第二十一梵動經に出づ。

【七】應器とは又應量器ともいひ、Patta の譯、鐵鉢のこと。

提婆達兜愚人は、衆僧を鬪亂し、阿羅漢の比丘尼を殺し、害意を起こして如來に向ひ、瞿波離罪人は舍利弗・目乾連を誹謗せり。又復比丘、末佉梨罪人は無數に衆生に教へて、邪見を行ぜ使めしかば、身壞命終して燗光泥黎の中に墮し、帝舍罪人は聖衆の應器の遺餘を斷ちしかば、身壞命終して等害地獄の中に墮し、提婆達兜罪人は謀りて害心を起し、如來に向ひしかば、身壞命終して阿鼻地獄の中へ墮し、瞿波離罪人は、其れ舍利弗・目乾連を誹謗せしに由り、身壞命終して、鉢頭摩地獄の中に墮せり。

末佉梨罪人は、是の時[一八]獄卒生きながら其の舌を拔き、背を背上に著く。然る所以は、其の曩昔無數の衆生に教へて、邪見を行ぜ使めしに由りてたり。帝舍大罪人は、是の時獄卒、生きながら其の身を攤き、鎔銅を灌ぎて其の心を壞り、又熱鐵丸を以て、之を呑ま使令む。然る所以は、其の應器の遺餘を斷ちしが故なり。提婆達兜罪人は、熱鐵輪を以て其の身を轢き壞り、又鐵杵を以て其の體を咬咀し、群暴惡象其の身を蹈蹢し、又復大熱鐵の山面上を鎭壓し、身を擧げて熱銅鍱の爲に裹ま所、然る所以は、其の曩昔、聖衆を鬪亂し、和合僧を壞りしに由るが故に、鐵輪其の頭を轢斷することを致すなり。又此の提婆達兜愚人は、彼の太子を教へて父王を害せ使めしが、是の果報に由るが故に鐵杵をして其の身を破壞せ使むるなり。又彼の提婆達兜愚癡之人は、象に飲まして醉は使め、往いて如來を害せしが、是の果報に由りて、群象其の體を蹈蹢するなり。又彼の提婆達兜惡人は、耆闍崛山頭に上り、石を執りて佛に擲ちしが、斯の果報に由るが故に、熱鐵山をして其の面を鎭壓せ使むるなり。然も彼の提婆達兜愚人は、阿羅漢の比丘尼を殺せり、斯の果報に由るが故に、熱銅鐵鍱をして其の身を纏裹せ使むるなり。比丘當に知るべし、瞿波離罪人は、彼の蓮華地獄の中に在りて、千の具梨牛以て其の舌を犂へず、然る所以は、其の舍利弗・目連を謗誹せしに由るが故に、此の因緣の果報に由り、千の具梨牛をして、其の舌を壞ら使むるなり。

【一八】獄卒（Nirayapāla）。

復次に比丘、末佉梨罪人は、身火光を出すこと長さ六十肘なり。若し衆生有りて、此の念を興起さん、『我當に此の人を拔濟し饒益すべし』と、四大海の水の高さ四十肘を取りて、其の身に澆灌がんに、然も彼の海水尋いで時に消盡するも、焰は增減せず、是れに由つて熱鐵鍱火の燒くこと四日、人有り來つて四渧の水を以て澆がんに、然るに水尋いで時に消盡せん、此れも亦是の如く、若し人有り、來つて四大海水を以て、彼の人身に澆ぎ、無爲なら令めんと欲するも、終に果す可からず。然る所以は、彼の罪過極めて深重なるに由るが故に。然して彼の帝舍罪人は、身より火光を出すこと、長さ四十肘なり。設し衆生有りて此の人を愍念し、三大海水を以て其の身に灌澆がんに、然るに彼の海水尋いで時に消盡するも、火焰滅ぜざること、其れ猶し人有りて、三渧水を以て、熱鐵上に著くるに、水尋いで消滅して久しく停ることを得ざるがごとく、此れも亦是の如し。若し三大海水を以て、帝舍の身上に澆がんに、水尋いで時に滅するも、火終に增減せざるなり。提婆達兜罪人は、身より火光を出すこと、長さ三十肘なり。若し衆生有りて、愛念之心を興起し、提婆達兜の身をして、永く無爲に處ら使めんと欲し、二大海水を以て其の身に澆灌がんに、水尋いで時に盡くるも、火終に滅せざること、猶し二渧の水を以て、熱鐵の上に著くるも、終に增減無きが如く、提婆達兜愚人も亦復是の如し。二大海水を以て、其の身に澆灌がんに、水尋いで時に盡くるも、火終に滅せず、提婆達兜の身體の苦痛斯くの如きなり。瞿波離罪人は、身より火光を出すこと、長さ二十肘なり。設し衆生有りて、斯の人を愍念し、一大海水を取りて、其の身に澆灌がんに、然も彼の海水尋いで時に消盡するも、火は終に滅せざること、猶し一渧の水を熱鐵上に著けんに、尋いで時に消盡して、久しく停まることを得ざるが如く、瞿波離比丘も亦復是の如し。罪報に牽かる所ゝが故に斯の罪を受くるなり。是れを比丘、此の四種の人は罪を受くること、極めて重しと謂ふなり。當に自ら意を盡くして斯の患ひを遠離し、諸の賢聖等の梵行を修する者を承くべし。是の如く仁者、當に

斯の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

〔一九〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今地獄を明曉にし、亦地獄に趣く之徑を知り、亦復彼の地獄の衆生之本を知れり。設し復衆生、諸の惡不善之行を造らば、身壞命終して地獄の中に入らん。我亦之を知るなり。又復比丘、我亦知る、畜生を明曉にし、亦畜生に趣く之道を知り、亦復畜生之本を知る。諸の惡の元を作して、彼に生ずる者も亦、悉く曉了れり。我今亦餓鬼之道を知る。其れ惡の根元を作すこと有る者は、餓鬼の中に生ぜん、我亦之を知る。我今亦人道の人に向ふ之趣を知る。其れ衆生有りて、人身を得る者、我亦之を知る、我亦天に趣く之道を知る。其れ衆生有りて、諸の德本を作さば、彼れ天上に生ぜん。我亦之を知る。我亦涅槃之趣を知る。其れ衆生有りて、漏盡くること有りて、無漏・心解脫・智慧解脫を成ぜば、現法中に於て證果を取らん。我亦之を知るなり。

比丘、當に知るべし。我地獄之趣を知る、何の因緣を以て斯の言を說く乎」。佛諸比丘に告げたまはく、「我今衆生の心意を觀察せんに、所謂此の人、身壞命終して應に地獄の中に入るべし。然して後時に此の人の以て地獄の中に入りて、苦酸を受け、酷だしく搒掠無數にして、愁・憂・苦惱稱計す可からざるを觀ずること、猶し一大火坑の塵烟有ること無く、設ひ人有り、來逕して斯の處に趣くも、又且つ有目之士、此の人の趣く所、必ず當に火に墜つべきを觀ずるも、終に虛しからざるなり。然して復後時、此の人以て火坑に墮つるが如し。吾の所謂人とは、已に火坑に墮せるなり。我今衆生の心意の所念を觀察するに、必ず地獄に入らんこと疑はじ。我後時に此の人を觀察せんに、已に定んで地獄に入り、苦酸を受くることゝ酷だしく、稱計す可からざるが如し。云何が斯の人已に地獄に入るや。是れを我地獄に趣くの衆生を觀じ、諸の惡行不善之業を作さば、身壞命終して地獄の中

〔一九〕 M. 12. Mahāsīhanāda S. 參照。

に入らん。我悉く之を知ると謂ふなり。吾所說は正しく之れを謂ふ耳。

我畜生之道を知り、亦畜生に趣く者を知るとは、何の緣本を以て此れを說く乎。是に於て比丘、我衆生の心中の所念を觀察するに、此の人身壞命終して畜生中に生ぜん。我後時に此の人を觀察せんに、已に畜生中に生じ、愁憂苦惱稱計す可からざる有り。云何が斯の人已に畜生中に墮する乎。猶し村落に大圊厠有り、屎其の中に滿つ。設し斯の人有りて、徑斯處に趣かんに、有目之士、斯の人の來徑して斯處に趣くを見る『此の人久しからずして、徑に厠に墮せん』と、然して後時に此の人已に厠に墮し、厄を受け、窮困せること稱計す可からざるを觀ずるが如し。云何が斯の人已に厠に墮せしや、我今衆生の類を觀ずるも、亦復是の如く『斯の人命終して應に畜生の中に生ずべし』と、又復時に已に畜生中に生じ、苦を受くること無量なるを觀ず。我今畜生の衆生を觀ずること、皆悉く明了なり。我所說は正しく此れを謂ふ耳。

我亦餓鬼の衆生、餓鬼之道を知り、其の身壞命終して餓鬼に生ずる者、我亦之を知る。其れ衆生有りて、身壞命終して餓鬼之道に趣くを、我悉く之を知る。我復後時に於て、此の衆生を觀見せんに、已に餓鬼に入りて苦痛・樂痛を受けん。云何が斯の人以て餓鬼中に入る乎。猶し大村落の側に一大樹有り、危嶮之處に生じ、枝葉凋落せり。設し人有り、來徑して斯の處に趣かんに、有目之士、遙に此の人を觀じ『必ず樹下に趣くこと疑はじ』と。復後時に於て此の人の或は坐し、或は臥して、其の苦樂之報ひを受くるを觀ずるが如し。『云何が斯の人、以て樹下に至りて坐臥する乎』と、我今衆生と類を觀ずること亦復是の如く、身壞命終して、必らず餓鬼に趣くこと疑はじ。其の苦樂之報ひを受くること稱計す可からず。我餓鬼を知り、餓鬼に趣く之道、皆悉く分明なり。我所說は正しく此れを謂ふ耳。

我人道を知り、亦人に趣く道を知り、亦其の行を造ること有れば、身壞命終して、人中に生ずる

者、我亦之を知るなり。是に於て比丘、我衆生の類の心中に所念を觀ずるに、『此の人必ず當に身壞命終して、應に人中に生ずべし』と、我復後時に於て、此の人已に人中に生ぜしを觀ぜり。云何が斯の人已に人中に生ぜしや、猶し村落の側に一大樹有り、平正の處に在りて、諸の蔭涼多し。若し人有りて、直ちに一道從り來る。有目之士見已つて便ち之を知る、『斯の人の趣向する所、定んで此の樹に至らんこと疑はじ』と、我復後時に於て、此の人を觀ずるに、已に此の樹に至り、樂を受くること無量なるが如し、云何が斯の人斯の處に至ることを得るや』と、此れも亦是の如し。我衆生の心意の所念を觀ずること亦復是の如く、『身壞命終して必らず人中に生ぜんこと疑はじ』と、我復後時に於て此の人已に人中に生じ、樂を受くること無量なるを觀ぜん。我人趣を知り、亦人に趣く之道を知る。今人中に生ずる者も我亦之を知る。我所說は正しく此れを謂ふ耳。

我亦天を知り、亦天に趣く之道を知る。其れ衆生有りて、諸の功業を作して、天に生ぜば、我亦之を知るなり、何の因緣を以て此れを說く乎。我今衆生之類の心中の所念を觀ずるに、『此の人必ず當に身壞命終して、善處天上に生ずべし』と、然して後時に於て、此の人身壞命終して善處天上に生じ、彼に於て自然之福を受け、快樂比ひ無きを觀ず。是れを斯の人已に天上に生じ、彼に於て自然之福を受け、快樂比ひ無しと謂ふなり。猶し村落の側に好高の講堂有りて、彫文刻鏤し、繒幡蓋を懸け、香汁を地に灑ぎ、好座具を敷き、[二〇]氍・毹・毾・㲪の文繡綩綖たり。若し人有りて直ちに一道從り來れば、有目之士、『直ちに一道從り來り、此の人の趣向する所、定んで高廣の講堂に至らんこと、必ず疑はじ』と、復後時に於て、此の人已に講堂上に到り、或は坐し、或は臥し、中に於て福を受け、快樂比ひ無きを觀見するが如く、此れも亦是の如し。吾今衆生の類を觀ずるに、身壞命終して、應に善處天上に生じ、彼に於て樂快を受くること、計る可からざるべし。『云何が斯の人已に善處天上に生ぜし乎、我天道、天に趣く之路を知る乎』と、我所說は正しく此れを謂ふ耳。

【二〇】氍・毹・毾・㲪は何れも毛織の敷物又は蒲團。

我今涅槃を知り、亦涅槃之道を知り、亦衆生の應に般涅槃すべき者を知る。或は衆生有りて、有漏を盡くして無漏を成じ、心解し、智慧解脫し、現身に證を取りて自ら遊化す。我悉く之を知る。何の因緣に由つて此れを說く乎。是に於て比丘、我衆生の類の心中の所念を觀じ、『此の人有漏を盡くして無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫す。是れを斯の人已に有漏を盡くして無漏を成ずと謂ひ、猶し、村落を去りて遠からざるに大池有り、水極めて淸徹にして、若し人有りて直ちに一道從り來る。有目之士、遙に斯の人の來るを見、此の人必ず池水に至るを知りて疑はず、又後時に、此の人已に池水に至り、沐浴澡洗して、諸の穢汚を除き、諸の垢坋を去り、側に在りて坐し、亦人と共に相競はざるを觀ずるが如く、我今衆生の類を觀ずるも亦復是の如し。有漏を盡くして無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦ずるを名けて眞人と爲す。是れを斯の人已に此の處に至り、我涅槃之道を知り、亦衆生の般涅槃する者を知り、皆悉く之を知ると謂ふなり。如來・至眞・等正覺に此の智無畏力の具はる有りて、皆悉く成就す。如來の智は量り有ること無し。如來は能く過去の無限無量不可計の事を觀じ、皆悉く之を知る。將來現在無限無量なるを皆悉く分別す。是の故に比丘、當に方便を求めて、十力無畏を具足すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

〔三〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「雪山上に依りて、大方廣之樹有りて、五事長大す。云何が五と爲すや、根移動せず、皮極めて厚大なり、枝節遠く蔭りて、覆はざる所無く、葉極めて茂盛す。是れを比丘、雪山上に依りて、此の大樹有り、極めて倚好爲りと謂ふなり。今善男子、善女人も亦復是の如し。豪族之處に依りて、五事長益す。云何が五と爲すや、所謂信長益し、戒長益し、聞長益し、施長益し、慧長益す。是れを比

〔三〕 A. V. 40 Sāla.

丘、信善男子、善女人、豪族の家に依りて、此の五事を成就すと謂ふなり。是の故に比丘、當に方便を求めて、信・戒・聞・施・智慧を成就すべし」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

猶し雪山の樹の如く　五事の功德成ず　根皮枝節廣く　蔭葉極めて茂盛なり　信善男子有りて

五事の功德成ぜば　信・戒・聞・惠施・智慧遂に增益せん

是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[三二] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時 [三三] 茂羅破群比丘、諸の比丘尼と共に相遊處せり。然して諸の比丘尼も亦復共に相遊處するを好樂し、共に人民にして、茂羅破群比丘を稱讚する者有れば、是の時諸の比丘尼、極めて瞋恚を懷き、愁憂して悅ばず。若し復人有りて、諸の比丘尼を毀呰せば、是の時破群比丘も亦復愁憂して悅ばざりき。是の時衆多の比丘、破群比丘に告げて曰く、「汝今云何が諸の比丘尼に親近し、諸の比丘尼も亦復汝と交接するや」と。破群報へて曰く、「我今如來の所說の敎誡を解せり。其れ婬を犯すこと有る者は、罪言ふに足らず」と。衆多の比丘、復告げて曰く、「止みなん、止みなん、比丘、斯の言を作すこと勿れ。如來の言敎を誹謗すること莫かれ。其れ如來の言敎を誹謗する者は、罪咎少からじ。又復世尊は、無數に方便して、婬之穢れを說きたまへり。其れ婬を習ふこと有りて、罪無から使めんこと、終に此の理無し。汝今此の惡見を捨つ可し。備さに長夜に於て、苦を受くること無量ならん。然るに此の破群比丘は故に與に交通して其の行ひを改めず」と。

爾の時衆多の比丘、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「舍衛城中に一比丘有り、名けて破群と曰ひ、諸の比丘尼と共に相交接せり。然して諸の比丘尼も亦、破群比丘と交接往來せり。我等彼に往いて勸喩して、其の行ひを改め使めしに、然も彼の一人遂に更に增益して、

【三二】 M. 21. Kakacūpama S. 漢譯中阿含第百九十三經、牟犁破群那經。
【三三】 茂羅破群比丘(Moliya-phagguna)

此の顚倒之見を捨てず、亦正法之業に順はず」と。爾の時世尊、一比丘に告げたまはく、「汝彼の破群比丘の所に往至して、『如來は卿を呼びたまふ』と云へ」と。爾の時比丘、如來の敎へを受け、卽ち破群比丘の所に往至し、「汝當に之を知るべし、如來は卿を喚びたまへり」と。破群比丘、彼の比丘の語を聞き、卽ち世尊の所に往到し頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時世尊、彼の比丘に問ひて曰はく、「汝審に諸の比丘尼に親近する耶」と。彼の比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝比丘と爲りて、云何が比丘尼と共に相交接するや、汝今是れ族姓子、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、信堅固を以て出家學道せしや」と。破群比丘、佛に白して言さく、「唯然り世尊、我は是れ族姓子なり、信堅固を以て出家學道せり」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝之法に非らず、云何が比丘尼と共に相交接するや」と。破群比丘、佛に白して言さく、「我は如來の所說を聞けり、其れ婬を習ふ者は、其の罪蓋しと言ふに足らず」と、佛、比丘に告げたまはく、「汝愚人、云何が如來は婬を習ふて罪無しと說きしや、我無數に方便して、婬之穢汚を說けり、汝今云何が是の語を作すや『如來は婬罪無しと說けり』と、汝好んで口の過を守護し、長夜に恒に其の罪を受け令むること無かれ」と。佛之に告げて曰はく、「汝今且らく止みなん、吾更に諸比丘に問ひを須ひん」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げて曰はく、「汝等、疑ふらくは、吾諸比丘の與に、婬罪無しと說きしを聞きし乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、世尊、如來は婬罪無しと說きたまひしを聞かず。然る所以は、如來は無數に方便して、婬之穢汚を說きたまへり。設し罪無しと言はゞ、此の義然らず」と。佛諸比丘に告げたまはく、「善い哉、善い哉、諸比丘、汝の言ふ所の如く、我無數に方便して婬之穢汚なるを說けり」と。爾の時世尊、重ねて諸比丘に告げて曰はく、「汝等當に知るべし、若し愚人有りて、法行を習はんに、所謂契經・祇夜・偈・授決・因緣・本末・譬喩・生・方等・未曾有・說・廣普、斯の

法を誦すと雖も、其の義を觀察せざるを以て、亦其の法に順從せず、順ふ應き所の法終に其の所に從はざるなり。斯の法を誦する所以は、欲に從つて人と共に競ひ諍ひ、意勝負を計し、亦自ら己の爲にせず、濟及する所有り。彼れ法を誦し已つて卽ち制限を犯すこと、猶し人有りて彼の村落を出で、惡蛇を求めんと欲し、彼若し極大之蛇を見ば、到り已つて左手を以て其の尾を摩抆す、然るに彼の蛇、頭を廻らして其の手を蠚螫せん、此の緣の報ひに由りて、便ち命終を致すが如し。此れも亦是の如く、若し愚人有りて、其の法を翫習し、十二部經斟酌せざるは靡く、亦其の義を觀ぜざらん。然る所以は、正法の義を究竟せざるに由るが故に、是に於て若し善男子有りて、將護して其の法を翫習して、契經・祇夜・偈・授決・因緣・本末・譬喩・生・方等・未曾有・說・廣普、彼の人此の法を誦し已つて、深く其の義を解し、已に彼の深義之法を解し、其の敎へに順從して、違失する所無けん。法を誦する所以は、勝負之心を以て、彼と競ひ諍はざるなり。法を誦習する所以は、自ら纂修して察及ならんと欲するなり。法を誦する所以は、果して所願有るなり、此の因緣に由りて、漸く涅槃に至ること、猶し人有りて彼の村落を出で、惡蛇を求覓めて、彼蛇を見已つて、手に鐵鉗を執り、先づ其の頭を鑷み、後便ち項を捉へて動搖せ令めず、設し彼の惡蛇尾を廻らして彼の人を害せんと欲するも、終に至る所無きが如し、然る所以は、諸比丘、其の項を捉ふるに由るが故なり。此の善男子も亦復是の如し。誦習・誦讀周遍せざるは靡く、其の義を觀察し、其の法に順從して、終に違失無く、漸漸に此の因緣に由りて、涅槃に至ることを得るなり。然る所以は、其れ正法を執るに由るが故に。是の故に諸比丘、其れ吾義を解する有らば、當に念じて奉行すべし。其の解せざる者は、重ねて來つて我に問へ、如來は方に今現在せるに後悔するも益無けん」と。

爾の時佛、諸比丘に告げたまはく、設し比丘有りて、大衆の中に在りて是の說を作さんに『如來の所說の禁戒、我悉く解了せり、其れ婬を習ふは罪蓋し言ふに足らず』と。彼の比丘、當に斯の比

丘に語るべし『止みなん、止みなん、斯の言を作すこと莫かれ、如來を誹謗して斯の語を言說すること莫かれ。如來は終に此の言を說きたまはず。若し此の比丘にして、其の所犯を改むれば善し。若し其の行ひを改めずば、復當に再三之を諫むべし。設し當に改むべくんば善し。設し改めずば墮せん。若し復比丘其の事を隱匿して、露現せ使めずば、諸人皆墮せん。是れを比丘、我之禁戒と謂ふなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時生漏梵志、世尊の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐しぬ。爾の時生漏梵志、世尊に白して曰さく、「幾劫の過去有りと爲んや」と。佛、梵志に告げたまはく、「過去の諸劫稱計す可からず」と。梵志佛に白さく、「數を計る可しと爲んや不乎。沙門瞿曇は恒に三世を說けり。云何が三と爲すや、所謂過去・將來・現在なり。沙門瞿曇は亦過去・當來・現在三世を知るや、唯願くは沙門、劫數之義を演說せよ」と。

佛、梵志に告げたまはく、「若し當に我此の劫に因り、復此の劫に次することを說くべし。我既に滅度し、汝命終を取らば、劫數之義を知らざるなり。然る所以は、如今は人壽短促にして、極壽のものも百年を過ぎず。計百年中劫を數へば、我滅度を取り、汝既に命終して、終に劫數之義を知らざらん。梵志當に知るべし。如來も亦此の智有りて具足し、劫數を分別し、衆生の壽命の長短、其の苦樂を受くること、皆悉く分明なり。今當に汝の與に譬を引くべし。智者は譬喩を以て解ることを得ん。猶し恒沙之數の如く、亦限り有ること無く、量り有ること無く、計算す可からず。過去劫は其の數是の如く、稱計す可からず、籌量す可からざるなり」と。

梵志佛に白さく、「當來の劫、願ふらくは幾數有りや」。佛、梵志に告げたまはく、亦恒沙之數の如くして、齊畔[二四]有ること無く、稱計す可からず、算の及ぶ所に非らず」と。梵志復佛に問ひまつらく、

【二四】齊畔とは限りのこと。

「頗ふらくは現在の劫、成敗劫有り乎」と。佛、梵志に告げたまはく、「此の成劫・敗劫有り、一劫百劫に非らざること、猶し器皿危地に在らば、終に安住せざるが如く、設し當に住すべくんば、要らず當に顚倒すべし。諸の世界の方域も亦復是の如し。或は劫成有り、或は劫敗有り、此の數も亦復計り叵く、幾劫成を爲し、幾劫敗を爲すや、然る所以は、生死長遠にして邊際有ること無し。衆生は無明・結・覆・蓋を以て漂浪流滯し、今世從り後世に至り、後世從り今世に至り、長夜に苦惱を受くれば、當に厭患して此の惱みを去離す可し。是の故に梵志、當に是の學を作すべし」と。爾の時生漏梵志、世尊に白して言さく、「沙門瞿曇は甚だ奇なり、甚だ特なり。過去・當來の劫數之義を知りたまへり。我今重ねて復、自ら沙門瞿曇に歸しまつらん。唯願くは沙門瞿曇、優婆塞と爲ることを聽したまへ。其の形壽を盡して、敢えて復殺乃至飲酒せじ」と。爾の時生漏梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

一〇

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時一異比丘有り、世尊に白して言さく、「劫は頗ふらくは邊際有り乎」と。佛、比丘に告げたまはく、「方便して譬を引かんに、然も劫數窮盡無し。過去久遠、此の賢劫中に於て佛有りて出でたまひ、號して倶樓孫至眞・等正覺と曰へり。爾の時此の耆闍崛山は更に姓號有りき。爾の時羅閱城の人民之類、此の耆闍崛山中に上るに、四日四夜行きて乃ち頂を徹せり。又復比丘、拘那含牟尼佛の時、此の耆闍崛山は更に姓號有りき。爾の時羅閱城の人民之類、三日三夜行きて乃ち此の山頂に至れり。迦葉如來世に出現せし(時)、此の耆闍崛山に更に姓號有りて、時に羅閱城の人民之類、二日二夜、行きて乃ち此の山頂に至れり。我今日の如く、釋迦文佛世に出現するや、此の山耆闍崛山と名け、須臾之頃に乃ち此の山頂に到る。若し彌勒如來、世に出現せば、此の山亦耆闍崛山と名けん。然る所以は、

諸佛の神力咸此の山をして在ら使むればなり。比丘、當に方便を以て知るべし。劫衰盡有ること稱計す可からず。然して劫に三種有り、大劫と小劫となり。若し劫中に於て、佛出世すること無くば、爾の時復辟支佛有りて出世せん。此れを名けて小劫と爲すなり。若し如來劫中に於て出世せば、爾の時彼の劫中に辟支佛の世に出現すること有ること無けん。此れを名けて大劫と爲すなり。當に此の方便を以て、劫數の長遠にして、稱計す可からざることを知るべし。是の故に比丘、當に此の劫數之義を憶ふべし」と。爾の時異比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第四十八

巻の第四十九

非常品第五十一

一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「云何が比丘、汝等生死に流轉して、苦惱を經歷し、中に於て悲號涕泣して、涙出するを多しと爲んや。恒水多しと爲ん乎」と。爾の時諸比丘、前んで佛に白して言さく、「我等如來の所說の義を觀察しまつるに、生死に經歷しての涕泣之涙は、恒水より多し」と。佛、比丘に告げたまはく、「善い哉、善い哉、諸比丘、汝の所說の如く、異り有ること無し。汝等生死に在りての涙は恒水より多し。然る所以は、生死の中に於て亦更に父母終に亡び、中に於て涙を墮すこと稱計す可からず。長夜之中に父兄・姉妹・妻子五親及び諸の恩愛の追慕悲泣稱計す可からざればなり。是の故に比丘、當に生死を厭患し、此の法を去離すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。當に此の法を說きたまふ時に當り、六十餘の比丘、漏盡意解しぬ。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「云何が比丘、汝等生死の中に在りて、身體毀壞して、血を流すこと多きや、恒水多しと爲ん乎」と。爾の時諸比丘、佛に白して言さく、「我等如來の所說を觀察しまつるが如くんば、流血、恒水より多し」と。佛、諸比丘に告げたまはく、「善い哉、善い哉、比丘、汝の所言の如く、流血、恒水より多し。然る所以は、生死の中に在りて、或は牛・羊・猪・犬・鹿・馬・鳥獸及び餘の無數と爲りて、經歷

【一】S. 15. 3 Assu 漢譯雜阿含經三十三卷第二十經。別譯雜阿含經卷十六第二經。

【二】恒水とは恒河(Gaṅgā)のこと。

【三】S. 15. 13. Tiṃsamattā 漢譯雜阿含卷三十三第十九經、別譯雜阿含卷十六第一經。

する所の苦惱は、實に厭患す可く、當に念じて捨離すべければなり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時世尊、是の法を說きたまひし時、六十餘の比丘、漏盡意解しぬ。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に無常想を思惟し、廣く無常想を布くべし。已に無常想を思惟し、廣く無常想を布かば、盡く欲愛・色愛・無色愛を斷じ、無明・憍慢皆悉く除盡せんこと、猶し火を以て草木を焚燒し、永く盡くして餘り無きが如し。比丘、當に知るべし、若し無常想を思惟し、廣く無常想を布き、盡く三界の愛著を斷ぜよ。

昔國王有り、名けて清淨音響と曰ひ、閻浮地を統領し、八萬四千の城郭有り、八萬四千の大臣有り、八萬四千の宮人婇女有りて、一一の婇女に各四の侍人有り。爾の時音響聖王、子息有ること無し。時に彼の大王便ち是の念を作さく、『吾今此の國界を領し、法を以て治化して、枉理有ること無し。然るに我今日亦繼嗣無し。設し我終りし後は門族斷滅せん』と。時に彼の國王、息の因緣を以ての故に、自ら諸天龍神日月星辰に歸し、自ら釋梵・四天王山神樹神より下藥草果神に及ぶまで歸し、福を求めて、『我をして息を生ま使めたまへ』と願ひぬ。

爾の時三十三天に一の天子有り、名けて須菩提と曰ひ、今將に終らんと欲して、五の瑞應有りて、自然に已に逼まれり。云何が五と爲すや。又此の諸天の華冠終に萎まざるに、此の天子の華冠自ら萎めり。是の時諸天の衣垢坋無きに、爾の時天子の衣に垢坋を生ぜり。又且つ三十三天の身體香潔にして、光明徹照せるに、爾の時彼の天子の身體の臭處親近す可からず。又且つ三十三天恒に玉女有りて、前後圍遶して倡伎樂を作し、五欲自ら恣まなるに、爾の時彼の天子の命將に終らんと

欲して、玉女離散せり。又且つ三十三天に、自然之座有りて、四尺地に入り、設し天子座を起たば地を離るゝこと四尺なるに、然るに此の天子の命將に終らんと欲するや、本座を樂します。是れを五の瑞應自然に已に逼ると謂ふなり。時に須菩提天子、此の瑞應有るを以て、爾の時釋提桓因、一天子に告げて曰く、『汝今閻浮地に往至し、音響王に告げて曰へ、「釋提桓因、敬ひを致すこと無量なり。興居輕利に、遊歩康强なるや。閻浮地に有德三人、王の與に息を作すこと無し。但し今三十三天に天子有り、名けて須菩提と曰ひ、今五の瑞應有りて、自然に已に逼れり。必ず當に神を降して王の與に息と作るべし。爾りと雖も、年壯盛の時、必ず當に出家學道して、無上の梵行を修むべし」』と、彼の天對へて曰く、『是の如し、天王』と、天王の敎へを受け、猶し力士の臂を屈伸するが如き頃に、三十三天從り沒して、閻浮地に來至せり。爾の時音響大王、高樓上に在り。及び持蓋一人となり。是の時彼の天、樓上の虛空中に在りて、王に告げて曰く、『釋提桓因、敬ひを致すこと無量なり、遊步康强にして、興居輕利なるや。閻浮地に有德之人、王の與に息を作すこと無し。今三十三天に天子有り、須菩提と名く。今五の瑞應有りて、已に已に逼れり。當に神を降して下り、王の與に息と作るべし。但し年壯盛の時、必ず當に出家學道して、無上の梵行を修むべし』と。時に音響王、此の語を聞き已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。即ち天に報へて曰く『今來りて告ぐる所、甚だ大幸に過ぎたり、但神を降して我與に息と作れ、出家を欲求せんも、終に違逆せじ』と。是の時彼の天、還つて釋提桓因の所に至り、即ち大王に白さく、『音響王は甚だ白せし所を慶べり。音響王言く、「但神を降さ使めよ。出家を欲せば、終に違逆せじ」』と。

　時に釋提桓因、便ち須菩提天子の所に往至し、須菩提天子に語げて言く、「汝今誓願を發して、音響人王の宮中に生ぜよ。然る所以は、音響人王は子息有ること無し。恒に正法を以て治化せり。汝昔福有りて衆の功德を造れり。今應に神を降して彼の宮中に生ずべし』と。須菩提天子曰く、「止

みなん、止みなん、天王、我人王の宮中に生ぜんことを樂願はじ、意に出家學道せんと欲へばなり。王宮に在らば、學道せんこと甚だ難からん』と。釋提桓因告げて曰く、『汝但發願して彼の王宮の中に生ぜよ。我當に將護して、汝をして出家學道せ令むべし』と。比丘當に知るべし。爾の時須菩提天子、卽ち誓願を發して、王の宮中に生ぜり。

是の時音響人王、第一夫人と共に相交接し、當に懷妊を覺えたり。是の時夫人、音響王に白して曰く、『大王、當に知るべし、我今身に懷妊を覺えたり』と。時に王、聞き已つて踊躍歡喜し、自ら勝ふること能はず。更に殊特なるを以て好座具を布き、食甘美を以て、味王の如くして異ること無し。是の時夫人、八九月を經て一男兒を生めり、極めて端正爲り、顏貌奇特にして世の希有なり。時に音響王、諸の外道梵志の群臣を召して占相せ使令め、此の因緣の本末を以て、具さに諸の相師に向つて說けり。諸の婆羅門報へて曰さく『唯願くは大王、當に此の理を察したまふべし。今生まれたまひし太子は世之殊特なり。昔天子爲りし(時)、須菩提と名けたれば、今前號に尋いで須菩提と名けまつらん』と、時に諸の相師、姓號を立て已つて、各〻座從り起ちて去りぬ。時に王子須菩提、王の爲に敬重せ所れ、未だ曾て目前を離れず。是の時音響王、便ち是の念を作さく『我昔日已來、子息有ること無く、子息に緣るが故に、諸天に禱謝して、一子有ら使め、爾許の時を經歷して、今方に子を生めり。然るに天帝の記する所は「當に出家學道すべし」と。我今要らず巧便を設けて、出家學道せざら使めん』と。是の時音響王、太子の爲の故に、三時の宮殿を設け、寒時には溫殿を設け、熱時には凉殿を設け、不寒不熱時には、時に適ふの宮殿を設け、與に四種の宮女の居處を設け、第一の宮には六萬の婇女有り、第二の宮には六萬の婇女有り、第三には六萬の婇女有り、第四には六萬の婇女有り、各侍從四人有りて、轉關座具を作り、彼の太子をして、上に於て臥せ令めり。若し須菩提王子にして、意に前に在りて遊戲せんと欲せば、是の時諸の婇女輒ち前に在

りて立ちぬ。是の時彼の座具、當に隨つて廻轉し、前に六萬の婇女有り、及び侍者四有り。若し彼の意、後に在りて遊戯せんと欲せば、是の時座床輒ち身に隨つて廻轉せり。若し復諸の婇女と共に相娛樂まんと欲せば、是の時座具身に隨つて廻轉し、王子須菩提をして、意五欲に在りて、出家を樂しまざら使めぬ。是の時釋提桓因、夜半非人之時、便ち王子須菩提の所に往至し、虛空中に在りて、須菩提王子に告げて曰く『王子は昔日豈是の念を作さざりし乎。「若し我家に在らば、年壯盛の時、當に出家學道すべし」と。今日何故に五欲の中に在りて、自ら娛樂みて、意に復出家學道を願はざる乎。然して我も亦斯の言ありき。「王子を勸樂して、出家學道せ使めん」と。今正に是れ時なり。設し出家學道せずんば、後悔せんも益無けん』と。釋提桓因、斯の語を說き已つて、便ち退いて去りぬ。

時に王子須菩提、宮人の中に在りて、便ち此の念を生ずらく、『善響王は已に我與に愛欲の羅網を作れり。此の愛欲の羅網に因緣が故に、出家學道を得ず。我今此の羅網を斷ちて、穢濁の與に拘牽せ所れず、信堅固を以て出家學道し、空靜之處に在りて、勤學し、業を經て、日をして新なら使令む可し』と。是の時王子須菩提、重ねて是の念を作さく『善響父王に此の六萬の婇女有りて前後を圍遶せり。我今當に觀察すべし。頗ふらくは斯の理有りて、世に在りて永く存せん乎』と。爾の時王子須菩提、遍く宮裏を觀ずるに、女人の久しく世に存する者有ること無し。是の時須菩提、復是の念を作さく『我今何故に外物を觀ずるや、當に身內の因緣の所起を觀ずべし。今此の身中に頗ふらくは髮毛・爪齒・骨髓之屬、久しく世に存すること有らん乎。頭從り足に至りて三十六物を觀ずるに、汚露不淨なり。然して自ら觀察するに、一として貪る可きものなし。亦眞實なく、幻僞非眞にして、皆空に歸し、久しく世に存せざるなり』と。是の時王子須菩提、復是の念を作さく『我今當に此の羅網を斷ちて出家學道すべし』と。是の時須菩提、此の五受陰の身を觀ぜり。所謂此の色は

苦、此の色の集、此の色の滅、此の色の出要なり。痛・想・行・識は苦、識の集、識の滅、識の出要なり。爾の時此の五陰の身を觀じ已れり。所謂集法は皆是れ盡法なりと、卽ち座上に於て辟支佛を得たり。時に須菩提辟支佛、以て佛を成ずることを覺せり。便ち斯の偈を說きぬ。

我汝の本を知らんと欲し　意思想を以て生ぜり　我汝を思想せずんば　則ち汝にして有らじ

と。是の時辟支佛、此の偈を說き已つて、虛空を飛在して去り、一山中に在りて、獨り樹下に在りて、無餘涅槃界に於て般涅槃せり。

爾の時音響王、傍臣に告げて曰く『汝往いて須菩提を宮內に觀よ。王子の寤寐安隱爲る乎』と。爾の時大臣、王の敎令を受け、卽ち王子の宮內に往至せり。然るに寢む所の內室の門戶牢固たり。時に彼の大臣、還つて王所に至り、前んで王に白して言く『王子の寤寐安隱にして、門戶牢固たり』と。時に王再三問ふ『汝往いて王子を看、善き眠りを爲す乎』と。爾の時彼の臣、復宮門に至るに、然も門戶牢固たり。復往いて王に白さく『王子は宮に在りて眠寐りて覺めず、門戶牢固として、今に至るも聞かず』と。時に音響王復是の念を作さく『我息王子は、少時猶ほ眠寐らず、何に況んや今日年壯盛時に眠寐ること有らん乎。宜しく自ら往いて看、子の吉凶を知るべし。我子は將に疾病を得ざりし耶』と。

是の時音響王、卽ち須菩提の宮內に往至し、門外に至りて立ち、一人に告げて曰く『汝今梯を施し、墻を踰えて內に入り、吾與に門を開け』と。彼の人、王の敎勅を受け、卽ち梯を施し、墻を踰え、內に入りて、王の與に門を開けり。時に王內に入りて、內宮の中に觀るに、臥する所の床に王子を見ず、見ざりしを以て、婇女に告げて曰く『王子須菩提は今所在爲るや』と。諸の婇女曰く、『我等も亦王子の所在を知らざるなり』と、時に音響王、斯の語を聞き已つて、自ら地に投じ、良久しうて乃ち蘇えれり。是の時音響王、群臣に告げて曰く『我息は小時猶ほ斯の念を生ぜり。「設し我

長大せば、當に鬚髮を剃除し、三法衣を著け、信堅固を以て出家學道すべし」と。然れば今王子は、必ず當に我を捨てゝ出家學道すべし。汝等各各四面して、王子を求索めて、竟に所在を爲せよ』と。卽時に群臣乘駕し、流馳して處處に求索めぬ。

爾の時臣有り、逕を彼の山中に往至し、中道にして復是の念を作さく、『若し王子須菩提にして、出家學道せば、必らず當に此に在りて學道すべし』と。爾の時大臣、遙に王子須菩提の、一樹下に在りて結跏趺坐するを見たり。時に臣便ち斯の念を生ずらく、『此れは是れ王子須菩提なり』と。熟ら之を視察し、還えつて王の所に詣り、前んで王に白して言さく、『王子須菩提は近く山中の樹下に在りて結跏趺坐せり』と、時に音響王、斯の語を聞き已つて、卽ち彼の山中に往至し、遙に須菩提の山の樹下に在りて結跏趺坐するを見、復自ら地に投じ『我息は昔日自ら誓願して曰く、「設し我年二十に向はゞ、當に出家學道すべし」と。今將に誤らず、又且つ天我に告げて言へり。「汝の子は必ず當に學道すべし」』と。時に音響王、直ちに前んで須菩提に語げて曰く、『汝今何故に我を捨てゝ出家學道せしや』と。時に辟支佛、默然として對へず。王復告げて曰く、『汝の母は極めて愁憂を懷き、汝を見んことを須ち、乃ち食時に起ちて宮に詣れり』と。時に辟支佛、言はず、語らず、默然として住せり。時に音響王、卽ち前んで手を捉らふるも、亦動搖せず。王復群臣に告げて曰く、『王子は今日已に命終を取れり。釋提桓因先きに來つて我に告げり、「汝息を得應きも、但し當に出家學道すべし」と。然して今王子は已に出家學道せり。今此の舍利を輿せ、王の國界に詣り、當に之を蛇旬すべし』と。時に彼の山中の諸の神祇、半身を現はして、王に白して曰く、『此れは是れ辟支佛なり。是れ王子に非らず、舍利を蛇旬するの法は、王子の法に如かず。然る所以は、我は是れ過去の諸佛の弟子なり。諸佛も亦此の教へ有り。世に四人有りて、應に與に偸婆を起こすべし。云何が四と爲すや。如來・至眞・等正覺は應に偸婆を起すべし。辟支佛は應に偸婆を起すべし。如來の弟子漏

【四】蛇旬は荼毗に同じ。

盡の阿羅漢は應に偸婆を起すべし。轉輪聖王は應に偸婆を起すべし。當に轉輪聖王の身を蛇旬すべき時、如來・辟支佛の身を蛇旬するも亦復是の如し。爾の時音響王復天に語げて曰く、『當に云何が供養して、轉輪聖王の身を蛇旬すべきや』と、樹神報へて曰く、『轉輪聖王は與に鐵槨を作り、香油を盛滿し、轉輪聖王の身を沐浴し、白淨の劫波育衣を以て其の身を纏裹し、復綵畫之衣を以て其の上を覆ひ、而して槨の中に著し、復鐵蓋を以て其の上を蓋ひ、處處に釘を施し、復百張の白疊を以て其の槨を裹み、種種の雜香を以て、移して地に在り、鐵槨を以て其の中に安著し、七日七夜之中、華香供養し、繒幡蓋を懸け、倡伎樂を作して七日を過し、後復王の身を取りて之を蛇旬し、以て舍利を取りて蛇旬し、復七日七夜を經て供養すること絕えず、四衢道中に於て偸婆を起し、復香華幡蓋を以て種種に供養す。大王、當に知るべし。轉輪聖王の舍利を供養すること、其の事是の如し。諸佛如來・辟支佛・阿羅漢も亦復是の如し』と。

時に音響王、彼の天に語げて曰く、『何の因緣を以て轉輪聖王の身を供養し、何の因緣を以て佛・辟支佛・阿羅漢の身を供養するや』と。天、王に報へて曰く、『轉輪聖王は法を以て王治し、自ら殺生せず、復他人を敎へて殺を行ぜざら使め、自ら與へられざるに取らず、復他人を敎へて竊盜せざら使め、己れ婬泆ならず、復他人に敎へて他の妻を犯さず、己れ妄言・綺語・惡口・兩舌・鬪亂彼此・嫉妬・恚癡せず、己れの意專正にして、恒に正見を行じ、亦他人をして其の正見を習は使む。是れを大王、此の因緣に由つて、轉輪聖王は應に偸婆を起すべしと謂ふなり』と。王天に問ふて曰く、『復何の因緣を以て漏盡阿羅漢は應に偸婆を起すべきや』と。天、王に報へて曰く、『漏盡阿羅漢比丘は、欲愛已に盡き、瞋恚・愚癡已に除き、已に有を度して無爲に至る。是れ世間の良祐福田なり。此の因緣に由つて、漏盡阿羅漢は應に偸婆を起すべし』と。王復問ふて曰く、『何の因緣を以て辟支佛は應に偸婆を起すべきや』と。天、王に報へて曰く、『辟支佛とは無師にして自覺し、出世すること甚だ

【五】劫波育衣(Kappāsacī-vara)は又劫貝衣に作り、劫貝といふ植物の果より採りし綿にて絲を作り、織りし衣の一種、

難く、現法に報ひを得て、惡趣を脫し、人をして天上に生ぜ令む。此の因緣に由つて、辟支佛は應に偸婆を起すべし』と。王復問ふて曰く、『何の因緣を以て如來は應に偸婆を起す應きや』と。天、王に報へて曰く、『如來は十力具足したまふ。此の十力は聲聞・辟支佛の能く及逮ぶ所に非らず。轉輪聖王の能く及ばざる所にして、世間の群萠の能く及ばざる所なり。如來の四無所畏は、大衆の中に在りて能く師子吼して梵輪を轉じ、如來は度せざる者を度し、脫せざる者を脫し、般涅槃せざる者をして般涅槃せ令め、救護無き者の與に覆蔭と作り、盲者に眼目と作り、諸の疾病の與に大臣王と作り、天及び世人魔、若しは魔天の宗奉せざるは靡く、敬ふ可く貴ぶ可く、惡趣を廻して善處に至ら令めたまふ。是れを大王、此の因緣に由つて、如來は應に偸婆を起すべしと謂ひ、是れを大王、此の因緣の本末に由つて、四種之人は應に偸婆を起すべしと謂ふなり』と。爾の時音響王、彼の天に語げて曰く、『善い哉、善い哉、神天、我今汝の教へを受けて、此の舍利を供養せ令むること、當に辟支佛を供養するが如くすべし』と。

爾の時音響王、諸人に告げて曰く、『汝等各須菩提辟支佛の舍利を舁ぎて、王國界に往け』と。群臣、王の教へを聞き已つて、金床に臥著し、舁ぎて國界に詣れり。是の時音響王、即ち勅して鐵槨を作ら使め、香油を盛滿し、辟支佛身を沐浴し、劫波育衣を以て其の身を纒褁し、復雜綵の好衣を以て其の上を覆ひ、鐵槨中に安處し、復鐵蓋を以て其の上を蓋ひ、處處に釘を安じて、極めて牢固なら令め、百張の白氎を以て其の上を覆ひ、種種の好香を取りて、辟支佛身を以て其の中に著し、七日七夜香華(もて)供養し、七日を過ぎて後、辟支佛の舍利を蛇旬し、復供養すること七日、倡伎樂を作し、四衢道頭に於て、一偸婆を起し、後香華繒綵幡蓋を以て倡伎樂を作して之を供養せり。

「比丘當に知るべし。其れ衆生有りて、辟支佛の舍利を恭敬し供養する者は、命終之後即ち三十三天の上に生ぜん。其れ衆生有りて、無常之想を思惟(する者は)、三惡趣を迴して天人中に生ぜん、汝

等斯の觀を作すこと莫かれ。爾の時の音響王とは豈異人ならん乎。則ち我身是れなり。其れ無常想を思惟せば、饒益する所多からん。我今此の義を觀じ已つて諸比丘に告げん。當に無常想を思惟して無常想を廣布すべし。已に無常想を思惟せば、便ち欲愛・色愛・無色愛盡く斷じ、無明・憍慢永く遺餘無きこと、猶し火を以て草木・高好の講堂の窓牖門閤を焚燒するが如く、比丘の無常想を思惟することも亦復是の如し、盡く欲愛・色愛・無色愛を斷じて、永く遺餘無し。是の故に比丘、當に心意を盡くして、違失せ令むること無かるべし」と。斯の法を說きたまふ時に當り、彼の座上に於て、六十餘比丘漏盡きて意解れり。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

六 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘・比丘尼にして、心の五弊斷ぜず、心の五結を除かずんば、彼の比丘・比丘尼は、日夜善法に於て損減して增益無けん。云何が比丘、心の五弊斷ぜず、心の五弊斷ぜざるや。是に於て比丘、心如來の所に狐疑すること有らば、如來の所に於て亦解脫せず、亦其の正法に入らず、彼の人の心、諷誦に在らず。是れを斯の比丘、心の弊斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、心正法を疑ふこと有らば、亦解脫せず、亦其の正法に入らず、彼の人も亦諷誦せず。是れを斯の人の心の弊斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、心聖衆を疑ふこと有らば、亦解脫せず、亦施意和合衆に向はず、亦復道品の法中に在らず。是れを斯の比丘、心の弊斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、禁戒を犯して自ら悔過せず、彼の比丘已に禁戒を犯して自ら改悔せず、亦施心道品之中に在らず。是れを斯の比丘、心の弊斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、心意不定にして梵行を修し、『我此の梵行之德を以て、天上の若しは諸の神祇に生ぜん』と、然して彼の比丘、此の心行を以て梵行を修し、心專ら道品之中に在らず、心已に道品之中に在らず。是れを心の弊斷ぜずと謂ふなり。是の如く比丘、心の五弊斷ぜざるなり。

【六】M. 16. Cetokhila S. 漢譯中阿含經第二百六經心穢經。

云何が比丘、心の五結斷ぜざるや。是に於て比丘、懈怠にして方便を求めず、彼の比丘已に懈怠有らば方便を求めず。是れを斯の比丘、心結斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、恒に多妄を喜び、貪り眠寐に在り、彼の比丘已に多妄を喜び、貪り眠寐に在り。是れを斯の比丘、第二の心結斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、心意不定にして、恒に多亂を喜ぶ。彼の比丘、心已に亂れて定まらず。是れを比丘、第三の心結斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、根門定まらず。彼の比丘已に根門定まらず。是れを比丘、第四の心結斷ぜずと謂ふなり。復次に比丘、恒に市に在ることを喜び、靜處に在らず。是れを比丘、第五の心結斷ぜずと謂ふなり。若し比丘・比丘尼にして、此の五の心弊、五の心結有りて斷ぜずば、彼の比丘・比丘尼は、晝夜之中善法斷絶して、增益有ること無きこと、猶し雞子の、若しは八、若しは十二、時に隨つて覆蔭せず、旣に隨はず、時に隨つて將護せず。彼の雞、此の念を生ずと雖も、『我雞子をして、全きを得て他無から使めん』と、然るに此の雞子終に安隱ならじ。然る所以は、皆時に隨つて將護せざるの致す所にして、後復斷壞して其の子を成ぜざるが如し。此れも亦是の如く、若し比丘・比丘尼にして五の心結斷ぜず、五の心弊除かずば、晝夜之中、善法に於て減じて增益有ること無けん。

若し復比丘・比丘尼にして、五の心結斷じ、五の心弊除かば、晝夜之中、善法增益し、損減有ること無きこと、猶し雞子の若しは八、若しは十二の、時に隨つて將護し、時に隨つて育養し、時に隨つて蔭覆し、彼の雞斯の念を生ずと雖も、『我雞子をして、全く成就せざら使めん』と、然るに彼の雞子、自然に成就し、安隱無爲なり。然る所以は、時に隨つて長養し、無爲を得令め、時に諸の雞子、尋いで外に出づることを得るが如し。此れも亦是の如く、若し比丘・比丘尼にして、五の心弊斷じ、五の心結除かば、彼の比丘・比丘尼は、長夜之中に於て、善法增益し、損減有ること無けん。是の故に比丘、若しは比丘尼、當に心を施設して、佛に猶豫狐疑し、法に猶豫狐疑し、衆に猶豫狐疑

することと有ること無かるべし。戒律を具足し、心意專正にして錯亂有ること無く、亦意を興して餘法を希望せず、亦傍倖に梵行を修めず、『我當に此の行法を以て、天人の身と作り、神妙尊豪なるべし』と、若し復比丘・比丘尼有りて、佛・法・聖衆に狐疑・猶豫有ること無くんば、亦戒を犯かすこと無く、漏失する所無けん。我今汝に告げて、重ねて汝に囑累せん。彼の比丘は當に二處に趣くべし。若しは天上に生じ、若しは人中に在ること、猶し人の極熱之中に處りて、兼て復飢渴し、遇陰涼之處を得、冷泉水を得て飮むが如し。彼の人斷の念を生ずと雖も、我陰涼の冷水に遇ひ、之を飮むと雖も、猶飢渴を斷ぜず、但彼の人暑熱已に盡き、飢渴已に除くがごとし。此れも亦是の如く、若し比丘・比丘尼にして、如來の所に狐疑猶豫すること無くんば、彼の比丘便ち二處に趣かん。若しは天上に生じ、若しは人中に處らん。若しは比丘・比丘尼、當に方便を求めて心の五弊を斷じ、心の五結を除くべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「或は是の時有りて、王威普ねからず、盜賊競ひ興り、賊已に競ひ興れば、村落・城廓の人民之類、皆悉く敗亡し、或は飢饉に遭遇し、命終を取る者、設し彼の衆生、飢饉に於て命終を取らば、皆三惡趣に墮せん。今此の精進の比丘も亦復是の如く、若し持戒減少せば、爾の時惡比丘已に競ひ起り、惡比丘已に競ひ起れば惡しく、正法漸く衰へて、非法を增益し、非法已に增益せば、其の中の衆生皆三惡趣に墮せん。若し復是の時、王威遠く接せば、賊便ち隱藏せん。王已に遠く接せば、城廓・村落人民熾盛ならん。今此の精進の比丘も亦復是の如く、若し持戒完具せば、爾の時犯戒の比丘漸く衰耗し、正法興隆し、非法衰耗し、其の中の衆生命終之後、皆天上の人中に生ぜん。是の故に比丘、

當に念じて戒律を具足し、威儀禮節をして缺減せ令むること無かるべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「寧ろ常に眠寐して、覺寤之中に於て亂想を思惟せざれ。身壞命終して惡趣に生ぜんよりは、寧ろ火を以て鐵錐を燒きて眼を烙かば、以て色を視るも亂想を興起さじ、想を興す比丘は識の爲に敗所る。比丘已に識の爲に敗らるれば、必ず當に三惡道地獄・畜生・餓鬼に趣くべし。今我の說く所以は何ぞや。彼の人寧ろ當に睡眠すべし。覺寤之中に於て亂想を思惟せざれ。寧ろ利錐を以て其の耳を刺し壞れば、以て聲を聽くも亂想を興起さじ。想を興す比丘は識の爲に敗所る。寧ろ恒に睡眠して、覺寤に於て亂想を起さざれ。寧ろ熱鉗を以て其の鼻根を壞らば、以て香を聞ぐも亂想を興起さじ。想を興す比丘は識の爲に敗所る。已に識の爲に敗所るれば、便ち三惡趣地獄・畜生・餓鬼に墮せん。我の說く所は正しく此れを謂ふ耳。寧ろ利劍を以て其の舌を截斷し、惡言麁語を以て三惡趣地獄・畜生・餓鬼に墮せざれ。寧ろ常に睡眠して、覺寤に於て亂想を興起さざれ。寧ろ熱銅葉を以て其の身を纏裹し、長者・居士・婆羅門女と共に、共に相交接せざれ、設し與に交接し、言語往返せば、必ず三惡趣地獄・畜生・餓鬼に墮せん。我說く所は正しく此れを謂ふ耳。寧ろ恒に睡眠して、覺寤を以て意に所念有り、聖衆を壞らんと欲せず、已に聖衆を壞れば、五逆罪に墮し、億千の諸佛終に療救せず、夫れ衆と鬪亂する者は、必ず當に不救之罪に墮すべし。是の故に我今說かん、寧ろ常に睡眠して、覺寤に於て意に所念有り、聖衆を壞らんと欲して無救之罪を受けざれ。是の故に比丘、當に六情を將護して、漏失せ令むること無かるべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

七聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時阿那邠祁長者に四兒有り、佛・法・聖衆に事へず、亦復自ら佛・法・聖衆に歸命せざりき。是の時阿那邠祁長者、四兒に告げて曰く、「汝等各自ら佛・法・聖衆に歸しまつらば、長夜之中に、福を獲ること無量ならん」と。諸兒父に白さく、「我等諸子は自ら佛・法・聖衆に歸しまつるに堪えず」と。阿那邠祁長者告げて曰く、「我今各ゝ卿等に純金千兩を賜へんに、我教勅に隨つて、自ら佛・法・聖衆に歸命しまつれ」と。諸子白して言さく、「我等自ら佛・法・聖衆に歸しまつるに堪任せず」と。父復告げて曰く、「汝に二千・三千・四千・五千兩の純金を加賜せんに、宜しく當に自ら佛・法・聖衆に歸しまつるべし。長夜之中福を獲ること無量ならん」と。爾の時諸子、斯の語を聞き已つて、默然として之を受けぬ。是の時諸子、阿那邠祁長者に白して曰く、「我等當に云何が自ら佛・法・聖衆に歸しまつるべきや」と。阿那邠祁長者報へて曰く、「汝等盡く來つて、吾に隨ひて世尊の所に至れ、若し世尊にして、所說したまふこと有らば、汝等當に念じて奉行すべし」と。諸子父に白さく、「如來は今所在爲るや、此を去ること遠近なるや」と。其の父報へて曰く、「今如來・至眞・等正覺は、近く舍衞國に在して、吾園中に止りたまへり」と。

時に阿那邠祁、四兒を將ひて世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時長者、世尊に白して言さく、「我今四子、自ら佛・法・聖衆に歸しまつらず、近く昨、各に五千兩金を賜へ、勸めて佛・法・聖衆に事へまつら令めぬ。唯願はくは世尊、各の與に說法したまひて、長夜之中に福を受くること無量なら使めたまへ」と。爾の時世尊、長者の四子の與に漸漸に說法し、勸めて歡喜せ令めたまひ、長者の諸子は、佛の說法を聞き、踊躍歡喜して自ら勝ふること能はず、前んで自ら長跪して、世尊に白して言さく、「我等各各自ら世尊と正法と聖衆とに歸しまつる。今自り已後復殺生せず、乃至飲酒せじ」と。是の如きこと再三なり。

【七】單譯せらるゝものに後漢安世高譯阿那邠邸化七子經一卷、西晉竺法護譯の彌勒下生經一卷あり。

時に阿那邠祁長者、世尊に白して言さく、「若し人有りて物を出し、人を雇は使め、佛に事へ使むる者の其の福云何ん」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、長者、乃ち斯の問ひを致さば天人安きを得ん。乃ち能く如來に斯の義を問へり。善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に說くべし」と。時に長者、佛に從つて敎へを受けぬ。世尊告げて曰はく、「四大藏有り、云何が四と爲すや、伊羅鉢龍有りて、乾陀衞國に在り。此を一藏と名け、無數の珍寶其の宮に積滿せり。復斑稠大藏有りて蜜絺羅國に在り、珍寶積聚して稱計す可からず。復賓伽羅大藏有りて、須賴吒國に在り、珍寶積聚して稱計す可からず。復蠰佉大藏有りて、婆羅㮈國に在り、珍寶積聚して稱計す可からず。設し閻浮地の男女大小各各探抱すること四年四月四日、伊羅鉢藏を取る者、終に減少せず、斑稠藏を四年四月四日、各來り取る者減少を知らず。賓伽羅藏を四年四月四日、各各取る者減少を知らず。蠰佉大藏は婆羅㮈國に在り、四年四月四日、取る者減少を知らず。是れを長者四大寶藏を、若しは閻浮地の男女大小各各探抱して、四年四月四日を經るも、減少を知らずと謂ふなり。

將來之世に佛有り、彌勒と名け、世に出現せん。爾の時國界は雞頭と名くる王の所治の處、東西十二由延、南北七由延、人民熾盛にして、穀米豐登なり。雞頭王の治する處、城を遶ぐること七匝、池水有り、各縱廣一由延にして、金沙下に在り。優鉢蓮華・拘勿頭花・分陀利華各其の中に生じ、水像は金色・銀色・水精色・琉璃色なり。設し銀水凝凍れば、化成して銀と爲り、若し金水凍れば化成して金と爲り、若し琉璃水凍れば化して琉璃と爲り、若し水精凍れば、化して水精と爲る。長者當に知るべし。爾の時四大城門有りて、銀池水中には金もて門閫を作り、金池水中には銀もて門閫を作り、琉璃池中には水精もて門閫を作り、水精池中には琉璃もて門閫を作る。長者當に知るべし。爾の時雞頭城中周匝鈴を懸く。是の時鈴の聲皆五樂之音を出す。爾の時城中に恒に七種之聲有り、云何が七と爲すや、貝聲・鼓聲・琴聲・小鼓聲・員鼓聲・鞞鼓聲・歌舞聲を七と爲す。爾の時雞頭城中に自

然の粳米を生ず、皆長さ三寸、極めて香美を爲し、衆味の上に出づ。尋いで取れば尋いで生じ、皆所取之處を見ず。爾の時王有り、蠰佉と名く。法を以て治化し、七寶具足す。長者當に知るべし。爾の時の典藏人を名けて善寶と爲す。高德にして智慧、天眼第一にして、皆能く寶藏の處所を知る。有主之藏は自然に擁護し、無主之藏は便ち王に奉上す。爾の時伊羅鉢龍王・般稠龍王・賓伽羅龍王・蠰佉龍王、是の時四龍王典寶藏を主りぬ。皆善寶典藏の所に往至して之に語げて曰く、「所須を欲せば、我等相給せん」と。時に四龍王、「唯願くは四藏之寶を奉上し、以て自ら己を營まん」と。時に善寶典主、卽ち四藏之寶を取りて蠰佉王に奉上す。金寶の羽車なり。爾の時世尊便ち斯の偈を說きたまはく、

伊羅は乾陀に在り　蜜絺に般稠在り　賓伽は須賴國　蠰佉は婆羅國なり　此れは是れ四寶藏
種種の藏充滿す　爾の時常に出現し　功德之致す所なり　彼の聖王に　金銀寶羽の車を奉上せば　諸神皆擁護し　長者其の福を受けん

と。爾の時佛有りて出世し、名けて彌勒至眞・等正覺・明行成・善逝爲り、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號し、人民を敎化す。長者當に知るべし。爾の時の善寶典藏とは、豈異人ならん乎。是の觀を作すこと莫かれ。然る所以は、爾の時の藏主とは今の長者是れなり。時に蠰佉王、金車を以て廣く福德を作し、八萬四千の大臣を將ひ、前後に圍遶せられて、彌勒の所に往至し、出家學道せり。爾の時の典藏も亦復廣く福德を作し、亦當に出家學道して苦際を盡すべし。皆長者の四子を將導し、自ら佛・法・比丘僧に歸せ使むるに由り、是の功德に緣つて三惡趣に墮せず、復此の德に緣つて四大藏を得、亦此の報ひに緣つて蠰佉の與に典藏主と作り、卽ち彼の世に於て苦際を盡くさん。然る所以は、佛・法・僧に歸するの其の德量る可からざればなり。其れ自ら佛・法・衆に歸する有らば、其の福是の如し。是の故に長者、當に有形之類を慈愍し、其の方便を求めて佛・法・衆に向

ふべし。是の如く長者、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿那邠祁長者、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。卽ち座從り起ち、佛を遶ること三匝、禮を作して去りぬ。及び其の四子も亦復是の如し。爾の時阿那邠祁長者及び四子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[八] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時阿那邠祁長者、身に重患を抱けり。時に舍利弗、天眼の觀清淨にして瑕穢無きを以て、阿那邠祁長者の身に重患を抱くを見、尋いで阿難に告げて曰く、「汝來つて共に阿那邠祁長者の所に至り問訊せよ」と。時に阿難報へて曰く、「宜しく是れ時を知るべし」と。

爾の時阿難、時到つて鉢を持し、舍衞城に入りて乞食し、次を以て漸漸に阿那邠祁長者の家に至り、卽便ち座に就きぬ。時に舍利弗、卽ち座上に於て、阿那邠祁長者に語げて曰く、「汝今疾む所、增有りや損すること有り乎。苦痛漸漸に除くを覺知して、增劇するに至らざる耶」と。長者報へて曰く、「我今患ふ所は、極めて、賴り少しと爲し、增すことを覺えて減ずることを覺えざるなり」と。舍利弗報へて曰く、「如今長者、當に佛を憶ふべし。是れ如來・至眞・等正覺・明行成・善逝爲り、世間解・無上士・道法御・天人師・佛衆祐と號しまつる。亦當に法を追憶念すべし。如來の法は極めて甚深爲り、尊ぶ可く、貴ぶ可く、與に等しき者無し。賢聖之修行する所なり。亦當に僧を念ずべし。如來の衆は上下和順して諍訟有ること無く、法法成就す。聖衆とは戒成就・三昧成就・智慧成就・解脫成就・見慧成就なり。所謂僧とは四雙八輩、此れを如來の聖衆と名け、尊ぶ可く、貴ぶ可く、是れ世間の無上の福田なり。長者若し念佛・念法・念比丘僧を修行せば、其の德稱計す可からず、甘露滅盡之處を獲ん。若し善男子善女人にして、三尊已に佛・法・聖衆を念ぜんに、三惡趣に墮せんこと、終に此の事無し。若し彼の善男子善女人にして、三尊を念ずることを修せんに、必ず善處天上の人中

【八】 M. 143 Anāthapiṇḍikovāda S. 漢譯中阿含經第二十八經敎化病經。

に至らん。然る後に長者、色を起さず、亦色に依つて識を起さず、聲を起さず、聲に依つて識を起さず、香を起さず、香に依つて識を起さず、味を起さず、味に依つて識を起さず、細滑を起さず、細滑に依つて識を起さず、意を起さず、意に依つて識を起さず、今世後世を起さず、今世後世に依つて識を起さず、愛を起さず、愛に依つて識を起すこと莫かれ。然る所以は、愛に緣つて受有り、受に緣つて有有り、有に緣つて生死愁憂苦惱有りて稱計す可からず。是れを此の五苦盛陰有りて、我人壽命有ること無しと謂ふなり。士夫萠兆有形の類、若し眼起る時亦來處を知らず、若し眼滅する時則ち滅し、亦去處を知らず。有ること無くして眼生じ、已に有りて眼滅す。皆諸法因緣と合會するに由るなり。所謂因緣法とは、是れに緣つて是れ有り、是れ無くんば則ち無し。所謂無明は行に緣り、行は識に緣り、識は名色に緣り、名色は六入に緣り、六入は更樂に緣り、更樂は痛に緣り、痛は愛に緣り、愛は取に緣り、取は有に緣り、有は生に緣り、生は死に緣り、死は愁憂苦惱に緣りて稱計す可からず。耳・鼻・舌・身・意も亦復是の如し。有ること無くして生じ、已に有りて滅するも亦復來處を知らず、亦去處を知らず、皆諸法因緣の合會に由るなり。是れを長者名けて空行第一之法と爲すと謂ふなり」と。

是の時阿那邠祁長者、悲泣涕零して自ら止むること能はず。時に舍利弗、阿那邠祁に語げて曰く、「何の因緣を以て悲感乃ち爾る乎」と。長者報へて曰く、「我悲感せず、然る所以は、我昔日來數、佛に承事し、亦復諸の長老の比丘を尊敬せしも、亦斯の如き尊重之法、舍利弗之演說せし所の如きを聞かざりき」と。是の時阿難、阿那邠祁に語げて曰く、「長者當に知るべし、世間に二種之人有り。如來之所說なり。云何が二と爲すや、一には樂を知り、二には苦を知るなり。彼の樂を習ふ之人は、所謂尊者耶輸提族姓子是れなり。彼の苦を習ふ之人は婆伽梨比丘是れなり。又復長者、耶輸提比丘は解空第一なり。信解脫の者は婆伽梨比丘なり。又復長者、苦を知る之人、樂を知る之人と、二人

は心俱解脫なり。二俱に如來の弟子にして與に等しき者無し。其の沒せず、生ぜざるに由つて、二人は勤めて佛の教へを受くるも亦懈廢無し、但心增減有るが故に、人に知者有り、不知者有り、長者之所說の如く『我昔已來諸佛に承事し、長老の比丘を恭敬せしも、初め斯の如き尊重之法、舍利弗之所說の如きを聞かざりき』と、耶輸提比丘は地を視て心解脫を得たり。婆伽梨比丘は刀を觀視して、卽時に心解脫を得たり。是の故に長者、當に婆伽梨比丘之比の如く作すべし」と。是の時舍利弗廣く與に說法し、勸めて歡喜せ令め、無上之心を發さ使め、卽ち座從り起ちて去りぬ。

舍利弗・阿難去りて未だ久しからずして、須臾之頃に阿那邠祁長者命終し、便ち三十三天に生ぜり。爾の時阿那邠祁天子、五事の功德有りて、彼の諸天に勝れたり。云何が五と爲すや、所謂天壽・天色・天樂・天の威神・天の光明なり。爾の時阿那邠祁天子便ち是の念を作さく、「我今此の天身を獲しは、皆如來之恩に由るなり、今我宜しく五欲に於て自ら娛樂すべからず。先づ應に世尊の所に至りて、拜跪し問訊すべし」と。時に阿那邠祁天子、諸天人を將ひ、前後に圍遶せられ、諸の天花を持して如來の身上に散じまつりぬ。時に如來、舍衞國祇樹給孤獨園に在せり。時に彼の天子虛空中に在りて、叉手して世尊に向ひまつり、便ち斯の偈を說けり。

此れは是れ祇洹界　仙人衆娛戲す　法王の所治の處　當に歡悅びの心を發すべし

と。

爾の時阿那邠祁天子、斯の偈を說き已るや、如來は默然として之を可したまひぬ。時に彼の天子卽ち此の念を生ずらく、「如來は已に然可したまへり。我卽ち神足を捨てゝ、一面に在りて立たん」と。時に阿那邠祁天子、世尊に白して言さく、「我は是れ須達、又阿那邠祁と名け、人の明に了る所なり。亦是れ如來の弟子にして、聖尊の教へを受けたり。今命終を取りて三十三天に生ぜり」と。世尊告げて曰はく、「汝何れの恩に由りて、今此の天身を獲しや」と。天子佛に白さく、「世尊之力を

蒙むりて天身を受くるを得たり」と。時に阿那邠祁天子、復天華を以て如來の身上に散じまつり、亦阿難及び舍利弗の身上に散じ、遍く祇洹を遶ること七匝還沒して現ぜず。是の時世尊、阿難に告げて曰はく、「昨夜天子有りて、我所に來至して便ち斯の偈を說けり。

此れは是れ祇洹界　仙人衆娛戲す　法王の所治の處　當に歡悅びの心を發すべし

と、是の時彼の天子、祇洹を遶ること七匝して、便ち退いて去りぬ。汝今阿難、汝は頗ふらくは彼の天子を識る乎」と。阿難佛に白して言さく、「必ず當に是れ阿那邠祁長者なるべし」と。佛阿難に告げたまはく、「汝の言ふ所の如し。善い哉、乃ち能く未だ知らざるの智を以て彼の天子を識れり。然る所以は、彼は是れ阿那邠祁天子なればなり」と。阿難佛に白して言さく、「阿那邠祁は今天上に生れて何等と名くと爲んや」と。世尊告げて曰はく、「卽ち阿那邠祁と名く、然る所以は、彼の天は卽ち生ぜしの日、諸天各各此の言有りき『此の天子人中に在りし時、是れ如來の弟子にして、恒に等心もて普く一切に施し、窮に周く、乏しきを濟ひ、此の功德を作し已れり。此れは是れ三十三天、今故に續いて阿那邠祁と名く』」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「阿難比丘は大功德有りて智慧成就す。阿難比丘は今學地[九]に在るも、智慧與に等しき者無し。然る所以は、阿羅漢の知る應き所は、阿難便ち之を知る。過去の諸佛世尊の學ぶ應き所は、阿難皆明に了知す。過去の時に亦斯の人有りて、聞けば便ち了知せしも、我今日の阿難比丘の如きは瞻望して方に之を知る『如來は是れを須ひ、如來は是れを須ひたまはず』と。過去の諸佛の弟子は、三昧に入りて、方に未然之事を知りしも、我今日の阿難比丘の如きは、覩れば便ち曉了するなり」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中、博く知る所有り、勇猛精進有りて、念じて錯亂せず、多聞第一にして執事に堪任するは、所謂阿難比丘是れなり」と。時に諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【九】學地は有學に同じく、未だ學ぶべきことのある位をいふ、四向四果の中前七をいふ。

九

一〇 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時阿那邠祁長者に兒婦有り、名けて一一善生と曰ひ、顏貌端正にして、面桃華の色の如し。王波斯匿の大臣之女なり。其の姓望を憑み、其の豪族を恃みて、亦姑嫜及び其の夫聟を恭敬せず、亦佛・法及び比丘僧に事へず、亦三尊を敬奉せざりき。是の時阿那邠祁長者、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時長者、世尊に白して言さく、「近く兒の與に婦を取れり。是れ波斯匿王の第一の大臣之女なり。自ら其の姓望を恃み、三尊・長老・尊卑に承事せず。唯願くは世尊、當に與に說法して、歡喜を發さ使めたまふべくんば、心開けて意解けん」と。爾の時如來默然として、長者の所說を許可したまひぬ。時に長者復佛に白して言さく、「唯願くは世尊、當に我請を受けたまふべし、及び比丘僧と。」爾の時長者、已に如來の默然として請を受けたまひしを見、即ち座從り起ち、佛を禮し、遶ること三匝して去り、還えつて家中に至り、種種の飲食を辨具し、好き座具を敷き、尋いで時の至りしを白して、「唯願くは世尊、當に我請を受けたまふべし。飲食已に具せり」と。

爾の時世尊、諸の比丘衆を將ひ、前後に圍遶せられて長者の家に至り、座に就いて坐したまひぬ。爾の時長者、更に小座を取り、如來の前に在りて坐しぬ。爾の時世尊、善生女人に告げて曰く、「長者女當に知るべし。夫れ婦人と爲るに四事有り、云何が四と爲すや。婦有り、母に如似たり、婦有り、親に似たり。婦有り、賊に似たり。婦有り、婢に似たり。汝今當に知るべし。婦にして母に似し者は、時に隨つて夫を瞻視し、主をして乏しきこと有ら令めずして承事供養す。爾の時諸天便ち復將護し、若しは人非人其の便りを得ず、死せば便ち天に生ぜん。是れを長者女、此れを婦人にして母に似し者と名くと謂ふなり。彼れ云何が婦有りて親親に似たるや。是に於て長者婦、夫を見るに已に增減之心有ること無く、其の苦樂を同じふす。是れを其の人親親に似し者と謂ふなり。彼れ

【一〇】A. VIII. 59 Sutta bhariyā 単譯せらるゝものに、劉宋・求那跋陀羅譯阿遬達經一卷、失譯玉耶女經一卷、東晉竺曇無蘭譯玉耶經一卷。
【一一】善生(Sujātā)

云何が名けて婦にして賊に如似たりと爲すや。是に於て女人、若し夫を見るに已に便ち瞋恚を懷き、夫主を憎疾し、亦承事し、恭敬禮拜せず、見れば輒ち害せんと欲し、心他所に在れば、夫は婦に親しまず、婦は夫に親しまず。人の爲に愛敬せ所れず、諸天は擁護せず、惡鬼侵害し、身壞命終せば地獄の中に入らん。是れを斯の人賊に如似たりと謂ふなり。彼れ云何が名けて、婦人にして婢に如似たりと爲すや。是に於て賢良之婦は、夫主を見るに時に隨つて瞻視し、其の言語を忍び、終に還報せず、其の寒苦を忍び、恒に慈心有り、三尊の所に於て亦斯の念を生ずらく、『此れ存して我在り、此れ衰ふれば我耗からん』と。此之事を以て諸天擁護し、若しは人非人皆悉く愛念し、身壞命終せば善處天上に生ぜん。是れを長者女、此の四婦有りと謂ふなり。汝今何れの條に在りと爲んや」と。

時に彼の女人、世尊の此の語を說きたまふを聞き已つて、前んで佛足を禮し、世尊に白して言さく、「唯願くは世尊、我今往を改め、來を修して、更に敢えて爲さじ。今自り已後常に禮法を行じ、婢に如似ん」と。是の時善生女人、還つて夫の所に至り、頭面に足を禮し、「唯願くは瞻視すること、當に婢の如かるべし」と。是の時善生女人、復世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時世尊、漸く與に法を說きたまへり。所謂論とは施論・戒論・生天之論、欲は不淨想爲り、婬を大穢と爲す」と。是の時世尊、已に女人の心開らけ、意解けしを知り、諸佛世尊の常に說法したまふ所の苦・集・盡・道、爾の時世尊、盡く女人の與に之を說きたまひ、即ち座上に於て法眼淨を得しこと、猶し新しき衣の染むるに色を爲し易きが如し。此れも亦是の如く、諸法を分別し、善く深妙之義を解り、自ら三尊に歸しまつりて、五戒を受けぬ。爾の時善生女人、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

一〇

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者舍利弗、便ち世尊の所に

往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、須臾にして退いて坐し、世尊に白して言さく、「『世尊は恒に豪尊高位を稱譽して、卑賤を說きたまはず』と、然るに我世尊は豪尊を歎ぜず、卑賤を說かず、中に處りて說きたまひ、出家學道することを得使めたまふ」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「汝等自ら稱言すらく、『豪尊を歎ぜず、卑賤を說かず、中に處りて說き、出家學道を得』と、然るに我今日も亦上中下及び受生分を說かず。然る所以は、夫れ生は甚だ苦なり、願樂するに足らず。彼の糞は除くこと少きも、尙極めて臭きが如し、何に況んや多くを積むをや。今受生分も亦復是の如し。一生二生も猶尙苦難なり。何に況んや流轉終始して甘處すべく、有に由りて生有り、生に由つて老有り、老に由つて病有り、死有り、愁憂苦惱何んぞ貪り樂しむ可けんや、便ち五盛陰の身を成ずるなり。吾今此の義を觀じ已つて是の說を作す、一生二生も猶常に苦難なり。何に況んや流轉終始して甘處す可けんや。若し當に舍利弗の意に生を欲すべくんば、便ち當に發願して、豪貴の家に生ずべし。卑賤に生ぜざれ。然る所以は、舍利弗、衆生は長夜に心の爲に縛せ所れ、豪族の爲に縛せ所れざればなり。然るに我舍利弗は豪貴の家に處る。是に刹利種にして轉輪聖王を出す。設し我にして出家學道せざりせば、應に轉輪聖王と爲るべかりしに、今轉輪聖王の位を捨てゝ、出家學道して、無上道を成ぜり。夫れ卑賤の家に生ぜば、出家學道することを得ず、反つて惡趣に墮せしならん。是の故に舍利弗、當に方便を求めて、心を降伏すべし。是の如く舍利弗、當に是の學を作すべし」と。爾の時舍利弗、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第四十九

卷の第五十

大愛道般涅槃品第五十二

一

聞くこと是の如し。一時佛、毘舍離普會講堂所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時[二]大愛道、毘舍離城高台寺中に遊び、大比丘尼衆五百人と倶なりき。皆是れ羅漢にして、諸漏已に盡きたり。爾の時大愛道、諸比丘の「如來は久しからずして、當に滅度を取りたまふべし。三月を過ぎずして當に拘夷那竭の娑羅雙樹の間に在すべし」と說くを聞けり。爾の時大愛道、便ち是の念を作さく、「我如來の滅度を取りたまふを見たてまつるに堪任せず、亦復阿難の滅度を取るを見るに堪任せず。我今宜しく先きに滅度を取る可し」と。

爾の時大愛道、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮しまつり、一面に在りて坐しぬ。爾の時大愛道、前んで佛に白して言さく、「我世尊の久しからずして、當に滅度を取りたまふべし、却後三月を過ぎずして、拘夷那竭の娑羅雙樹の間に在はさんと聞きまつり、我今世尊及び阿難の滅度を取りたまふを見るに堪えざるなり。唯願くは世尊、我の先きに滅度を取ることを聽したまへ」と。爾の時世尊、默然として之を可したまへり。爾の時大愛道、重ねて佛に白して言さく、「今自り已後、唯願くは世尊、諸の比丘尼の與に說戒したまへ」と。佛之に告げて曰はく、「我今比丘尼の還つて比丘尼の與に禁戒を說くことを聽さん。我本施行せし所の禁戒の如く、[三]差錯せ令むること無かれ」と。爾の時大愛道、前んで佛足を禮し、佛前に在りて立ちぬ。爾の時大愛道復佛に白して言さく、「我今更に如來の顏色を見たてまつらじ。亦復將來の諸佛の胞胎を受けずして、永く無爲に處りたまふを見たてまつらじ。今日聖顏を[四]遠く離るれば、永く更に覩たてまつらじ」と。時に大愛道、佛を遶

【一】單譯せらるゝものに、西晉白法祖譯大愛道般涅槃經一卷、劉宋慧簡譯佛母般泥洹經一卷あり。

【二】大愛道、阿含部八、通頁四九、一五九の大愛道瞿曇彌の註を見よ。

【三】差錯とは、たがふこと。

【四】大正藏に違離とあり。誤植か。

ること七匝、亦復阿難を遶ること七匝、盡く諸の比丘衆を遶りて、便ち退いて去り、諸の比丘尼衆中に詣り、諸の比丘尼に告げて曰く、「我今無爲涅槃界に入らんと欲す。然る所以は、如來は久しからずして、當に滅度を取りたまふべし。汝等各宜しく所行に隨ふべし」と。

爾の時差摩比丘尼・優鉢色比丘尼・基利施比丘尼・舍仇梨比丘尼・奢摩比丘尼・鉢陀蘭柘比丘尼・婆羅柘維比丘尼・迦旃延比丘尼・闍耶比丘尼及び五百の比丘尼、世尊の所に往至し、一面に在りて立ちぬ。爾の時五百の比丘尼、差摩比丘尼を最も上首と爲し、佛に白して言さく「我等諸人は、『如來は久しからずして、當に滅度を取りたまふべし』と聞きまつりぬ。我等は世尊及び阿難の、先きに滅度を取りたまふを見たてまつるに忍びず。唯願くは世尊、我等先きに滅度を取ることを聽したまへ。我等今涅槃を取ること、正しく是れ其の宜なり」と。爾の時世尊、默然として之を可したまひぬ。時に差摩比丘尼、及び五百の比丘尼、世尊の默然として之を可したまひしを見、前んで佛足を禮し、遶ぐること三匝、便ち退いて去り、還つて本房に詣りぬ。

時に大愛道、講堂の門を閉ざし、揵椎を擊ち露地に於て座具を敷き、虚空に騰在し、虚空中に於て坐臥經行し、或は火焰を出し、身下煙を出し、身上火を出し、(或は)身下水を出し、身上煙を出し、擧身焰を放ち、擧身煙を放つ。(或は)左脅水を出し、右脅火を出し、(或は)右脅水を出し、左脅烟を出し、或は前火を出し、後ろ水を出す。前水を出し、後ろ火を出し、或は擧身火を出し、擧身水を出す。爾の時大愛道、若干の變化を作し、還つて本の座に在りて結跏趺坐し、正身正意に繫念在前して初禪に入り、初禪從り起ちて第二禪に入り、第二禪從り起ちて第三禪に入り、第三禪從り起ちて第四禪に入り、第四禪從り起ちて空處に入り、空處從り起ちて識處に入り、識處從り起ちて不用處に入り、不用處從り起ちて有想無想處に入り、有想無想處從り起ちて〔五〕想知滅に入り、想知滅從り起ちて還つて有想無想處に入り、有想無想處從り起ちて不用處に入り、不用處從り起ちて

【五】想知滅とは滅盡定・滅受想定に同じ。想も受も滅盡せし境地。

還つて識處に入り、識處從り起ちて還つて空處に入り、空處從り起ちて還つて第四禪に入り、第四禪從り起ちて還つて三禪に入り、三禪從り起ちて還つて二禪中に入り、二禪從り起ちて還つて初禪に入り、初禪從り起ちて二禪に入り、二禪從り起ちて還つて三禪に入り、三禪從り起ちて還つて四禪に入り、已に四禪に入りて便ち滅度を取れり。爾の時天地大に動き、東踊して西沒し、西踊して東沒し、四邊都て踊りて中央沒し、又四面に涼風起り、諸天空に在りて倡伎樂を作し、欲界の諸天涕零悲泣すること、猶し春月に天甘雨を降らすが如し。神妙之天優鉢華香を雜碎し、又栴檀を雜碎して其の上に散じぬ。爾の時差摩比丘尼・優鉢色比丘尼・基梨施瞿曇彌比丘尼・舍瞿離比丘尼・奢摩比丘尼・波陀蘭遮羅比丘尼・迦旃延比丘尼・闍耶比丘尼、此の如きの上首五百の比丘尼等、各各露地に於て座を敷き、虛空を飛在し、虛空之中に於て坐臥經行して十八變を作し、乃至想知滅に入りて各、滅度を取りぬ。

爾の時毘舍離城内に大將有り、名けて耶輸提と曰ひ、五百の童子を將ひて普會講堂に集り、講說する所有り、時に耶輸提及び五百の童子、遙に五百の比丘尼の十八變を作すを見、見已つて歡喜踊躍すること無量なり。各共に叉手して彼の所に向へり。爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「汝耶輸提大將の所に往至して、之に告げて曰へ、『速に五百の床具・五百の座具・五百瓶の酥・五百瓶の油・五百輿の花・五百裹の香・五百車の薪を辦ぜよ」と。爾の時阿難、前んで佛に白して言さく、「不審たり、世尊、何の施爲を欲したまふや」と。佛之に告げて曰はく、「大愛道は已に滅度を取り、及び五百の比丘尼泥洹せしかば、我等舍利を供養せんと欲してなり」と。爾の時阿難、悲泣交ゝ集りて自ら勝ふること能はず、『大愛道の滅度を取りしこと、何んぞ其れ速かなる哉』と。

爾の時阿難、手を以て涙を揮ひ、便ち耶輸提大將の所に往至しぬ。爾の時耶輸提、遙に阿難の來るを見、皆起ちて前んで迎へ、並に是の說を作さく、「善くぞ來れり、阿難、何の告勅を欲してや、

又行くこと常に非らずや」と。爾の時阿難報へて曰く、「我は是れ佛の使なり、告勅する所有らんと欲す」と。時に大将咸共に問ふて曰く、「何をか告勅せ所れんと欲するや」と。阿難報へて曰く、「世尊は大将に告げて曰はく、『當に五百の床具・五百の座具・五百瓶の酥・五百瓶の油・五百輿の花・五百裹の香・五百車の薪を辦ずべし。大愛道及び五百の比丘尼皆滅度を取れり。我等は往いて舍利を供養せんと欲す』」と。爾の時大将悲泣交〻集りて是の說を作さく、「大愛道の滅度を取りしこと、何ぞ其れ速き哉。及び五百の比丘尼の滅度を取りしこと、甚だ速しと爲す哉。誰か當に我等を教授し、分檀布施を教化すべきや」と。

爾の時耶輸提大将、卽ち五百の床具・五百の座具・五百瓶の油・酥・薪及び諸の耶維之具を辦じ、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時耶輸提大将、世尊に白して言さく、「如來の約勅せ所れし供養之具今日已に辦ぜり」と。佛之に告げて曰はく、「汝今各大愛道の身及び五百比丘尼の身を取り、毘舍離を出でゝ曠野之處に到れ、吾彼に於て舍利を供養せんと欲す」と。耶輸提大将、佛に白して言さく、「唯然り、世尊」と。

是の時長者卽ち大愛道の[六]寺所に往至し、一人に告げて曰く、「汝今梯を施し、牆を登り、內に入り、徐かに門を開き、聲有ら令むること無かれ」と。是の時彼の人、彼の教勅の如く、卽ち入つて門を開き、復五百人に勅して、各舍利を擧げて床上に著く。爾の時二の沙彌尼の在る有り、一を難陀と名け、二を優般難陀と名く。是の時二の[七]沙彌尼、大将に語げて曰く、「止みなん、止みなん、大将、諸師を觸擾すること勿れ」と。耶輸提大将報へて曰く、「汝の師は睡眠を爲さず皆滅度を取りしなり」と。爾の時二の沙彌尼、諸師皆滅度を取りしと聞き、心恐怖を懷き、卽ち自ら思惟し、有集之法は皆此れ盡法なりと觀じ、卽ち座處に於て三明六通を得たり。爾の時二の沙彌尼、卽ち虛空中を飛在して、先づ曠野之中に至り、十八變を作し、坐臥經行に身水火を出し、變化すること無量

【六】宋・元・明三本により寺とす。

【七】沙彌尼（S. maneri）出家して未だ一人前の比丘尼とならざるもの、二十歲に達せざる女子の出家をいふ。

なり。即ち無餘涅槃界に於て般涅槃を取りぬ。

爾の時世尊、諸の比丘僧を將ひ、前後に圍遶せられて、大愛道比丘尼の寺中に往至したまへり。爾の時世尊、阿難・難陀・羅云に告げたまはく、「汝等大愛道の身を擧げよ、我當に躬自ら供養すべし」と。是の時釋提桓因、世尊の心中の所念を知り、即ち三十三天上從り、譬へば力士の臂を屈伸するが如き頃に毘舍離に來至し、世尊の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。其の中漏盡比丘は皆釋提桓因及び三十三天を見、其の漏盡せざる有欲の比丘、及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の未だ漏盡せざる者も亦釋提桓因及び三十三天を見ざりき。爾の時梵天王、遙に如來の心中の所念を知り、諸の梵天を將ひ、梵天上從り沒して世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時毘沙門天王、世尊の心中の所念を知り、諸の閱叉鬼神を將ひ、如來の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時提地賴吒天王、諸の乾沓和を將ひ、東方從り如來の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。毘婁勒叉天王、諸の無數の拘槃荼を將ひ、南方從り世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。毘婁波叉天王、諸の龍神を將ひ、如來の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。及び欲界・色界・無色界の諸天、各各如來の心中の所念を知り、世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。

爾の時釋提桓因・毘沙門天王、前んで佛に白して言さく、「唯願くは世尊、自ら神を勞したまふこと勿れ、我等自ら當に供養すべし」と。舍利弗諸天に告ぐらく、「止みなん、止みなん、天王、如來は當に時を知りたまふべし。此れは是れ如來の修行す應き所、是れ天・龍・鬼神の及ぶ所に非らざるなり。然る所以は、父母子を生み、多く益する所有り、長養の恩重く、乳哺懷抱す。要らず當に恩を報ずべし。恩に報ひざるを得ず。然して諸天、當に知るべし。過去の諸佛世尊の所生の母は先きに滅度を取りたまひ、然る後に諸佛世尊は皆自ら舍利を供養し、[八]虵旬したまへり。正使ひ將來の諸

【八】虵旬は元・明・宋の三本耶維とす。荼毗のこと。

佛世尊の所生之母も先きに滅度を取り、然る後に諸佛は皆自ら供養したまはん。此の方便を以て知る、如來は應に自ら供養したまふべし。天・龍・鬼神の及ぶ所に非るなり」と。爾の時毘沙門天王、五百鬼に告げて曰く、「汝等栴檀林中に往至して、栴檀の薪を取り來れ、當に虵旬を供養すべし」と。時に五百鬼、天王の語を聞き已つて、即ち栴檀林中に往至し、栴檀の薪を取りて、曠野之間に來至せり。

是の時世尊、躬自ら床の一脚を擧げたまひ、難陀一脚を擧げ、羅云一脚を擧げ、阿難一脚を擧げて虚空を飛在し、彼の塚間に往至し、其の中部之衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、五百の比丘尼の舍利を擧げて塚間に至りぬ。爾の時世尊、耶輸提大將に告げて曰はく、「汝今更に二の床具・二の坐具・二車の薪を辨じ、香花もて二の沙彌尼の身を供養せよ」と。耶輸提大將、佛に白して言さく、「唯然り、世尊」と、尋いで時に即ち供養之具を辨ぜり。爾の時世尊、栴檀木を以て各〻諸天に傳與したまへり。是の時世尊復大將に告げて曰はく、「汝今各五百の舍利を取り、各〻分別して之を供養せよ。二の沙彌尼も亦復然ら使めよ」と。時に大將、佛の教へを受け已つて、各各分別して取りて供養し、即ち取りて虵旬しぬ。爾の時世尊、復栴檀木を以て大愛道の身の上に著けたまへり。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

一切行無常なり　生ずれば必ず盡くること有り　生ぜずば則ち死せじ　此の滅を最樂と爲す

と。

爾の時諸天人民、皆悉く雲集して塚間に在り。天人大衆十億　姟[九]　那術他[一〇]なり。時に大將火滅し已つて復舍利を取りて偸婆を起しぬ。佛、大將に告げて曰はく、「汝今五百比丘尼の舍利を取りて、與に偸婆を起さば、長夜之中に福を受くること無量ならん。然る所以は、世間に四人有りて偸婆を起さん。云何が四と爲すや。若し人有りて、如來・至眞・等正覺の與に偸婆を起し、轉輪聖王の與に、

【九】姟とは次の那術他の譯語。

【一〇】那術他（Nahuta）、阿含部九、通頁一一四の那術の註を見よ。

聲聞・辟支佛の與に偸婆を起さば、福を受くること無量ならん」と。爾の時世尊、諸天人民の與に微妙之法を說き、勸めて歡喜せ令めたまひぬ。爾の時天と人一億有り、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時諸天・人民・乾沓和・阿須倫・四部之衆、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時舍衞城內に比丘尼有り、名けて婆陀と曰ひ、五百の比丘尼を將ひ、彼に於て遊化しぬ。時に婆陀比丘尼、閑靜之處に在りて自ら思惟し、結跏趺坐して繫念在前し、自ら無數の宿命之事を憶ひ、復自ら笑へり。比丘尼有り、遙に婆陀比丘尼の笑ふを見、見已つて便ち比丘尼の所に往至し、「今婆陀比丘尼、獨り樹下に在りて笑へり。將た何の緣有りてや」と。時に五百の比丘尼、卽相將ひて婆陀比丘尼の所に至り、頭面に足を禮せり。爾の時五百の比丘尼、婆陀に白して曰く、「何の因緣有りて、獨り樹下に坐して笑ひし耶」と。爾の時婆陀比丘尼、五百の比丘尼に告げて曰く、「我向者に此の樹下に在りて、自ら無數の宿命之事を憶ひ、復昔日經歷せし所の身を見しに、此に死し、彼に生ぜしを皆悉く觀見せしかばなり」と。時に五百の比丘尼、復白して言く、「唯願くは當に曩昔之緣を說くべし」と。

時に婆陀比丘尼、五百の比丘尼に告げて曰く、「過去久遠九十一劫に佛有りて出世したまひ、名けて毘婆尸如來・至眞・等正覺・明行成・善逝爲り・世間解・無上士・道法御・天人師・佛衆祐と號しまつると曰ひ、世に出現したまへり。爾の時世界、槃頭摩と名け、人民熾盛にして稱計す可からず。爾の時如來、彼の國界に遊びたまひ、十六萬八千の比丘衆を將ひ、前後に圍遶せられて、說法を爲したまひし時、佛の名號四遠に流布し、『毘婆尸佛は衆相具足したまふ。是れ一切人の良祐福田なり』と。爾の時彼の國界中に童子有り、名けて梵天と曰ひ、顏貌端正にして世之希有なり。時に彼の

【二】 Theri G. A. P. 69–71 參照。

童子、手に寶蓋を執りて諸の街巷中に行きぬ。時に居士婦有り、亦復端正にして、亦此れに從つて道行し、衆人皆共に觀看しぬ。時に童子便ち是の念を作さく『我今亦端正にして、手に寶蓋を執るに、衆人皆我身を觀視せず。此の諸の人民皆共に此の女人を觀る。我今要らず當に方便を作して、人をして我を觀視せ使むべし』と。時に彼の童子、即ち彼の城を出でゝ毘婆尸佛の所に往至し、手に寶華を執りて供養すること七日七夜、亦誓願を作さく『設し當に毘婆尸佛にして此の神足有り、此神力有るべくんば、是れ世間天上の福田なり。此の功德を持して、我をして將來之世に女人の身と作して、人民之を見て喜踊せざること莫から使めん』と。

爾の時彼の童子、七日七夜、彼の佛を供養し已つて、命の長短に隨ひ、後便ち三十三天に生じ、彼に於て女人の身と作り、極めて端正にして、玉女中第一爲り。五事の功德を以て彼の天女に勝れたり。云何が五と爲すや、所謂天壽・天色・天樂・天の威福・天の自在なり。時に三十三天見已つて各自ら說いて曰く『此の天女は極めて殊妙爲り、與に等しき者無し』と、其の中或は天子有りて是の說を作さく『此の天女は我應に以て天后と爲すことを得べし』と、各相競ひ爭へり。時に大天王說いて曰く『汝等共に鬪訟すること勿れ。其の中の能く極妙の法を說く者は、便ち此の天女を以て之を與ふれば婦と作せ』と。爾の時一天子有り、便ち斯の偈を說けり。

若しは起ち若しは復坐す　寤寐も數ずること有ること無し　設し我眠睡る時は　然る後乃ち欲無けん

と。爾の時復天子有りて斯の偈を說けり。

汝今故に樂を爲すも　眠りに於て念想無けん　我今欲念を興すこと　戰鼓を打つに如似たり

と。爾の時復天子有りて斯の偈を說けり。

設ひ復戰鼓を打つも　猶休息する時有り　我欲の馳することの速疾きこと　水の流れて停まら

ざるが如し

と。爾の時復天子有りて斯の偈を說けり。

水の大木を漂はすが如きも　猶休息する時有り　我恒に思想し欲すること　殺象の胸たかざるが如し

と。爾の時諸天中の最尊天子、諸の天人の與に斯の偈を說きぬ。

汝等猶閑暇にして　各〻能く斯の偈を說けり　我今自ら知らず　存する爲にや亡びる爲に乎

と。爾の時諸天人、彼の天子に白して曰く、『善い哉、天子、說く所の偈は極めて清妙爲り。今日此の天女は天王に奉貢せよ。爾の時天女卽ち天王の宮に入らば、汝等諸天は猶豫有ること勿れ。然る所以は、爾の時童子の佛に上寶蓋を供養せし者、豈異人ならん乎。是の觀を作すこと莫かれ。爾の時の童子の身とは卽ち我身是れなり。

過去三十一劫に式詰如來有りて世に出現し、野馬世界に遊化したまひ、大比丘衆十六萬人と倶なりき。爾の時彼の天女後便ち命終して人中に生じ、女人の身を受け、極めて端正にして、世之希有爲り。時に式詰如來、時到つて衣を著け、鉢を持し、野馬城に入りて乞食したまひぬ。時に彼の天女人も復、長者婦と爲り、好き飲食を以て式詰如來に奉上し、普く誓願を作さく、『此の功德之業を持して、所生之處に三惡に墮すること莫く、顏貌端正にして人と殊異ならん』と。爾の時彼の女人、後便ち命終して三十三天に生じ、彼に於て復女人の身と作り、極めて端正爲り。五事の功德有りて彼の諸天に勝れたり。爾の時の天女は豈異人ならん乎。是の觀を作すこと莫かれ。然る所以は彼の女人とは則ち我身是れなり。卽ち彼の劫に於て毘舍羅婆如來世に出現したまへり。爾の時天女は壽の長短に隨つて、命終之後人中に來生し、女人の身を受け、顏貌端正にして世之希有なり。復長者居士の與に婦と作りぬ。爾の時長者婦復妙衣好服を以て如來に奉上し、此の誓願を發すらく、

『我をして將來之世に女身と作ることを得使めたまへ』と。時に彼の婦女、命終之後三十三天に生じ、顏貌端正にして、彼の天女に勝れたり。爾の時の彼の女人とは豈異人ならん乎。斯の觀を作すこと莫かれ。然る所以は、爾の時の女人とは則ち我身是れなり。時に彼の女人、壽の長短に随つて、命終之後人中に來生し、波羅捺大城に在りて、月光長者の與に婦婢と作り、顏貌麁醜にして、人の惡見する所なり。毘舍羅婆世を去りたまひて自り、更に佛無し。爾の時辟支佛遊化せり。時に月光長者婦、其の婢に告げて曰く『汝外に在りて遊行して、沙門の顏貌端正にして、吾意に入る者を求覓めよ。將來家に在らば吾供養せんと欲す』と。爾の時彼の婢、即ち家中を出で、外に在りて沙門を求覓め、遇ゝ辟支佛の城內に遊乞するを見る。然るに彼の顏貌麁惡にして、姿色醜弊なり。時に彼の婢使、辟支佛に語げて曰く『大家見んと欲す。願くは屈して家に至れ』と。即ち入りて主に白さく『沙門已に至れり、往いて相見る可し』と。時に長者婦、沙門を見已つて心歡樂しまず、即ち其の婢に語ぐらく『此れを還つて發遣せよ。吾布施せじ。然る所以は、其の顏貌の麁弊に出るが故に』と、爾の時其の婢、夫人に語げて曰く「設し夫人にして沙門に恵施せずんば、我今日應ずる所の食分を、盡く用つて恵施せん」と。時に彼の夫人、即ち食分を出し、細麨一升なり。時に彼の婢便ち沙門に授與し、辟支佛此の食を受け已つて、虛空を飛在し、十八變を作しぬ。時に長者婢復誓願を作さく『此の功德を持して、所生之處に三惡趣に墮すること莫く、我をして將來之世に女人と作ることを得、極めて端正爲ら使めよ』と。時に彼の辟支佛、手に鉢飯を擎げ、城を遶ること三匝せり。時に月光長者、五百の商人を將ひて、普會講堂に集りぬ。時に彼の城中の男女大小、辟支佛の鉢飯を擎げ、虛空に飛在するを見、見已つて相謂ひて言く『斯れは是れ何人の功德の乃ち爾る乎。誰か此の辟支佛に遇ひて飲食を恵施するや』と。時に長者婢、夫人に語げて曰く『出でゝ沙門の神德を觀看せよ、虛空に飛在して十八變を作し、神德無量なり』と。時に長者婦、其の婢に告げ

て曰く『汝の今沙門に惠施せし所之食にして、設し福を獲ば、盡く持して我に與へよ。我當に汝に二日の〔二〕食直を與ふべし』と。其の婢報へて曰く『我福を以て相與ふるに堪任せず』と。夫人告げて曰く『汝に四日の食直乃至十日の食直を與へん』と。其の婢報へて曰く『我福を以て相與ふるに堪任せず』と。夫人告げて曰く『我今汝に百枚の金錢を與へん』と。其の婢報へて曰く『我亦須ひず』と。夫人復告ぐらく『汝に二百乃至千枚の金錢を與へん』と。其の婢報へて曰く『我亦須ひず』と。夫人告げて曰く『我汝の身を免じて婢と作さざら使めん』と。其の婢報へて曰く『我亦良人爲ることを求むることを須ひず』と。夫人復告ぐらく『汝を夫人と作し、我婢使と爲らん』と。其の婢報へて曰く『我亦夫人爲ることを求むることを須ひず』と。夫人告げて曰く『我今當に汝を取りて撾打し、耳鼻を毀兀し、汝の手足を截るべし。當に汝の頭を斷つべし』と。其の婢報へて曰く『斯の如き之痛み、盡く堪忍して受くるも、終に福を以て相惠施せじ。身は大家に屬するも、心善く各異るなり』と。爾の時長者婦、即ち其の婢を撾打しぬ。

時に五百の商人各斯の論を作さく、此の神人は今來つて乞食す。必ず當に是れ我家施與すべし』と。時に月光長者、諸人を發遣し、還えり來つて家に入り、夫人の婢を取りて鞭打つを見、即ち之に問ふて曰く『何の因緣を以て此の婢を鞭つや』と。時に婢使ち斯の因緣を以て具さに白せり。時に月光長者、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。即ち夫人を擇して以て婢使と爲し、其の婢をして夫人の處に代へ使めぬ。

爾の時波羅奈城に王有りて治化し、梵摩達と名く。時に彼の大王、月光長者の辟支佛に飯はせしを聞き、甚だ喜悅を懷き、乃ち眞人に遇ひ、時に隨つて惠施しぬ。梵摩達王、即ち人を遣はして月光長者を召して、之に告げて曰く『汝は實に神仙、眞に飯はす乎』と。長者王に白さく『實に眞人に遇ひて食を以て惠施せん』と。時に梵摩達王、尋いで時に賞賜し、更に職位を增せり。時に長者

〔二〕食直とは食の値をいふ。

の姉、壽の長短に隨つて、命終之後三十三天に生じ、顏貌殊妙にして世之希有なり。五事の功德有りて彼の諸天に勝れたり。諸妹是の觀を作すこと莫かれ。爾の時の長者の婢とは、卽ち我身是れなり。此の賢劫中に於て佛有りて出世し、拘樓孫如來と名けたり。時に彼の天女、壽の長短に隨ひて、命終之後人中に生ぜり。爾の時耶若達梵志の與に女と作れり。時に此の女人復如來に飯はしまつり、誓願を發し、女人の身と作ることを求め、後命終して三十三天に生じぬ。顏貌端正にして諸の天女に勝れたり。復彼從り命終して人中に生ぜり。爾の時拘那含牟尼佛世に出現したまひぬ。時に彼の天女、長者の女と爲り、復金華を以て拘那含牟尼佛を供養し『此の功德を持して、所生之處に三惡趣に墮すること莫く、我後身をして女人の身と作ることを得ん』と。時に此の女人、壽の長短に隨つて、命終之後三十三天に生じ、彼に於て端正にして、衆の天女の上に出で、五事の功德有りて及ぶ可からず。爾の時長者女、拘那含牟尼佛を供養せしは豈異人ならん乎。斯の觀を作すこと莫かれ。爾の時の長者の女人は則ち我身是れなり。時に彼の天女、壽の長短に隨つて人中に來生し、復長者の與に婦と作り、顏貌殊特にして世之希有なり。爾の時迦葉如來世に出現したまひぬ。時に長者婦七日七夜迦葉佛を供養し、誓願を發して言く『我をして將來の世に、女人の身と作ることを得しめたまへ』と。時に長者婦、壽の長短に隨つて、命終之後三十三天に生じ、五事の功德有りて彼の天女に勝れたり。爾の時長者婦の迦葉佛を供養せしとは豈異人ならん乎。斯の觀を作すこと莫かれ。爾の時の長者婦は則ち我身是れなり。此の賢劫に於て釋迦文佛世に出現したまへり。時に彼の天女命終之後、羅閱城中に生じ、劫毗羅婆羅門の與に女と作り、顏貌端正にして、諸の女人の表に出でたり。劫毗羅婆羅門の女、正に紫磨金像を以て彼の女人の所に至る、黜きこと墨に如似たり。意五欲を貪らず。諸妹斯の觀を作すこと莫かれ。此の女人の身は豈異人ならん乎。爾の時の婆羅門女とは則ち我身是れなり。諸妹當に知るべし。昔日の功報に緣つて、比鉢羅摩納の與に婦と作りぬ。

所謂摩訶迦葉是れなり。尊大迦葉は先きに自ら出家し、後日我方に出家せり。自ら昔日經歷せし所の女人之身を憶ひ、是を以て今故に自ら笑ひし耳。我無智自蔽を以て六如來を供養し、女人の身と作ることを求めぬ。此の因緣を以ての故に、昔日經歷せし所を笑ひしなり」と。

爾の時衆多の比丘、婆陀比丘尼の自ら宿命の無數世の時の事を憶ふを聞き、卽ち世尊の所に往き、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに如來に白しぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく「汝等頗ふらくは、聲聞之中、比丘尼の自ら無數世の事を憶ふこと、斯の人の如きを見る乎」と。諸比丘、佛に白さく「見ざるなり、世尊」と。佛諸比丘に告げたまはく「我聲聞中第一の弟子にして、自ら宿命の無數世の事を憶ふは、劫毗羅比丘尼是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[三] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時一比丘有り、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、須臾にして座を退き、前んで佛に白して言さく『劫は長短を爲すや、限り有りと爲ん乎』と。佛比丘に告げたまはく「劫は極めて長遠なり。我今汝の與に譬へを引かん。意を專らにして之を聽け、吾今當に說くべし」と。爾の時比丘、佛從り敎へを受けぬ。世尊告げて曰はく「比丘、當に知るべし。猶し鐵城の縱廣一由旬にして、芥子其の中に滿ちて、空缺の處無きが如く、設し人有りて來り、百歲に一芥子を取るに其の鐵城の芥子猶滅盡有り。然る後を乃至一劫と爲し、稱計す可からず。然る所以は、生死は長遠にして邊際有ること無く、衆生の恩愛縛著して生死に流轉し、此に死して彼に生じ、窮り已ること有ること無し。我其の中に於て生死を厭患す。是の如く比丘、當に巧便を求めて、此の愛著之想を免るべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第五十

【三】 S. 15. 6 Sāsapā 漢譯雜阿含經卷三十四第九經、別譯雜阿含經卷十六第十二經。

巻の第五十一

大愛道般涅槃分品第五十二

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時一比丘有り、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時彼の比丘、佛に白して言さく、「世尊、劫は長遠爲りや」と。佛、比丘に告げたまはく、「劫は極めて長遠にして、算を以て籌量す可からず。我今當に汝の與に譬喩を引くべし。善く之を思念せよ。吾今當に汝の爲に說くべし」と。爾の時彼の比丘、佛に從り教へを受けぬ。世尊告げて曰はく、「猶し大石山の縱廣一由旬、高さ一由旬なるが如く、設し人有りて來つて手に天衣を執り、百歲に一拂するも、石猶磨滅するも劫數限り難し。然る所以は、劫數は長遠にして邊際有ること無ければなり。此の如く一劫百劫に非らず。然る所以は、生死は長遠にして限量す可からず、邊際有ること無ければなり。衆生之類は無明に弊はれて生死に流浪し、出期有ること無し。此に死し、彼に生じて、窮り已ること有ること無し。我其の中に於て生死を厭患す。是の如く比丘、當に巧便を求めて、此の愛著之想を免るべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「時に隨つて法を聞くに、五の功德有りて恒に時を失はず。云何が五と爲すや。未だ嘗て法を聞かずして便ち之を聞き、已に聞けば便ち受持し、狐疑を除去し、亦邪見無く、甚深之法を解す。是れを比丘、時に隨つて法を聞くに、此の五功德有りと謂ふなり。是の故に比丘、當に念じて常に甚深之

【一】 S. 15. 5 Pabbata

法を聽くべし。此れは是れ我之敎誡なり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[二]聞くこと是の如し。一時佛、[三]毘舍離摩訶婆那園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時師子大將、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時如來、大將に告げて曰はく、「施主檀越に五功德有り、云何が五と爲すや。是に於て施主の名聞流布し、『某甲の村の中に此の好施之人有り、窮に周くし、乏しきを濟ひ、愛惜有ること無し』と。是れを[四]師子大將、第一の功德、施主の致す所と謂ふなり。復次に師子大將、施主檀越にして、若し[五]刹利衆・[六]婆羅門衆・[七]沙門衆の中に至れば、皆畏る所無く、亦疑難無し。是れを師子第二の功德と謂ふなり。復次に施主檀越は多く人の愛念する所と爲り、普く來宗して仰ぐこと、子の母を愛し、其の心相離れざるが如く、施主も亦復是の如く、多く人の愛する所と爲るなり。復次に師子、施主檀越は布施之時、歡喜心を發し、歡喜有るを以て卽ち悅豫有りて、意性堅固なり。是の時便ち自ら樂有り、苦有ることを覺ゆるも亦變悔せず、實の如く、自ら知るなり。云何が自ら知るや。苦諦・苦集・苦盡・苦出要諦有りと知り、實の如くに之を知るなり」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

施は衆の爲の福具にして　第一義に逮ぶ　其れ能く施を憶はゞ　便ち歡喜の心を發せ

と。

「復次に師子長者、施主檀越は布施之時、身壞命終せば三十三天に生じ、又五事有りて彼の諸天に勝れたり。云何が五と爲すや。一に顏貌豪貴にして、威神光明なり。二に所欲自在にして、事として果さざるは無し。三に若し檀越施主にして、人中に生ぜば、富貴の家に値はん。四に饒財多寶なり。五に言從諦用なり。其れを師子、檀越に此の五功德有りて、引いて善道に入ると謂ふなり」と。

【二】A. V,34 Sīha.
【三】毘舍離摩訶婆那園(Vesāli, Mahāvana)、摩訶婆那園は大林と譯す。
【四】師子大將 Sīhasenāpati。
【五】刹利衆(Khattiyaparisā)。
【六】婆羅門衆 (Brāhmaṇaparisā)。
【七】沙門衆(Samaṇaparisā)。

爾の時師子大將、佛の所說を聞いて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、前んで佛に白して言さく、「唯願くは世尊、及び比丘僧は、當に我請を受けたまふべし」と。爾の時世尊、默然として請を受けたまひぬ。時に師子大將、已に世尊の默然として請を受けたまふを見、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り、還つて家中に至り、種種の飮食を辨具し、好き座具を敷き、卽ち白さく、「時至れり、今正に是れ時なり。唯願くは大聖、愍みを垂れて臨顧したまへ」と。

爾の時世尊、時到り、衣を著け、鉢を持し、諸の比丘衆を將ひ、前後に圍遶せられて大將の家に至りたまひ、各、次第して坐しぬ。爾の時師子將軍、佛及び比丘僧の、已に次第して坐せしを見、手自ら斟酌して、種種の飮食を行きぬ、爾の時大將食を行く之時、諸天虛空中に在りて、之に告げて曰く、「此れは是れ阿羅漢なり、斯の人は[八]向阿羅漢なり。此れに施さば、福を得ること多く、此れに施さば福を得ること少し。此れは是れ阿那含、此の人は向阿那含、此の人は是れ斯陀含、斯の人は向斯陀含道、此の人は是れ須陀洹、斯の人は向須陀洹道、是の人は[九]七生往返、此の人は一生、[一〇]此れは是れ信を持し、[一一]此の人は法を奉じ、此れは是れ利根、此れは是れ鈍根、此の人は下卑、此の人は精進にして持戒、此の人は犯戒なり。此の人に施さば、福を得ること多く、此の人に施さば福を得ること少し」と。

爾の時師子大將、諸天の語を聞き已つて、亦懷を經ず、如來の食已に訖れるを見、鉢器を除去し、更に小座を取り、如來の前に在つて坐しぬ。爾の時師子大將、世尊に白して言さく、「我向者に諸天有りて、我所に來至して我に告げて曰く、『羅漢從り犯戒に至れ』と、皆具さに如來に白さん、斯の言を聞くと雖も、亦懷を經ず、亦復、此の念を生ぜず、『我當に此れを捨てゝ彼に施し、彼を捨てゝ此れに施すべし』と。然して我復斯の念を生ぜり、『應に一切の衆生に施すべし。有形之類は食に由つて存し、食すること無くば則ち喪はん。我躬自ら如來從り斯の偈を說きたまふを聞き、恒に心懷

【八】向阿羅漢は阿羅漢向、阿羅漢道に同じ。
【九】七生往返とは人天の間を七度往返することで、出家沙門の階位中、須陀洹果に入りしもの最も多くして七度人天の間を往返して諸苦を盡して涅槃に入るなり。
【一〇】此れは是れ信を持しとは隨信行（Saddhānusāri）のもの。
【一一】此の人は法を奉じとは隨法行（Dhammānusāri）のもの。

に在りて忘失せず、云何が名けて一偈と爲すや。

施しは當に普く平等に　終に所逆有らざるべし　必ず當に聖賢に遇ひ　斯れに縁つて得度すべし

と。是れを世尊、斯の偈の所說、我躬ら如來從り之を聞き、恒に念じて奉行すと謂ふなり」と。佛、大將に告げたまはく、「善い哉、斯れ菩薩之心、平等の惠施と名くるなり。若し菩薩にして、布施之時亦此の念を生ぜずば、我當に此れと與に此れを置くべし。恒に平等にして惠施有らば、亦復此の念有り。一切衆生は食すること有れば則ち存し、食すること無くば則ち亡びん。菩薩施を行ずる之時、亦復此の業を思惟し、便ち斯の偈を說け。

夫れ人は其の行ひを修め　惡及び其の善を行じ　彼彼自ら報を受け　行ひは終に衰耗せず　人其の行ひを尋ねば　卽ち其の果報を受くるが如く　善を爲さば其の善を獲　惡を作さば惡報を受けん　惡及び其の善を爲し　人之所習に隨ふこと　五穀を種えて　各其の果實を獲るに如似たり

師子大將、當に此の方便を以て知るべし。善惡各其の行ひ有り。然る所以は、初發意從り成道に至るに、心增減すること無し。人を選擇せず、亦其の地を觀ぜず。是の故に師子、若し惠施せんと欲する之時、恒に念じて平等に、是非之心を興すこと勿れ。是の如く師子、當に是の學を作すべし」と。爾の時世尊、復[三]嚫を說いて曰はく、

施しの歡びは人の愛する所　衆人の稱歎する所なり　至る所に疑難無く　亦嫉妬の心無し　是の故に智者の施しは　諸の惡想を除去し　長夜に善處に至り　諸天の嘉し歎する所なり

と。爾の時世尊、斯の語を說き已つて、便ち座從り起ちて去りたまひき。爾の時師子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【三】嚫とは施に同じ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時波斯匿王、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。是の時波斯匿王、世尊に白して言さく、「夫れ施し之家は當に何れの處に施すべきや」と、世尊、王に告げたまはく、「心の歡ぶ所に隨つて便ち彼に於て施せ」と。王復佛に白さく、「何れの處に施さば、大功德を得ると爲んや」と。佛王に告げて曰はく、「汝の前の所問は、『當に何れの處に施すべきや』と、今復福を獲るの功德を問へり」と。王佛に白して言さゝ、「我今如來に何れの處に施しを爲さば、其の功德を獲るやを問ひまつれり」と。佛、王に告げて曰はく、「吾今還つて問はんに、王所樂に隨つて、還つて吾に報へよ。云何が大王、若し刹利の子來り、婆羅門の子の來る有り、然るに愚惑にして所知無く、心意錯亂して、恒に一定ならず、王の所に來至して王に問ふて言はん、『我等は當に聖王に恭奉し、時の所須に隨ふべし』と、云何が大王、此の人を須ひて左右に在く乎」と。王佛に白して言さく、「須ひざるなり、世尊。然る所以は、彼の人に由るに黠慧有ること無く、心識不定なり。外敵を候つに堪えざる之致す所なればなり」と。佛王に告げて曰はく、「云何が大王、若し刹利・婆羅門種、諸の方便多く、恐難有ること無く、亦畏懼せず、能く外敵を除き、王の所に來至して、王に白して言はく、『我等時に隨つて聖王を瞻奉せん。唯願くは恩を垂れて、當に納受せ見るべし』と、云何が大王、當に斯の人を受くべきや不や」と。王佛に白して言さく、「唯然り、世尊、我等は當に斯の人を納受すべし。然る所以は、彼の人外敵を候つに堪任し、畏難有ること無く、亦恐懼せざるに由ればなり」と。佛王に告げて曰はく、「今比丘も亦復是の如し。諸根完具して五を捨て六を成じ、一を護り、四を降して、此之人に施さば、福を獲ること最も多からん」と。王佛に白して言さく、「云何が比丘は五を捨てゝ六を成じ、一を護りて四を降すや」と。佛王に告げて曰はく、「是に於いて比丘、貪欲蓋・瞋恚蓋・[一三]睡眠蓋・調戲蓋・疑蓋を捨

【一三】宋本による。大正本は睡眠調疑となる。

つ。是の如きの比丘を名けて、五を捨つと爲すなり。云何が比丘、六を成就するや、王當に之を知るべし。若し比丘、色を見已つて色想を起さず。此に縁つて眼根を護り、惡不善の念を除去して眼根を護る。若し耳・鼻・舌・身・意、意識を起さずして意根を護る。是の如きの比丘、六を成就するなり。云何が比丘にして一を護るや。是に於て比丘、繫念して前に在り。是の如く比丘、一を護るなり。云何が比丘にして四を降すや。是に於て比丘、身魔・欲魔・死魔・天魔を降し、皆悉く降伏す。是の如く比丘、四を降伏するなり。是の如く大王、五を捨て六を成就し、一を護りて四を降すなり。此の如き之人に施さば、福を獲ること量り難し。大王、邪見は邊見と相應す。斯の如き之人の施は蓋し益無きなり」と。

時に王、佛に白して言さく、「是の如し、世尊、斯之人に施さば、其の福量り難し。若し比丘にして一法を成就するも、福尚量り難し、何に況んや餘をや。云何が一法と爲すや、所謂身念是れなり。然る所以は、尼乾子は恒に身行 意行を計して、口行を計せざればなり」と。佛王に告げて曰はく、「尼乾子の者は愚惑にして、意常に錯亂して、心識定まらず。是れ彼の師の法の故に斯の言を致す耳なり。彼身行之報ひ口行之報ひを受くるは、蓋し言ふに足らず。意行は形無くして、見る可からず」と、王佛に白して言さく、「此の三行の中、何れの者最も重きや、身行なり耶、口行なり耶、意行なり耶」と。佛王に告げて曰はく、「此の三行の中、意行最も重く、口行・身行は蓋し言ふに足らざるなり」と、王佛に白して言さく、「復何の縁の故に念意を說きて最第一と爲すや」と。佛王に告げて曰はく、「夫れ人の所行は意念を先きにし、然る後に口發し、口已に發せば便ち身に殺・盜・婬を行じ、舌根定まらず、亦端緒無し。正使ひ彼の人命終するも、身根・舌根在り。大王、彼の人は何を以ての故に身・口所設有らざる耶」と。王佛に白して言さく、「彼の人は意根無きを以ての故に、斯の變を致す耳」と。佛王に告げて曰はく、「當に此の方便を以て意根最も重しと爲し、餘の二は輕しと知るべ

し」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

一四 心は法本爲り　心尊く心に使はる　心に惡を念じ　卽ち行ひ卽ち施さば　彼に於て苦を受くること　輪の轍を轢むがごとし　心は法本爲り　心尊く心に使はる　中心に善を念じ　卽ち行ひ卽ち爲さば　其の善報を受くること　影の形に隨ふが如し

と。

爾の時波斯匿王、世尊に白して言さく、「是の如く如來、惡を爲す之人、身に惡を行じ、行ずるに隨つて惡趣に墮するや」と。佛王に告げて言はく、「汝何等の義を觀ずることを爲して、來つて我に問ひ、何人に施しを爲して、福を獲ること益多きや」と。王佛に白して言さく、「我昔尼乾子の所に至り、尼乾子に問ふて曰はく、『當に何れの處に於て惠施すべきや』と、尼乾子我所問を聞き已り、更に餘事を論じて亦報ひを見ざりき。時に尼乾子我に語げて言く、『沙門瞿曇は是の說を作せり、『我に施さば福を得ること多く、餘は福無し。當に我弟子に施すべし、餘人に施すべからず。其れ人民有りて我弟子に施さば、其の福量る可からざるなり』』と。佛王に告げて曰はく、「爾の時云何が之に報ゆと爲んや」と。王佛に白して言さく、「時に我便ち是の念を作さく、『或は斯の理有り、如來に惠施せば、其の福量り難し。今故に佛に問ひまつらん。何處に與ふることを爲ば、其の福量り難きや。然るに今世尊は自ら稱譽したまはず、亦人を毀りたまはざるなり」と。佛王に告げて曰はく、「我亦是の說を作さず『我に施さば、福を得ること多く、餘は福を得ず』と、但我今日說く所は、鉢の中の遺餘は、持して人に與ふれば、其の福量り難く、清淨之心を以て、淨水中に著し、普く斯の念を生ぜば、斯の中の有形の類、祐を蒙ること無量なり、何に況んや人形をや。但大王、我今說く所は、持戒の人に施さば、其の福量り難く、犯戒の人に與ふれば、蓋し言ふに足らず、大王、當に知るべし、田家の子の善く其の地を治め、穢惡を除去し、好き穀子を以て、良田中に著せば、中に於て子

【一四】法句經雙要品を見よ。

を獲ること、限量有ること無きが如く、亦彼の田家の子、地を修地せず、亦穢惡を除去せずして、穀子を下せば、後收むる所蓋し言ふに足らざるが如く、今比丘も亦復是の如し。若し比丘にして、五を捨て、六を成就し、一を護り、四を降さん。斯の如き之人に、其れ施惠せば、其の福量り無からん。邪見之人に與ふれば、蓋し言ふに足らざること、猶し大王、剎利種・婆羅門種、意に疑難無く、能く外敵を降すが如く、當に亦羅漢之人の如きを觀ずべし。彼の婆羅門種、意專ら定まらずば、當に邪見之人の如く觀ずべし」と。

時に波斯匿王、世尊に白して言さく、「持戒之人に施さば、其の福量り難し。今自り已後、其れ來つて求索むる者有らば、終に違逆せじ。若し復四部之衆にして、求索むる所の者有らば、亦之に逆らはず、時に隨つて衣被・飲食・床臥の具を給與せん。亦復諸の梵行者に施與せん」と。佛之に告げて曰はく、「是の說を作すこと勿れ、然る所以は、畜生之類に施さば、其の福量り難し、況んや復人身を乎。但我今日說く所は、持戒の人に施さば計り難し。犯戒の人に非るなり」と。波斯匿王、佛に白して言さく、「我今重ねて復自ら歸しまつらん。然るに世尊の慇懃なること。乃ち斯の外道異學に至りては恒に世尊を誹りまつる。又且つ世尊は恒に彼の人を歎譽したまふに、外道異學は利養に貪著せり。又復如來は利養を貪りたまはず。國事猥りに多し所止に還らんと欲す」と。佛王に告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と。爾の時波斯匿王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[一五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時波斯匿王、庶母の百子を殺し、即ち變悔を懷きぬ。「我惡の源を造りしこと、極めて甚だ多しと爲す。復此れを用つて、王位に由ると爲すが故に此の百人を殺せり。誰れか能く我愁憂を除くに堪任せんや」と。時に波斯匿王、復是の念を作さく、「唯世尊有りて、能く我憂ひを去りたまふ耳」と。時に復斯の念を作さく、「我今宜し

【一五】S. III. 3. 5 を含む。

く此の愁憂を懷くべからず、默然として世尊の所に至り、當に王威を備して世尊の所に至るべし」と。時に波斯匿王、群臣に告げて曰はく、「汝等寶羽之車を催駕せよ。前王の法の如く、舍衞城を出で、如來に親近しまつらんと欲す」と。群臣王の敎へを聞き已つて、即時に羽寶之車を嚴駕し、即ち來つて王に白して言く、「嚴駕已に訖れり、王是れ時を知れ」と。時に波斯匿王、即ち羽寶之車に乘り、鐘を椎ち、鼓を鳴し、繒幡蓋を懸け、[一六]人民之徒皆鎧器を著し、諸臣圍遶して舍衞城を出で、祇洹に往至し、歩みて祇洹精舍に入り、前王の法の如く五威儀を除く、蓋し天冠・拂・劍・履・屣盡く之を捨て、世尊の所に至り、頭面に地に布き、復手を以て如來の足を摩し、並に自ら陳啓すらく、「我今悔過し、往を改めて來を修めん。愚惑にして眞僞を別たず、庶母の百子を殺せり、王の威力の故に、今來つて自ら悔ゆ、唯願くは納受したまへ」と。佛王に告げて曰はく、「善い哉、大王、還つて本位に就け、今當に說法すべし」と。

時に波斯匿王、即ち座從り起ち、世尊の足を禮し、還つて本位に詣りぬ。佛王に告げて曰はく、「命は極めて[一七]危脆にして、極壽も百年に過ぎず、出づる所のもの幾ばくも無し。人壽百年を計して三十三天の一日一夜と(爲し)、彼の日夜三十日を計して一月と爲し、十二月を一歲と爲し、彼の三十三天は正しく壽千歲なり。人中の壽、壽十萬歲を計し、復計して還活地獄の中の一日一夜を計す。復彼の日夜三十日を計して一月と爲し、十二月を一歲と爲して、還活地獄中五千歲なり、或は壽半劫、或は壽一劫なること、人の所作の行ひに隨ふ。或は中夭の者有り、人中之壽百億之歲を計す。智者は恒に念じて普く此の行を修め、復此の惡を用つての爲に、樂少く、苦多く、其の殃ひ計り難し。是の故に大王、己身の父母妻子國土人民に由つて、罪業を施行すること莫かれ、亦王身の爲の故に罪の本を作ること莫かれ。猶し石蜜の初め甜めて復苦しきが如く、此れも亦是の如し。短壽之中に於て何んぞ惡を作さんと爲るや。大王、當に知るべし。四の大畏有りて、恒に人身を逼り、終に制

【一六】宋・元・明の三本による。
【一七】危脆とは危くもろいこと。

約す可からず。亦復呪術戰闘藥草の能く抑折せ所る可からず。所謂生老病死も亦、四大山の四方從り來つて、各各相就き、樹木を摧壞し、皆悉く磨滅するが如く、此の四事者も亦復是の如し。大王當に知るべし、若し生來る時、父母をして憂・愁・苦・惱を懷か使むること稱計す可からず。若し老來至せば、復少壯無く、形貌を壞敗し、支節漸く緩まん。若し病來至せば、丁壯之年も復た氣力無く、轉々命促せん。若し死來至せば、命根を斷ち、恩愛別離五陰各〻散ぜん。是れを大王、此の四大有りて、皆自在を得ずと謂ふなり。

若し復人有りて、殺生に親近し、諸惡の原を受け、若し人中に生ずれば、壽命極めて短からん。若し人盗を習はゞ、後生貧困にして、衣形を蓋はず、食口を充たさゞらん。然る所以は、皆他の財物を取りしに由るが故に。故に斯の變を致すなり。若し人中に生ぜば、苦を受くること無量ならん。若し人他を婬せば、後に人中に生じ、妻貞良ならざらん。若し人妄語せば、後人中に生ずるも、言信用せず、人に輕慢爲られん。皆前世に詐りて虛僞を稱せしが故に。若し人惡言せば、地獄の罪を受け、若し人中に生ぜば、顏色醜陋ならん。皆前世の惡言に由るが故に、斯の報ひを致すなり。若し人綺語せば、地獄の罪を受け、若し人中に生ぜば、家中和せず、恒に鬪亂を被むらん。然る所以は、皆前身の所造之報ひに由ればなり。若し人兩舌せば、彼此を鬪亂し、地獄の罪を受け、若し人中に生ぜば、家は和せず、恒に諍訟有らん。然る所以は、皆前世に彼此を鬪亂せし之致す所なり。若し人憙びて他を憎嫉せば、地獄の罪を受け、若し人中に生ぜば、人の爲に憎ま所ん。皆前世の行本に由る之致す所なり。若し人謀害之心を興さば、地獄の罪を受け、若し人中に生ぜば、意專ら定まらざらん。然る所以は、皆前世に由りて斯の心を興すが故に。若し復人有りて、邪見を習はゞ、地獄の罪を受け、若し人中に生ぜば、聾盲瘖瘂人に惡見せ所れん。爾る所由は皆前世の行本に由るの致す所なり。是れを大王、此の十惡之報ひに由るが故に、斯の殃舋を致し、無量の苦を受くと謂

ふなり。況んや復外の者を乎。是の故に大王、當に法を以て治化し、非法を以てすること莫かるべし。理を以て民を治め、亦非理を(以て)すること莫かれ。大王、諸の正法を以て民を治むる者は、命終之後皆天上に生ぜん。正使大王、命終之後人民追憶して、終に忘失せず、名稱遠布せん。大王、當に知るべし、諸の非法を以て、人民を治化せば、死後皆地獄の中に生ぜん。是の時獄卒五縛を以て之を繋ぎ、其の中に苦を受くること稱量す可からず。或は鞭うち、或は縛し、或は捶ち、或は諸の支節を解き、或は火を取りて炙き、或は鎔銅を以て其の身に灌ぎ、或は其の皮を剝ぎ、或は革を以て腹に著し、或は其の舌を抜き、或は其の體を刺し、或は鋸もて其の身を解き、或は鐵臼の中に擣き、或は輪もて其の形を壞り、刀山劍樹を走ら使めて停息せ令めず、熱せる銅柱を抱き、或は其の眼を挑り、或は其の耳根を壞り、或は手足を截り、耳鼻已に截れば復生じ、復身形を擧げて大鑊中に著し、復鐵叉を以て其の身を擾動して息住せ令めず。復鑊中從り出生せば、脊筋を抜き、持用つて車を治し、復熱炙地獄中に入り、復熱屎地獄中に入り、復刺地獄中に入り、復灰河地獄中に入り、復刀樹地獄中に入ら使む。復仰臥せ令めて、熱鐵丸を以て之を食は使め、腸胃五臟皆悉く爛盡し、下從りして過ぐ。復鎔銅を以て其の口に灌ぎ、下從りして過ぐ。中に於て苦惱を受くること、要は當に罪畢つて、然る後に乃ち出づべし。是の如く大王、衆生の地獄に入る其の事是の如し。皆前世の治法整はざりしに由る之致す所なり」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

百年放逸を習ひ　後故に地獄に入る　斯れ竟に何んぞ貪るに足らん　罪を受くること稱計し難ければなり

「大王、法を以て治せば、自ら其の身、父母・妻子・奴婢・親族を濟ひ、國事を將護せん。是の故に大王、常に當に法を以て治化し、非法を以てすること勿かれ。人命極めて短し、世に在るは須臾の間耳。生死長遠にして、諸の畏難多し。若し死來至せば、中に於て呼哭するも、骨節離解し、身體煩

【一八】灰河地獄（Khārodaka-nadinirnaya)。

拯せん。爾の時救ふ者有ること無く、父母・妻子・奴婢・僕從・國土・人民の能く救ふ所有るに非らざるなり。此之難有り、誰か代るに堪ゆる者ぞ、唯布施持戒有り、語常に和悅にして、人の意を傷けず、衆の功德を作し、諸の善本を行ぜよ」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

智者は當に惠施すべし　諸佛の嘉歎したまふ所なり　是の故に淸淨心に　懈慢の意有ること勿れ　死の爲に逼め所れ　大極苦惱を受け　彼の惡趣の中に至りて　休息の時有ること無し　若し復來らんと欲する時　極めて苦惱を受け　諸根自然に壞れ　惡に由りて休息無し　若し醫師來る時　諸の藥草を合集し　其の身體に遍からずば　惡に由りて休息無けん　若し復親族來り　其の財貨の本を問はんに　耳亦聲を聞かず　惡に由りて休息無し　若し復移りて地に在らば　病人其の上に臥せん　形は枯樹の根の如く　惡に由りて休息無し　若し復已に命終せば　身命識已に離れ　形牆壁土の如く　惡に由りて休息無けん　若し復彼の死屍　親族塚間に擧げんに　彼の持す可き者無く　唯福怙む可き耳

と。是の故に大王、當に方便を求めて、福業を施行すべし。今爲されば後悔するも益無けん」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

如來は福力に由り　魔の官屬を降伏す　今已に佛力に還える　是の故に福力尊し

と。是の故に大王、當に念じて福を作すべし。惡を爲して尋いで當に悔ひて、更に復犯すこと莫かるべし」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

惡の原を極むることを爲すと雖も　悔過漸く復薄ければ　是の時世間に於て　根本皆消滅せん

と。是の故に大王、己身に由つて其の惡を修行すること莫かれ、父母・妻子・沙門・婆羅門の爲に、惡を施行して、其の惡行を習ふこと莫かれ。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

父母兄弟に非らず、亦諸の親族に非らず、能く此の惡を免るれば、皆捨てゝ死に歸せんと。是の故に大王、自今已後當に法を以て治化し、非法を以てすること莫かれ。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時波斯匿王、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

一九 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時國王波斯匿、夜十事を夢見せり。王卽ち覺寤し、大に用つて愁怖し、國及び身と妻子とを亡ぼさんことを懼畏れ、明日卽ち公卿・大臣・明智の道士・婆羅門の能く夢相を解く者を召せしに、悉く來り集會しぬ。王卽ち爲に夜十事を夢みしことを說き、「誰か能く解く者ぞ」と。婆羅門言く、「我能く之を解かん。恐らく王之を聞かば、卽ち當に樂しまざるべし」と。王言く、「便ち之を說け」と。婆羅門言く、「當に國王及び王の太子、王の妻を亡ぼすべし」と。王言く、「云何が諸人、寧ろ二〇禳厭す可きや不耶」と。婆羅門言く、「斯の事之を禳厭す可し。當に太子及び王の重んずる所の大夫人、邊傍の侍者、僕從奴婢幷に貴ぶ所の大臣を殺し、以用て天王を祠るべし。所有の臥具・珍琦の寶物、皆當に火燒し、以て天を祠るべし。是の如くんば王身及び國は盡く他無かる可し」と。

王婆羅門の言を聞き、大に用つて愁憂ひて樂しまず、却いて齊室に入り、此の事を思念しぬ。王に夫人有り、名けて二一摩利と曰へり、就いて王の所に到り、王の意故を問ふらく、「何を以て愁憂ひて樂しまざるや、妾の身は將に王に過有りし耶」と。王言く、「卿は我に過無し。但是の事を問ふこと莫かれ。卿にして儻し之を聞かば、汝をして愁怖せ令むればなり」と。夫人王に答ふらく、「敢て愁怖せず」と。王言く、「問ふを須ひざれ、聞かば愁怖せん」と。夫人言く、「我は是れ王身之半なり、急緩有らば當に妾一人を殺して、大王安隱なるべし。以て怖れを爲さず。願くば王、之を說きたまへ」と。王卽ち夫人の爲に昨夜の十事を夢見せしことを說けり。一には三釜雜、兩邊の釜滿ち、中

【一九】 J. I. pp. 334–343. 單譯に失譯舍衞國三夢見十事經一卷、失譯舍衞國王十夢經一卷、東晉竺曇無蘭譯、國王不梨洗泥十夢經。

【二〇】 禳厭とは天を祀り厭ひはらふこと。

【二一】 摩利（Mallikā）。勝鬘經の主人公なる勝鬘夫人の母、波斯匿王をして歸依せしめし篤信の夫人。

釜空なり。兩邊の釜の沸氣相交往して、中央の空釜の中に入らざるを見たり。二には馬口も亦食し、尻も亦食するを夢見せり。三には大樹の華を生ずるを夢見せり。四には小樹の果を生ずるを夢見せり。五には一人縄を索き、然して後に羊有り、羊主縄を食ふを夢見せり。六に狐金床の上に坐し、食するに金器を以てするを夢見せり。七には大牛還つて犢子に從ひて、乳を嗽ふを夢見せり。八に黑牛の群、四面從り吼鳴し、來つて相趣き、鬪はんと欲し當に合すべきに未だ合せず、牛處を知らざるを夢見せり。九に大陂池の水中央濁りて、四邊清めるを夢見せり。十には大溪の水波流れて正しく赤なるを夢見し、夢見し已つて、卽ち寤めて大に用つて悍怖し、恐らく國及び身妻子人民を亡ぼさん」と、今公卿大臣道人婆羅門の能く夢を解く者を召しぬ。時に一婆羅門有りて言く、「當に王太子の重んずる所の夫人・大臣・奴婢を殺し、以て天を祠るべし」と。故を以て愁ひを致せる耳」と。夫人報へて言く、「大王夢を愁ふること莫かれ、人行きて金を買ひ、又火を以て燒き、兼ねて石上に磨れば、好惡自ら現ずるが如く、今佛近く祇洹精舍に在せり。往いて佛に問ひまつる可し。佛解說したまはゞ、佛說に隨ふ可し。云何が此の狂癡の婆羅門の語を信じ、以て自ら愁苦せんや」と。

乃ち斯に至つて、王方に喜び寤めて、卽ち左右の傍臣を召し、速に車騎を嚴駕し、王高蓋之車に乘り、騎に乘り、數千萬人に侍從せられ、舍衞城を出でゝ祇洹精舍に到り、自ら下り歩みて佛所に到り、頭面に足を禮し、長跪叉手して、前んで佛に白して言さく、「昨夜十事を夢見せり。願くば佛、我を哀みて事事解說したまへ」と。佛王に告げて曰はく、「善い哉、大王、王の夢みる所は乃ち將來後世の爲に、瑞應を現ぜし耳。後世の人民は禁法を畏れず、普く當に淫泆にして、妻息に貪著して情を放ち、婬嫉にして厭足有ること無し。妬忌愚癡にして慚を知らず、愧を知らず、貞潔にして棄て見れ、佞諂國を亂すべし。王三釜羅の兩邊の釜滿ちて、中央の釜空しく、兩邊の釜の沸氣相交往して、中央の空釜の中に入らざるを夢見せしは、後世の人民皆當に給足し、貧窮を養親せず、同生

親近せず、返つて他人の富貴に親しみ、相從ひ共に相饋遺すべし。王の一事を夢見せしは、正しく此れが爲め耳。正しく馬口も亦食ひ、尻も亦食ふは、後世の人民大臣・百官・長吏・公卿、官を廩食し、復民を食し、賦歛息まず、下吏姦を作し、人民寧ずることを得ず、舊土に安ぜざるなり。王の二事を夢見せしは、正しく此れが爲め耳。王の大樹の華を生ずるを夢見せしは、後世人民多く驅役に逢ひ、心焦ち意惱みて、常に愁怖有り、年未だ三十に滿たざるに、頭髮皓白ならん。王の三事を夢見せしは、正しく此れが爲め耳。王の小樹の果を生ずるを夢見せしは、後世女人年未だ十五に滿たざるに、便ち行いて嫁ぐことを求め、兒を抱きて來歸して慚愧を知らじ。王の四事を夢見せしは、正しく是れが爲め耳。王の一人繩を索き、後に羊有り、羊主繩を食ふを夢見せしは、末後の世人は、夫聟行きて賈ひ、或は軍征に入り、街里に遊洋し、朋黨交ゝ戲れ、不肖之妻家に在りて、他の男子と與に私に通じ、栖宿に夫の財を食飲し、情を快くし、欲を恣にし、陋を愧づること有ること無し。夫も亦之を知り、人の佯愚に效ふ。王の五事を夢見せしは、正しく是れが爲め耳。王の狐金床に上り、食するに金器を用ふるを夢見せしは、後世の人賤しき者は當に貴く、金床の上に在りて坐し、重味を食飲すべく、貴族大姓は當に走使に給れ、良人は奴婢と作り、奴婢は良人と爲るべし。王の六事を夢見せしは、正しく此れを謂ふ耳。王の大牛還つて犢子に從ひ下乳を嗽ふを夢見せしは、後世の人の母、當に女の爲に媒と作り、他の男子を將ひて房室を與にし、母住りて門を守り、財物を得るに從つて、持用し自給して活すべく、父も亦同情し、佯り聾して知らざらん。王の七事を夢見せしは、正しく是れを謂ふ耳。王の黑牛四面從り群り來り、相趣き鳴吼して鬪はんと欲し、當に合すべきに未だ合せず、牛處を知らざるを夢見せしは、後世の人、國王・大臣・長吏・人民皆當に大禁を畏れず、婬を貪り、欲を嗜み、財を畜へ、產を貯へ、妻子大小皆廉潔ならず、婬泆(三)饕餮にして、厭極有ること無く、嫉妬愚癡にして慚愧を知らず、忠孝を行ぜず、佞諂にして國を破り、上下を畏

【三】饕餮とは財貨飲食を貪ること。

れず、雨ふるに時節ならず、氣和適せず、風塵暴起して沙を飛ばし、木を折り、蝗蟲稼を噉ひ、茲に熟せざら使むべし。帝王人民の施行すること此の如し。故に天然り又四邊に現ずるに雲を起ら使むるなり。帝王人民皆喜び、各言く、『雲は以て四合せり、今必ず當に雨るべし、須臾之間に雲各自ら散ぜん。故に此の怪を現じ、萬民をして行ひを改め、善を守り、戒を持ち、天地を畏懼れて惡道に入らず、貞廉にして自守し、一妻一婦、慈心にして怒らざら使めんと欲す』と。王の八事を夢見せしは、正しく此れを謂ふ耳。王の大陂水の中央濁り、四邊清めるを夢見せしは、後世の人、閻浮地内に在りて、臣は當に忠ならざるべく、當に孝ならざるべく、長老を敬はず、佛道を信ぜず、明經道士を敬はず、臣は官賜を貪り、子は父の財を貪り、反復有ること無く、義理を顧みず、邊國は當に忠孝なるべく、長老を尊敬し、佛道を信樂し、明經道士に給施、報反復を念ぜん。王の九事を夢見せしは、正しく此れを謂ふ耳。王の大溪水の流波の正しく赤なるを夢見せしは、後世の人、諸の帝王・國王當に其の國を厭はず、師を興し共に闘ひ・當に車兵・馬兵を作し、當に相攻伐し、還つて相殺害し、流血正しく赤なるべし。王の十事を夢見せしは、正しく是れを謂ふ耳。盡く皆後世の人之事の爲め耳。後世の人にして、若し能く心佛道に存し、明經道人に奉事せば、死して皆天上に生ぜん。若し愚行を作し、更に共に相殘らば、死して三惡道に入り、復陳ぶ可からず」と。

王卽ち長跪叉手して佛の教へを受け、心中に歡喜し、定慧を得て復恐怖無し、王便ち稽首作禮し、頭面を佛足に著け、宮に還つて夫人に重賜し、拜して正后と爲し、多く財寶の資を給して人に施さ令め、國遂に豐樂たり。皆諸の公卿・大臣・婆羅門の俸祿を奪ひ、悉く國を逐ひ出して、復信用せず。一切の人民皆無上正眞之道を發し、王及び夫人は佛を禮して去りぬ。爾の時波斯匿王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第五十一（完）

あとがき

本國譯の初卷の刊行を取り急いだために、解題の上に次の粗漏のあつたことを、こゝに訂正してをく。

一、增壹阿含經解題一傳譯及び註疏に關する事項中、二頁上段第十行目に、「至元法寶勘同總錄卷六には「初缺」とあれば、勘同總錄の成つた元代には」とあるを、「開元釋教錄卷十三・同十五には、「右一經前後兩譯一本在藏一本缺」とあれば、開元釋教錄の成りし頃には」と訂正すること。

二、同頁中段十九行に獨譯の外「他の譯出を見ないが」とあるを、「英譯には西紀一九二五年 A. D. Jayasundere 氏の手に成つたものに The Book of the Numerical Sayings Part II (Catukka Nipāta)があり、該書の序によれば Part I は E. R. Gooneratne 氏によつて譯せられたやうであるが、未だ該譯を手にしない。」と補正すること。

右補訂事項中の、本經の英譯のあることを文學士龍山章眞君に指教せられたことを附してこゝに謝意を表する。

昭和第六、四月中浣　　洛東下鴨紀の森僑居にて

譯者　林　五邦　誌す

雜寶藏經解題

一　本經の名稱

本經は雜寶藏經といふ名稱になつてゐるが如く、その內容等から類推するに、雜然と諸種の因緣譬喩本事本生等を集錄したものであつて、雜藏と稱すれば簡明に云ひ現すことができる。

殊に有名なラーマーヤナ物語や那先比丘ミリンダ王物語、祇夜多尊者とカニシカ王物語なども含まれてゐる。三十二相を具せる彌勒が比丘として行乞せる物語など興味を牽くものがある。

南條目錄の第一千三百二十九番に梵名Samyuktaratnapitaka-Sūtra　として掲載せられてゐるが、梵文原本は散佚して學界に知られてないから、恐くはサミエル・ビール氏が漢譯の經題から梵語に復文せられたものを再錄したものであらう。

二　本經の部接

本經は北方佛敎徒の所傳に係る經であるから、原本は梵語か若しくは西域の胡語にて錄されたものから漢譯したものであらうが、十二部經中の譬喩に相當する。

其部接は思想內容から推測するに小乘部の接屬たることに於ては先哲の分類せられし如く依然として異はなからう。

三　本經の完成

本經は阿含部の經律二藏に散在せる因緣譬喩本事本生等を漫然と集錄したものであるが、ミリンダ王やカニシカ王の記事を採錄せる點から觀察するに、カニシカ王は佛滅後大約四百年の出世で、西曆紀元第二世紀頃に相當すれば、同時代已後に集錄完成したものであらう。

四　本經の譯者

本經の譯者は西域の沙門吉迦夜 Kekaya にして、元魏宋明帝の世卽ち西紀第四百七十二年に曇曜と共に譯出した。其他大方廣菩薩十地經等四部をも漢譯せられた三藏である。

五　本經の組織

本經は卷を分つこと十卷にして、一百二十一章の因緣譚を集錄してある。雜然たる排列のやうではあるが、多少の意味脈絡を存して彙類したところも見える。

第一卷　孝養篇

第二卷　孝養篇　因果篇

第三卷　誹謗篇

第四卷　施行篇

第五卷　施行生天篇
第六卷　施行雜篇
第七卷　施行雜篇
第八卷　教化篇
第九卷　教化雜篇
第十卷　闘諍篇

已上の如く不規則ではあるが大別することができる。

昭和六年四月十七日

譯者　岡教邃　識

二

古來我國に於て本經の因縁譚は屢〻話題に昇り巷間に宣傳せられてゐる經の一である。

雜寶藏經

元魏西域三藏吉迦夜共曇曜譯

卷の第一

一　十奢王の緣

昔人壽八萬歳の時、一王有り、號して[一]十奢と曰ふ、閻浮提に王たり。王の大夫人一子を生育し、名を[二]羅摩と曰ふ。第二夫人にも一子有り、名を[三]羅漫と曰ふ。羅摩太子は大武勇有りて[四]那羅延力のごとく、兼て扇羅有り、聲を聞き形を見れば皆能く害を加ふ、能く當るもの無し。時に第三夫人一子を生み、[五]婆羅陀と名く。第四夫人一子を生み、滅怨惡と字す。第三夫人を王は甚だ愛敬して之に語りて言く、我れ今爾に於てあらゆる財寶をも悋惜すること無し、若し須ひるところあらば爾の所願に隨へと。夫人對へて言く、我れ求むるところ無し、後に情願有らん、當に更に啓白すべしと。

時に王患に遇ひ、命惙に在り、即ち太子羅摩を立て己に代りて王と爲し、帛を以て髮を結び、頭に天冠を著け儀容軌則王者の法の如し。

時に小夫人王の病を瞻視して、小しく瘳差することを得たれば、自ら恃むこと此の如し。羅摩其父の位を紹ぐを見て心に嫉妬を生ず、尋いで王に啓して先の願を求索む、願くば我子を以て王と爲し、羅摩を廢せよと。王是語を聞き、譬へば人噎びて既に咽むことを得ず、又吐くことを得ざるが如し、正に長を廢せんと欲せば、已に立てゝ王と爲せり。正に廢せざらんと欲せば先に其願を許せ

【一】十奢王とは梵語ダーシャラタ王の漢訛譯なり、アヨダヤー國を統治せし名君なり。此緣は印度にて有名なる物語ラーマーヤナの事緣なり。
【二】羅摩太子は梵音のラーマを漢音譯せるものなり。
【三】羅漫王子は梵語ラクシマンの漢訛音譯。
【四】梵語ナーラヤナにして大力ある神名なり。
【五】梵語バハーラタの漢訛音譯。

り。然に十奢王少より已來未だ曾て信に違はず、又王者の法は、法に二語無く、前言に負かずと、是を思惟し已りて、即ち羅摩を廢し、其衣冠を奪ふ。

時に弟羅漫其兄に語りて言く、兄勇力有り兼て扇羅有り、何を以てか用ひず、斯恥辱を受くるやと。兄は弟に答へて言く、父の願に違ふは孝子と名けず。然に今此母我を生まずと雖も、我父の敬待するところ亦我母の如し。弟　婆羅陀は極めて和順を爲し、實に異意無し。我今の如くんば大力、扇羅有りと雖も、寧ろ父母及び弟に於て作すべからざるところ、而も害を加へんと欲すべけんや。弟其言を聞き即便ち默然たり。

時に十奢王即ち二子を徙して遠く深山に置き、十二年を經て乃ち國に還ることを聽す。羅摩兄弟は即ち父の勅を奉じて心結恨無く、父母を拜辭して遠く深山に入る。

時に婆羅陀先に他國に在りしも、尋で召し國に還し、以用ひて王と爲す。然に婆羅陀は素とより二兄と和睦恭順し、深く敬讓を存せり。既に國に還り已れば父王已に崩しぬ。方に己が母妄りに廢立を興し、遠く二兄を擯するを知り、所生の母の所爲非理なるを嫌ひ、向ひて拜跪せず、己が母に語りて言く、母の所爲は何ぞ勃逆を期し、便ち我の門戸を燒滅爲すやと。大母に向ひて拜することは恭敬孝順にして倍常より勝れり。

時に婆羅陀即ち軍衆を將ひて彼山際に至り、衆を留めて後に在らしめ、身自ら獨り往けり。弟來る時に當りて羅漫兄に語りて言く、先に恒に弟婆羅陀の義讓恭順を稱しに今日兵を將ひて來る、我兄弟を誅伐せんと欲するならんと。兄は婆羅陀に語りて言く、弟今何爲ぞ此軍衆を將ふるやと、弟は兄に白して言く、道路を渉るに賊難に逢ふを恐るゝが故に、兵衆を將ひて自の防衛に用ふるのみ更に餘の意無し、願くば兄國に還りて國政を統理せよと。兄は弟に答へて言く、先に父の命を受けて遠く徙り此に來れり、我今云何ぞ輒に還返することを得んや、若し專輒ならば、仁子孝親の義

と名けずと。是の如く怨恕に苦求して已まざるも、兄の意確然として執志彌固し。弟は兄の意終に迴すべからざるを知り、尋で卽ち兄より革屣を索め得て悵悵懊惱し、齎し國に還歸し國政を統攝す。常に革屣を御坐の上に置き、日夕朝拜問訊の義、兄の如く異ること無し。亦常に人を遣し彼山中に到り數數兄に請ふ。然ども其二兒は父が先に十二年にして還れと勅せられしを以て年限未だ滿たずとて、孝を至し忠を盡し敢て命に違はず。其後ち漸漸に年歲已に滿ちて、弟の怨戀に屢信を遣し召を知り、又屣を敬ひて己の如く異ること無を知り、弟の情至を感じ、遂に便ち國に還る。既に國に至り已りて、弟還り位を讓りて兄に與ふ、兄復讓りて言く、父先に弟に與ふ、我取ること宜ならずと。弟復讓りて言く、兄は嫡長と爲す、父の業を負荷ふ、正に是兄たるべしと。是の如く展轉し互に相ひ推讓せり。兄已ことを獲ずして遂に還り王と爲る。兄弟敦穆なれば風化大に行れ、道の被るところ黎元賴を蒙り、忠孝の加ふるところ、人の思ひ自ら勸めて奉事孝敬なり。婆羅陀の母大惡を造ると雖、都て怨心無く、此忠孝の因緣を以ての故に、風雨時を以てし、五穀豐熟し、人疾疫無く、閻浮提の內の一切の人民熾盛豐滿にして常に十倍したりき。

二　王子肉を以て父母を濟ふの緣

是の如く我聞く、一時佛[一]舍衞國に在しき、その時[二]阿難衣を著鉢を持ち、城に入りて乞食するに、一小兒を見る、盲父母有り乞ひ索めて食を得れば、好きものは父母に供養し、麁しきものは便ち自ら食せり。

阿難は佛に白して言さく、世尊よ、此小兒は甚だ希有と爲す、好食を乞ひ得ば用つて父母に奉じ、麁惡なるものを擇びて自ら之を食すとはと。

佛言はく、此未だ難しとなさず、我過去世の中にて父母を供養せしに、乃ち極めて難しとなす。

【一】舍衞國は梵音シラワスティの漢音訛譯。
【二】釋尊の從弟にて弟子なるアーナンダの漢音訛譯。

呵雜佛に白して言さく、世尊よ、過去の世にて、父母を供養せし其事云何ぞや。

佛言はく、乃往過去に大國王あり、國土を統領しき。王に六子ありて各一國を領せり。

時に一大臣あり[三]羅睺求と名く、計謀をなして軍を興し、彼大王及び其五子を殺す。其第六小子は先に鬼神あり來り之に語りて言く、汝の父大王及び諸の五兒悉く大臣羅睺求の爲に之れ殺害せられ、次に汝に到らんと欲すと、王子聞き已りて即ち家中に還る、婦は王子の顏色憂悴して常と同じからざるを見て夫に問ふて言く、汝何を以て爾るやと。夫は婦に答へて言く、男子の事汝に語るを得ずと。婦の言く、王子よ、我今汝と生死共に同じ、何の急緩ありてか語られざるやと。夫は婦に答へて言く、適鬼神あり來りて我に語りて言く、汝の父大王及び五兒とともに悉く他の爲に殺されん、次に來り汝に到らんと、是を以て憂懼す、適するところを知る莫し。夫婦計を作し、即ち共に兒を將ひて他國に逃げ奔らんとし、七日の糧を持ち達し到すべく計れり。惶怖の致すところ錯りて曲道に從ひ、行くこと十日を經るもなほ達到せず、糧食乏しく盡き、餓に困り死に垂んとす。王子思惟すらく、三人命を併すも苦痛特に劇し、寧ろ一人を殺して二人の命を存せんにはと、即便ち劍を拔き婦を殺し得んと欲す、兒顧み父を見合掌して白して言さく、願くば父よ、今は我母を殺すこと莫れ、寧ろ我身を殺せ以て母の命に代らんと。父は兒の語を用ひて其子を殺さんと欲す。子復白して言さく、我命を斷つこと莫れ、若し我が命を斷たば肉則ち臭爛して久しく停むることを得ず、或は恐る其母前み達することを得ざらんと。我命を斷たずして須臾に削割し日日稍食せよと。未だ人村に到らざるに餘り身に在るの肉、唯三臠あるのみ。子は父母に白さく、此肉二臠は父母之を食せよ、餘り一臠あらば還り用ひて我に與へよ。兒を擲て地に放ちて父母は前進せり。

時に[四]釋提桓因の宮殿震動す、即便ち之を觀て、是れ何の因緣ぞやと。此小兒希有の事を作すを見、即ち化して餓狼と作り來り從ひ肉を索む。小兒思惟すらく、我此肉を食するも亦當に命盡くべ

【三】梵音ラーフラグプタの漢音訛譯ならん歟。

【四】シャクティインドラの梵音訛譯にして帝釋天王のことなり。

し、食せざるも亦死せん、便ち此肉を捨てゝ餓狼に與ふ。

釋提桓因は卽ち化して人と作り小兒に語りて言く、汝今肉を割き父母に與ふに悔心を生ずるや不やと。小兒是に於て實言を出し、我若し悔心を生ぜざるならば、身肉還りて生じ平復して故の如くなるべし、若し悔あらば是に於て卽ち死せんと。此言を作し已りて、身體平復すること本と異ることなし。釋提桓因卽ち其子幷に其父母を將ひて、一處なることを得せしめたり。

彼國王心大に悲喜するを見て、其至孝を愍み未だ曾て有らざるところなりと嘆し、卽ち軍衆を給し本國に還復せしめたり。

釋提桓因は卽ち漸く擁護せられ閻浮提王と作りにける。

爾時の小兒とは我身是なり。爾時の父母とは今日の父母是なり。

佛言はく、但今日慈孝を讃嘆するに非ず、無量劫より常に亦讃嘆せりと。諸の比丘佛に白して言さく。世尊よ、過去世の中にて父母を供養せしとは其事云何ぞや。

佛言はく。昔[五]迦尸國王土界の中に一大山あり、中に仙人ありて[六]睒摩迦と名く。父母年老ひて眼倶に盲たり、常に好菓鮮花美水を取り以て父母を養ひ、閑靜無怖畏の處に安置せり。凡そ所作あらば擧動行止するには先づ父母に白す、父母に白し已りて便ち水を取り去るなり。

時に[七]梵摩達王遊獵して行くに鹿の水を飲むを見、弓を挽き之を射しに、藥箭誤りて睒摩迦の身に中り毒箭を被りぬ。高聲に唱へて言く、一箭三人を殺す斯痛ひかな何ぞ酷なるやと。其王其聲を聞き、尋で弓箭を以て之を地に投じ、便卽ち往き看、誰か此言を作すやと。我聞くならく、此山中に仙人あり睒摩迦と名け、慈仁孝順にして盲たる父母を養ひ、世を擧つて稱嘆するところなり。汝今睒摩迦に非ずやと。答へて言く、我卽ち是なりと。而して王に白して言さく、今我此身は苦痛を計らず、但父母年老ひ目冥し、今より飢困して人の供養することなきを憂ふるのみと。王復問ふて

【五】梵音カーシー國の漢音訛譯にして今のベーナーレス地方なり。
【六】梵音ヤマカの漢音譯なり。
【七】梵音ブラフマダッタの漢音訛譯なり。

言く、汝の盲父母今何許に在るやと。睒摩迦は王に指示して言く、彼草屋の中に在りと。王卽ち盲父母の所に至る。睒摩迦の父は、時に婦に語りて言く、我眼瞤動す將に我孝子睒摩迦の衰患あるに非ずや不やと。婦復夫に語らく、我乳亦惕惕として動く、將に我子の不祥事あるに非ずや不やと。時に盲父母は王の行く聲を聞き索め索めて、心恐怖を生じ我子の行くに非ずや、是誰とか爲すやと。王其前に到り唱へ言ひて禮を作せり。盲父母の言く、我眼見るところなし、是誰か禮を爲すやと。答へて言く、我は是迦尸國王なりと。時に盲父母は王に命じて言く、坐せよと。我子若しあらば、當に好き華菓を以て王に奉上すべきならんも、我子朝に水を取らんと往きしも、遲晩く久しく待てども來らざるなりと。王便ち悲み泣きて偈を說き言く。

我は斯國の王なり　此山に遊獵す、
但禽獸を射んと欲して　覺えず中り人を害す。
我今王位を捨てゝ　來り盲父母に事へん、
汝の子と異無からん　愼み憂苦を生ずる莫れ。

盲父母、偈を以て王に答へて曰く、

我子慈孝順なること　天上人中に無し、
王憐愍せらると雖　何ぞ我子の如く得んや。
王當に憐愍せられ　願くば將に子の處を示せ、
兒の左右に在を得ば　幷に命意の分足らん。

是に於て、王は盲父母を將ひて、往き睒摩迦の邊に至れり。既に兒の所に至りて胸を搥き懊惱し、號咷して言く、我子は慈仁にして孝順なること比無しと。

天神地神山神樹神河神池神諸神偈を說きて言く、

釋梵天世王は　云何ぞ佐助せざるや、
我の孝順の子をして　此の如く苦ましむるや。
深く我孝に感じて　速に命を救濟せよ。

時に釋提桓因の宮殿震動し、天耳を以て盲父母の悲み惻む語聲を聞き、卽ち天より下り、其所に往き到りて、睒摩迦に語りて言く、汝は王の所に於て惡き心を生ずるやと。答て言く、實に惡き心無しと。釋提桓因の言く、誰か當に汝の惡心無を信ずべきや。睒摩迦答へて言く、我王の所に於て惡き心あらば、毒の身中に遍して卽爾に命終せん、若し我王の所に於て惡き心無くんば、毒箭當に出づれば身瘡便ち愈ゆべしと。卽ち其言の如く、毒箭自ら出でゝ平復すること故の如し。王大に歡喜し踊躍無量なり。便ち敎令を出し、普く國內に告ぐ。當に慈仁を修し父母に孝事すべしと。

睒摩迦は昔より已來慈仁孝順にして、父母を供養せしなり。

爾時の盲父母は今の淨飯王是なり、爾時の盲母は今の摩耶夫人是なり、睒摩迦は今の我身是なり。迦尸國王は舍利弗是なり、時の釋提桓因は摩訶迦葉是なり。

三　鸚鵡子盲父母を供養するの緣

佛王舍城に在して、諸の比丘に告げて言く、二邪行あり、拍毱の如似く速に地獄に墮つ。云何が二と爲すや。一は父母を供養せざるなり。二は父母の所に於て諸の不善を作すなり。二正行有り拍毱の如似く速に天上に生ぜん。云何が二となすや。一は父母を供養するなり。二は父母の所に於て衆の善行を作すなりと。

諸の比丘の言く、希有なるかな世尊、如來は極めて能く父母を讚嘆したまふと。

佛の言はく、但今日のみに非ず過去世に於て、雪山の中に一鸚鵡あり、父母都て盲す。常に好き

花菓を取れば先づ父母に奉ぜり。

爾時に一田主あり、初て穀を種す時而も願言を作さく、種すところの穀、衆生に與へて共に噉食せんことを要す。時に鸚鵡子は彼田主先に施心あるを以て、卽ち常に田に於て稻穀を採取し以て父母に供ふ。是時に田主苗稼を按行せしに、諸の虫鳥の穀穗を揃く處を見、瞋恚懊惱して便ち羅網を設け鸚鵡を捕へ得たり。鸚鵡子言く、田主先に好心あり、物を施し悋むなしと、是に由りての故に我敢て來り稻穀を採取するに、如何ぞ今は而も網に捕へらるゝや、且つ田は母の如く、種子は父の如く、實語は子の如く、田主は王の如し、擁護は己に由ると。是語を作し已りぬ。田主歡喜して鸚鵡に問ふて言く、汝の此穀を取るは竟に復誰の爲にするやと。鸚鵡答へて言く、盲父母あり願くば以て之に奉ぜんとす。田主答へて言く、今より已後常に此に於て取れ、復疑難すること勿れと。

佛言はく、鸚鵡は菓種の多を樂む、田者も亦然りと。爾時の鸚鵡は我身是なり、爾時の田主は舍利弗是なり、爾時の盲父は淨飯王是なり、爾時の盲母は摩耶是なり。

四　老を棄つる國の緣

佛舍衞國に在しける。爾時に世尊、是言を作したまはく、宿老を恭敬すれば大利益あり、未だ曾て聞かざる事にして聞き解くことを得て、名稱遠く達し、智者の敬ふところなり。

諸の比丘の言く、如來世尊は常に父母耆長宿老を恭敬することを讚嘆したまふやと。

佛言はく、但今日のみならず、我過去無量劫の中に於て恒に父母耆長宿老を恭敬しき。諸の比丘佛に白して言さく、過去の恭敬とは其事云何、佛の言はく、過去久遠に國ありて棄老と名けける。彼國土の中にて老人あらば皆遠く驅し棄てたり。一大臣あり其父年老ひぬ、依て國法の如く應に駈遣在らしむべきなり、大臣孝順の心は忍びざるところなり、乃ち深く地を堀り一密屋を作り父を置き

て中に著かしめ、時に隨ひて孝養せり。

爾時に天神あり二蛇を捉へ持ち王殿の上に著けて是言を作さく、若し雄雌を別たば汝が國安きことを得べし、若し別たざれば汝の身及び國は七日の後に悉く當に覆滅すべしと。王是を聞き已りて、心に懊惱を懷き卽ち群臣とともに斯事を參議せしに、各自陳謝して別つこと能はずと稱せしかば、卽ち國界に募りて、誰か能く別つ者は厚く爵賞を加へんと。大臣家に歸り往ひて其父に問ふ、父は子に答へて言く、此事別ち易し、細軟の物を以て蛇を停め上に著けば、其躁擾する者は當に知るべし是雄なり、住して動かざる者は當に知るべし是雌なりと、卽ち其の如くせしに果して雄雌を別てり。

天神復問ふて言く、誰をか睡者に於て之を名けて覺と爲し、誰をか覺に於て之を名けて睡と爲すやと。王群臣とともに復辯ずること能はず、復國界に募るも能く辯ずるものなし。大臣復父に問ふ、此は是何を言ふやと。父の言く、此を學人と名く、諸の凡夫に於ては名けて覺者と爲し、諸の羅漢に於ては之を名けて睡と爲す。卽ち其言の如く以て答ふ。

天神又復問ふて言く、此大白象は幾斤兩ありやと。群臣共に議するも能く知る者なし、亦國內に募りしも復知ること能はず。大臣父に問ふ、父の言く、象を船の上に置き大池中に著け、水が船の深淺に齊きこと幾許かを畫し、卽ち此船を以て石を量り中に著けば、水の沒すること畫せしに齊しくすれば則ち斤兩を知らんと。卽ち此智を以て答へたり。

天神又復問ふて言く、一掬の水を以て大海よりも多し、誰か能く之を知るやと。群臣共に議す、又解すること能はず。又遍く募り問ふも、都て知る者なし。大臣父に問ふ、此は是何の語ぞやと、父の言く、此語は解し易し、若し人あり能く信心清淨にして一掬の水を以て、佛・僧及び父母困厄の病人に施さば、此功德を以て數千萬劫も福を受くること窮り無けん、海水極めて多きも一劫に過ぎ

す、此を推し之を言へば一掬の水も百千萬倍大海より多からん。即ち此言を以て、用ひ天神に答へたり。

天神復化して餓えたる人と作り、連骸骨を拄へて來り問ふて言く、世頗し人の飢えて窮瘦の苦我より劇しきものありや不やと、群臣忖量せしも復答ふること能はず、臣復狀を以て往き父に問ふ。父即ち答へて言く、世間に人有り慳貪嫉妬にして三寶を信ぜず、父母師長を供養すること能はざれば將來の世に餓鬼の中に墮ち、百千萬歲水穀の名をも聞かず、身は太山の如く、腹は大谷の如く、咽は細針の如く、髮は錐刀の如く身を纏ふて脚に至り、擧動の時支節に火然ゆ、此の如き人は汝の飢えたる苦より劇しきこと百千萬倍ならんと。即ち斯言を以て用ひ天神に答へたり。

天神又復化して一人と作り、手脚に杻械し、項に復鎖を著け、身中より火出で擧體燋爛せり。而して又問ふて言く、世頗し人の苦我より劇しきものありや不やと。君臣卒爾に知り答ふる者なし。大臣復其父に問ふ、父即ち答へて言く、世間に人あり父母に孝せず、師長を逆害し、夫主に叛き、三尊を誹謗せば、將來の世に地獄に墮ち、刀山劍樹、火車爐炭、陷河沸屎、刀道火道、是の如きの衆の苦無量無邊にして計數すべからず、此を以て之を方するに、汝の困苦よりも百千萬倍ならんと。即ち其言の如く以て天神に答へたり。

天神又化して一女人と作り、端政瓌瑋なること世人に踰えたり。而して又問ふて言く、世間頗し端政の人我如きものあるや不やと。君臣默然として能く答ふる者なし。臣復父に問ふ、父時に答へて言く、世間に人あり三寶を信敬し父母に孝順にして施を好み、忍辱精進して戒を持ち、天上に生ずるを得ば、端政殊特なること汝の身に過ぎたること百千萬倍ならん、此を以て之を方するに、瞎の獼猴の如しと。又此言を以て天神に答へたり。

天神又一[一]眞檀木の方直く正等なるを以て、又復問ふて言く、何者か是頭なりやと。君臣の智力

【一】栴檀木に同じ梵音チャンダナにして香木なるが木目密なり

能く答ふる者無し、臣又父に問ふ。父答へて言く知り易し、水中に擲げ著けば根は必ず沈み、尾は必ず擧らんと。卽ち其言を以て、用ひ天神に答へたり。

天神又二の白き騲馬の形色異ること無きを以て復問ふて言く、誰が母にして誰が子なるやと。君臣亦復能く答ふるものなし。復其父に問ふ、父答へて言く、草を與へて食せしめよ、若し是母ならば必ず草を推して子に與へんと。是の如く問ふところ悉く皆之を答へしかば天神歡喜し、大に國王に珍琦なる財寶を遺して王に語りて言く、汝の今の國土、我當に擁護すべし、諸の外敵も侵害すること能はざらしめんと。王是を聞き已りて極めて大に踊悅す。而して臣に問ふて言く、是自ら知ると爲すや、人有りて汝に敎へしや、汝の才智を賴み國土安きことを獲たり。旣に珍寶を得又擁護を許さる、是汝の力なりと。臣王に答へて言く、臣の智に非ず、願くば無畏を施せば乃ち敢て具に陳べんと。王言く、設ひ汝今萬死の罪有るも猶尙問はじ、況や小罪過をやと。臣王に白して言く、國に制令ありて老を養ふことを聽るさず、臣老父あり、遺棄するに忍びず、王法を冒犯して藏して地中に著けり。臣來り應答せしは盡く是父の智にして臣の力に非ず。唯願くば大王、一切の國に還つて老を養ふことを聽せと。王卽ち嘆美し心に喜悅を生じ、臣の父を奉養し尊び以て師と爲せり。我國家の一切人命を濟ふ此の如き利益は我知るところに非ずとし。卽便ち宣令し普く天下に告げて老を棄つることを聽さず、仰ひで孝養せしむ。其父母に孝せず、師長を敬はざるもの有らば當に大罪を加ふべしと。

爾時の父とは我身是なり、爾時の臣とは舍利弗是なり、爾時の王とは阿闍世是なり。爾時の天神とは阿難是なり。

五　佛忉利天上に於て母摩耶の爲に說法の緣

佛舍衛國に在して諸の比丘に告げて言はく、我今忉利天上に往き夏坐安居し母の爲に法を說かんと欲す、汝諸の比丘よ、誰か去を樂ふ者は當に我に隨ふて去るべしと。是語を作し已りて、卽ち忉利天上に往き、一樹下に在して夏坐安居し、母摩耶及び無量の諸天の爲に法を說きたまひしに、皆見諦を獲たれば閻浮提に還りたまへり。

諸の比丘言く、希有なるかな世尊、能く其母の爲に九十日中忉利天に住したまへるかなと。

佛言はく、但今日のみに非ず、我過去の時も亦曾て母の爲に苦惱の事を拔きたりき。時に諸の比丘佛に白して言さく、過去の所爲とは其事云何ぞや。佛言はく、往昔久遠雪山の邊に獼猴王あり五百の獼猴を領せり。時に一獵師網を張り圍み捕ふ、獼猴王言く、汝等今日愼み恐怖すること勿れ、我當に汝の爲に彼網を破壞すべし、汝諸の獼猴悉く我に隨ひ出でよと。卽時に網を破り皆解脫することを得たり。一老獼猴あり兒を擔ひ脚跌きて深坑に墮ちぬ、獼猴王母を覓るに在る所を知らず。一深坑を見往き邊に到り看るに母の下に在るを見る、諸の獼猴に語り各自力を勵し我と共に母を出せと。時に諸の獼猴は互に相ひ尾を捉へて坑の下に至り母を挽き出すことを得、苦難より離れたり。況や我今日母の苦難を拔くをや。爾時深坑の難を拔き免れ、今復母の三惡道の難を拔けり。

佛諸の比丘に告げたまはく、父母を拔濟するは大功德あり、我母を拔くに由りて世世に難無く、自ら成佛を致せり。是義を以ての故に諸の比丘等よ、各孝順にして父母を供養すべし。

六　佛往昔の母迦旦遮羅を說くの緣

佛時に遊行して居荷羅國に到り、便ち中路に於て一樹下に坐したまへり。一老母あり迦旦遮羅と名く、人に繫屬して井の上にて水を汲めり。佛は阿難に語り往ひて水を索め來らしむ、阿難は佛勅を承けて卽ち往き水を索む。爾時に老母は佛の水を索めたまふを聞き、自ら盥を擔ひ往き、旣

【一】梵語コンカナ城卽ち玄奘の恭建那補羅國ならんか、若し然りとせば南印度にして今のマドラスより北部の山地に相當するなり。佛陀成道第十二年蘇羅婆國薩遮比耶町の附近なる毘蘭若村にて雨安居し馬麥食の難に遇ひ、那鄰羅濱州・摩薩婆曼陀羅國・迦陵伽國を經て五個月を要し波羅捺城に到られしことあり、恐くは此時の事件ならんか。

に佛の所に到り、盥を地に著き、直に往ひて佛を抱く。阿難遮らんと欲せしも、佛言はく、遮ぎること莫れ、此老母は五百生の中に曾て我母と爲れり。愛する心未だ盡きず、是を以て我を抱くなり。若し當に遮らば沸血面門より出で、即ち命終せんと。既に佛を抱くことを得て、其手足を鳴らし一面に在りて立てり。

佛は阿難に語りたまはく、往ひて其主を喚べと。其主來り到り頭面をもつて佛を禮し、却りて住して立つ。佛は主に語りて言はく、此老母を放ち出家することを得せしめよ、若し出家せば當に羅漢を得べしと。主即便ち放てり。佛は阿難に告げて波闍波提比丘尼に付け度して出家せしめたまひしに、久しからずして即ち阿羅漢道を得、比丘尼中に善く契經を解すること最も第一と爲れり。諸の比丘は疑ひ怪み、佛に白して言さく、世尊よ、何の因縁を以て他に繋屬され、復何の因縁を以て阿羅漢を得たるやと。

佛言はく、迦葉佛[二]の時出家學道しき、是因を以ての故に阿羅漢を得たり、爾時に當り徒に衆の主の爲に諸の賢聖を罵りしかば勝尼婢と爲る、此因縁を以て今他に屬せり。五百生の中に恒に我母と爲りしも慳貪嫉妬にして我布施を遮る、是因縁を以て常に貧賤に生れたり。但今日其貧賤を拔けるに非ざるなり。諸の比丘言く、不審なるかな過去世に於て貧賤を拔濟せしとは、其事云何ぞや。

佛言はく、過去世の時、波羅㮈國に一貧家あり、母子共に活く、兒は恒に傭作し以て母を供養し、少の錢財を得て且く旦夕を支ふるのみ。爾時に其子即ち母に白して言さく、我今諸の賈客等とともに遠く行きて商估せんと欲すと。其母然り可とせり。是に於て發し去る。兒發し去りし後、賊來り家を破り錢財を劫掠し并に老母を驅し異處に出し賣れり。兒既に來り還り、其母を推覓して處所を知り、多くの錢財を齎し勉めて其母を贖ひ、即ち本國に於て生活を爲し資財滿足し前より倍に勝れり。

【二】梵音カーシャパの漢音訛。釋尊以前出世の佛なり。

爾時の母とは今の迦旦遮羅是なり。爾時の兒とは我身是なり。我爾時に於て已に母の苦を拔きしなり。

七　慈童女の緣

昔佛王舍城に在して諸の比丘に告げたまはく、父母の所に於て少しく供養を作さば福を獲んこと無量なり。少しく不順を作さば罪獲ること無量ならんと。諸の比丘佛に白して言さく、世尊よ、罪福の報とは其事云何。

佛言はく、我過去久遠の世の時に於て、波羅奈國に長者あり、子を慈童女と名く。其父早く喪したりしかば錢財用ひ盡し、力を役して薪を賣り日に兩錢を得て老母を養ひ奉れり。方に計轉勝れ日に四錢を得以て母に供ふ。遂に復漸く差して日に八錢を得て母を供養し、轉た衆人の體信するところなり、遠近投けば利を獲ること轉た多く日に十六錢にして母を奉給せり。衆人其聰明福德なるを見て之に勸めて言く、汝が父在る時常に海に入りて寶を採れり。汝今何爲れぞ海に入らざるやと。是語を聞き已りて母に白して言く、我父在せし時恒に何の業を作せしやと。母の言く、汝が父在せし時海に入り寶を取れりと。便ち母に白して言く、我父若し當に海に入りて寶を採りたまひしならば、我今何ぞ復海に入らざらんやと。母其子の慈仁孝順なるを見て去る能はずと謂へども、戲に之に語りて言く、汝も亦去るべしと。母の此語を得て謂く呼已に定ると。便ち伴侶と計り海に入り去らんと欲し莊嚴既に竟り、母に辭して去らんと欲す。母卽ち語りて言く、我唯一子のみ、當に我死を待つべし、何に由りてか汝を放たんやと。兒母に答へて言く、先に若し許さずば敢て正意ならず、母已に我に許せり、那ぞ復遮ることを得んや、望むらくは此身を以て信を立てゝ死せんのみ、他に許し已に定れり復住することを得ずと。母は子の意正しきを見て前み脚を抱きて哭きて是言を作さく、我

死を待ずして何に由りてか去ることを得んやと。兒便ち意を決し、自ら手を擧きて脚を出し母の數十根の髮を絕つ。母は兒の罪を得んことを畏れ卽ち放ち去らしめたり。諸の商賈と共に遂に海に入り寶渚に達到し、多くの珍寶を取りて諸の同伴とともに便ち還らんと發引す。

時に二道あり一は是水道にして一は是陸道なり。衆人皆言ふ陸道より去らんと、卽ち陸道に從ふ。時に彼國法は賊來り刧奪せんに若し商主を得ば諸の商人の物皆賊に入り、商主を得ざれば財物を獲と雖商主來り還らば盡く財物を歸すなり。是を以ての故に、是慈童女は恒に別宿を營み、商人早く起き來り迎へて之を取る。一夜大風ありしかば商人卒に起き忘れ迎ひ取らず。商主後に於て卽ち伴ふことを得ず、途徑することを識らず、一山あるを見、便ち往き至り上り、遙に城有るを見る紺琉璃の色なり、飢渴困乏したれば疾走して之に向ふ。

爾時に城中四玉女あり如意寶珠を擎げ倡伎樂を作して共に來り迎ふ。四萬歲の中一大快樂を受けたり。是に於て自然に厭離心を生じ便ち捨て去らんと欲す。諸の玉女言く、閻浮提【一】の人は甚だ反復なし、我と共に生活して四萬歲を經たり、云何ぞ一旦にして我を捨て去るやと。其言を顧ず便ち復前行するに頗梨城を見、八玉女あり、八如意を擎げ亦伎樂を作して來り之を迎ふ。八萬歲の中極めて大に歡樂せしが、厭惡の人を生じ復捨てゝ遠く去る。白銀城に至る、十六玉女ありて十六如意珠を擎げ、前の如く來り迎へ十六萬歲大快樂を受けしが、亦復捨て去り、黃金城に至る、三十二玉女あり、三十二如意珠を擎げ、前の如く來り迎ふ、又三十二萬歲大快樂を受けしが、亦捨て去らんと欲す。諸の玉女言く、汝は前後住する所は常に好處を得、之より已去は更に好き所なからん、卽ち住するに如ずと、是語を聞き已りて、自ら念ひて言く、諸の玉女等我を戀慕するが故に是語を作すのみ、若し當に前に進まば必ず好き處あらんと、卽ち捨て去る。遙に鐵城を見、心に疑ひ怪みを生じて是念を作して言く、外は是鐵なりと雖、內は極めて好からんと爲し、漸々に前進し並に城に

【一】梵音漢訛譯ヂャンブディーパにして狹義には印度を曰ふも廣義は此世界を曰ふ。

近きしも亦玉女の來り之を迎ふる者なし。復念を作して言く、城中甚だ極めて大快樂に似たり、是故に我を奉迎するに及ばず、轉々前進して遂に鐵城に入れば門關已に下り中に一人の頭に火輪を戴くものあり、此火輪を捨てゝ童女の頭上に著け卽便ち出で去れり。慈童女は獄卒に問ふて言く、我此輪を戴く何の時にか脫すべきやと。答へて言く、世間人あり其罪福を作すは汝の所作の如し、海に入りて寶を採り諸の城を經歷し久しくするも近如たり。然れども後當來に汝に代り罪を受けずんば、此鐵輪は終に地に墮ずと。慈童女問ふて言く、我何の福をか作し、何の福をか作せるやと。答へて言く、汝昔閻浮提に於て日に二錢を以て母に供養せり、故に琉璃城、四如意珠、及び四玉女を得て四萬歲の中に其快樂を受けたり。四錢を母に供養せしが故に頗梨城、八如意珠、八玉女等を得て八萬歲の中に諸の快樂を受けたり。八錢を母に供養せしが故に白銀城、十六如意珠、十六玉女を得て、十六萬歲快樂を受けたり。十六錢を母に供養せしが故に黃金城、三十二如意珠、三十二玉女を得て、三十二萬歲大快樂を受けたり。母の髮を絕ちしを以ての故に今鐵火輪を戴き曾て地に墮ちざるなり。人あり汝に代らば乃ち脫ることを得べしと。又問ふて曰く、今此獄中に頗し罪を受けて我に比ぶが如きものありや不やと。答へて言く、百千無量にして稱げて計るべからずと。是語を聞き已りて、卽ち自ら思惟すらく、我終に免れざらん、願くば一切をして苦を受けしむべきは盡く我身に集れと。是念を作し已りたるに鐵輪卽ち地に墮ちぬ。慈童女は獄卒に語りて言く、汝は道ふ此輪は曾て地に墮ちずと、今何を以て墮つるやと。獄卒瞋恚りて卽ち鐵叉を以て童女の頭を打ちしに、尋ひで便ち命終して[二]兜術陀天に生れたり。

爾時の慈童女を知らんと欲せば卽ち我身是なり。諸の比丘よ當に知るべし、父母の所に於て少しく不善を作して大苦報を獲、少しく供養を作して福を得たること無量なり。當に是學を作すべし、勸めて心を盡し父母を奉養すべきなり。

【二】梵音ツシタの漢訛譯にして又忉率天ともいふ彌勒菩薩の居處なり。

八　蓮華夫人の縁

佛舍衞國に在して諸の比丘に告げたまはく、若しは父母に於て、若しは佛及び弟子の所に於て、瞋恚の心を起さば此人は黑繩地獄に墮ちて苦を受くること無量にして邊際あること無しと爲す。諸の比丘は佛に問ふて言く、世尊よ、父母を敬重し、若しは父母に於て敬重を生ぜずして少しく不善を作すとは其事云何ぞや。

佛言はく、過去久遠無量世の時に、雪山の邊に一仙人あり〔一〕提婆延と名く、是婆羅門種なり。婆羅門の法に男女を生まずんば天に生ずることを得ざるなり。此婆羅門は常に石上に小便を行ふに精氣ありて石宕に流れ墮つ、一雌鹿あり來りて小便の處を舐めて卽便ち娠むところありたり。日月滿足して仙人窟の下に來詣して一女子を生むに華其身を裹む。母胎より出てたるまゝにして端正殊妙なり。仙人は是己が女なりと知りて便ち取り畜へ養ふ。漸漸に長大となり旣に能く行き來る。脚の地を踏むところ皆蓮華出づ。

婆羅門の法は夜恒に火を宿すなり、偶一夜火滅し有ること無に値ふ、走りて他家に至り從つて火を乞はんと欲す、他人其跡を見るに跡に蓮華あり、而して語りて言く、我舍を遶ること七匝せよ我汝に火を與へんと。卽ち遶ること七匝し火を得て還歸せり。

〔二〕烏提延王の遊獵するに値ひ、彼人の舍を見るに七重の蓮華あり怪みて之を問ふ、爾が舍此蓮華ある所以はと。卽ち王に答へて言く、山中に梵志の女あり來りて火を乞ふ、彼女の足下に此蓮華を生ぜしなりと。其脚跡を尋ねて仙人の所に到る、王是女の端正殊妙なるを見て、仙人に語りて言く、我に是女を與へよと。卽便ち之を與へて王に語りて言く、當に五百の王子を生むべしと。遂に立てゝ夫人と爲す。五百の婇女中最も上首と爲せり。王の大夫人甚だ鹿女を妬みて是言を作さく、王今

〔一〕梵音デーワヤナの漢訛譯天生の義。

〔二〕梵語ウダヤナの漢訛并譯なり。

愛重し若し五百子を生まば倍當に之を敬ふべしと。其後久しからずして五百の卵を生み、篋中に盛り著けり。

時に大夫人は五百の麪段を捉り以て卵の處に代ふ。卽ち此篋を以て蓋を封じ記識して恒河の中に擲げたり。王は夫に問ふて言く、何物を生みたりやと。答へて言く、純ら麪段を生めりと。王言く、仙人妄語せりと。卽ち夫人の職を下して更に王に見えしめざりき。

時に薩耽善王は下流に在して諸の婇女とともに河の邊に遊戲せられしが、此篋の來りしを見て是語を作さく、此篋は我に屬しぬと。諸の婇女の言く、王は今篋を取る、我等は當に篋中に有る所のものを取るべしと。人を遣し篋を取り五百の夫人に各一卵を與へしに、卵自ら開敷き中に童子あり面目端正なり。養育して長大となりしが各皆大力士の力ありて五百の力士幢を竪てたり。

烏提延王は薩耽善王より常に貢獻を索む。薩耽善王は貢獻を索めらると聞き愁憂して樂まざりき。諸の子白して言さく、何を以て愁ひ惱みたまふやと。王言く、今我世に處して他の爲に凌るればなりと。諸の子問ふて言く、誰の爲に凌るるやと。王言く、烏提延王なり。常に我に隨いて貢獻を責め索むるなり。諸の子白して言さく。一切の閻浮提王に貢獻を索めんと欲せば、我等能く王に貢獻せしむべしと。王よ何を以ての故に他に貢獻を與へんやと。五百の力士遂に軍衆を將ひて烏提延王を伐つ。烏提延王恐怖して言く、一力士すら尙當るべからず、何に況や五百の力士をやと。便ち國中に能く此敵を却けるものを募らんかと。又復思憶すらく、彼仙人は或は能く解知せんかと。諸の方便を作して仙人の所に往き到り仙に語りて言く、國に大難あり、何に由りてか攘ひ却けんやと。答へて言く、怨敵あるやと。王言く、薩耽善王五百の力士あり、皆軍衆を將ひて來り我を伐たんと欲せり、我今乃ち是力士と彼と對を作すもの無きに至らん、何の方計を知りてか彼敵を却け得んやと。仙人答へて言く、汝還りて蓮華夫人を求むべし、彼能く敵を却けんと。王言く、彼云何してか能く

却けんやと。仙人答へて言く、此五百の力士は皆是蓮華夫人の生むところなり。汝の大夫人心に憎嫉を懐き彼蓮華生むところの子を河水中に著けり。薩耽善王は河水の下頭に於て接り得て養育し長大ならしめたり。王今蓮華夫人を以て大象の上に乘せ、軍陣の前に著かば彼自然に當に服すべしと。卽ち仙の言の如く、還り來りて蓮華夫人に懺謝せり。共に懺謝し已りて夫人を莊嚴し好き衣服を著け大白象に乘り軍陣の前に著けり。五百の力士は弓を擧げ射んと欲するも、手自然に直となり屈伸することを得ず、大に驚愕を生ぜり。

仙人飛び來り虛空の中に於て諸の力士に語らく、愼みて手を擧ぐること勿れ、惡心を生ずること莫れ、若し惡心を生ぜば皆地獄に墮ちん。此王及び夫人は汝の父母なり。母卽ち乳を按ずるに、一乳は二百五十岐を作し、皆諸子の口中に入りしなり。卽ち父母に向ひて懺悔せよ、自ら慚愧を生ぜば皆辟支佛となることを得ん。二王も亦自然に開悟せば辟尸佛たることを得んと。

爾時の仙人とは卽ち我身是なり。我爾時に於て彼の諸子を遮り、父母に於て惡心を生ぜざりしかば辟尸佛を得せしめたり。我今も亦復老父母を供養する德を讃嘆するなり。

九　鹿女夫人の緣[一]

佛王舍城耆闍崛山中に在して諸の比丘に告げたまはく。二種の法あり人に於て疾く人天を得せしめ涅槃樂に至らしめんと。二種の法あり能く人に於て速に三惡に墮ち大苦惱を受けしめんと。何等の二法か能く人をして疾く人天を得涅槃樂に至らしむるやと。

佛言はく、一は父母を供養し、二は賢聖を供養するなり。云何なる二法か速に三惡に墮して大苦惱を受くるやと。佛言はく、一は父母の所にて諸の不善を作し。二は賢聖の所にても亦不善を作すなり。諸の比丘は佛に白して言さく、世尊よ、速に善惡を成すとは其事云何ぞや。

【一】此鹿女夫人の緣は前の蓮華夫人の緣と同一因緣を記せるものにして異る點は國名人名等小異あるのみ。

佛諸の比丘に告げたまはく、過去久遠無量世の時に國あり[二]波羅奈と名く、國中に山あり名を仙山と曰ふ。時に梵志あり彼山に在りて住し、大小便利は恒に石上に於てす、後に精氣ありて小行處に墮つ、雌鹿來りて舐めしに即便ち娠むことあり、日月滿足し、仙人の所に來至して一女子を生めり。端正殊妙なるも唯脚鹿に似たるのみ。梵志之を取りて養育長成せり。梵志の法は恒に火に奉事し火をして絕えざらしむ。此女宿火せしに少く意を用ひざりしかば火をして滅せしめたり。此女恐怖し梵志の瞋を畏る、餘の梵志あり此住處より[三]一拘屢者を離れたり。此女速疾に彼梵志に往きて火を求めて乞ふ。梵志其跡を見るに跡に蓮華あり、此女に要して言く、我舍を遶ぐること七匝せよ、當に汝に火を與ふべし。若し出で去る時遶ること七匝せよ、本跡を行くこと莫れ異道にて還れと。即ち其言の如くし火を取りて去れり。

時に梵豫國王出行して遊獵せしに、彼梵志の舍を遶り周匝して十四重蓮華を見たり。後二道を見るに兩行の蓮華あり。其所以を怪み梵志に問ふて言く、都て水池なきに云何してか此妙好蓮華有るやと。答へて言く、彼仙の住處に一女あり來りて我より火を乞ふ、此女の足跡は皆蓮華を生ず、我便ち之を要し若し火を得んと欲せば舍を遶ること七匝せよ。將に去らんとする時も亦復七匝せよと。是を以て此周匝蓮華あるなりと。王華跡を尋ねて梵志の所に至り、從ひて女を索め看しに、其端正なること甚だ悅意に適へるを見る。即ち梵志より此女を求索むるに、梵志即ち王に與へたりしかば、王即ち立てゝ第二夫人と爲せり。此女は少小より仙人養育せしかば、性を受くるも端直にして、婦女妖蠥の事を解せざるなり。

後時に娠むあり、相師占ふて言く、當に千子を生むべしと。王の大夫人此語を聞き已りて嫉忌を生じ、漸く計校を作し、恩厚くして鹿女夫人の左右の侍從を招喩し、饒に錢財珍寶を與へたり。爾時に鹿女は日月滿足し、便ち千葉の蓮華を生めり。生んと欲する時大夫人は物を以て眼を瞞し

【二】梵語パーラーナシーの漢訛音譯。

【三】一拘屢者は秦朝の五里。

自ら看るを聴さず、臭爛せる馬肺を捉りて其下に承け著き、千葉の蓮華を取りて檻裏に盛り著き河中に擲ぐ。還りて爲に眼を解きて之に語りて言く、汝の生むところを看よ、唯一段の臭爛せる馬肺を見るのみと。

王人を遣して問はく、何物を生むと爲すやと。而して王に答へて言く、唯臭爛せる馬肺の物を生めるのみと。

時に大夫人而も王に語りて言く、王は倒惑を喜びたまふや、此畜生の生むところ、仙人の養ふ所は此不祥なる臭穢の物を生めり。王大夫人は卽使ち其夫人の職を退かしめ復見ることを聴さざりき。

時に【四】烏耆延王は諸の徒從夫人婇女を將ひて下流に遊戲せられしに、黄き雲蓋あり河の上流より水に隨ひて來るを見、王是念を作さく、此雲蓋の下必ず神物有らんと、人を遣し往きて看せしめしに、黄雲の下に一檻あるを見、卽便ち接取し開きて之を看るに千葉の蓮華を見る。一葉に一小兒あり、之を取りて養育せしに、漸を以て長大し、各皆大力士の力あり。

烏耆延王は歳常に梵豫王に貢獻せり、諸の獻物を集めて使を遣し去らんと欲す。諸の子問ふて言く、何等をか作さんと欲するやと。時に王答へて言く、彼梵豫國王に貢獻せんと欲すと。諸の子各言く、若し一子あらば猶能く天下を伏し來り貢獻せしめんと望む、況や我等千子あるをや、而も當に他に貢獻すべきやと。

千子卽時に諸の軍衆を將ひ、諸國を降伏して次第に梵豫國に來到せり。王は軍至ると聞き、其國中に募り、誰か能く此の如き敵を攘ひ却くやと。都て人の能く攘ひ却くものあることなし。第二夫人來り募を受けて言く、我能く之を却けんと。問ふて言く、云何之を攘ひ却け得んやと。夫人答へて言く、但我爲に百丈の臺を作れ、我其上に坐せば必ず能く攘ひ却けんと。臺を作り已竟りて、第二夫人上に在りて坐せり。

【四】梵語ウダヤナの漢訛音譯。

爾時に千子弓を舉げ射んと欲するに自然に手舉ぐること能はず。夫人語りて言く、汝愼みて手を舉げ父母に向ふこと莫れ、我は是汝が母なりと。千子問ふて言く、何を以て驗と爲し我母なることを知り得べきやと。答へて言く、我若し乳を按ぜば、一乳に五百岐ありて各汝が口に入らん、是汝が母なり若し爾らずんば是汝が母に非ずと。即時に兩手にて乳を按ぜしに一乳の中に五百岐ありて千子の口中に入り、其餘の軍衆は得る者あることなし。千子降伏し父母に向ひて懺悔す。諸子と是に於て和合し、二國復怨讎なし。自ら相勸め率ひて五百子を以て親に與へ、五百子を以て養父母に與へたり。

時に二國の王は閻浮提を分ちて各五百子を畜へたり。

佛言はく、知らんと欲せば、彼時の千子とは賢劫の千佛是なり。爾時の嫉妬の夫人他の目を瞞きし者は交鱗瞽目の龍是なり。爾時の父は白淨王是なり。爾時の母は摩耶夫人是なりと。

諸の比丘佛に白して言さく、此女は何の因縁ありてか王の夫人となりしや。佛言はく、此女は過去世の時、貧賤の家に生れ、母子二人田中に鋤穀せり、一辟尸佛の鉢を持ち乞食するを見る、母は女に語りて言く、我家中に我食分を取り是快士に與へんと欲すと。女の言く、亦我分を取り并に與へんと。母即ち家に歸り母子二人の食分を取り來りて辟尸佛に與へ。女は草を取り華を採り之が爲に草坐を敷き、華を散し上に著き辟尸佛に坐せんと請ふ。女は母の遲を怪み一高處に上り遙に其母を望む、已に其母を見、母に語りて言く、何ぞ急疾ならざりしやと。鹿驟りて來りしなければと。母の遲しを嫌ふが故に尋ひで恨言を作さく、我母の邊に在りて生るゝよりは、鹿の邊に生ずるに如ずやと。母即ち二分の食を以て辟尸佛に與へ、餘殘は母子共に食す。辟尸佛食し訖り鉢を擲げて虛空の中に著き、尋ひで遂に飛び去り、虛空の中に到り十八變を作せり。時に母歡喜し即ち誓願を發すらく、我將來恒に聖子に生れ今の聖人の如くならしめよと。是業縁を以て後に五百子を生む皆辟

尸佛を得たり。一は養母と作り、一は所生の母と作れり。母の鹿驟れと語りしに對へて言ふ因縁を以て、鹿の腹中に生れ脚は鹿甲に似たり。華を採り辟尸佛に散すを以ての故に、跡中に一百の華生ぜり。草を敷くを以ての故に、常に王の夫人となることを得たり。其母の後身は梵豫王と作り、其の女の後身は蓮華夫人と作れり。是業縁に由りて後に賢劫の千聖を生み、誓願力を以て常に賢聖に生れたり。

諸の比丘は是語を聞き已りて歡喜奉行せり。

雜寶藏經卷第一

卷の第二

十　六牙白象の緣

昔舍衛國に一大長者ありて一女子を生みしが、自ら宿命を知れり。初めて生れ能く語りて是言を作さく、不善の所作は不孝の所作にして、無慚の所作は惡害の所作、背恩の所作なりと。此語を作し已りて默然として止れり。此女生れし時、大福德あり。卽ち爲に字を立て之を名けて賢[一]と爲せり。漸漸に長大となるに、極めて袈裟を敬ひ、袈裟を恭敬する因緣を以て出家して比丘尼と作り、佛の邊に到らず精勤修習して卽ち羅漢を得たり。佛の邊に到らざりしを悔ひ、便ち佛所に往き佛に向ひて懺悔せり。

佛言はく、我彼時に於て已に懺悔を受けたりと。諸の比丘疑ひ怪み佛に問はく、此賢比丘尼は何を以ての故に出家せしより以來佛を見たてまつらずして、今日佛を見たてまつりて懺悔を得るは何の因緣ありてなるかと。

佛卽ち爲に因緣を說きたまはく。昔日六牙の白象あり諸の群衆多し。此白象に二婦あり一をば賢と名け二をば善賢と名けたり。林中遊行のとき偶蓮華に値ひ、意は賢に與へんと欲せしも善賢奪ひ去れり。賢は華を奪はれしを見て嫉妬心を生じ、彼象は善賢を愛して我を愛せずとせり。時に彼山中に佛塔ありき。賢は常に花を採りて供養し卽ち願言を發すらく、我人中に生れて自ら宿命を識り幷に此白象牙を拔き取らんと、卽ち山頭に上り自ら撲ちて死せり。尋ひで[二]毘提醯王家に生れ女と作り、自ら宿命を知れり。年旣に長大となりしかば[三]梵摩達王に與へて婦となり、其宿怨を念じ、梵摩達に語りて言く、我に象牙を與へ床と作さば我能く活きんのみ、若し爾らずんば我活くること能はざらんと。梵摩達王卽ち獵者を募り、若し能く象牙を得來るものあらば百兩金を與ふべし

【一】賢は梵語バハドラの意譯。

【二】梵語ヴヰデーハの漢訛音譯にして毘舍離地方の王家なり。

【三】梵語ブラフマダッタの漢訛音譯にして梵授の義、波羅捺地方の王なり。

と。即時獵師詐りて袈裟を被むり、弓に毒箭を挾み往き象の所に至れり。時に象の婦善賢は獵師を見已りて即ち象王に語りて言く、彼に人あり來れりと。象王問ふて言く、何の衣服をか著けたる。答へて言く、身に袈裟を著けたりと。象王言く、袈裟の中には必ず當に善あるべし、惡あることなしと。獵師是に於て便ち近づくことを得、毒箭を以て射たり。善賢其夫に語らく、汝言ふ、袈裟の中に善ありて惡なしと、云何此の如きやと。答へて言く、是袈裟の過にあらず、乃ち是心中煩惱の過たりと。善賢即ち彼獵師を害せんと欲せしが、象王種種に慰喩説法して害せしむることを聽さず。又復五百の群象必ず此獵師を殺さんことを畏れ、岐間に藏し著きて、五百の群象を皆遠くに遣し去れり。獵師に問ふて言く、汝何物を須ゐして我を射たるやと。答へて言く、我須ふるところなし、梵摩達王の募りて汝が牙を索めらる、故に來りて取らんと欲するなりと。象の言く、疾く取れと。答へて言く、敢て自ら取られず、是の如き慈悲をもて我を覆育す、我若し自らの手にて取らば、手當に爛れ墮つべしと。白象即時に大樹の所に向ひ、自ら牙を拔き出し、鼻を以て絞り捉へ、願を發して與ふらく、牙を以て布施す、願くば我將來に一切衆生の三毒の牙を拔かんことをと。獵師牙を取り便ち梵摩達王に與へたり。

爾時に夫人此牙を得已りて、便ち悔ゆる心を生じて是言を作さく。我今云何してか此賢勝淨戒の牙を取らんや、大に功德を修せんと。而して誓言を發して言く。願くば彼將來に成佛を得ん時、彼法の中に於て出家學道して阿羅漢たることを得せしめよと。

汝等當に知るべし、爾時の白象とは我身是なり。爾時の獵師とは提婆達多是なり。爾時の賢は今の比丘尼是なり。爾時の善賢は耶輸陀羅比丘尼是なり。

十一　兎自身を燒き大仙に供養する緣

舍衛國に一長者の子あり、佛法の中に於て出家し、常に親里眷屬を樂みて道人と事を共にするを樂まず、亦經を讀み道を行ずることを樂まざりき。佛此比丘に勅して阿練若處に向ひ、精懃修習して阿羅漢を得、六通を具足せしめたまへ。

諸の比丘疑ひ怪みて佛に白して言さく、世尊の出世は甚奇甚特なり。是の如き長者の子、能く安立して阿練若處を得、阿羅漢道を得、六神通を具足せしめたまへることやと。

佛諸の比丘に告げたまはく、但今日能く安立することを得せしむるに非ず、乃ち往昔に於て已に嘗て安立せり。諸の比丘佛に白して言さく。不審なるかな世尊よ、過去に安立せしとは其事云何ぞや。佛諸の比丘に告げたまはく、過去の時一仙人ありて山林の間に在りき。時に世大旱し、山中の草疏根莖枝葉悉く皆枯れ乾けり。

爾時に仙人は兎と共に親善なりき。而して兎に語りて言く、我今聚落に入り乞食せんと欲すと。兎の言く、去ること莫れ、當に汝に食を與ふべしと。是に於て兎は便ち自ら薪を拾ひ聚め、又仙人に語らく、必ず我食を受けよ。天當に雨を降すべし、汝三日住せば華菓還り出でん、便ち食を採るべし、人間に趣くこと莫れと。是語を作し已りて卽ち大に火を然し、身を投じて中に著きぬ。仙人見已りて是思惟を作さく、此兎は慈仁にして我の善き伴なりき、我食の爲の故に能く身命を捨てたり。實に是難き事なりと。

時に彼仙人は大苦惱を生ぜしが卽ち取りて之を食せり。菩薩此難行苦行を爲せしかば、釋提桓因の宮殿震動して自ら念言すらく、今何の因縁を以て宮殿震動するやと。觀察して是兎能く難事を爲せしを知り、其所爲に感じて卽便ち雨を降せり。仙人遂に住し還りて菓疏を食せり。爾時に修習して五神通を得たりき。

爾時の五通の仙人とは今の比丘是なり。爾時の兎とは今、我身是なり。我是身を捨てしが故に彼

仙人をして阿練若處に住せしめ、五神通を獲せしめたり。況んや我今日此比丘をして眷屬を遠離し、阿練若處に住して阿羅漢を得、六神通を獲せしむること能はざらんや。

十二　善惡獼猴の緣

佛王舍城に在して諸の比丘佛に白して言さく。世尊よ、提婆達多に依止せば常に苦惱を得、如來世尊に依止せば、現に安樂を得て後に善處に生じ解脫道を得と。

佛諸の比丘に告げて言はく、但今日のみに非ず。乃往過去の時、二獼猴ありて各五百の眷屬ありき。迦尸王子の遊獵せらるゝに値ひ圍み將に至らんと欲しに、一善獼猴は一惡獼猴に語りて言く、我等今此河を渡り難を免ることを得べしと。惡獼猴の言く、我渡ること能はずと。善獼猴諸の獼猴に語りて言く、[一]毗多羅樹の枝桿は極めて長し、卽ち樹枝を挽きて五百の眷屬を渡さんと。惡獼猴の眷屬は渡らざるを以ての故に、卽ち王子の爲に獲得せられたり。

爾時の善獼猴は我身是なり。爾時の惡獼猴は提婆達多是なり。將ひたるところの眷屬は爾時に苦惱せり、今の依止者も亦復是の如し。爾時に我に依止せし者は長夜に樂を受け、現に名稱供養を得、將來に人天の解脫を得ん。爾時に提婆達多に依止せし者は長夜に衰苦を受け、現身に惡名稱を得て人供養せず、將來三惡道に墮ちん。是故に諸の比丘よ、當に惡知識を遠離し善知識を親近すべし。善知識は長夜人に安穩快樂を與へん、是を以ての故に當に善知識に親近すべし。惡知識は當に遠離すべし。所以は何となれば、惡知識は能く燒き燋然し、今世後世に衆の苦集り聚らん。

十三　佛智水を以て三火を滅するの緣

國あり[二]南方山と名く、佛彼國に往かんと欲し、中路に於て一聚落に至りて宿したまひしに、彼

【一】梵語ヴァエーターラの漢訛音譯にして又貝多羅樹とも曰ふ棕櫚樹の一種長大なるものなり。

【二】梵語ダクシナギリの漢意譯にして又音譯には法顯傳に達嚫とせり、今のデッカン地方なり。

聚落の吉會を造作するに値ひ、飲酒醉亂して火起るをも覺らず此聚落を燒かんとす。諸人驚き怕れて趣くところを知らず。各相ひ謂ふて言く、我等唯佛に依憑して火難を免るべしと。便ち佛に白して言さく、世尊よ、願くば救濟せられよと。

佛言はく、一切衆生は皆三火あり、貪欲・瞋恚・愚癡の火なり。我智水を以て此三火を滅せんと。此言若し實ならば此火當に滅すべしと。是語を作し已りたまひしに火即時に滅せり。諸人歡喜して佛を信じ重んじき。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹道を得たりけり。

諸の比丘疑ひ怪みける。世尊の出世は甚奇甚特なるかな、此村落の爲に大利益を作したまひ、聚落の火滅し、心の垢も亦滅せりとは。

佛言はく、但今日のみ爲に利益を作すに非ず、過去の世に於ても亦曾て彼諸人の爲に大利益を作したりきと。諸の比丘問ふて言く、不審なるかな世尊よ、過去の利益とは其事云何ぞやと。

佛言はく、過去の世にて雪山の一面に大竹林あり、諸の鳥獸多く彼林に依りて住しき。一鸚鵡あり歡喜首と名く、彼時に林中の風は兩竹を吹きて相ひ共に揩磨し、其間火出でゝ彼竹林を燒く、鳥獸恐怖して歸依處なし。爾時に鸚鵡は深く悲の心を生じ、彼鳥獸を憐み翅を捉へて水に到り以て火上に灑ぐ、悲の心精懃なるが故に帝釋宮に感じて大に震動せしむ。釋帝桓因は天眼を以て觀じ、何の因緣ありてか我宮殿動くやと。乃ち世間を見るに、一鸚鵡あり心に大悲を懷き、火を救濟せんと欲して其身力を盡すも火を滅すること能はざるなりと。

釋帝桓因は卽ち鸚鵡のところに向ひて之に語りて言く、此林は廣大にして數千里なり、汝の翅羽取るところの水は數滴に過ぎず、何を以て能く此の如き大火を滅せんやと。鸚鵡答へて言く、我心弘曠なれば精懃して懈らずんば必ず當に火を滅すべし、若し此身盡きて滅すること能はずんば更に來身を受けて誓ひて必ず之を滅すべしと。釋帝桓因其志意に感じて爲に大雨を降せしかば火即ち滅

することを得たり。

爾時の鸚鵡とは今の我身是なり。爾時林中の諸の鳥獸は今の大聚落の人民是なり。我爾時に於て彼火を滅し其をして安きことを得せしめんが爲なりしなり。今も亦火を滅し彼をして安きことを得せしめたり。又問ふ復何の緣を以つて見諦道を得るやと。佛言はく、此諸の人民は迦葉佛の時に五戒を受持せり、是因緣に由りて今見諦を得、須陀洹道を獲るなり。

十四　波羅㮈國一長者の子と共に有るを天神感じて王孝を行ふの緣

是の如く我聞く。一時佛舍衛國に在して諸の比丘に告げて言はく、若し人ありて梵天王家中に在すことを得んと欲せば、能く父母に孝養せよ、梵天卽ち家中に在さん。帝釋をして家中に在さしめんと欲せば、能く父母に孝養せよ。卽ち是帝釋家中に在さん。但父母に孝養せば、當に知るべし一切天神已に家中に在すなり。但能く父母に供養せば、便ち和上已に家中に在すと爲す。[一]阿闍梨家中に在すことを得んと欲せば、但父母に供養せよ、卽ち是阿闍梨其家中に在すなり。若し諸の賢聖及び佛を供養せんと欲せば、卽ち父母を供養せよ、諸の賢聖及び佛は卽ち家中に在さんと。諸の比丘言さく。如來世尊は極めて希有と爲す、父母を恭敬したまへばなりと。

佛言はく、但今日極めて希有と爲し父母を恭敬するに非ず、過去世に於ても亦曾て希有とし父母を恭敬せしなりと。比丘問ふて言く、過去に恭敬せしとは其事云何ぞや。

佛言はく、往昔波羅㮈國に一貧人あり唯一子を生めり。然も此一子は多くの兒息ありて其家貧窮せり。時に世飢儉なりしかば其父母を以て生ながら地中に埋めて兒子を養ひ活せり。隣比問ふて言く、汝が父母は何所に在すと爲すやと。答へて言く、我父母は年老ひ當に死に至るべきに會せしかば我便ち之を埋め、父母の食分を以て兒子を養ひ長大なることを得せしめんと欲すと。第二の家聞

【一】梵語アーチャールヤの漢訛音譯にして教授師の義なり。

きて此は是理なりと謂へり。此の如く展轉して波羅奈國に遍し、即ち以て法と爲せり。

復一長者ありて亦一子を生めり、此子之を聞き以て是に非ずと爲し、即ち是念を作さく、當に何の方便を作してか此非法を却くべしと。遂に父に白して言く、父今應に遠く行きて學び讀み經論を知らしむべしと。其父便ち去り、少しく學び讀むことを得て便ち家に還りしに年轉老大なりき、子爲に地を堀り好き屋舍を作り父を以て中に著き、好き飲食を與へて是思惟を作さく、誰か當に我と共に此非法を除かんやと。天神身を現し之に語りて言く、我今汝に與みし以て伴侶と爲らん、天神の疏紙をもつて王に四事を問へ、若し能く此疏上の事を解かば、汝の爲に擁護せん。若し解かざれば却りて後七日當に王の頭を破り七分と作さしむべしと。四種の問とは、一は何物か是第一の財なりや。二は何物か最も樂と爲すや。三は何物か味中の勝たるものなりや。四は何物の壽が最も長きやと。牓を王門の上に著けり。國王得已り搜り國中に問ふ、誰か此を解く者ぞ、若し解く者あらば何事を求めんと欲するも皆願ふところを滿さんと。長者の子此文書を取り其義を解きて言く、信は第一の財と爲し、正法は最も樂みと爲し、實語は第一の味と爲し、智慧の命は第一なりと。此義を解き已り還りて王門の頭に著けり。天神已りて心大に歡喜し、王も亦大歡喜せり。

王は長者の子に問ふて言く、誰か汝に此語を教へたるやと。答へて言く、我父我に教へたりと。王の言く、汝が安に在りやと。長者の子言く、願くば王よ無畏を施したまへ。我父實に老ひたるも國法に違ふが故に藏して地中に著けり、願くば臣の說くところを聽きたまへ。大王よ、父母の恩は重く猶天地の如し、懷き抱くこと十月、乾けるを推して濕へるを去り、乳哺して養ひ大となり、人事を教授して此身成立せること皆父母に由る。日月を見ることを得、生活所作すること父母の力なり。假使左肩に父を擔ひ右肩に母を擔ひ行きて百年に至り、復種種に供養するも猶父母の恩を報ずること能はずと。

時に王問ふて言く、汝は何等をか求めんと欲するやと。答へて言く、更に求むるところなし、唯願くば大王よ此惡法を去れと。王其言を可とし、國内に宣下し、若し父母に孝せざる者あらば當に其罪を重く治すべしと。

爾時に長者の子は今の我身是なり。我爾時に於て彼一國の爲に惡法を除去し、孝順の法を成就せり、此因緣を以て自ら成佛を致せり。是を以て今日亦復孝順の法を讃嘆するなり。

十五　迦尸國王の白香象が盲父母を養ひ并に二國を和せしの緣

昔佛舍衞國に在して諸の比丘に告げて言はく、八種の人あり決定して施すべし復疑を生ずべからず。父・母・佛・及び弟子・遠來の人・遠去の人・病人・看病者なり。諸の比丘佛に白して言さく、如來世尊は甚奇甚特なり、父母の所に於て常に讃嘆恭敬したまふやと。佛言はく、我但今日のみに非ず、過去よりこのかた恒に尊重恭敬せりと。諸の比丘問ふて言く、尊重讃嘆したまふとは其事云何ぞや。佛言はく、過去久遠に二國王ありき。一はこれ[一]迦尸國王にして、二は[二]比提醯國王なり。比提醯王には大香象あり、香象の力を以て迦尸王軍を摧伏せり。迦尸王是念を作して言く、我今云何香象を得て比提醯王の軍を摧伏すべきやと。

時に人有り言く、我山中を見るに一白香象ありと。王之を聞きて即便ち募りて言く、誰か能く彼香象を得る者あらば我當に重く賞すべしと。有人募に應じて多くの軍衆を集め往き彼象を取れり。象思惟して言く、若し我遠く去らんか、父母盲老たり、調順して王の所に往き至らんには如じと。

爾時に衆人便ち香象を將ひて王の邊に向ふ。王大に歡喜し爲に好き屋を作り、氍氀毾㲪を其下に敷き著き、諸の伎女とともに琴を彈じ瑟を鼓し以て之を娛樂し、象に飲食を與ふるも之を食することとを肯ぜす。

【一】梵語カーシーの漢訛音譯、今のベーナーレス地方の王なり。

【二】梵語ヴ井デーハの漢訛音譯、今のバハガルプール地方の王にして昔の毘舍離國王の異稱なり。

時に象を守る人來りて王に白して言さく、象食することを肯ぜずと。王自ら象の所に向ふ。上古畜生皆能く人語せしかば、王象に問ふて言く、汝何故に食せざるやと。象答へて言く、我父母あり年老ひて眼盲たれば水草を與ふる者なし、父母食せざるに云何か食せんやと。象は王に白して言さく、我去らんと欲せば王の諸の軍衆も能く我を遮るものなからん、但父母の盲老なるを以て王に順ひ來れるのみ。王今聽さるれば還り去り供養して其年壽を終へば自ら當に還り來るべしと。王此語を聞き極めて大に歡喜し、我は便ち是人頭の象に等しく、此象は乃ち是れ象頭の人なり。先に迦尸國の人は父母を惡み賤しみて恭敬のなかりしが、此象に因ての故に、王は即ち一切の國内に宣令し、若し父母を孝養恭敬せざる者は當に大罪を與ふべしと。尋ひで即ち象を放ち父母の所に還し父母を供養せしめ壽の長短に隨はしむ。父母喪亡して王の所へ還り來れり。

王は白象を得て甚だ大に歡喜し、即時に莊嚴して彼國を伐たんと欲す。象は王に語りて言く、與に鬪諍することと莫れ、凡そ鬪諍の法は傷害する所多しと。彼我を欺き凌げばなりと。象言く、我を聽して往かしめよ、彼怨敵をして敢て欺き侮らざらしめんと。王の言く、汝若し去らば、或は能く還らざらんと、答へて言く、能く我を遮り還らざらしむる者無けんと。象即ち是に於て彼國中に往けり。

此提醯王は象の來り至ると聞き、極めて大に歡喜し、自ら出で往き迎ふ。即に象を見已りて之に語りて言く、即ち我國に住せよと。象は王に白して言さく、即ち住することを得ず、我は身を立てゝ以來、言の誓を違はず、先に彼王に許せり當に其國に還るべしと。汝二國の王は怨惡を除きて自ら其國を安ずべし、豈に快からざらんやと。即ち偈を說きて言く、

勝を得ば怨を增長し　負くれば則ち憂苦を益す、
勝負を諍はざるは　其れ樂の最第一ならん。

爾時に此象は此偈を說き已りて即ち迦尸國に還る。是より以後三國和ぎ好し。

爾時の迦尸國王は今の波斯匿王是なり。比提醯王は阿闍世王是なり。爾時の白象は今の我身是なりと。我爾時父母に孝養せしに由るが故に、多の衆生をして亦父母を孝養せしめたり。爾時に能く二國を和好せしめたりしが、今日も亦爾るなり。

十六　波羅㮈國の弟微しく兄を諫めて遂に相承を徹し王を勸めて天下を教化するの縁

昔世尊諸の比丘に語りたまはく、當に知るべし往昔波羅㮈國に不善法ありて世に流行せり。父年六十ならば敷氍を與へ著きて門戸を守らしむるなり。

爾時に兄弟二人あり、兄は弟に語りて言く、汝父に敷氍を與へて門を守らしむべしと。屋中唯一の敷氍のみ。小弟便ち半を截りて父に與ふ。而して父に白して言く、大兄の父に與へしなり、我の與ふ所に非ず、大兄は父をして門を守らしむるなりと。

兄は弟に語りて言く、何ぞ盡く敷氍を與へずして半を截りて之を與ふるやと。弟答へて言く、適一の敷氍あるのみにして半を截り與へずんば後更に何處にか得んやと。兄問ふて言く、更に誰に與へんと欲するやと。弟の言く、豈に留めて兄に與へざることを得べけんやと。兄の言く、何を以て我に與ふるやと。弟の言く、汝當に年老ゆべし、汝が子も亦當に汝を安じて門中に置くべしと。兄此語を聞き驚愕して曰く、我も亦當に是の如くなるべきやと。弟の言く、誰か當に兄に代るべきやと。便ち兄に語りて言く、此の如き惡法は宜しく共に除き捨つべしと。兄弟相將ひて共に輔相の所に至り、此言論を以て輔相に向ひ說けり。輔相答へて言く、實に爾り、我等も亦共に老ゆることあらんと。輔相は王に啓せしに、王此語を可とし、國界に宣令して父母に孝養し、先の非法を斷じ、更に爾ることを聽さゞりけり。

十七　梵摩達夫人妬み忌みて子の法護を傷くるの緣

佛王舍城に在して提婆達多に語りて言く、我恒に深心に汝を慈念せり、及び身口意にも汝に於て惡むこと無し、今共に懺むべしと。提婆達多は罵詈して去れり。諸の比丘言く、云何してか如來の慈心此の若くなるに、提婆達多は反つて更に惡罵するやと。

佛言はく、但今日のみに非ず、過去の時に於て、波羅㮈國に王あり梵摩達と名け、夫人の名を不善意と名く、子に法護といふあり、聰明慈仁なるが師に就きて教學せり。

時に梵摩王諸の婇女を將ひて園苑中に於て遊戲安樂を行ひ、飲殘の酒を以て夫人に送與せしかば、夫人瞋恚りて是言を作さく、我寧ろ法護の咽の中を刺し血を取りて飲むとも此酒を飲まずと。王此語を聞き瞋恚りて言く、學中の法護を喚び來れと。法護來りしかば其咽を割かんと欲す。子は父に白して言さく、我過罪なし、王唯一子あるのみ、何爲ぞ我を殺すやと。王言く、我汝を殺さず、汝が母の意のみと。能く汝の母に白して懺悔し彼をして歡喜せしめば終に汝を殺さずと。兒即ち母に向ひ懺悔して是言を作さく唯我一子あるのみ亦過罪なし、何爲ぞ我を殺すやと。母は悔を受けずして便ち兒の咽を刺し血を與へ飲ましめたり。

佛言はく、爾時の父王は〔一〕拘迦離是なり、彼時の母は提婆達多是なり。彼時の子は我身是なり。我爾時に於て都て惡心なきも我悔を受けざりしなり。今日も亦爾り我悔を受けず。我爾時に於て爲に殺さるゝと雖も、都て一念瞋恨の心なし、況や今日に於て而も當に忿恚し惡心あらんやと。

十八　駝驃比丘謗らるゝの緣

昔比丘あり名けて〔二〕駝驃と曰ふ。大力士の力あり、出家精勤して阿羅漢果を得、威德具足せり。

〔一〕梵語カウガーリの漢譯音譯にして又瞿伽利ともなせり。

〔二〕梵語ドラヴヤパラプトラの漢譯音譯にして財力士の義なり。

恒に僧事を營み五指より光を出す、而して衆僧種種の敷具を賦せり。是に由りて佛は營事第一なりと說きたまへり。[三]彌多比丘は自ら福德薄く當に次の會處すべければ飲食麤惡なり、乃ち反し恚りて言く、若し此駝驃僧事を料理すれば我終に好食し自活することを得ず、當に方便を設くべしと。

彌多は姉あり比丘尼と作れり、往き共に相ひ教へて駝驃を謗り乃ち三を滿つるに至る。駝驃厭惡して卽ち虛空に昇り十八變を作し火光三昧に入り、虛空の中に於て火焔滅するが如く屍骸あることなし。誹謗貪嫉は能く賢聖をして猶ほ身を滅せしむ、況や復凡夫をや。是を以て智者は誹謗を愼むべし、輕しむ言を說くこと莫れと。

時に諸の比丘は卽便ち佛に問はく、駝驃比丘は何の因緣ありてか誹謗せられ、復何の因緣を以てか是大力を得、復何の緣を以てか羅漢を逮得せしや。

佛言はく、過去世の時人壽二萬歲の時、佛あり迦葉と名けたり。爾時に迦葉佛の法の中に年少の比丘あり、面目端正にして顏色妹妙なり。彼年少の比丘乞食して未だ還らざるに、一少婦あり異色に惑著し、此比丘を看て眼捨離せざりき。駝驃比丘時に食監たり、會此婦の比丘に逐して目暫くも捨てざるを見、卽便ち謗りて言く、此女必ず彼比丘と通ずと。是因緣に由りて三惡道に墮ち苦を受くること無量なり、乃ち今日に至るも餘殃盡きず猶誹謗せらる。又過去迦葉佛の時出家學道するを以て今羅漢を得たり。其過去に僧事を經營し、驢馱米麵深泥に溺れしを卽ち能く挽き出すを以て、是に緣るをもつての故に力士の力を得たるなり。

十九　離越謗らるゝの緣

昔[一]罽賓國に[二]離越阿羅漢ありて山中に坐禪しき。有一人牛を失ひ蹤跡を追逐し徑に其所に至る。爾時に離越は草を煮て衣を染む、衣自然に變じて牛皮と作り、染汁變成して血と爲り、煮る所の染

【三】梵語ミトラの漢訛音譯にして親友の義なり。

【一】罽賓を玄弉は迦畢試と漢音譯せるもの今のアフガニスタンの東境カブール地方なり。

【二】梵語レーワタの漢訛音譯にして又離波多ともなす、室星の義なり。

草變じて牛皮と成り、所持の鉢盂變じて牛頭と成れり。牛主見已りて卽ち捉へ收縛し將ひて王に詣る、王卽ち獄中に付し十二年を經、恒に獄監と爲し馬を飼ひ糞を除けり。離越の弟子羅漢を得たる者五百人あり、其師を覩覓せんとして所在を知らず、業緣盡きんと欲するとき、一弟子あり師は乃ち罽賓の獄中に在らるゝを見る。卽ち來り王に告ぐ、我師離越は王の獄中に在せり、願くば斷理を爲せと。王卽ち人を遣し獄に就て檢校せしむ。王人獄に至りしも唯人ありて威色憔悴　鬚髮極めて長くして獄監と爲り馬を飼ひ糞を除くを見るのみ。還り王に白して言く、獄中都て沙門道士なし、唯獄卒の比丘ありしのみと。弟子復王に白して言く、願くは但敎を設けよ、諸の有らゆる比丘は悉く出獄を聽せと。王卽ち諸の有らゆる道人に宣令して悉く皆獄を出でしむ。尊者離越は其獄中に於て鬚髮自ら落ち、袈裟身に著き、踊りて虛空に在り、十八變を作せり。王是事を見て未曾有なりと嘆じ、五體を地に投じ、尊者に白して言く、願くば我懺悔を受けよと。卽時に來り下りて王の懺悔を受く。王卽ち問ふて言く、何の業因を以て獄中に在り、苦を受け年を經るやと。尊者答へて言く、我往昔に於ても亦曾て牛を失ひ蹤跡を隨逐して一山中を經しに、辟支佛の獨處坐禪せるを見、卽便ち誣ひ謗りて一日一夜に至れり。是因緣を以て三途に墮落し苦毒無量なり。餘殃盡きず羅漢を得るに至るも猶誹謗せらるゝなり。

二十　波斯匿王の醜女賴提の緣

昔波斯匿王に女あり、名を[一]賴提と曰ふ、十八醜あり都て人に似ず、見れば皆恐怖せり。時に波斯匿王國中に募り、其れ族姓長者の子にして窮寒孤獨なるものあらば、仰ぎて將來るべしと。爾時市邊に長者の子あり、孤獨單己にして乞ひ索めて自活せり。人を募る之を見、將來して王に詣る。王此人を將ひ後園に入れ、而も約し勅して言く、吾一女を生ぜしが形貌醜惡にして人に示

【一】梵語ラディーの漢訛音譯ならんか。

すに中らず、今卿に妻とせんと欲す、爾を得べきや不やと。時に長者の子王に白して言く、王の約勅せらるゝならば假使是狗なりとも猶尙辭せず、何に況や王女をや、可ならざらんやと。王遂いで之に妻とし、爲に宮室を立て長者の子に約勅して言く。此女の形醜ければ愼みて人に示すこと莫れ、出づるには則ち門を鎖し、入らば則ち戸を閉ぢよ、以て常の則と爲せと。

諸の長者の子あり共に親友となり飲醼遊戲す。每に會する日に於て諸の長者の子の婦皆來り集會するに、唯此王女のみ獨自來らず、是に於て諸人共に要言を作さく、後日更に會せんには仰ぐらくは婦を將ひ來れ、來らざる者あらば重く財物をもつて讁せんと。

遂に復會を作せしが貧長者の子猶故前の如く婦を將ひて來らず。諸人便ち共に重く讁罰を加へしが、貧長者の子敬しく其罰を受く。諸人已に復共に要言を作さく、明日更に會せん、婦を將ひ來らざれば復當に重く罰すべしと。是の如く罰せられ乃ち二三に至るも亦將ひて會所に來詣せざるなり。

貧長者の子後に家中に到り其婦に語りて言く、我數汝に坐して人の爲に罰せらると。婦言く何故ぞやと。夫の言く、諸人要するあり、飲會の日、盡く仰ぎ婦を將ひて會所に詣れり。我王の勅を被り汝を將ひて外人に示すことを聽さず、故に數罰せらるゝなりと。婦此語を聞きて甚だ大に慚愧し、深く自ら悼慨し晝夜佛を念ぜり。

是に於て後日更に醼會を設けたりしかば夫復獨り去る。婦は室內に於て倍懇惻を加へ願を發して言く。如來の出世は利益したまふところ多しと。我今罪惡のみ獨り潤を蒙らずと。

佛其心至れるを感じたまひ、地より踊り出でたまふに、始て佛髮を見たてまつり敬重歡喜せしかば、己が髮卽ち異り變じて好き髮と成れり。次に佛の額を見、漸く眉目耳鼻身口を覩たてまつり、見るところに隨ひて歡喜轉深く、其身卽ち變じて醜惡都て盡き、貌は諸天に同じくなりぬ。

諸の長者の子密に共に議して言く、王女の會に來らざる所以は、必ず當に端正常人に異るべきか、或は當に絶えて醜かるべし、是故に來らざるなりと。我等今當に其夫に酒を勸めて覺知なからしめ、鑰匙を解き取りて門を開き往き看んと。即ち飲みて醉はしめ、鑰匙を解き取り相ひ將ひて共に往き門を開き之を看しに、此王女の端正雙無を見て便ち還り門を閉ぢ本處に詣れり。

爾時に其夫猶故のごとく未だ寤めざりしかば、還り鑰匙を以て腰下に繫ぎ著けたり。其夫覺め已り尋ひで還り家に向ふ、門を開き婦の端正なること殊異なるを見、怪みて之を問ふ。汝何る天神の女ぞ我屋宅に處するやと。婦の言く、我は是君の婦賴提なりと。夫怪みて之を問ふ卒爾なる所以なり。婦時に答へて言く、我聞く君數我に坐して罰せらると、心に慚愧を生じ懇惻に佛を念じ、尋ひで如來の地より踊出せるを見たてまつりしかば、見已りて歡喜せしかば身體變好せりと。

貧長者の子極めて大に歡喜し、將ひで入り王に白さく、王女の身體自然に變好せり、今王に見えんことを求むと。王聞きて歡喜し、尋ひで即ち喚び看、見已りて歡喜せり。情甚だ疑ひ怪み、將に佛所に詣りて佛に白して言さく。世尊よ、此女は何の緣にて深宮に生じ、身體醜惡にして人見て驚き怪み。復何の因を以て今卒に變好せるやと。

佛は王に告げたまはく、乃往過去に辟尸佛ありき。日日食を乞ひて一長者の門前に到る。時に長者の女食を持ち辟尸佛に施せしに、辟尸佛の身體麁惡なるを見て是言を作さく。此人は醜惡なること形は魚の皮の如く、髮は馬の尾の如しと。爾時の長者の女とは今の王女是なり、食を施す因緣にて深宮に生ぜしも、辟尸佛を毀呰し故に身體醜惡なり。慚愧懇惻の心を生ぜし故に而も我を見ることを得、歡喜心の故に身體變好せしなりと。

爾時の衆會は佛の說きたまふところを聞きたてまつり、恭敬禮を作して歡喜奉行せり。

二十一　波斯匿王の女善光の縁

昔波斯匿王に一女あり、名を善光と曰ふ、聰明端正なりき。父母憐愍し宮を擧げて愛敬せり。父は女に語りて言く、汝は我力に因りて宮を擧げ愛敬するなりと。女は父に答へて言く、我業力あり父王に因らずと、是の如く三問せしかども、答ふることも亦前の如し。王時に瞋忿し、今當に汝が自業力あるか自業力なきかを試むべしと。左右に約勅せり。此に於て城中にて一最下貧窮の乞人を覓めしむ。時に王の教を奉じ尋ひで便ち推覓め一窮人を得、將ひ來りて王に詣れり。王卽ち女の善光を以て窮人に付與し、王は女に語りて言く、若し汝自ら業力ありて我に假らずんば今より以往の事を驗として知るべしと。女猶答へて言く、我に業力あればと、卽ち窮人と共に相將ひて出で去れり。其夫に問ふて言、、汝先に父母ありや不やと。窮人答へて言く、我父は先に舍衞城中第一の長者なり、父母と家に居りしが、都て死し盡すを以て依り怙むところなし、是を以て窮乏しけりと。善光問ふて言く、汝今頗故宅の處を知れりや不やと。答へて言く處を知れりと。垣宅毀壞し遂に空地あるのみと。善光卽便ち夫とともに相ひ將ひて故舍の所に往き、周歷し按じ行くに、其行く處に隨ひて其地自ら陷り、地中の伏藏發き出でたり。卽ち珍寶を以て人を雇ひ舍を作り、未だ一月に盈たざるに宮室屋宅都て悉く成就せり。宮人妓女其中に充滿し、奴婢僕吏稱げて計るべからず。

王卒に我女の善光のことを憶念し、云何に生活するやと。有人答へて言く、宮室錢財王に減ぜずと。王言く、佛語は眞實なり、自ら善惡を作り、自ら其報を受くるなりと。

王女卽日其夫主を遣し往き王に請ふ、王卽ち請を受けて其家内を見るに氍毹毾㲪をもつて舍宅を莊嚴し王宮より踰へたり。王之を見已りて未曾有なりと嘆ぜり。此女自ら語れることの皆眞實なる

を知りて是言を作さく、我自ら此業を作し自ら其報を受けたりと。王往き佛に問はく、此女は先の世に何の福業を作してか王家に生るゝことを得、身に光明あるやと。

佛は王に答へて言はく、過去九十一劫に佛有しき[一]毘婆尸と名く、彼時に王あり名を[二]盤頭と曰ひ、王に第一の夫人ありき。毘婆尸佛の涅槃に入りたまひし後、盤頭王は佛舍利を以て七寶の塔を起て、第一の夫人は天冠を以て拂飾し、毘婆尸佛像の頂上に著き、天冠中の如意珠を以て振頭に著け光明世を照せり。因りて願言を發し、我將來の身に光明ありて紫磨金色、尊榮豪貴にして三惡八難の處に墮つること莫らしめよと。

爾時の王の第一の夫人とは今の善光是なり。迦葉佛の時復餚饍を以て迦葉如來及び四大聲聞に供養せしに、夫主遮斷せしが、婦勸め請ふて言く、我を斷絕すること莫れ、我今以請ひ充足することを得せしめよと。夫還つて婦に聽し供養し得訖へり。爾時の夫とは今の夫是なり。爾時の婦は今日の婦是なり。夫は爾時婦を遮るを以ての故に、恒常に貧窮なるも、還つて聽すを以ての故に、要す其婦に因りて大富貴を得たり。其婦無き時、後還つて貧賤なり。善惡の業追ふこと未だ曾て違ひ錯らざるなり。

王は佛の說きたまふ所を聞きたてまつりて、深く行業に達し、自ら矜大せず、深く信悟を生じ歡喜して去りぬ。

二十二　昔王子兄弟二人國を驅り出さるの緣

昔王子兄弟二人あり、國を驅り出だされ曠路の中に到り糧食都て盡きたりければ、弟は卽ち婦を殺し肉を分ち其兄嫂に與へて食せしむ。兄は此肉を得るも藏し擧げて噉ます、自の脚肉を割きて夫婦共に食しき。弟の婦肉盡き嫂を殺すを得んと欲す、兄言く殺すこと莫れ、先の藏肉を以て還つ

【一】梵音ヴヰパシュイーの音譯にして過去七佛の第一佛名なり。

【二】梵語パーンドゥの漢訛音譯なり。

て弟に與へ食せしむ。既に曠野を過ぎて神仙の住處に到り、華菓を採取し以て自ら供ふ。弟は後に病亡し、唯兄獨り在り。

是時に王子一の刖せられ手足無き人を見て慈悲心を生じ菓實を採取して彼刖人を活せり。王子人となり欲事少し、華菓を採取に去る、其婦後に在りて刖人と通じ已に私情あり深く夫を嫉む。一日の中に於て夫を逐ひ華を採りて河岸の邊に至る、而して夫に語りて言く、樹頭の華菓を取れと。夫は婦に語りて言く、下に深き河あり或は當に墮落すべしと。婦の言く、索を以て腰に繫ぎ我當に索を挽き小しく岸邊に近づくべしとて、婦は其夫を排し河中に墮著せしめたり。慈善力を以ての故に水に墮ちしも漂ひ去りて沒死せざりき。

河の下流に於て國王の崩ずるありき。彼國の相師は國中を推求し誰か應に王と爲るべきやと、遙に水上を見るに黃雲蓋あり、相師占ひ已りて、黃雲蓋の下必ず神人あらんと、人を遣し水中にて往き迎へ接り、立て以て王と爲せり。

王の舊婦彼刖人を擔ひ展轉して乞ひ索め王子の國に到れり。國人皆稱す、一の好き婦あり一刖婿を擔ひ恭承孝順なりと。乃ち王に聞えたりしかば、王之を聞き已りて卽ち人を遣し喚び來りて殿前に到る。王は婦に問ふて言く、此刖人は實に是れ爾が夫なりや不やと。答へて言く、實に是なりと。王時に語りて言く、我を識るや不やと。答へて言く、識らずと。汝某甲を識るや不やと。識れりと王に向ひ看、然して慚愧せり。王慈心を以ての故に人を遣して養ひ活せり。

佛言はく、王を知らんと欲せば卽ち我身是なり。爾時の婦とは旃遮婆羅門の女[一]木杅を帶して我を謗る者是なり。爾時に手足を刖れたる者は提婆達多是なりと。

二十三　須達長者の婦佛を供養して報を獲るの緣

【一】梵語シャーンチャーの漢訛音譯にして佛在世の時舍衛城に住せし婆羅門の女なり。

昔佛世に在しき。須達長者は最後貧苦にして財物都て盡き、客作傭力して三㪷の米を得、炊ひて飮食を作る、時に炊き已訖りて阿那律[一]の來り乞食するに値ひ、須達の婦卽ち其鉢を取り飯を盛滿し與ふ。後に須菩提、摩訶迦葉、大目揵連、舍利弗等次第に來り乞ふ、其婦悉く亦各其鉢を取り飯を盛りて施與す。末後に世尊自ら來り乞食したまひしかば亦與へて鉢に滿せり。是に於て須達外に在りしが行き還りて婦より食を索む、婦は夫に答へて言く、其れ若し尊者阿那律來らば汝當に自ら食すべきを尊者に施すやと。答へて言く、寧ろ自ら食せずとも當に尊者に施すべしと。若し復迦葉・大目揵連・須菩提・舍利弗等乃至佛來りたまはば汝當に云何がすべきやと。答へて言く、寧ろ自ら食せずとも盡く以て施與すべしと。婦は夫に語りて言く、朝よりこのかた諸聖盡く來りて食を索められしかば所有の食盡く以て之を施せりと。夫は婦に語りて言く、我等の罪盡きたり福德應に生ずべしと、卽ち庫中を發するに穀帛飮食悉く皆充滿し、用ゆるも盡く復生ぜりとぞ。

二十四　娑羅那比丘が惡生王の爲に苦惱せらるゝの緣

昔優塡王[一]の子名を娑羅那と曰へり。心に佛法を樂しみ出家學道して頭陀[二]苦行し、山林樹下に坐禪繫念せり。時に惡生王諸の婇女を將ひ巡行遊觀して此林に至り、駕を頓めて憩息し卽便ち睡眠せられたり。諸の婇女等王の眠られしを以の故に卽ち共に遊戲せしが、一樹の下に於て比丘の坐禪念住する有るを見、其所に往き至り禮敬して問訊へり。爾時に比丘其爲に說法せり。王後に尋ひで覺め婇女を求覓めしが、遙に樹の下に一比丘あり顏貌端正にして其年壯美なるあり、諸の婇女等前に在りて法を聽けるを見たり。卽ち往き問ふて言く、汝阿羅漢を得たりや不やと。答へて言く、得ずと。阿那含を得たりや不やと。答へて言く、得ずと。斯陀含を得たりや不やと。答へて言く、得ずと。須陀含を得たりや不やと。答へて言く、得ずと。不淨觀を得たりや不やと。答へて言く、得

【一】梵語アヌルッダハの漢訛音譯にして釋迦族より出家せし人なり。

【一】梵語ウダヤナの漢訛音譯なり。

【二】梵語ヅータの漢訛音譯にして十二種の苦修遊行なり。

すと。王便ち大に瞋りて此言を作して言く、汝都て所得なし、云何か此生死の凡夫を以て諸の婇女と共に一處に坐するやと。卽ち捉へて撾打ち遍身傷つき壞れたり。諸の婇女言く、此比丘過なしと。王轉瞋恚を增して叉打たれたり。皆啼哭懊惱せしかば王倍瞋ること劇しかりき。

此時に比丘心に自ら念言すらく、過去の諸佛は能く忍辱するが故に無上道を獲たりと。又復過去の忍辱仙人は他に耳鼻手足を刵られしかども猶尙能く忍べり。況や我今日身形固完なるをや當に忍ばざるべきやと。此の如く思惟し默然として忍受せり。打を受け已竟り擧體の疼痛 轉轉增劇して其苦に堪へず。復是念を作さく、我若し俗に在らば是國王の子にして當に王位を紹ぐべし、兵衆の勢力は彼王に減ぜざらん。今日我出家し單獨なるを以て便ち欺き打れたりと。深く懊惱を生じ卽ち道を罷め家に還歸せんと欲し、卽ち和上迦旃延の所に向ひ、辭して還俗せんと欲せり。和上答へて言く、汝今身體新に打たれ疼痛するも、且らく明日を待て小しく住し止息せよ、然して後乃ち去れと。

時に娑羅那は敎を受け卽ち宿りしに其夜半に於て尊者迦旃延便ち爲に夢に現れ、娑羅那をして自ら己が身を見せしむ。道を罷めて家に歸りたれば父王已に崩じたりしかば、卽ち王位を紹ぎ大に四兵を集めて惡生王を伐たんとして既に彼國に至り、陣を列ゐて共に戰ひ彼の爲に敗られ、兵衆破れ喪ひ、身は囚執へらる。

時に惡生王は娑羅那を得て、人を遣し刀を持ちて將に殺し去らんと欲せし時、娑羅那極めて大に怖畏し、卽ち心念を生ぜり、願くば和上を見たてまつらば他の爲に殺さると雖も以て恨と爲さずと。其時に和上は念に應じ心を知り、錫を執り鉢を持ちて乞食を行はんと欲し其前に於て現れ之に語りて言く。子よ、我常に種種に汝が爲に法を說けり、鬪諍して勝を求むるも終に得べからず、我敎を用ひずして可を知るや云何と。和上に答へて言く、今若し弟子の命を救濟せば更に敢てせさらんと。

爾時に迦旃延は婆羅那の爲に王人に語りて言く、願くば小しく停り住することを我に聽せ、王に啓して其生命を救はんと。是語を作り已りて便ち王の所に向へり。其後王人は待ち住することを肯ぜず遂に殺し去らんとし、刀を下さんと欲するに臨み、心中驚怖して聲を失して覺めたり。覺めて卽ち夢見る所の事を以て往き和上に白す。和上答へて言く、生死鬪戰は都て勝あることなし、所以は何となれば、夫れ鬪戰の法は他を殘するを以て勝とたす、殘害の道は現在の愚情用て其意を快くせんも、將來の世に三途に墮ち苦を受くること無量ならん。若し其れ他の爲に害せられ已が身を喪失せられ、殃の衆庶に延び他の重罪を增すに如かざらんや。地獄に陷れしめ更に相ひ殘殺せば寃家息まず、五道に輪轉して終竟あることなけん。反覆して之を尋ねば何ぞ身瘡拷楚の痛を補はんや。汝今生死の怖懼、鞭打の痛を離れんと欲せば、當に自ら身を觀じ以て怨謗を息めよ。所以は何となれば、是身は衆苦の本にして、飢渴寒熱、生老病死、蚊虻毒獸の侵害するところ、是の如き諸の怨は衆多無量なり。汝報ひること能はず、何ぞ獨り惡生王に報ひんと欲するや。怨を滅せんと欲せば當に煩惱を滅すべし、煩惱の怨は無量の身を害せん。世の怨は重しと雖も正に一身を害するのみ。煩惱の怨は善法の身を害す。世の怨は酷なりと雖も正に有漏臭穢の身を害するのみ。是に由りて之を觀ぜば、怨害の起は煩惱を根と爲す。汝今煩惱の賊を伐たずして云何ぞ惡生王を伐たんと欲するやと。是の如く種種に其が爲に法を說けり。

時に婆羅那此語を聞き已りて心開き意解けて須陀洹を得、深く大法を樂み、倍精進を加へ、未だ久しからずして道を行じ、阿羅漢を得たりき。

二十五　內官の犍せんとする牛を贖ひ男根を得たるの緣

昔[一]乾陀衞國に一屠兒ありき。五百頭の小牛を將ひて盡く刑犍せんと欲せり。時に內官あり金錢

【一】梵語ガンダハリスツの漢訛音譯ならんか、或は乾陀羅國の約か。

を以て牛を贖ひ群を作し放ち去れり。是因緣を以て現身に卽ち男根具足することを得たり。還つて王家に到り人を遣し通じて白さく、某甲外に在りと。王言く、是我家人なり自ら恣に行けるや、未だ曾て通じ白さずして何故に爾るやと。王時に卽ち喚びて其所以を問はれしに、王に答へて言して曰く、向に屠兒の五百頭の小牛を將ひて刑治せんと欲するを見しかば臣卽ち贖ひ放ちぬ。是因緣を以て身體具することを得たり。故に敢て入らずと。

王聞きて喜び愕き深く佛法に於て信じ敬ふ心を生ぜり、夫れ華報を以て感ずる所此の如し。況や其果報をや、豈に量るべけんや。

二十六　二內官の道理を諍ふの緣

昔波斯匿王臥し眠れる中に於て、二內官の共に道理を諍ふを聞けり。一は是言を作さく、我は王依りて活くと。一人答へて言く、我は依るところなし、自らの業力に活くと。王之を聞き已りて、情彼王に依りて活くといふ者を可とし、之を賞せんと欲す。卽ち直人を遣し夫人に語りて言く、我今當に一人を使す、往く者に重く錢財衣服瓔珞を與ふべしと。是に於て尋ひで王に依りて活くといふ者を遣し、已が飮みしところの餘殘の酒を持ちて夫人に與ふ。爾時に此人酒を持ちて戶を出でしに鼻中より血出でゝ前進することを得ず。會ゝ復彼の自業にて活くといふ者に値ひしかば、卽ち請ふて酒を持たし往ひて夫人に與へたり。夫人見已りて王の言を憶ひ其に錢財衣服瓔珞を賜ふ。王の前に還れり。王は此人を見て怪み惑を生じ、卽便ち彼王に依りて活くといふ者を喚びて之に問ふて言く、我汝を去らしめたり、云何してか去らざりしやと。答へて言く、我戶外に出でしに卒に衂鼻することを得、竟に堪任せられず、卽便ち彼に請ふて王の殘酒を持たしめ以て夫人に與へたりと。

王時に嘆じて言く、我今乃ち知る佛語の實なることを、自ら其業を作して自ら其報を受く奪ふべからざるなりと。是に由りて之を觀るに善惡の報應は行業の致す所にして、天にも非ず王の能く與ふ所に非ざるなり。

雜寶藏經卷第二

巻の第三

二十七　兄弟二人倶に出家するの縁

往昔の世、兄弟二人あり、心に佛法を樂み出家して道を學べり。其兄は精懃にして衆の善法を集め阿練[一]行を修す。未だ久しからざるの頃、羅漢道を得たり。其弟は聰明にして學問し博識なりしかば、三藏經を誦せり。後輔相は爲に、作門師[二]を請ひ多く財錢を與へ、委ねて僧房塔寺を營造せしめたり。

時に三藏法師其財物を受け、人を將ひ地を經て爲に塔寺を造り、基趾端嚴にして堂宇瑩麗なり。制作の意妙絶の工匠なりしかば、輔相見已りて倍信敬を生じ、供養供給し事に觸れて乏きことなからしめき。

三藏比丘は其心好を見て是念を作さく、寺廟訖成れり、倶に須からく衆僧を寺の上に安置すべしと。當に輔相に語りて、我兄を請はしめ是念を作し已りて、輔相に語りて言く、我に一の兄ありて彼處に在り、家を捨てゝ道に入り懃心に精進し阿練行を修せり、檀越よ今請ふて寺の上に著くべしと。

輔相答へて言く、師の約勅するところ但是比丘ならば敢て違逆せじ、況や復師の兄にして阿練をやと。卽便ち人を遣し慇懃に往き請ひ、旣に來り到りぬ。輔相は其精懃に行を用ふるを見て倍供養を加へたり。

其後輔相は一の妙氎の價値千萬なるを以て彼阿練比丘に與へしが、阿練比丘は肯じて之を受けず。慇懃に强ひて與へしかば、然る後乃ち受け、而して是念を作さく、我弟事を營めば當に財を須ふべしと。卽ち以て之に與へたり。

【一】梵語アーランニヤチャルヤの漢訛音譯と行はチャルヤの意譯なり。
【二】作門師は今の建築技師なり。

輔相後の時に一麁氎を以て用ひ三藏に與ふ。三藏得已りて深く瞋恚を生ず。又後日に於て輔相更に一張の妙氎直千萬錢なるを以て兒阿練に與へたりしかば、其兒既に得て復以て弟に與ふ。其弟見已りて倍嫉妬を懷き、卽ち此氎を持ちて輔相の愛敬する女の所に往き到りて之に語りて言く、汝が父の輔相は先に我を看ること厚し、今彼比丘至り來りて已來、何を以て汝が父を幻惑するやを知らざれども今我に薄しと。汝に此氎を與へん、汝持ちて輔相の前に向ひ縫ひ以て衣と爲すべし。若し問はゞ汝答へて言ふべし、父が愛し重ずる所の阿練若は捉へ以て我に與へたりと。輔相は必定瞋りて共に語らざるべしと。女は三藏に語りて言く、我父今厚く彼比丘を敬ふこと眼睛を愛するが如く亦明珠を愛するが如し、云何ぞ卒にして謗毀到るべきやと。三藏復言く、汝若し爾らずは汝と永く斷たんと。女人又答ふらく、何が故ぞ太だ卒なるや、更に方に宜しくすべしと。情已むこと能はず、便ち此氎を受け其父の前に於て裁ち以て衣と爲せり。

爾時に輔相は氎を見卽ち識りて念を作して言く、彼比丘は甚だ大惡人なり、我の氎を得て自ら供給せず、反つて以て小兒婦女を誑惑すと。是に於て後日阿練若來りしも復出で迎へず顏色變じ異れり。時に此比丘は輔相の爾るを見て、心に自ら思惟すらく、必ず異る人ありて我を毀謗し彼をして爾らしむるのみと。卽ち空中に昇り十八變を作せり。輔相見已りて深く敬服を懷き、卽ち其婦とともに足を禮して懺悔し、恭敬の情濃く常日に倍せり。卽ち三藏及び其己が女を驅りて悉く國を出さしめたり。

佛言はく、爾時の三藏とは我身是なり、他を謗るを以ての故に、無量劫に於て大苦惱を受けたり。乃ち今日に至るも[三]孫陀利の爲に毀謗せらるゝなりと。

爾時此女は聖を謗るに由るが故に現に驅り出だされ窮困して乞ひ活けり。是を以て世人よ、一切の事に於て當に明に察すべし、輕しく誹謗し用て咎罰を招くこと莫れ。

【三】梵語スンダリーの漢訳音譯なり。

二十八　仇伽離が舍利弗等を謗るの緣

昔尊者舍利弗・目連あり、諸の聚落に遊び瓦師の所に到り、天大雨するに値ひしかば卽ち中に於て宿す。會窰の中に先の時より一牧牛の女ありて後の深き處に在りしに値ふ。而して聲聞の人も定に入らざる時は凡夫と異なし、故に知見せざるなり。彼牧牛の女は舍利弗目連の其容端政なるを見て心中惑ひ著し便ち不淨を失せり。

尊者舍利弗・目連は瓦窰より出でたり。仇伽離は形相に善し、人の顏色を觀て欲を作せし相と欲を成さざる相とを知れり。牧牛の女後に在りて出づるを見たり。其女の顏色は欲を成せし相あり、彼女の自ら惑著して不淨を失せることを知らず、卽便ち謗りて言く、尊者舍利弗と目連とは牧牛の女と婬せりと。諸の比丘に向ひて廣く是事を說けり。時に諸の比丘卽ち三諫めて、尊者舍利弗・目連を謗る莫れと。

時に仇伽離は心に瞋恚を生じ、倍更に忿盛なりき。一長者あり名を[一]婆伽と曰へり。尊者舍利弗・目連は爲に法要を說きて阿那含を得、命終して梵天上に生じ、卽ち名を稱へて[二]婆伽梵と爲せり。

時に婆伽梵は遙に天上に於て仇伽離の尊者舍利弗・目連を謗るを知り、卽便ち來り下りて仇伽離の房中に至る。仇伽離問ふて言く、汝は是阿誰ぞやと。答へて言く、我は是婆伽梵なりと。何事を爲さんとして來りしやと。梵の言く、我天耳を以て汝が舍利弗・目連を謗るを聞けり、汝は尊者等の此の如き事あるを說くこと莫れと。是の如く三諫め、之を諫めて止まざりき。反つて是言を作さく、汝婆伽梵よ、阿那含を得たりと言ふや、阿那含は名けて不還と爲す。何を以て我邊に來至せるや。若し是の如くならば、佛語も亦虛なりと。梵の言く、不還とは欲界に還りて生を受けざるを

【一】梵語バーガの漢訛音譯。
【二】梵語バーガワット漢訛音譯にして世尊の義なり。

謂ふなりと。

時に[三]仇伽離其身の上に於て卽ち惡瘡を生じ、頭より足に至るまで大小豆の如し。佛の所に往至きて佛に白して言さく、云何してか舍利弗・目連は牧牛の女と婬せしやと。佛復諫めて言はく、汝是舍利弗・目連の是事を說くなかれと。佛の此語を聞きて倍瞋恚を生ぜり。

時に惡疱瘡轉大さ棗の如し。第二に又此事を以て佛に白す。佛復諫めて言はく、此事を說く莫れと。疱瘡轉大にして拳のごとし。第三にも止ます、其疱轉大にして瓠のごとく、身體壯に熱し冷池の中に入るも能く氷池をして甚だ大に沸熱せしむるなり。疱瘡盡く潰れ卽時に命終して[四]摩訶優池地獄に墮ちたりき。

爾時に比丘佛に白して言さく、世尊よ、何の因緣を以て尊者舍利弗・目連等は他の爲に重く謗らるゝやと。佛言はく、過去劫の時、舍利弗・目連等曾て凡夫たりしが、辟尸佛の瓦師の窰の中より出て、亦牧牛女あり後よりし出づ。卽便ち謗りて言く、彼比丘は必ず此女と共に交通を爲せりと。是業緣に由りて三惡道の中に墮ち無量の苦を受けたり。今聖を得と雖も先の緣盡きず猶誹謗せらるゝなりと。

當に知るべし、聲聞の人は衆生の爲に大善知識と作ること能はず。所以は何んとなれば、若し舍利弗・目連が仇伽離の爲に少しく神足を現ぜば、仇伽離も必ず地獄を免れんに。爲に現ぜざるが故に仇伽離をして地獄に墮せしむること、此事の如しと。

佛是說を作したまはく、是菩薩の人は鳩留孫佛の時の如し。一仙人あり名を定光と曰ふ。五百の仙人と共に山林中の草窟の裏にありて住しき。時に婦人あり偶行きて此に在り、天降雨するに値ひ風寒く理極り雨を避くる處なし。卽ち定光仙の所に向ひ一夜を寄宿し、明日出で去れり。諸の仙人之を見、卽便ち謗りて言く、此定光仙は必ず彼女と共に不淨行を行ひしならんと。

【三】仇伽離は瞿伽利に同じ。提婆達多比丘の徒なり。

【四】梵語マハーヴィーチの漢訛音譯にして大阿鼻地獄或は大無間地獄のことなり。

爾時に定光は彼の心の念を知り、其誹謗して地獄に墮ちんことを恐れ、卽ち虛空に昇ること高さ七多羅樹にして十八變を作せり。諸の仙人見已りて是言を作さく。身能く地を離るゝこと四指なるも婬欲あることなしと、何に況や定光は虛空の中に昇り大神變あるをや。而も欲事あらんやと。我等云何してか淨淸の人に於て誹謗を起せしやと。

時に五百の仙人卽ち五體を地に投じ躬を曲げて懺悔せり。是に緣るが故に重罪を免るゝことを得たり。

當に知るべし、菩薩は大方便あり、眞に是衆生の善知識なりと。

佛言はく、爾時の定光仙人とは今の彌勒是なり。爾時の五百の仙人とは今の長老等五百の比丘是なり。

二十九　龍王偈の緣

佛王舍城に在しけるに、提婆達多は佛の所に往至きて惡口罵詈せり。阿難聞きて極めて瞋恚を生じ、提婆達多を驅りて出で去らしめ、之に語りて曰く、汝若し更に來らば我能く汝をして大苦惱を得せしめんと。諸の比丘見て、佛に白して言さく。希有なるかな世尊よ、如來は常に提婆達多に於て慈愍の心を生じたまへり。而るに提婆達多は如來の所に於て恒に惡心を懷けり。阿難瞋恚して卽ち驅り去らしめたりと。

佛言はく、但今日のみに非ず、過去世に於ても亦曾て此の如し。昔迦尸國に於て、時に龍王あり。兄弟二人にて一をば大達と名け、二をば優婆大達と名けたり。恒に甘雨を雨らし、其國內の草木を滋長し、五穀を成熟せしめ、畜生は水を飲み皆肥え壯なることを得、牛羊蕃息しき。

時に彼國王は多くの牛羊を殺して龍の所に至りて龍を祠れり。龍卽ち身を現して王に語りて言

く、我既に食せず、何を用てか生を殺さんや、而して我を祠れと。數語をなすも改めざりしかば、兄弟相ひ將ひて遂に此處を避け、更に一小龍の住處に到れり、屯度脾と名く。屯度脾龍は晝夜瞋恚り惡口罵言せり。大達語りて言く、汝瞋恚ること莫れ、しかるところをい還り去らんと。優婆大達は極めて大に忿怒して之に語りて言く、唯汝小龍のみ常に蝦蟇を食せり、我若し氣を吐かば汝眷屬を吹きて皆消滅せしめんと。大達は弟に語りて瞋恚ること莫れ、我等當に本の處に還り向ふべしと。迦戸國王は我等を渴仰せらるればなりと。

迦戸國王是言を作して曰く、二龍若し來らば其須ゆるところに隨ひ乳酪を以て祀らん、更に生を殺さざらんと。龍王聞きて卽ち本の處に還れり。

是に於て大達は而も是偈を作りて言く、　盡く共に合和し至心に聽け

極善なる清淨心數の法とは、　菩薩の本緣に說きたまふ所の事
今佛故昔の偈を顯に說きたまふ。　天中の天なる三佛陀
如來世に在すとき諸の比丘は　更に惡言を出して相ひ譏毀す
大悲此の如き言を聞くを見て。　比丘僧を集めて是說を作さく
諸の比丘は我に依りて出家せり　非法の事は作すべからず
汝等各各麁語を作せり。　更に相ひ誹謗して自ら毀害し
汝は知り菩提を求むることを聞かず　慈忍難苦の行を修集せよ
汝等若し佛法に依らんと欲せば　當に六和敬を奉行すべし
智者は善く聽きて佛道を學ぶ　利益して衆生を安ぜんと欲せんが爲に
普く一切に於て惱害せざれ　修行して若し聞かば惡を遠ざくべし
出家の人忿諍を起すは　猶し氷水の水より出づるが如し

我過去に於て龍王と作り　兄弟二あり同處に住せり
若し出家の法に隨順せんと欲せば　應に瞋諍を斷じ道に合して行ふべし
第一の兄は名を大達と爲し　第二は優婆達と名く
倶に殺生せず淨戒を持ち　大威德ありて龍形を厭ひ
恒に善趣に向ひ人と作らんと求む　若し沙門婆羅門の
淨戒を修持し又多聞なるを見ば　形を變じて供養し常に親近し
八日と十四十五日　八戒を受持して心意を檢し
己が住處を捨てゝ他方に詣づ　龍あり名を屯度脾と曰へり
我二龍の大威德なるを見　己の如ざるを知りて嫉恚を生じ
恒に惡口を以て罵詈し　膖領腫くれ口氣麤く出し
瞋恚の心盛なれば身眼大し　是惡聲を出して謗りて言く
幻惑諂僞に侵逼せらると　此下賤なる惡龍の罵を聞き
優波大達は極めて瞋恚り　其兄大達に請求して言く
此惡語を以て毀しらるとは　恒に蝦蟇を食して水際に住す
此の如き賤しき物に敢て罵らる　若し水中に在らば水性を惱まし
若し陸地に在らば人を惱害す　惡を聞きて忍ばんと欲するも堪ふべき難し
今當に身眷屬を除滅すべし　一切に皆毀らるるよりは本處に還らんと
大力龍王は弟の言を聞きて　說く所の妙偈は智者も讚む
若し一宿たりとも住止の處に於て　少しく供給を得て安眠せば
彼に於て惡念を生ずべからず　恩を知り恩を報ずるは聖の讚むる所

若し樹下に少しく蔭涼に息はゞ
枝葉及び花菓を毀らず
若し親厚に於て少しく惡を作すとも
是人終始樂まれず
一飡の恵も惡報を以てせば
是恩を知らず惡を行ふ人
善菓生ぜず復消滅せん
林の焼かれて焦兀たるが如く
後還つて生長し復故の如し
恩に背くの人は善生ぜず
若し惡人を養ひて百種供へば
終に恩を念ぜず必ず怨を報ひん
譬へば仙人に象依住し
子を生めば卽ち死して仙養ひ活し
長大なれば狂逸して仙人を殺し
樹木屋宇盡く蹋壊するが如く
惡人の恩に背くも亦是の如し
心意輕躁にして暫も停らず
譬へば洞濩の中に樹あるが如し
友に親を修せず返復なし
白氎の甄叔染の如くさも似たり
若し怨を報ひんと欲せば善を加ふべし
惡を以て毀害すべからず
智者は怨を報ふるに皆慈を以てす
天地及び山海を擔負するとも
此擔は乃ち輕く恩に背くは重し
一切衆生を平等に慈む
是を第一最勝の樂と爲す
河津を渡るに安穩に過ぐるが如く
慈等の二樂も亦是の如し
親友を害せざるは是快樂
憍慢を滅除するも亦是樂み
內に德行無くば外憍逸なり
實に知るあるなくんば憍慢を生じ
好みて强に興して諍ひ惡友に親む
名稱損滅して惡聲を得
孤小老者及び病人
新に富貴を失せる羸劣者
貧窮にして財無く國主を失せる
單己苦厄にして所依無き

上の種種因厄せる者に於て
若し他國にて眷屬無く
能く衆の惡を遮りて鬪諍息み
己が邦に在るも衆に輕しめられず
皆來りて親附して瞋り諍はず
世間は富貴の樂甚だ少し
若し衆生を見て皆退失せば
怨敵の力勝るゝも自ら羸弱たらん
自ら察すること是の如く默然として樂め
不信無慚にして言を受けず
瞋恚甚だ多ければ殘害にして惡なり
此の如き人の邊には默然として樂め
逆に諂僞詐幻惑を得る
破戒兇惡にして慮り忍ぶことなく
此人の所に於ては默然として樂め
邪見惡口或は綺語
極大慳貪にして嫉妬を懷く
若し他の所に於て己を知らず
自ら高ぶり憍慢を生ずべからず
衣食を人に仰ぎて自在ならずば

憐愍を生ぜずば仁と名けず
衆の惡罵を得るも忍びて快と爲さば
寧ろ他國に在りて人識らず
若し異國に於ても恭敬を得
卽ち是己が國の親眷屬なり
衰滅苦惱甚だ衆多なり
制して己に由らず默然として樂め
親友旣に少く怙む所無くんば
非法の人の所は貪にして且つ慳
彼惡しき所に於ては默然として樂め
好く苦毒を衆生に加へん
不信强梁にして喜んで自ら高ぶり
是の如き人に於ては默然として樂め
恒に非法を作して信の行なき
妄語無愧にして兩舌を好み
傲慢にして自ら高ぶり深く我を計し
此人の所に於ては默然として樂め
亦種性行を識別することなく
餘の國界に至りて停住し
若し毀罵を得るも皆忍ぶべし

他界に寄住して衣食を仰ぎ
亦上の如く忍辱を生ずべし
乃至下賤來りて己を輕しむるも
他界に在りて惡知友と住し
智者は自ら隱れて覆火の如し
炎は林野に著き皆焚燒するが如く
此を極惡の毀害と名くるなり
若し慈等を修すれば瞋漸く滅せん
恒に惡者に近くは是癡人なり
上の如き事を作すは智者に非ざるなり
鳥の翅を折りて飛ぶこと能はざるが如く
多くの愚小及び無智を以てしても
是義を以ての故に諸の賢哲は
智者は利を得れども心高ぶらず
解する所の義理は實を稱して說く
安樂し利益せんが故に辯を宣ぶ
智者は害を聞くも卒に行はず
其理を明了にして後行ふ
智者は終に身命の爲に
苦樂を以て正法に違はず

若し甚業の爲に快樂を欲せば
若し他界に住して衣食を仰ぎ
諸の是を智者は宜しく忍受すべし
愚小下賤と同じく處するも
猶熾なる火に猛風吹きて
瞋恚は火の如く自他を燒く
瞋恚欲心は智者除けり
未だ曾て共に住せざりしに輒ち親善し
其過を察せずして輒ち棄捨す
若し愚小なくんば智顯れず
智者も愚なくんば亦是の如し
覺了すること能はざる智は力有り
博識多聞にして樂み住することを得
利を失へども下らず愚癡なし
諸有言は爲に惡を遮ぎり
必ず解せしめんが爲に是語を說く
思惟籌量して其實を論じ
是を自ら利し亦他を利すと名く
惡業無理の事を造作せず
終に己の爲に正行を捨てざるなり

智者は慳ならず嫉恚なく
危害至り垂とするも恐怖せず
亦威猛ならず怯弱ならず
此の如き諸の事は智者の相なり
其兩邊を去り中に處して行へ
或時は言ひ教へて王者の如く
或時は熱を現じて熾火の如く
或時は卑を現じて臥草の如く
或時は寂滅して解脱の如く
或時は苦樂の事を堪忍す
自在に能く諸の瞋恚を調へり
或時は恐怖して猶鹿の如く
時と非時と力と無力とを觀じ
忍ぶべからざるを忍ぶ是眞の忍なり
羸弱者に於ても亦忍ぶべし
忍ぶべからざるを忍ぶ是を忍と名く
瞋る人の中に於て常に心淨く
己に勝つ者を忍ぶ怖忍と名く
下劣の者を忍ぶは盛忍と名く
兩石の眼中に著くが如し

亦惡を嚴にせず愚擬なし
終に利の爲に讒を構へざるなり
又下劣ならず正しく中に處せり
威猛は嫌を生じ懦は他の輕しむ
或時は默然として瘂者の如く
或時は寒を作して雪の如く
或は高大を現じて須彌の如く
或時は猛を顯現して王の如く
或時は能く飢渇の苦を忍び
諸の財寶に於て糞穢の如く
或時は安樂に伎樂を縱にし
或時は威猛なること虎狼の如く
能く富貴及び衰滅を觀じ
忍ぶべきを忍ぶは是常の忍にして
富貴强盛にして常に謙忍す
嫌恨者の所に嫌恨せざるは
人の惡を爲すを見て自ら作さざるは
己に等しき者を忍ぶは鬪諍を畏れ
惡罵誹謗も愚は忍はず
能く惡罵と重き誹謗を受くるも

智者は能く忍び花の象に雨るごとし
明智は能く忍ぶこと慧眼に於てす
石損壞せず消滅せず
智者は能く忍ぶこと亦石の如し
此人の實語は瞋るに足らず
彼自ら欺誑すること狂言の如し
若しくは財寶及び諸の利の爲に
若しくは能く財寶の利の爲にせず
猶速疾に惡人を離るべし
人心已に離るれば親むべからず
親むべき友は世間に滿つるも
亦恭敬なく讃歎せず
智者は愚を遠ざけ速に離るべし
喜びて他の過を見て兩舌を作し
諸の衆生を輕賤毀辱し
身業と口と意とを護らざれば
嫉妬する惡人は善心なく
心に熱惱大苦毒を生ぜん
唯智のみ能く遠く他方に至らん
諂曲にして取を耍し慚愧無し

若し惡罵と重き誹謗に於て
猶降雨の大石に於てするが如し
惡言と善語と苦樂の事
若し實事を以て罵辱を見ば
若し虛事を以て罵辱せば
智者は解了せば倶に瞋らず
苦樂惡罵の謗を忍受し
設ひ百千の諸の珍寶を得るとも
樹枝斫らるゝとも拔くべからず
便ち異道に從ひ遠く避け去る
先に敬ひ後には慢りて輕毀し
白鵠の輕く飛び去るに似たり
好みて鬪諍を樂み諂曲を懷き
妄言惡口し亦綺語し
更に痛言を出して心髓に入り
智者は遠離して他方に至らん
他の利と樂及び名稱を見れば
言語善濡なるも意極めて惡しく
人は惡欲を樂み利養を貪り
內清淨ならざれば外も亦然り

智者は速に遠く他方に至らん
憍慢の懐くところ教法なし
慧者は遠く離れて他方に至らん
幷に諸の衣被を得て活路に憑る
猶慈母の一子を救ふがごとし
先づ當に愛を斷ちて瞋を離るべし
自高我憍慢も亦捨つべし
此の如きの友を離れ當に速に遠ざくべし
若しくば一村の爲に一家を捨て
若しくば己身の爲に天下を捨て
若しくば一指の爲に現財を捨て
若しくば正法の爲に一切を捨てよ
法を修行するものは法の擁護
春盛熱して蔭涼を得るが如く
諸の賢智と趣向倶ならば
若し重寶を失ふとも憂と爲さじ
是を堅實なる大丈夫と名く
世間の過惡は速に捨離す
是を雄健なる勝丈夫と名く
人と爲り柔軟にして共に樂を行ふ

若し人恭恪心有ることなくんば
自ら智者なりと謂へども實は愚癡
此處に飲食して臥具を得
當に擁護して其恩を念ずべきこと
愛は能く一切の苦を生長すれば
悉く能く人を將ひて惡趣に至る
富貴と親友と貧賤と
若しくば一家の爲に一人を捨て
若しくば一國の爲に一村を捨て
若しくば正法の爲に己身を捨て
若しくば身命の爲に四支を捨て
正法は蓋の如く能く雨を遮るなり
行法力の故に惡趣を斷ずること
法を修行する者も亦復然り
多く財利を得るも喜と爲さず
常に懃苦するも求めて乞索せず
他に財寶を施して甚だ歡喜し
己が身を安立すること海よりも深し
若し義理を解せば衆事巧にして
諸人歎じて善丈夫と說かん

優波大達は是言を作さく　我今兄に於て倍信敬す
假使苦に遭ひ極めて困厄すとも　終に復諸の惡事を作さざらん
若しは死し若しは活き財産を得　及び財産を失ふも惡を造らず
兄今當に知るべし我事へ奉らんことを　願くば持戒を以て死を取り
犯戒を以て生を取らざらん　何の故に當に一生を爲すべく
而も放逸にして惡行を作すべきや　生死の中には放逸莫し
我生死に於て不善を作し　惡友に遭値ひて非法を造り
善友に遇ふて斷除することを得たり　佛は宿命智に入り了り
諸の比丘に告げて是本偈を說きたまふ　爾時の大達は是我身にして
優波大達は是阿難なり　當に知るべし爾時の屯度脾は
卽ち是提婆達多の身なり　比丘當に是學を作して知るべし
是を集法總攝說と名く　宜しく廣く愼み行ふて恭敬すべし
諸の比丘僧は是法を修せよ。

三十　提婆達多が佛を毀傷せんと欲せし因緣

佛王舍城に在して、提婆達多に告げたまはく。汝は如來に於て過患の心を生ずること莫れ、自ら滅損を取りて不安の事を得、自ら共苦を受けんと。諸の比丘の言く、希有なるかな世尊よ、提婆達多は如來の所に於て常に惡心を生ぜり。世尊は長夜に慈心もて憐愍し柔軟に共に語りたまふはと。佛言はく、但今日のみならず、乃往過去に、迦尸の國波羅㮈城に大龍王あり、名を[一]瞻蔔となせり。常に時雨を降らし穀をして成熟せしむ。十四日十五日の時は人の形に化作して五戒を受持し、

【一】梵語チャンパカの音譯にして花に芳香ある樹名よりとれり。

布施し法を聽けり。

時に南天竺國に呪師あり來り箭を竪て呪を結びて瞻匐龍王を取る。時に天神は迦尸王に語りて言く、呪師あり瞻匐龍王を將ひ迦尸國を去れりと。王即ち軍衆を出して往き之を逐ひしかば、彼婆羅門便ち復呪を結し、王の軍衆をして都て動くこと能はざらしむ。王大に錢財を出して龍王を贖ひ取れり。

婆羅門は第二に更に來り呪して龍王を取りしかば、諸の龍の眷屬は雲を興し雨を降し雷電霹靂して婆羅門を殺さんと欲せり。龍王は慈心を以て諸の龍衆に語らく、彼命を害すること莫れと。善く好く慰め喩して彼を還り去らしめたり。

第三に復來れり。時に諸の龍等は即ち之を殺さんと欲せしに、龍王は遮り護りて殺さしむることを聽さず。即ち放ちて去らしめたり。

爾時の龍王とは今の我身是なり。爾時の呪師とは提婆達多是なり。我れ龍と爲りし時尚能く慈心をもつて數數救濟せり。況や今日に於て當に慈ならざらんや。

三十一　共命鳥の緣

佛王舍城に在せしに、諸の比丘は佛に白して言さく。世尊よ、提婆達多は是如來の[一]從弟なるに、云何してか常に佛を怨み害せんと欲するやと。

佛言はく、但今日のみならず、昔雪山の中に鳥あり共命と爲す、一身二頭なり。一頭は常に美しき菓を食し身に安穩を得せしめんと欲し。一頭は便ち嫉妬の心を生じて是言を作さく、彼常に云何してか好美の菓を食するや、我は曾て得ずと。即ち毒の菓を取りて之を食し、二頭倶に死せしめたり。

【一】提婆達多は世尊の從弟なること諸經の定說なり此經に如來の弟とせるは云何か今私に從の字を挿入せるのみ。

爾時に甘き菓を食せし者は我身是なり。爾時に毒の菓を食せし者は提婆達多是なり。昔我と一身を共有せしに猶惡心を生じけり。今我［從］弟と作りとも亦復是の如し。

三十二　白鵝王の緣

佛王舍城に在せしが、提婆達多は山を推し佛を壓し、護財といふ象を放ちて佛を蹈さしめんと欲し、惡名流布せり。提婆達多は衆人の前に於ては、佛に向ひて懺悔し如來の足を鳴らし。衆人無き時は比丘の中に於て惡口して佛を罵れり。

諸人皆言く、提婆達多は佛に向ひては懺悔し、心極めて調順なるに故無くして此惡名の流布することを得たりと。諸の比丘言く、希有なるかな世尊よ、提婆達多は甚だ能く諂僞にして、衆人の前にては調順して佛に向ひ、屛處に於ては惡心にて佛を罵れりと。

佛言はく、但今日のみならず、乃往過去の時に蓮華池あり、多くの水鳥あり中に在りて住しき。時に鶴雀あり池中にありて徐に歩き脚を擧ぐ。諸の鳥皆言く、此鳥は善行にして威儀庠序として水性を惱さずと。

時に白鵝ありて偈を說きて言く。

脚を擧げて徐に歩み　音聲極めて柔軟なれば
世間を欺き誑せり　誰か諂詭を知らざらんや

鶴雀語りて言く、何爲ぞ此語を作すや、來れ共に親善を作さんと。白鵝答へて言く、我汝が諂詭を知れりと。終に親善せざりき。

汝知らんと欲せば、爾時の鵝王は即ち我身是なり。爾時の鶴雀とは提婆達多是なり。

三十三　大龜の因緣

佛王舍城に在せしに、提婆達多は心常に惡を懷き、世尊を害せんと欲し、乃ち五百の善く射る婆羅門を雇ひ、弓箭を持たしめて世尊の所に詣り、弓を挽きて佛を射さしめしに、射る所の箭變じて拘物頭華[一]・分陀利華[二]・波頭摩華[三]・優鉢羅華[四]と成りたり。五百の婆羅門是神變を見て大に怖畏し、即ち弓箭を捨て、佛を禮し懺悔し一面に在りて坐す。佛爲に法を說き、皆須陀洹道を得たり。復佛に白して言さく、願くは我等に出家して道を學ぶことを聽せと。佛言はく、善來比丘と、鬚髮自ら落ち法服を體に著け、重て爲に法を說きたまひしかば阿羅漢道を得たり。

諸の比丘は佛に白して言さく、世尊の神力は甚だ希有と爲す。提婆達多は常に佛を害せんと欲せり、然るに佛は恒に大慈を生じたまへりとはと。

佛言はく、但今日のみに非ず、過去の時に於てもなり。波羅㮈國に一商主ありき。不識恩と名けたり。五百の賈客と共に海に入り寶を採る。寶を得て還り返らんとせしに、迴澓の處に到り水羅刹に遇ひて其船を捉へられ、前むことを得ること能はず。衆の商人等極めて大に驚怖し、皆共に唱へて言く、天神地神日月諸神よ、誰か能く慈愍して我厄を濟へと。

一大龜あり背の廣さ一里、悲愍を生じて來り船の所に向ひ、衆人を負載して即ち海を渡ることを得たり。時に龜小しく眠れり。不識恩は大石を以て龜頭を打ち殺さんと欲す。諸の商人言く、我等は龜に難を濟はれ命を活すことを蒙れり。之を殺すは不祥にして恩を識らざるやと。不識恩の曰く、我停りて飢急なり、誰か爾恩を問んやと。輒便龜を殺して其肉を食へり。即日夜中に大群象あり衆人を蹋み殺しぬ。

爾時の大龜は我身是なり。爾時の不識恩は提婆達多是なり。五百の商人とは五百の婆羅門出家し

【一】梵語クムツダの漢訛音譯にして黃色睡蓮なり。
【二】梵語プンダリーカの漢訛音譯にして白蓮華なり。
【三】梵語パツマの漢訛音譯にして紅蓮華なり。
【四】梵語ウットパラの漢訛音譯にして青蓮華なり。

て學び得道せる者是なり。

我往昔に於て彼厄難を濟ひ、今復其生死の患を救けり。

三十四　二輔相讒構の緣

佛王舍城に在せしに、提婆達多は種種の因緣を作して、佛を殺すことを得んと欲せり。然れども得ること能はざりき。

時に南天竺國に婆羅門あり來る、善く呪術を知り毒藥を和合す。提婆達多は婆羅門の所に於て卽ち毒藥を合せ、以て佛の上に散せしが、風此藥を吹き反つて己が頭上に墮ち、卽便ち悶絕して地に躃れ死せんと欲す、醫も治すること能はざりき。

阿難は佛に白して言さく。世尊よ、提婆達多は毒を被り死せんと欲すと。

佛は憐愍の故に爲に實語を說きたまはく。我菩薩として成佛せしより已來、提婆達多に於て常に慈悲を生じ惡心なき者なり。提婆達多は毒に自ら當に滅すべしと。是語を作し已れるに、毒卽ち消滅しき。

諸の比丘言く、希有なるかな世尊や。提婆達多は恒に惡心を如來の所に起せり。如來は云何してか猶故のごとく之を活したまふやと。

佛言はく、但今日のみ惡心我に向ふに非ず、過去も亦爾り。時に佛に問ふて言く、惡心佛に於てすとは其事云何ぞや。

佛言はく、過去の世、迦尸國中に波羅㮈城ありて、二輔相ありき。一を斯那と名け、二を惡意と名く。斯那は常に法に順ひて行ひ、惡意は恒に惡事を作し、好んで讒構を爲す。而して王に語りて言く、斯那は逆事を作さんと欲すと。王卽ち收閉せり。諸天善神は虚空の中に於て聲を出して言

く。此の如き賢人は實に過罪なし、云何して拘繋するやと。諸の龍は爾時に亦是語を作せり。群臣人民亦是語を作せり。王便ち之を放つ。

第二に惡意は王の庫藏を劫め斯那の舍に著く。王亦信ぜずして之に語りて言く、汝は彼を憎嫉して横に此事を作せるならんと。王言く、此惡意を捉へ斯那に付與し仰ぎて之を斷ぜしめよと。斯那は即ち惡意に敎へて王に向ひ懺悔せしむ。惡意自ら罪あるを知り毘提醯王の所に向ひ、一寶篋を作りて二惡蛇を盛り毒の具足せるを見る。毘提醯王をして使を遣し彼國に送り與へしめて、國王幷に斯那二人共に看よ、餘人に示すこと莫れと。王は寶篋を見るに極めて嚴飾を以てしたれば心大に歡喜し、即ち斯那を喚び共に發き看んと欲す。斯那答へて言く、遠來の物は自ら看るを得ず、遠來の菓食は即ち食するを得ず。何を以ての故となれば、彼に惡人あり、或は能く惡を以て來り中傷せられんと。王言く、我必ず看んと欲すと。慇懃に三諫むれども、王は語を用ひず。復王に白して言く、臣の語を用ひずば王自ら之を看よ、臣は看ること能はずと。王即ち發き看るに兩眼盲冥となり物を見ず。斯那憂苦し愁悴して死せんと欲せしも、人を遣して四出せしめ諸國を遍歴して遠く良藥を覓めしめ、既に好き藥を得以て王の眼を治し、平復して故の如し。

爾時の王とは舍利弗是なり。爾時の斯那とは我身是なり。爾時の惡意とは提婆達多是なり。

三十五　山鷄王の緣

佛王舍城に在せしに、提婆達多は佛の所に往き至りて是言を作さく。如來今は閑靜に住したまふべし、此大衆を以て我に付囑せよと。佛言はく、唾を食ふ癡人、我尙諸の大衆等を以て舍利弗・目犍連にすら付囑せざるに、云何ぞ乃ち汝に付囑すべけんやと。提婆達多瞋罵して去れり。

諸の比丘言く。世尊よ、提婆達多は種種の苦惱を佛に作さんと欲せり。又多く方便して如來を欺

を誑せりと。

佛言はく、但今日のみならず、過去世に於ても、雪山の側に山雞王あり、多くの雞衆を將ゐて之に隨從せり。雞冠極めて赤く身體は甚だ白し。諸の雞に語りて言く、汝等城邑聚落を遠く離れて人民の爲に噉み食はるゝこと莫れ、我等は諸の怨嫉多し、好く自ら愼み護れと。

時に聚落の中に一猫子あり、彼に雞ありと聞き、便ち往き之に趣き、樹の下に在り徐に行き低く視、而して雞に語りて言く、我は汝の婦となり、汝は我夫とならん、而して汝の身形は端正にして愛すべし、頭上の冠は赤く身體は倶に白し、我相ひ承けて事へば安穩快樂ならんと。

雞は偈を說きて言く。

猫子は黃眼なる愚小の物　事に觸れて害せんと懷ひ噉食を欲す
此の如き婦を畜へて　壽命安穩を得る者あるを見ず。

爾時の雞は我身是なり。爾時の猫は提婆達多是なり。昔過去に於ても我を誘ひ誑さんと欲し、今日も亦後我を誘ひ誑さんと欲するなり。

三十六　吉利鳥の緣

佛王舍城に在せしに、爾時提婆達多是念言を作さく、佛には五百の青衣鬼神ありて恒常に侍衞せり。佛は十力ありて百千の[一]那羅延も及ぶ能はざるところ、我今害することを得る能はず、當に還つて事へ奉り、其要脈を覩て之を傷害せば乃ち殺すことを得べけんと。便ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・大衆の中に於て佛に向ひ懺悔す。而して是念を作さく、我懺悔を受けたまはば方便を作すを得。我悔を受けたまはずば、如來をして惡名を流布せしむるに足らんと。便ち佛に白して言さく、世尊よ、我懺悔を受けたまへ、我が閑靜の處に於て自ら其志を修せんと欲すと。佛言はく、法

【一】梵語ナーラヤナの漢訛音譯にして大力神名なり。

は諂誑無し、諸の諂誑する者は法有ることとなきなりと。外道六師皆言く、提婆達多は好く佛に向ひ懺悔せしに、佛懺悔を受けざるなりと。諸の比丘言く、提婆達多は諂曲して佛に向ふと。
佛言はく、但今日のみに非ず、過去久遠、波羅㮈國に王あり、梵摩達と名く、制を作り殺を斷ぜり。時に獵師あり仙人の衣服を著て諸の鹿鳥を殺す、人知る者無し。吉利鳥[二]あり諸人に語りて言く、此大惡人は仙人の衣を著ると雖も、實は是獵師なり常に殺害を行へるも人知らずと。衆人皆吉利鳥を信ぜしが、實に其言の如し。
爾時の吉利鳥とは我身是なり。爾時の獵師とは提婆達多是なり。爾時の王とは舍利弗是なり。

三十七　老仙の縁

佛王舍城に在せり。爾時に阿闍世王は提婆達多の爲に日に五百釜の飯を送りしかば、多く利養を得たり。諸の比丘皆世尊に白して言く、阿闍世王は日に提婆達多の爲に五百釜の飯を送ると。
佛言はく、比丘よ、提婆達多の利養を得る事を羨む莫れと。卽ち偈を說きて言く、

芭蕉は實を生ずれば枯る　　蘆竹葦も亦然り
駏驉は懷姙すれば死す　　騾驢も亦復然り
愚は利養を貪りて害す　　智者の嗤笑する所なり

是偈を說き已りて諸の比丘に告げて言く、提婆達多は但今日のみ利養の爲に害せられ、我を誹謗すに非ず、過去も亦爾りと。比丘は佛に問ふて言く、過去の事とは其義云何。
佛言はく、往昔波羅㮈國仙山の中に二仙人ありき。其一の老ひたる者は五神通を得。其一の壯なる者は竟に所得なし。時に老仙人は卽ち神力を以て[一]欝單越に往き、成熟せる粳米を取りて來り共に之を食し。復閻浮提に至りて閻浮樹の菓を取り、亦來り共に食し。忉利天に到り天の[二]須陀味を

【二】梵語チーリーの漢訛音譯にして森鶯の一種なり。

【一】梵語ウッタラクルの漢訛音譯にして須彌山四洲の一北洲なり。
【二】梵語シュッダの漢訛音譯にして白の義、天の甘露味食なり。

取り來り共に之を食せり。少仙人是を見已りて心に悕仰を生じ、老者に白して言く、願くば我に五神通を修することを教授せよと。老仙人言く、若し好心あらば五神通を得、必ず利益あらん。若し好心なくんば反つて惡害を爲さんと。猶懃に啓し請ひ、唯願くは我に教へよと。

時に老仙人は便ち五通を敎へ、尋ひで卽ち獲得せり。旣に五神通を得たりしかば衆人の前に於て種種の神足を現ぜり。是に於て已後大に多稱と利養とを得、乃ち老者に於て嫉妬心を生じ、處處にて誹謗せしかば卽ち神足を退失せり。

諸人聞き已りて是言を作して曰く、老仙人は宿舊にして有德なり。是壯仙人は橫に誹謗を生じ、便ち皆之を瞋れり。城門の下遮りて入らしむるを聽るさざりしかば、便ち利養を失せり。知らんと欲せば、爾時の老仙人とは我身是なり。爾時の壯仙人とは提婆達多是なり。

三十八　二估客の因緣

佛王舍城に在しき。爾時に諸の比丘等、佛語を用ふる者は皆涅槃天人の道を得。提婆達多の語を用ふる者は悉く地獄に墮して大苦惱を受けんと。

佛言はく、但今日我敎を奉ずる者大利益を得、提婆達多の語を用ひば大苦を獲るに非ざるなり。往昔も亦爾り、過去の世に二賈客あり。俱に五百の商人を將ひて曠野の中に到る。夜叉鬼あり年少のものに化作し、好き衣服を著頭には花鬘を戴き、琴を彈じて行き賈客に語りて言く、疲れ極らずや、是水草を載せて竟に何の用に爲すや。近く前頭に在りて好き水草あり、我に從ひ去り來れ、當に汝に道を示すべしと。一賈客主尋ひで其言を用ひ、我等今載せし所の水草を棄て卽便ち輕くして行くべしと。前に在りて去る。一賈客言く、我等今は水草を見ず、愼みて擲げ棄つること莫れと。前に水草を棄てたる者は渇乏して死し盡せしが、之を棄てざりし者は所在に達到せりとぞ。

爾時水草を棄てざりし者は我身是なり。水草を棄てし者は提婆達多是なり。

三十九　八天次第に法を問ふの縁

昔佛世に在せしとき。夜分中に於て忽ち八天あり次第して來り世尊の所に至る。其初めて來りし者は容貌端政にして光一里を照し、十天女あり以て眷屬と爲せり、佛所に來詣して至心に頂禮し却つて一面に在り。佛天に告げて曰く、汝福を修するを以て天の身を受くることを得、五欲をもつて自ら娛み快く安穩を獲たるかなと。時に此天卽ち佛に白して言く、世尊よ、我れ生れて天上に處すと雖も、心常に憂ひ苦めり。所以は何となれば、我先身に修行の時父母師長沙門婆羅門に於て、忠孝を爲し心に恭敬を生ずと雖も、然も其所に於て慇懃に恭敬禮拜し迎へ來り送り去ること能はざりき。是業緣を以て果報實に少きこと餘の天に如ず。如ざるを以ての故に自ら責め修行するも滿足すること能はずと。

復一天あり、容貌と身の光及び其眷屬、十倍も前のものより勝れるが佛の所に來至りて頭面に足を禮し却つて一面に在り。佛は天に告げて曰はく、汝天上に生れて快く安樂を得たりやと。天は佛に白して言く、世尊よ、我生れて天上に處すと雖も亦常に憂苦せり。所以は何となれば、我前世に修行の時、父母師長の所、沙門婆羅門に於て忠孝の心を生じ、恭敬禮拜すと雖も、然も爲に床坐氍氀敷具を施すこと能はざりしかば、是業緣を以て、今果報を獲ること餘の天に如ず。如ざるを以ての故に、自ら責めて因を修するも滿足すること能はざるを以てなりと。

復一天あり、形貌光明及び眷屬十倍も前のより勝れたるもの佛の所に來至し、頭面に足を禮し却つて一面に在り。佛は天に告げて曰はく。汝は天の身を受けて快く安樂を得たりやと。天は佛に白して言さく、我生れて天宮に處すと雖も、常に憂惱を懷けり。所以は何となれば、我前身に復善く

父母師長沙門婆羅門に於て、忠孝恭敬禮拜し爲に床敷を施すと雖も、然も其所に於て廣く餚膳飲食を設け以用て供養すること能はざりしを以て、今報果を得るも餘の天に如ず、如ざるを以ての故に、心自ら悔み責め因を修するも具せず、是故に憂惱せりと。

復一天あり容貌光明及び其眷屬十倍も前より勝るゝもの佛の所に來至り、頭面に足を禮し却つて一面に在り。佛は天に告げて曰はく、汝は天の身を受けて快く安樂を得るやと。天は佛に白して言さく、我天に生ずと雖も心常に憂惱せり。所以は何となれば、我過去にて父母師長沙門婆羅門に於て、忠孝恭敬禮拜し爲に敷具を施し及び飲食を以てすと雖も、然も法を聽かざりしを以て、是因緣にて今果報を獲ること餘の天に如ず。如ざるを以ての故に常に自ら刻責して因を修するも滿たず、是の故に憂惱せりと。

次に復一天あり、身の色光明及び其眷屬十倍も前より勝れたるもの、佛の所に來至りて、頭面に足を禮し、却つて一面に在り。佛は天に告げて曰はく、汝は天の身を受けて快く安樂を得たりやと。天は佛に白して言さく、我天に生ると雖も心常に憂惱せり。所以は何となれば、我前世にて君父母師長沙門婆羅門に於て、能 忠孝恭敬禮拜し敷具飲食せしかども、而も法を聽きて義を解せざりしを以て、解せざりしを以ての故に、今果報を獲ること餘の天に如ず。如ざるを以ての故に、心常に悔み責め因を修するも滿たず。是故に憂惱せりと。

次に一天あり、身の色光明及び其眷屬十倍も前より勝れたるもの佛の所に來至りて、頭面に足を禮し却て一面に在り。佛は天に告げて曰はく、汝は天の身を受け快く安樂を得るやと。天は佛に白して言く、我生れて天に處すると雖も、心常に憂惱せり。所以は何となれば、我前世に修行の時、能く君父母師長沙門婆羅門に於て忠孝恭敬禮拜敷具飲食し、法を聽き義を解すると雖も、然も復說の如く修行すること能はざりき。是業緣を以て今果報を得れども餘の天に如ず。如ざるを以ての故

に深く自ら悔ひ責めて因を修するも滿たず。是故に憂惱せるなりと。

次に一天あり、容貌光明及び其眷屬十倍前より勝れるもの佛の所に來至り、頭面に足を禮し却て一面に在り。佛は天に告げて白はく、汝は天の身を受けて快く安樂を得るやと。天は佛に白して言さく、我今日に於て天宮に生ずることを得、五欲をもつて自ら娛み、所須の物は念に應じて輙ち至り、眞實快樂にして諸の憂惱なし。所以は何となれば、我前世に因を修する時、父母師長沙門婆羅門に於て、忠孝恭敬敷具飲食し、法を聽きて能く其義を解し、說の如く修行せるを以て、是因緣を以て天の果報を受け、身形端正にして光明殊妙、眷屬衆多にして餘の諸天より勝れたり。此行を修せしを以ての故に果の滿足を得、滿足を以ての故に最勝の果報を得、勝れたる果報の故に一切の諸天及ぶ者あることなし、及ぶ者なきを以て心快樂を得るなりとぞ。

雜寶藏經卷第三

雜寶藏經卷の第四

四十　貧人麨團を以て施し現に報を獲るの縁

昔一人あり、家に居り貧窮なりしが、人の爲に肆力して麨六升を得、齎し持ち家に歸り、妻息を養育せんとせしが、會中路に於て一道人を見る。鉢を執り錫を捉へ行き求めて乞食せり。即ち心念を生ずらく、彼沙門は形貌端正にして、威儀庠序なり、甚だ恭敬すべし、一食を施すを得ば亦快からずやと。

爾時に道人は其心の心念を知り、貧人に隨逐して一水の邊に至れり。貧人即便ち道人に語りて言く、我今麨あり意相ひ施さんと欲す、頗し能く食するや不やと。道答へて言く、唯得んのみと。即ち水邊に於て其が爲に衣を敷き道人を坐せしめ、一升の麨を和へ用て一團と爲して之を與へ、是念を作さく、若し此道人是淨き持戒得道の人ならば、我をして現に一小國王と作さしめよと。道人麨を得て、貧人に語りて言く、何を以て極めて少なるや、何を以て極めて小なるやと。此人謂へり、此道人は大食なりと。復一升を和し用て一團と作し、與へ願言して言く、若し此道人是淨き持戒得道の人ならば、我をして二小國王と作ることを得せしめよと。道人復言く、何を以て極少なるや、何を以て極小なるやと。貧人念じて言く、唯是道人は極めて多食に似たり、如許かの麨を與へても猶少小たりと嫌へり。然り我已に事を請ひしかば須からく供給すべしと。復二升の麨を和へ用て一團と爲して之を與へ、又念言を作さく、若し此道人是淨き持戒得道の人ならば、我をして四小國を領する王たることを得せしめよと。道人復言く、何を以て極少なるや、何を以て極小なるやと。餘二升ありしかば盡く和へて一團と作し、道人に與へ、又願を作して言く、今此道人若し是清淨持戒の人ならば、我をして波羅㮈國王と作ることを得、四小國を領することを得、見諦道を獲せ

しめよと。道人は麨を得て少小を嫌ふが故に、貧人白して言く、唯願くば且く食せよ、若し足らずんば當に衣裳を脱ぎ飲食に貿へ取り共に相ひ供給すべしと。道人卽ち食しぬ。唯一升を盡し餘は還つて主に歸せり。貧人問ふて言く、尊者先に麨の極少小なるを嫌へり、如今云何してか盡さしめざるやと。道人答へて言く、汝初め我に一團麨を與へし時、正に一小國王と作らんと求めし故に、是を以て我言く、汝の心願少しと。第二團麨のとき、正に二小國王と作ることを得んと願へり、是を以て我言く、汝の願少小なりと。第三團麨の時のとき、正に四小國王と作らんことを得んと求む、是を以て我言く、汝の心願小なりと。第四團麨のとき、正に波羅㮈國王と作り、四小國を領せんことを求め、我後に見諦の道の果を得せしめよと。是を以て我言く、汝の願少小なりと。足らざるを以て少小なりと慊はざりしなりと。

爾に貧人自ら疑念を生じ、我をして現に五國に王たることを得せしめば、此事小ならず。恐くは實なきのみと。又復思惟すらく、能く我心を知れり、必ず是聖人ならん、是大福田は我を誑さじと。道人知り已りて、卽ち其鉢を擲げて虛空の中に著き、後に隨ひて飛び去り、大身を化作して虛空に滿つ。又化して小と作り猶微塵の如し、一身を以て無量の身と作り、無量の身を以て合して一身と爲せり。身上より水を出し、身下より火を出し、水を履むこと地の如く、地を履むこと水の如し。十八變を作して貧人に語らく。好く大願を發せり疑の慮あること莫かれと。卽ち身を隱し去れり。

時に此貧人波羅㮈城に向ひて道中に於て輔相を見る。輔相見已りて、諦に形相を視て之に語りて言く、汝は某甲の子に非ずやと。答へて言く我は是なりと。問ふて言く、何ぞ襤褸を以て乃至爾るやと。答へて言く、少しく恃怙を失ひたりしかば居家喪盡し人の見看なし、是を以て困苦して襤褸此の如しと。輔相卽ち波羅㮈王に啓し、王の親しむ所の某甲の子今門外に在り、極めて窮悴を爲

せりと。王尋いで勅あり將ひ前しめ、其委曲を問ひ是親める所なるを知れり。王即ち告げて言く、好く我に親近せよ、愼みて遠く離るゝこと莫れと。却後七日王病し命終せり。諸臣謀りて言く、王は繼嗣なし唯此窮子のみ、是王の親むところ、宜しく共に推擧して波羅㮈國王と作すべしと。四國を統領せしが然る後虐暴なりき。先の彼道人虛空の中に於て王の殿前に當り結跏趺坐して之に語りて言く、汝昔願を發し且諦を得んと求めたり。今日云何してか乃ち衆の惡を造り、本と乖違せるや。又復王の爲に種種の法を說く。王は法を聞き已りて、先の惡を作せしを悔ひ、過を改め慚愧し、精專に道を行ひ須陀洹を得たりけり。

四十一　貧女兩錢を以て布施し卽ち報を獲るの緣

昔耆闍山中に諸の賢聖隱居せる衆の僧多かりき。諸方の國土は彼山名を聞き、供養する者多し。一長者あり諸の眷屬を將ひ往きて供養を送れり。一貧窮乞索の女人あり、是念を作して言く、今諸の長者は供を送り山に詣づ、必ず會を作さんと欲するならん、我當に往き乞ふべしと。便ち山中に向ひ、旣に山に到り已りて、向の長者が種種の饌を設け衆僧に供養せるを見、私に思惟すらく、彼人は先世に福を修して今日富貴なり。今復重ねて功德を作さば將に勝れなん。我先の世に作さざりしかば今世貧苦なり。今若し作さずんば未來轉劇しからんと。此を思惟し已りて啼哭して樂まず。又自ら念言すらく、我曾て糞中にて兩錢を拾得、恒常に寶として惜めり。以て乞ひ索めて意の如くたらざる時を俟ちて、當に飮食に貿へ用て自ら存活すべしと。今當に持以て衆僧に布施すべし、一二日を分ち飮食を得ざるも死すること能はじと。僧の食訖るを伺ひ此兩錢を捉り卽便ち布施す。彼山の僧法は人施す者あらば[一]維那は僧前に立ちて呪願を爲す。爾時に當りて上座は維那の呪願

【一】梵語ヴヰナの漢訛音譯にして知事の義、又知堂とも曰ふ、寺內の事務を司る僧の職名なり。

を聽さずして自ら呪願を爲せり。諸の下座等深く慊心を生じて此念を作さく。彼乞女の兩枚の小錢を得て、上座自ら輕しく其呪願を爲せり、常に錢を見るが如く何を以て爾らずやと。上座尋ひで時に半分の食を留めて此女人に與ふ。諸人上座の多く女に與へらるゝを見て人多く此に與へたり。女は時に重く擔ふ飲食を得極めて大に歡喜し、我適布施し今以て報を得たりと。卽ち飲食を擔ひ還り山を出で去り、一樹の下に到り眠り臥して止息したりき。

會王の大夫人亡なりてこのかた七日なるに値ふ。王は使者を遣し國界を按行せしめ、誰か福德ありて夫人と爲るに應ぜるやと。相師占ふて言く、此黃雲蓋の下必ず賢人あらんと。卽ち共に相ひ將ひて彼樹の下に至り彼女人を見る、顏色潤澤にして福德の相あり、樹は曲りて蔭を爲し光影移らざりき。

相師の言く、此女人の福德は夫人となるに堪へたりと、卽ち香湯を以て沐浴し、夫人の衣服を與ふるに大ならず小ならず身と相ひ稱へり。千乘萬騎左右に導き從ひ、將に來り宮に至る。王見て歡喜し心に敬重を生じ、是の如くすること數時なりけり。

私に自ら念言すらく、我是富福の緣を得たる所以は錢を施すを以ての故なり。彼衆僧は我爲に大重恩あらしめたりと。我先に斯賤し、王に拔擢せられて人次と爲ることを得たり。我に彼衆僧の恩を報ずることを聽せと。王の言く、意に隨へと。夫人卽時車に飲食及び珍寶を載せて彼山に往き到り、僧に食を施し訖り寶を以て布施せしが、上座起たず維那を遣して呪願せしめ自ら呪願せざりき。王夫人の言く、我昔兩錢にて我爲に呪願せられしに、今車に珍寶を載するも我爲に呪願せられずとはと。諸の年少の比丘皆上坐を慊ふ。先に貧女人たりしに兩錢を以て布施せしに其が爲に呪願し、今の王夫人車に珍寶を載すも呪願を爲さず、老耄の爲なりやと。

爾時に上座は卽ち王夫人の爲に正法を演說し語りて言く、夫人よ、心に念ひ我を慊ふか、先に兩

錢を以て施せし時我爲に呪願し、今車に珍寶を載するも呪願を爲さずと。我佛法の中には珍寶を貴ばず唯善心を貴ぶたり。夫人よ、先に兩錢を施すの時は善心極めて勝れたり。後に珍寶を施すに吾我貢高なり、是を以て我今呪願を與へざるなりと。年少の道人も亦我を懐ふこと莫れ、汝當に深く出家の心を解すべしと。諸の年少の道人は各自ら慚愧し、皆須陀洹道を得たりき。王の夫人も法を聽き慚愧し、歡喜して亦須陀洹道を得、法を聽き已訖り禮を作して去にけり。

四十二　乾陀衛國の畫師罽那は食を設けて報を獲るの緣

昔[1]乾陀衛國に一畫師あり、名を[2]罽那と曰へり。三年客作して三十兩金を得、家に還歸せんと欲して、他の[3]般遮于瑟を作すを見、維那に問ふて言く。一日會を作さば幾許を用すべきやと。維那答へて言く、三十兩金を用ひば一日の會を得と。即ち自ら念ふて言く、我先の身は福業を種ゑざりしに由るが故に、此報を受け傭力し自活せり。今福田に遭へり云何してか作さざらんやと。

即ち維那に語らく、請ふ弟子の爲に椎を鳴らし僧を集めよ、我會を設けんと欲すと。會を設け已訖りて踊躍歡喜し、即便ち家に歸り、既に家に到りぬ。

其婦問ふて言く、三年客作して錢財在られしやと。其夫答へて言く、我得しところの財は今已に舉げて堅牢なる藏の中に著けりと。婦時に問ふて言く、堅牢の藏とは今何の許にありやと。夫の言く、乃ち僧中に在りと。婦時に懐ひ責め、即ち親里を集め、其夫主を縛りて[4]斷事の人に詣りて是言を作さく。我母と子とは貧窮辛苦して衣も無く食も無し、而るに我夫主は財を得しも餘に用ひて擔ひ來り歸らず、請ふ所以を詰られよと。

時に斷事の人は其夫に問ふて言く、何を以て爾るやと。我身は電光の如く照曜すること久しからず、亦朝露の如く須臾に則ち滅せん。是に由りて恐懼し深く自ら念ふて言く、我前身に福業を作さ

【一】梵語ガンダーラワスツの漢訳音譯にして北印度今のペシャワル方なり。

【二】梵語カンナの漢訳音譯にして草花の名より字せり、現時我國にも多く栽培せられたり。

【三】梵語パンチャワルシャの漢訳音譯にして五年大會なり、五ケ年目に一度僧侶の大集會をなすに名く。

【四】斷事とは裁判官のことなり。

ざりしに緣り、今窮苦に遭ひ衣食困乏す。故に彼[五]弗迦維城中に般遮會を作すを見るに因り、衆僧清淨なりしかば心に歡喜を生じ、敬信内に發し卽ち維那に問はく、幾許の物を得ば一日の食を供せんやと。維那答へて言く、三十兩金を得ば一日を供ふることを得べしと。我三年の中に作して得しところの物、卽ち維那に與へ衆僧の爲に一日の食を作らしめたりと。

時に斷事の人是語を聞きて、心に歡喜を生じ、其人を憐愍し、己が衣服瓔珞及以び鞍馬幷に諸の乘具を脱ぎ、悉く罽那に施し、卽ち一村落を分ちて之を賞し封ぜりとぞ。華報此の如く、其果は後に在らんかな。

四十三　罽夷羅夫婦自ら賣りて會を設け現に報を獲るの緣

昔一人あり[一]罽夷羅と名く、夫婦二人にて貧窮し理極り傭はれ賃して自活せり。他の長者悉く寺中に往き、大施會を作せるを見て、家中に來り歸り婦と共に止宿し、頭は婦の臂を枕とし自ら自惟して言く、我前身に福を作さざりしに由るが故に今日貧窮せり。彼長者は先身に福を作せしが如く、今も亦福を作せり。我今福なく將來の世に唯轉た苦劇しからんと。是念を作して涕泣し桀まず、淚婦の臂に墮ちぬ。婦は夫に問ふて言く、何を以て落淚するやと。答へて言く、他は福を修して常に快樂を得、自は鄙しく貧賤にして以て福を修することなし、是を以て落淚するなりと。婦の言く、落淚するも何ぞ益せんや、我身を以て他人に賣り與へ、財を取りて福を作すべしと。夫の言く、若し當に相ひ賣るべくんば、我身は云何にして自ら存活することを得んやと。婦の言く、若し活きざるを恐れて出でられずんば、我今君と俱共に自ら至りて功德を修せんと。是に於て夫婦便ち共に相ひ將ひて一富家に至り、而して之に語りて言く、今我夫婦此賤しき身を以て請ふ金錢に貿へよと。主人問ふて言く。幾錢を得んと欲するやと。答へて言く、十金錢を得んと欲すと。主人言

[五]　梵語ブックハーラにして玄奘は捕喝國或は中安國なり、古の西域方にして今のアフガニスターン國のブッカ地方なり。

[一]　梵語カピラの漢訛音譯ならんか。

く、今汝に錢を與へんも却つて後七日我に償ふことを得ずは、汝夫婦を以て卽ち奴婢と爲さんと。言にて契り以て定む。

錢を齎し往詣して彼塔寺に至り施設して會を作し、夫婦二人自ら共に米を搗き、相ひ勸め勵みて言く、今日我等自ら力を出して福業を造り、後他家に屬するも豈に意に從んやと。是に於て晝夜懃に會具を辦じ六日頭に到り會を作すに垂んとす。彼國主亦會を作さんと欲するに値ひ、來り共に日を諍へり。衆僧皆言く、窮者を受くるを以て終に移すことを得ずと。國主聞き已りて、是言を作して曰く。彼何たる小人ぞや、敢て能く我と共に會日を諍ふやと。卽ち人を遣して罽羅に語らしめ、汝は我に日を避けよと。罽羅答へて言く、實に相ひ避けずと。是の如く三反、辭を執ること初の如し。王は所以を怪しみ、自ら僧坊に至り彼人に語りて言く、汝今何を以て後日に作さずして、我と共に日を諍ふやと。答へて言く、唯一日自在なるのみ、後は他家に屬して復作すことを得ずと。王卽ち問ふて言く、何を以て得ざるやと。自ら賣れる者、自ら惟ふに先身に福業を作さざりしかば今日窮し苦めり。今若し作さずんば恐らくは後轉た苦まんと。此事を感念し、唯自ら身を賣り以て金錢に貿へ、用て功德を作し此苦を斷ぜんと欲す。七日の後に至るも財の他に償ふものなければ卽ち奴婢と作らんとす。今以て六日は明日便ち滿ちたん、是を以ての故に死を分ちて日を諍ふたりと。

王は是語を聞きて深く憐愍を生じ、未曾有なりと歎し。汝は眞に貧窮の苦を解悟し、能 不堅の身を以て堅身に易へ、不堅の財を堅財に易へ、不堅の命を堅命に易ふと。卽ち會を設くることを聽しぬ。王己が身及び夫人の衣服瓔珞を以て脫ぎ罽羅夫婦に與へ、十の聚落を割きて福を作せし封に與へたり。

夫れ能く至心に福德を修する者は現に華報を得ること猶倘是の如し。況や其將來に果報を獲んをや。此に由りて之を觀るに、一切の世人苦を免ることを得んと欲せば、當に懃に福を修すべし。

何ぞ情を縱にして懈怠放逸すべけんや。

四十四　沙彌が蟻子の水災を救ひて長命の報を得たるの緣

昔一羅漢道人ありて一沙彌を畜へたり。此沙彌却て後七日必ず當に命終すべしと知り、暇を與へて家に歸らしめ、七日の頭に至り還り來るべしと勅せり。沙彌は師を辭し即便ち歸り去りしが、其道中に於て衆の蟻子の水に隨ひ漂流して命將に絕えんと欲するを見て慈悲の心を生じ、自ら袈裟を脫ぎ、土を盛り水を堰ぎて蟻子を取り、高燥なる處に置き遂に悉く活すことを得たり。七日の頭に至りて師の所に還歸せしが、師甚だ之を怪み、尋ひで即ち定に入り、天眼を以て觀ずるに、其は更に餘福なきを知るに、爾を得たるは蟻子を救ふ因緣を以ての故に、七日死せず、命を延し長くすることを得たり。

四十五　乾陀衞國王の故き塔寺を治して延命を得たるの緣

昔乾陀衞國に一國主ありき。一明相師ありて王を占ひ、却て後七日必ず當に命終すべしと。遊獵に出で行かれしに、一故塔の毀敗崩壞せるを見、即ち群臣をして共に之を修治せしめ、修治し已訖り、歡喜して宮に還り七日安穩なりき。相師七日過ぐるを見て其所以を怪み、王に問ふて言く。何の功德を作せしやと。答へて言く、更に所作なし、唯一破塔あり埿を以て補治せしのみと。塔を治せしに由るが故に功德是の如し。

四十六　比丘寺の壁孔を補ひ延命の報を獲たるの緣

昔比丘あり死せんとする時將に至る。會外道婆羅門あり相を見しに、是比丘は七日後に必ず命

終すべきを知れり。

時に此比丘は僧坊に入るに因りて壁に孔あるを見、卽ち泥を團にして之を補ひ塞げり。此福に緣るが故に其壽命を增し七日を過すことを得たり。

婆羅門見て其所以を怪みて之に問ふて言く、汝何の福を修せしやと。比丘答へて言く、我修するところなし、唯昨日に於て僧房中に入り、壁に孔あるを見て補治せしのみと。

婆羅門歎じて言く、是僧は福田にして最も深重と爲す。能く死すべき比丘をして命を續ぎ壽を延さしめたりと。

四十七　長者の子佛を見て長命を求むるの緣

昔佛世に在しき。一長者の子年五六歲なり。相師之を占ひしに福德具足せり、唯短き壽命あるのみと。將ひて外道六師の所に至り長壽を望み求めしが、彼六師は都て長壽を與へ能ふこと有ることなきを瞋れり。將ひて佛の所に至り、佛に白して言く、此子短壽なり、唯願くば世尊其に長壽を與へよと。

佛言はく、是法は能く長壽を與ふることあることなしと。重て佛に白して言く、願くば方便を示せと。佛時に敎へて言く、汝は城門の下に到り人の出づるを見ば之が爲に禮を作せ、入る者にも亦禮せよと。

時に一鬼神あり、婆羅門の身に化作し、來り城に入らんと欲せしかば、小兒は向ひ禮す。鬼呪願して言く、汝をして長壽たらしめんと。此鬼は乃ち是小兒を殺す鬼なりき。但し鬼神の法として二語することを得されば殺すことを得ず、以て長壽を許し更に殺すことを得ざるなり。

其是の如く謙忍恭敬せしを以て、壽命を延すことを得たるなり。

四十八　長者の子客作して會を設け現報を獲るの縁

昔佛世に在せし時、長者の子ありき、早く父母を喪ひしかば孤窮伶俜し客作して自活す。有人忉利天上は極めて快樂と爲すと說くを聞けり。又他の佛僧を供養せば必ず往生することを得んと說くを聞き、卽ち他に問ふて言く、幾許の物を用ひば佛及び衆僧に供ふることを得べきやと。時に人語りて言く、三十兩金を用ひば會を作すことを得べしと。

便ち市に向ひ客作の處を求めしに、市邊に一大富める長者ありしかば其に雇れて客作となる。長者問ふて言く、汝今能く何事を作すやと。答へて言く、是作すべきは皆能くすと。三年客作せば幾許の物を索むるやと。答へて言く、三十兩金を索むと。長者其を聞くに事事皆能くす。卽ち雇ひ作さしめたり。人と爲り端直にして金・銀・銅・鐵・種種の肆上に利を得ること常に倍せり。

日月滿ちたるを以て彼長者より作せし價の金を索む。長者問ふて言く、汝今金を得用て何事を作すやと。答へて言く。我佛僧を供養せんと欲すと。長者語りて言く、我今汝を佐けん、乃ち種種の瓮器米麵を以て汝に與へん食を作せ。汝但佛及び衆僧を請はんとせば、卽ち僧房に詣り佛及び僧に請ひ、佛と衆僧とをして其請を受けしめよと。

佛は自房に住し、衆僧は皆彼長者の請を受く。正しく節日に値ひ、衆の人皆種種の飲食を送り往きて衆僧に與へしかば、衆僧は食し飽き長者の舍に至れり。

時に長者の子は手自ら食を行しが、上座言く少しく著けよと。次第して皆言ふ、少しく著けよと。下行に至訖れり。時に長者の子啼哭懊惱すらく、辛苦すること三年にして此飮食を設けたるに、衆僧の食するを望むに僧食せず、我天に生ぜんと求めしに必ず生ずることを得ざらんと。

佛の邊に往至て佛に白して言さく、衆僧は我供を食せず、而し我願ふところ必ず得べからざるべ

きやと。佛言はく、小食を以てせしや不や。答へて言く、皆悉く少食なりきと。佛言はく、假使食せずとも汝が願必ず成ぜん、況や後少食して成ぜざらんやと。童子歡喜して還り飲食す。彼時衆僧は食訖りて即ち還れり。

時に五百の賈客あり、海に入り來り還り城に入り飲食を募り索む、時に世飢饉にして與ふる者あることなし。有人語りて言く、彼長者の子今日會を設けしかば必ず飲食あらんと。時に長者の子賈客ありと聞き、歡喜して食を與ふ。五百の賈客皆充足することを得、一切の將從も悉く亦飽滿せり。最下の賈客一珠を解き値萬兩金なるを與ふ。最上頭なる者一珠を解き直十萬兩金なるを與ふ。五百の賈客人ごとに一珠を與へ一鋼盞とともに此長者の子に與ふるも敢て取らず。往き走り佛に問ふ。佛言はく、此は是華報なり、但取るも苦無し、後必ず天に生ぜん恐懼するに足らずと。

主人の長者更に男兒なし唯一女あるのみ、即ち童子に與へたり。

是の如く家業遂に大熾盛となり、舍衛城中最も第一と爲れり。

長者命終せしかば波斯匿王其聰明にして知見あるを聞き、其家業を以て悉く乞ひ之を與ふ。華報是の如く、其果は後に在らん。

四十九　弗那佛鉢に食を施して現報を獲るの緣

昔佛世に在せしに、梵志兄弟五人ありき。一をば[一]耶奢と名け、二をば[二]無垢と名け、三をば[三]憍梵波提と名け、四をば[四]蘇駄夷と名く。四兄は山に入り道を學びて五神通を得たり。其最小弟の名は[五]弗那と曰ふ。佛乞食したまふを見、好き白淨飯を盛り鉢に滿てゝ佛に施せり。爾時弗那は恒に耕種を以て業となす。時に耕種訖りて家に還歸す。後一日に於て出でゝ田中に到り、其田中を見るに生ふるところの苗稼變じて金禾と成り、皆長さ數尺なり。收め刈り已に盡くれ

【一】梵語ヤシャならんか。
【二】梵語ヴィマラの漢意譯か。
【三】梵語ガワンパティならんか。
【四】梵語スダーヴィならんか。
【五】梵語プールナならんか。

ば還り生ずること初の如し。

國王之を聞き、亦來り收め刈られしも盡くることを得る能はず。是の如く一切諸の來り取る者皆盡すこと能はざるなり。

兄等念じて言く、我弟弗那は生活を得ん爲すや、貧苦を爲すやと、尋ひで共に來り看るに、弟の福業は國王より踰へたり。便ち弟に語りて言く、汝先に貧窮なりしが云何し卒に富めるやと。答へて言く、我[六]瞿曇を見て、一鉢の飯を施せしに是の如き報を得たりと。四兄聞き已りて歡喜踊躍す。又弟に語りて言く、爾今我爲に[七]歡喜團を作れ、我等四人各一團を持ち瞿曇に供養せん、願ひ生天を求め、其法を聽さざれば解脫を用ひずと。

是に於て各歡喜團を擔ひて佛の所に往至り、大兄一團を捉り佛鉢の中に著く。佛言はく、諸行無常と。第二も後歡喜團を以て佛鉢の中に著く。佛是語を作さく、是生滅法と。第三も後歡喜團を以て佛の鉢裏に著く。佛是語を作さく、生滅滅已と。第四も復歡喜團を以て佛鉢の中に著く。佛是語を作さく、寂滅爲樂と。

即ち寂靜の處に至り共に相ひ問ふて言く、汝何の語を聞くやと。第一の兄言く、我諸行は無常なりと聞く。次は復是生滅の法と聞く。又次は生滅滅し已りてと聞く。第四は寂滅を樂と爲すと聞くと。兄弟四人各此偈を思ひ、阿那含を得、皆佛の所に來り出家せんことを求め、阿羅漢道を得たりけり。

五十　大愛道が佛に金縷に織り成せる衣を施し幷に穿珠師の緣

昔佛世に在しき。大愛道[一]は佛の爲に金縷織成の衣を作り、齎し來りて佛に上れり。佛即ち語りて言はく、用て衆僧に施せと。大愛道言く、我乳餔を以て世尊を長養したてまつれり、自ら此衣を

【六】梵語ガウタマの漢訛音譯にして最上牛の義なり、釋尊の字を呼ぶ。
【七】歡喜と又は歡喜丸とも漢意譯せり、梵語のモーダカにして米粉を牛乳にてねり團子とせしものなり。

【一】大愛道は釋尊の姨母摩訶波闍波提夫人の漢意譯なり。

作りしが故に來り佛に奉るなり、必ず如來我が爲に之を受けたまはんことを欲むなり、云何してか方に衆僧に與ふと言ひたまふやと。佛言はく、姨母に大功德を得せしめんと欲するなり、所以は何となれば、衆僧福田は廣大無邊なればなり。是故に爾に勸むるなり、若し我が語に隨はゞ僧に供養せよと。時に大愛道は卽ち此衣を持ちて僧中に往き到り、上座より行ふも敢て取る者なし。次に〔二〕彌勒に到る、彌勒衣を受け卽ち著け城に入りて乞食す。彌勒の身は三十二相ありて紫磨金色なり、既に城裏に到りしかば衆人競ひ看て食を與ふる者なし。一穿珠師あり諸人等の食を與ふる者なきを見て卽ち前み跪き請はく、將に家中に至れ彌勒に食を與へんと、彌勒食し訖りたり、時に穿珠師一小座を以て彌勒の前に敷き求めて法を聽かんと欲す。彌勒は四辯才力あり、卽便ち爲に種種に妙法を說けり。時に穿珠師願くば聽聞を樂はんとて厭足あることなし。

先に長者あり、將に女を嫁せんと欲し、穿珠師を雇ひ一寶珠を穿てとて錢十萬を與へたり。此時に當りて彼女を嫁がしむる家は人を遣し珠を索む。時に穿珠師法を聽くに情濃くして穿を爲すに暇せず、卽ち之に答へて言く、且く小し須臾の頃を待つべしと。已に復來り索むること乃至三返せしが猶故のごとく得ず。彼長者瞋り其珠錢を合し還せとて來り奪ひ去れり。穿珠師の婦は其夫に瞋りて言く、更に業なきなり、須臾に珠を穿たば一萬の利を得べかりしに、云何ぞ此道人の美說を聽くやと。其夫聞き已りて意中悵恨たりき。

爾時に彌勒は其悵恨たるを知り、卽ち之に問ふて言く、汝能く我に隨ひ寺に至るや不やと。答へて言く、我能はんと。卽ち彌勒に隨ひ僧坊中に往き、上座に問ふて言く、有人金を得十萬斤に滿つると、歡喜して人の說法を聽くと何か如くものぞと。〔三〕憍陳如言く、假使人あり金十萬を得るとも、人あり一鉢の食を以て持戒者に施すに如ず、況や能く信心をもつて須臾も法を聽くをや、復彼に勝ること百千萬倍ならんと。是に於て又第二上座に問ふ、上座答へて言く、設復有人十萬車の金を得

〔二〕梵語マーイトリヤの漢訛音譯なり。

〔三〕梵語カウディンニャの漢訛音譯にして五比丘の一人なり。

とも、亦一鉢の食を以て持戒者に施すに如ず、況や復法を聽きて歡喜せるをやと。時節を經て又復第三上座に問ふ、上座答へて言く、若し有人十萬舍の金を得るとも、持戒の人に一鉢の食を施すに如かず、況や復法を聽きしをやと。又第四上座に問ふ、上座答へて言く、若し其十萬國の金を得るあるとも、亦復持戒の人に一鉢の食を施すに如かず、況や復法を聽きしをや、百千萬倍ならんと。是の如く次に問ふて乃ち阿那律に至る、阿那律言く、人あり四天下に滿つる金を得るとも、猶持戒の人に一鉢の食を施すに如かざるが故に、況や復法を聽きしをやと。

彌勒答へて言く、尊者の說に比丘に一鉢の食を施すことあらば、乃至四天下に滿つる金を得るに勝ると言へり。云何ぞ是の如くなるやと。尊者答へて言く、自身を以て證と爲せ。

往昔を憶念するに九十倍劫に一長者ありて其に二子ありき、一をば利吒と名け、二をば阿利吒と名く。恒に之に告げて言く、高き者も亦墮ち、常なる者も亦盡く。夫れ生るれば死し、合會は離ることありと。

長者病を得て命終に臨む時、兒子に約勅すらく、愼みて分居すること莫れ、譬へば一絲にては象を繫ぐこと能はざるも、多く諸の絲を集むれば象も絕つこと能はざるが如く、兄弟並び立つも亦多くの絲の如しと。時に彼長者は子を囑誡し竟りて氣絕え命終せり。

父の勅を以ての故に、兄弟共活し極めて相ひ敬ひ念ぜり。後弟の爲に婦を娶り生活すること幾くならざりき。而して此弟の婦は其夫に語りて言く、汝は彼の奴の如し、所以は何となれば、錢財用度し人の客に應當するも皆汝が兄に由れり、汝今は唯衣食を得るのみ、奴に非ざるに如何ぞやと。數此語を作せり。

爾時に夫婦は心に變異を生じ、兄に分居を求めしかば、兄は弟の意を見て正に便ち分居して、一切の所有皆中し半分を與へたり。弟夫婦は年少なれば遊逸にして用度奢侈なり。未だ幾の時を經

ざるに貧窮困匱せしかば來りて兄より乞へり。其兄爾時に錢十萬を與ふ。去ることを得て未だ久しからざるに復用ひ盡くせり。而して更に來り索む。是の如く六返せしが皆十萬を與ふ。第七返に至り、兄便ち數なるを責め。汝は父臨終の言を念ぜずして分異を求めしに、用心して生活すること能はず數來りて物を索むるや。今更に汝に十萬の錢を與へん、今より已往生活を好くせずんば、重て復來り索むるとも更に汝に與へずと。是苦語を得て夫婦二人は用心して生活し漸を以て富を得たり。兄は錢財喪失し漸を以て貧窮す。來りて弟より乞ふ。其弟は乃ち兄に食をも讓らずして、是言を作すに至る、兄常に富むと謂へるも亦復貧するや。我昔汝より乞索する所ありしも苦切して責められたり。今日何が故ぞ來りて我より索むるやと。兄此を聞き已りて憂惱を生じ、自ら念言を作さく、同生の兄弟すら猶尙此の如し、況や外の人をやと。生死を厭惡して遂に家に還らず。山に入りて道を學び精懃苦行して辟支佛を得たり。

其弟後に亦以て漸く貧窮し、世の飢饉に遭ひ薪を賣りて自活せり。時に辟支佛城に入りて乞食せしが竟に得る所なく空鉢にして還り出でたり。時に薪を賣る人は辟支佛の空鉢にして城を出づるを見、卽ち薪を賣り得し所の稗麨を以て之を與へんと欲し、辟支佛に語りて言く、尊者は能く麤惡食を以てするや不やと。答へて言く、好惡を問はず趣き身を支ふるを得んと。時に薪を賣る人卽便ち授與せしかば、辟支佛は受けて之を食し、食し訖りし後、虛空に飛び騰りて十八變を作し卽ち所止に還れり。時に薪を賣る人後更に薪を取り道にて一兎を見しかば杖を以て之を撩る、變じて死人と成り卒に起ちて來り薪人の項を抱へ取れり。彼薪を取る人種種に方便して推し去らしめんと欲するも離ることを得る能はず、衣を脫ぎ人を雇ひ之を挽き却らしむるも亦離るゝことを得ず。展轉して闇に至りしかば負ひ來り家に向ふ。旣に家中に到りしかば死人自ら解け墮ちて地に在り眞金の人と作る。時に薪を賣る人卽ち金の頭を截り却れば頭尋ひで還り生じ。其手脚を截り却れば手脚還

り生ぜり。須臾の間に金頭金手は其屋裏に滿ち、積みて大藏と爲れり。隣比は官に告げて、此貧窮の人の屋裏自然に此金藏ありと。王聞き使を遣し往きて覆之を檢せしむるに、即ち屋裏に到れば膿爛臭なる死人の手頭を見るのみ。其人自ら金頭を捉へ來り以て王に上つる便ち是眞金なり。

王大に歡喜し、此は是福人なりとし、即ち聚落に封ぜり。是より命終して第二天に生じ天帝釋と爲る。下りて人中に生ぜば轉輪聖王と爲れり。天王人王たること九十一劫曾て斷絕せず、今は最後身にして釋種に生る。初めて生るゝの日、四十里中の伏藏より珍寶自然に踊出せり。

後漸く長大となる。兒の【四】釋摩男は父母偏愛せり。阿那律の母諸兒を試さんと欲し、時に遣し食無しと語りしに、但擔へ食無きも來らんと。即ち空器を與ふ。時に空器の中に百味の飲食自然に盈ち滿てり。設四天下の金を以て用ひ乳哺爲すも一劫に足らじ。況や九十一劫常に快樂を受けたるをや。我今此自然の飲食を得たる所以は、適先身に此一鉢の食を施せしに由り今此報を得たりと。上は諸佛より下梵天に至るまで淨き持戒者は皆持戒と名くるなりと。

時に穿珠師是語を聞き已りて心大に歡喜せり。

雜寶藏經卷第四

【四】梵語シャーキャ・マハーナーマの漢訛音譯にして釋種の皇族より出家す。

卷の第五

五十一　天女本華鬘を以て迦葉佛に供養せしの縁

爾時に釋帝桓因は佛より法を聞きたてまつり須陀洹を得たり。即ち天上に還り諸の天衆を集めて佛法僧を讃せり。

時に天女あり頭に華鬘を戴き、華鬘の光明甚だ大に晃曜せるが、諸の天衆と共に善法堂の上に來集せり。諸天の衆は是天女を見希有の心を生ず。

釋帝桓因卽便ち偈を說き天女に問ふて言く、

汝は何の福業を作してか　身の眞金に融するが如く
光色ありて蓮花の如し。　而も大威德ありて
身より妙なる光明を出し　面は開敷せる蓮花の如し。
金色晃然として照せるは　何の業行を以て得たるや
願くば我が爲に之を說け。

爾時に天女偈を說きて答へて言く、

我昔華鬘を以て　迦葉佛の塔に奉り
今天上に生じ。　是勝たる功德を獲
生れて天中に在り　報ひて金色の身を得たり。

釋帝桓因重て復偈を說きて讃嘆して言く、

甚だ奇なるかな功德田　諸の穢惡を転除せしに
是の如き少種子も。　天の勝れたる果報を得

誰か當に供養せずや　恭敬せよ眞金聚を。
誰か佛を供養せずや　上妙の功德田なるを
其目甚だ脩廣なること　猶靑蓮花の如し
汝能く供養を興せ　無上第一尊に。
少しく功德業を作して　此の如き容を獲たるをや。

爾時に天女卽ち天より下り、華蓋を執持して佛の所に來至れり。佛爲に法を說きたまひしかば、須陀洹を得て天上に還れり。諸の比丘等は其所以を怪み、卽ち佛に問ふて言く、世尊よ、今此天女は何の功德を作してか此天の身を獲、端正殊特なりやと。

佛言はく、往古の時、種種の華鬘を以て迦葉佛塔に供養せり。是因緣を以て今此果を獲たり。

五十二　天女本蓮華を以て迦葉佛塔に供養せしの緣

爾時に復一天女あり、頭上の華鬘光明晃曜せり。諸天衆と共に善法堂の上に來集せり。時に諸天衆は是天女を見て希有の心を生じき。

時に天帝釋は偈を以て問ふて曰く、

汝昔何の福を作してか　身眞金聚の如くなるや
光色蓮花の如く　而も大威德あり
身より微妙の光を出し　面は開敷花の如く
光明甚だ燁燁たり　何の業行を以て得しや
唯願くば我爲に說け。

天女卽便ち偈を說き答へて言く、

我昔蓮華を以て　迦葉塔に供養せしに
今日世尊に値ひたてまつり　是勝れたる功德を得
生れて天上に處し　是金色の報を得たり。

釋帝桓因重て偈を以て讃むらく、

甚だ奇なるかな功德田は　諸の穢惡を滅除したまへり
因を殖ゑる甚だ少きも　勝れたる果報を獲得せり
誰か樂まざらんや供養し　眞金聚を恭敬せよ
誰か佛を供養せざらんや　上妙の勝福田なるを
目は廣く脩りて長く　其は青蓮華に喩へらる
汝昔能く供を興せるかな　第一最勝尊に
妙なる福德業を作して　此の如き報を獲得せることや。

爾時に天女卽ち天より下り、華蓋を執持し佛の所に來到り、佛の說法を聽き、法眼淨を得て天上に還れり。

時に諸の比丘卽ち佛に問ふて言く、此女は往昔何の行業を作してか報を得ること是の如きやと。佛言はく、過去の時妙なる蓮華を以て迦葉佛塔に供養せり、故に勝果を獲て、今道跡を見るなり。

五十三　天女八戒齋を受持し生天の緣

爾時に復一天女あり、八齋を受持して天上に生じ、端正の報を得て光顏の威相衆と超異せり。時に諸天と共に善法堂の上に集る、諸天見已りて希有の心を生ぜり。釋提桓因偈を以て問はく、

汝昔何の業を作してか　身は眞金山の如くなるや
光れる顔は甚だ煒燁として　色は淨き蓮花の如し
是かる勝れし威德を得　身より大妙光を出せるは
何の業行を以て獲たりしや　願くば我爲に之を說け。

天女爾時に偈を說き答へて言く、

昔迦葉佛に於て　八戒齋を受持せしに
今天中に生ずることを得　是端正の報を獲るなり

釋提桓因重て偈を以て讃むらく、

奇なるかな功德田は　能く勝妙の報を生ぜり
昔少しく微因を修せしに　而も天上に生ずることを得たり
此の如き勝れたる福聚に　誰か當に供養せざるや
是の如き最勝尊に　誰か當に恭敬せざるや
諸の是を聞くことある者　宜しく大に歡喜すべし
天に生ずることを求めんと欲せば　應に淨戒を持つべし

爾時に此天は好き華蓋を持ち佛の所に來至りしかば、佛爲に法を說きたまひしかば見諦道を得たり。時に諸の比丘、卽ち佛に問ふて言く、此天は往昔何の福業を作してか天中に生ずることを得、而して聖果を獲たるやと。

佛言はく、昔人と爲りし時迦葉佛の所に於て八齋を受持せり。是善行に出りて天上に生じ、而も道迹を得たるなり。

五十四　天女本燈を然し供養するを以て天に生るゝの縁

爾時に王舍城の頻婆娑羅王は佛法の中に於て得道し、不壞の信を獲、常に燈明を以て佛に供養せり。後提婆達多が阿闍世王に與ふるに惡知識を作し、佛法を害せんと欲せり。是を以て國土怖畏し復燈を然して供養せざりき。

一女人あり常に習なるを以て、僧自恣の日、佛の經行したまへる道頭に於て燈を然し供養せり。阿闍世王は聞き極めて大に瞋恚り、卽ち劍輪を以て腰を斬りて殺しけるに、命終して三十三天の摩尼焰の宮殿中に生ずることを得、此宮殿に乘りて善法堂に至れり。

帝釋偈を以て問ふて曰く、

汝昔何の業を作してか　身は眞金の聚るが如くなるや
而も大威德ありて　容貌甚だ光明なるや。

天女卽時に偈を以て答へて言く、

三界の眞濟にして　三有の大燈なる
佛を至心に眼觀すれば　相好莊嚴の身にして
法中の最勝たり　之が爲に明燈を然す
燈は然え以て闇を滅し　佛燈は衆の惡を滅す
燈を見れば日光の如く　眞實に信心を生す
燈明の熾盛なるを覩　歡喜して佛を禮せり。

此偈を説き已りて、佛の所に來至れり。佛爲に法を説きたまひしかば、須陀洹を得て卽ち天上に還れり。比丘佛に問はく、何の因緣を以て天宮に生ぜしやと。

佛言はく、昔人間に在りしとき、僧自恣の日に佛經行の道頭に於て燈を然して供養しけるが、阿闍世王其腰を斬り殺せり。是善因を以て命終の後に天中に生ずることを得、重て我邊に於て法を聞き信解して須陀洹道を得たるなり。

五十五　天女本車に乘り佛を見歡喜するを以て道を避くるの緣

爾時に佛舍衞國に在しけるが、城に入り乞食したまひしに、一童女あり車に乘りて遊戲し、園中に向はんと欲せしに、道にて如來に逢ひたてまつりしかば、車を廻して道を避け歡喜の心を生ぜり。其後命終して三十三天に生じ、善法堂に住き集れり。

帝釋偈を以て問ふて曰く、

汝昔何の業を作してか　身の色眞金の如く
光れる顏甚だ爗爗たること　猶[一]優鉢羅の若し
是勝れたる威德を得　而も天中に生ぜるとは
願くば今我爲に說け　何に由りて之を得たりや。

天女即時に偈を以て答へて曰く、

我佛の城に入りたまふを見　車を廻して道を避け
歡喜して敬信を生ぜしが　命終して天に生ずることを得たり。

此偈を說き已りて、佛の所に來り向へり。佛爲に法を說きたまひしかば、須陀洹を得て卽ち天宮に還れり。

比丘問ふて言く、何の業緣を以て此天中に生ぜしやと。佛言はく、昔人間に於て車を廻し我を避けて全生天を得、重て我所に於て法を聞き、信受して須陀洹果を證せるなり。

【一】梵語ウットパラの漢訛音譯にして青蓮華のことなり。

五十六　天女本華を以て佛に散じ化して華蓋と成るの緣

爾時に舍衞國に一女子ありき。節日の中に於て阿恕伽華[一]を採り、還りて城に入り來りしに、佛の出でたまふに遇値ひしかば、即ち此華を以て佛の上に散ぜしに化して華蓋と成れり。歡喜踊躍して敬信の心を生じき。是に於て命終し三十三天に生れ、即ち宮殿に乘り善法堂に至りぬ。

帝釋偈を以て問ふて言く、

汝昔し何の業を作してか　天中に來生することを得しや
身は眞金の色の如く　威德甚だ光り明なり
何の業行を以て獲たるや　願くば我爲に之を說け。

天女即ち偈を以て答へて言く、

昔閻浮提に於て　阿恕伽花を取り
還りて如來に値ひしかば　即ち以て佛に供養し
歡喜して敬重を生ぜしが　命終して天に生ずることを得たり。

是偈を說き已りて、來り佛の所に向ふ。佛爲に法を說きたまひしかば、須陀洹を得、便ち天上に還れり。比丘問ふて言く、此天女は何の因緣を以て天の身を受くることを得たりやと。佛言はく、昔人中に在りしとき、城を出でゝ阿恕伽花を取り、還り來りて我に値ひ、即ち華を以て供養し、歡喜の心を發しき。此善業に乘じ命終して天に生じ、重て我所に於て法を聞き悟を得須陀洹を證せしなり。

五十七　舍利弗摩提が佛塔を供養せし緣

【一】梵語アショーカの訛音譯にして無憂華のことなり。

頻婆娑羅王は已に見諦を得、數佛の所に至りて禮拜し問訊せり。時に宮中の婦女は日日に佛の邊に來到るを得ざりしかば、王は佛髮を以て宮中に塔を起てたり。宮中の人經常に供養したりき。

頻婆娑羅王崩じ。提婆達多・阿闍世王とともに同情相ひ厚く、誹謗心を生じ、宮中にて此塔を供養することを聽さざりき。

一宮人あり、舍利弗摩提[一]と名く、僧自恣の日を以て本の所習を憶ひ、即ち香花を以て此塔を供養せり。時に阿闍世王は其佛塔を供養せるを嫌ひ、鑽を用て鑽殺したりしが。命終して三十三天に生ずることを得、天の宮殿に乘りて善法堂に集る。

帝釋偈を以て問はく、

汝昔何の福を作してか　而も天中に生ずることを得るや
威德甚だ光明なること　猶眞金の色の如し
何の業行を作してか獲たる　願くば我爲に之を說け。

天女偈を以て之に答へて曰く、

我昔人中に在りき　歡喜恭敬の心にて
諸の好き香華を以て　佛塔に供養したりき
而も阿闍世王の爲に　鑽を以て我を鑽殺せられ
命終して天に生ずることを得　此に極めて快樂を受くるなり

是偈を說き已りて佛の所に來向れり。佛爲に法を說きたまひしかば、須陀洹を得て即ち天宮に還れり。比丘問ふて言く、何の因緣を以て、此天中に生ぜしやと。

佛言はく、本人間に於て曾て華香を以て佛塔を供養せり。是善業に由りて今天の身を得、重て我

【一】梵語シャーリプットラ・マティの漢訛音譯なり。

所より法を聞きて悟り須陀洹を證せるなり。

五十八　長者夫婦浮圖を造作し生天せし緣

舍衞國に一長者あり[一]浮圖・僧坊を作りけるが、長者病を得命終して三十三天に生ぜり。婦は夫を追憶して愁憂苦惱し、追憶を以ての故に浮圖と僧坊とを修治すること夫在りし時の如し。夫は天上に在りて自ら觀察して言く、我何の緣を以て此天上に生ぜしか。知る塔寺を造作せし功德を以てなり、是故に來ることを得たりと。自ら定めて是れ天身なるを見て心に歡喜を生じ、常に塔寺を念じ天眼を以て作せし所の塔寺を觀す。今誰か料理するやと。卽ち其婦晝夜夫を憶ひ憂愁苦惱し、其夫を以ての故に塔寺を修治するを見る。夫念を作して言く、我婦は我に於て大に功德あり、我今當に其所に往き至りて問訊し安慰すべしと。天上より沒して卽ち婦の邊に到り之に語りて言く、汝大に憂愁し我を念ふやと。婦の言く、汝は是誰とか爲す、我を勸め諫むとはと。答へて言く、我は是汝の夫なり、僧坊・塔寺を作りし因緣を以て、天上三十三天に生ずることを得たり。汝の精懃し塔寺を修治せるを見るが故に汝の所に來れりと。婦の言く、前に來れ我と與に交會せんと。夫の言く、人身は臭穢にして復近づくべからず、我妻とならんと欲せば、但懃めて佛及び比丘僧を供養せよ、命終の後我天宮に生ぜん、汝を以て妻と爲さんと。婦は夫の語を用ひて、佛僧に供養し衆の功德を作し、天に生ぜんとの願を發せり。

其後命終して卽ち彼天宮に生じ、夫婦相ひ將ひて共に佛の邊に至れり。佛爲に法を說きたまひて須陀洹を得たり。

諸の比丘等驚き所以を怪み、便ち問はく、何の業緣の故に此天に生ずることを得しやと。

佛言はく、人中に在りて浮圖・僧坊を作りて佛僧に供養せり。是功德に由りて今天に生ずること

【一】浮圖は梵語スツーパの漢訛音譯なるが如し然らば塔の義なり。

を得たるなり。

五十九　長者夫婦信敬して佛を禮し生天せし緣

王舍城中に一長者ありき。日日佛の所に往至りしかば、其婦疑を生じ念を作して言く、將に他と私通せざるや、日日恒に去れりと。便ち夫に問ふて言く、日日恒に何處に向ひ來り還るやと。夫は婦に答へて言く、佛の邊に去來せりと。問ふて言く、佛は好と爲すや醜なりや能く汝より勝れりや、而も恒に邊に至るかなと。夫卽ち婦の爲に佛の種種なる功德を嘆說せり。

爾時に其婦は佛の功德を聞きて心に歡喜を生じ、卽ち車に乘り往き、旣に佛の所に至りぬ。

爾時に佛の邊に諸王大臣あり、左右を逼塞ぎて前むことを得る能はず、遙に佛の爲に禮を作し卽ち還り城に入る。

其後壽を捨て三十三天に生ぜしが、便ち自ら念ふて言く、佛恩重きかな一禮の功德は我をして天に生ぜしめたりと。卽ち天より下り佛の邊に往き至る。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たり。比丘問ふて言く、何の因緣を以て此天に生ずることを得られしや。

佛言く、昔人中に在りしとき我爲に禮を爲し、一禮の功德を以て命終して天に生ぜるなり。

六十　外道婆羅門の女佛弟子に學びて齋を作し生天せし緣

爾時に舍衞國にて佛諸の弟子ありき。女人邑會を作して數數佛の邊に往き至れり。徒伴の中に一婆羅門の女あり邪見にして信ぜず、曾て受齋持戒せざりき。諸の女人共に聚り齋食するを見、問ふて言く。汝等今何等の吉會を作すや、汝と與に親み厚きに、而も我に命ぜずやと。諸の女答へて言く、我等齋を作せりと。婆羅門の女言く、今は月の六日に非ず、又十二日に非ず、誰が法の爲に齋

を作すやと。諸の女言く、我佛齋を作せりと。婆羅門女の言く、汝佛齋を作さば何の功德を得るやと。答へて言く、生天解脫を得んと。婆羅門の女は飲食を貪るが故に、水を受けて齋食を作し、後好美漿を與へたり。

婆羅門の齋法は飲まず食はざるに、佛齋の法は好食を食し美漿を飲むこと、此齋は甚だ易しとて信樂歡喜を生ぜり。

却て後壽盡き、天上に生ずることを得、來り佛の邊に向へり。佛爲に法を說きたまひしかば、須陀洹を得たり。

比丘問ふて言く、何の因緣を以て天中に生ぜしやと。佛言はく、昔人間に在りしとき、諸女等の聚集して齋を作せるを見、隨喜して齋を作しけり。是善業に由り來りて天に生ずることを得たるなり。

六十一　貧女人氈を以て須達に施し生天せし緣

爾時に須達長者是思惟を作さく、我家に生るゝ者は命終の後たりとも惡道に墮つることなからん、何を以ての故に、我盡く敎ふるに淨法を以てするが故にと。貧窮困苦、信と不信とに我今亦當に敎ふるに善法を以て佛僧を供養せしむべしと。

是に於て其に上の事を以て波斯匿王に啓せしかば、王便ち鼓を擊ち鈴を鳴らし、却て後七日須達長者が勸化乞索して三寶に供養せんと欲す、一切人民各各隨喜して多少布施せよと。

七日の頭に至りて須達長者諸人等より勸化乞索せり。一貧女あり辛苦して價を求め唯一氈を得以て身體を覆ふのみ、須達の乞ふを見て卽便ち施與しけり。須達得已りて其能ふところを奇とし、便ち錢財穀帛衣食を以て恣に意の欲するところを供給せり。

貧女其後壽盡き命終して天上に生じ、佛の邊に來至りたり、佛爲に法を說き、須陀洹を得たり。
比丘問ふて言く、今此天女は何の因緣を以て天上に生ぜしやと。佛言はく、昔人中に在りしとき、須達長者の敎化乞索せしに値ひ、心に歡喜を生じ、即ち著るところの白氎を以て須達に布施せり。是善業に由りて天上に生ずることを得、重て我邊に於て法を聞き、信解して須陀洹を獲たるなり。

六十二　長者の女三寶を信ぜず父金錢を以て雇ひ五戒を受持せしめ生天の緣

爾時に舍衞國中に一長者あり、名を[一]弗奢と曰ふ。二女子ありき、一は出家し精進し用ひ行ひ阿羅漢を得。一は邪見にして誹謗し信ぜざりき。父時に此不信の女に語らく、汝今佛に歸依せよ、我當に千枚の金錢にて雇ふべし、乃至法僧に歸依し五戒を受持せよ、當に八千の百錢を與ふべしと。是に於て五戒を受けたりき。久しからざるの頃命終して天に生じ、佛の所に來り向ひたてまつれり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たり。比丘問ふて言く、此天女は何の業行を以て天に生ずることを得たるやと。
佛言はく、本人間に於て父の金錢を貪り、三寶に歸し五戒を受持せし是因緣に由りて、今天に生ずることを得、重て我所に於て法を聞き道を得たるなり。

六十三　女地を掃き佛を見るに由りて歡喜を生じ生天するの緣

南天竺の法、家に童女あらば必ず早起し、庭中と門戶左右とを淨く掃かしむるなりき。
長者の女あり、早起して地を掃きしに、會々如來門前に於て過ぎたまふに値ひ、見たてまつりて歡喜を生じ、注意して佛を看たてまつれり、壽命短促し即ち終りて天に生ぜり。

【一】梵語プッシャの漢訛音譯にして元と二十八宿中の鬼宿の名よりとりて命名せしものなり。

夫れ天に生ぜば法として三念あるなり。自ら思惟して言く、本は是何の身ぞやと。自ら人身なりしを知れり。今何處に生ぜしや、定で是天なるを知れり。昔何の業を作してか此に來生せしやと、佛を見たてまつり歡喜せし善業に由りて此果報を得たるを知れり。佛の重恩を感じ、來りて佛を供養したてまつれり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たりき。

諸の比丘の言く、何の因緣を以て、此女人をして生天得道せしめしやと。

佛言はく、昔人中に在りしとき、早起して地を掃きしが、佛門を過ぎたまふに値ひ、見て喜の心を生ぜり。是善業に由りて天上に生じ、又我所に於て法を聞き道を證せり。

六十四　長者舍を造り佛を請し供養し舍を以て布施し生天するの緣

王舍城に大長者ありき新に屋舍を造り、佛を請し供養したてまつり以て布施し、而して佛に白して言さく、世尊、今より已後城に入るの時は手を洗ひ鉢を洗ひ恒常に此に來りたまへと。其後壽盡き天上に於て生れ、天の宮殿に乘りて佛の所に來詣せり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たりき。

比丘白して言く、何の因緣を以て、天に生ずることを得たるやと。

佛言はく、昔人中に在りしとき、新屋舍を造り佛を請じて布施せり。是善業に由りて天宮に上生し、遂に我邊に於て法を聞き得道したるなり。

六十五　婦甘蔗を以て羅漢に施し生天するの緣

昔舍衞國に羅漢比丘ありき。城に入り乞食し、次に甘蔗を壓する家に到れり。其家の兒の婦は一の麤大なる甘蔗を以て、比丘の鉢中に著きたり。姑見て之を瞋り便ち杖を捉り打ちしに、要脈に遇

著き、即時に命終して忉利天に生ずることを得、而も女身と作り、處る所の宮殿は純ら是甘蔗なり。
諸天の衆善法堂に集る時、彼天女も亦此堂に集れり。

帝釋偈を以て問ふて言く、
「汝昔何の業を作して　妙色の身を得たるや
光明の色比なきこと　猶鎔金の聚れるが如し。」
天女偈を以て答へて言く、
「我昔人中に在り　少の甘蔗を以て施せしに
今大果報を得　諸天衆の中に於て
光明甚だ暉き赫たり。」

六十六　女人香を以て佛足に塗り生天するの縁

昔舍衞城中に一女人ありき。地に坐して香を磨きしが、佛の城に入りたまふに値ひたてまつれり。女は佛身を見て歡喜の心を生じ、磨くところの香を以て佛の脚の上に塗りたてまつれり。其後命終して天中に生ずることを得、身香遠く聞く四千里に徹せり。便ち往き善法堂上に集りしに、帝釋偈を以て問ふて言く、
「汝昔何の福を作してか　身より微妙の香を出し
生れて天中に在り　光色鎔金の如くなるや。」
天女偈を以て答へて言く、
「我上妙の香を以て　最勝尊を供養せしに
無等の威德を得　三十三天に生じ

而も大快樂を受け　身より衆妙の香を出し
百由旬にも聞え　諸の香を聞くを得る者
悉く大利益を得るなり。

卽時に天女は世尊の所に向ひたり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹道を得て天上に還れり。諸の比丘問ふて言く、昔何の福を作してか天中に生ずることを得、身此の若く香るやと。佛言はく、此天女は昔人間に在りしとき、香を以て我足に塗りしに由り、是因緣を以て命終して天に生じ、此果報を受けしなり。

六十七　須達長者の婢三寶に歸依し生天するの緣

爾時に舍衛國の須達長者十萬兩金を以て人を雇ひ佛に歸依せしめたりき。時に一婢あり長者の語を聞きて卽ち佛法に歸依したりしが、命終の後三十三天に生れたりき。是に於て善法堂上に往き集れり。

帝釋偈を以て問ふて言く、

汝宿に何の福ありてか　天中に生ずることを得
光明の色微妙なるや　今我爲に之を說け。

天女偈を以て答へて言く、

三界の堅勝は　能く生死の苦を拔き
三界の眞濟は　三垢の結を斷除したまへり
我昔佛に歸依したてまつり　幷及に法と僧とに
是因緣を以ての故に　而も此果報を獲たるなり

是偈を說き已りて佛の所に來至せり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹道を得たり。

比丘問ふて言く、何の業緣を以て是果報を受けたりしやと。

佛言はく、昔人中に於て人に歸依せしが故に、今生天することを得、我說法に値ひて須陀洹道を得たり。

六十八　貧女佛より乞食して生天するの緣

昔舍衞國の城中に一女人ありき。貧窮困苦し常に道頭に於て乞索し自活せり。轉轉久を經るも一切の人民看視する者無かりき。佛の行きたまふに遇ひ見て其所に往到り、佛より食を乞ふ。貧女の困り、餓え死せんと欲するを憐愍し、卽ち阿難に勅して其に食を與へしむ。時に此貧女は食を得て歡喜し。後便ち命終して天上に生じ、佛の往恩を感じ、來りて佛を供養せり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たり。

諸の比丘佛に問ふて言く、今此天女は何の因緣を以て、天上に生ずることを得たるやと。

佛言はく、此天女昔人間に在りしとき、困餓して死に垂んとせしかば、佛阿難をして食を與へしむ、既に食を得已りて心に歡喜を生じ、是善根に乘じて命終し此天宮に生じ、重て我所に於て法を聞き得道せしなり。

六十九　長者の婢が主の爲に食を送るに佛に値ひ卽ち施し報を獲て生天するの緣

舍衞國の中に長者の子あり、諸の長者の子と共に園中に遊戲し去らんと欲する時、其家內に語り我爲に食を送れと。其家後に於て婢を遣し食を送る。婢門外に到りしに遇佛を見たてまつり、卽

ち其食を以て如來に供養したてまつり。還り復家に歸りて食を取り更に送りしも亦路中に於て舍利弗目連等を見て卽ち復之を與ふ。第三に食を取りて長者の子に與へたり。長者の子食し竟り自ら來り還歸し、其婦に語りて言く、今日食を送りしに何爲極めて晚かりしぞやと。婦之に答へて言く、今日三過も君の爲に食を送れり、何故に遲晚せしやと。卽ち婢を喚び問はく、汝朝三過食を取りしが誰に與へしやと。婢時に答へて言く、第一に送るの食は佛に値ひて卽ち施し。第二に送りし食は舍利弗目連等を見て復以て之に與へ。第三に取りし食始めて大家に與へたりと。大家聞きて極めて大に瞋恚し杖を以て打ちしかば、卽時に命終して天上に生じたり。

初めて天に生ぜし時具に三念を作さく、一は自ら念ずらく、我今生ぜしは何處に在りやと。自ら天に生ぜしを知り。二は自ら念ずらく、何處より終りて來り天に生ぜしやと。人道の中より天上に生ぜしことを知り。三に自ら念ずらく、何等の業緣に乘じて天に生ずることを得たりやと。食を施せしに由りて此果報を獲たることを知れり。卽ち佛の所に來りて供養恭敬せしかば、佛爲に法を說き須陀洹を得たり。

比丘佛に問はく、今此天女何の因緣を以て天上に生ぜしやと。

佛言はく、本人中に於て長者の婢と作りしとき、長者の子の爲に食を送りしが、佛如來に値ひたてまつり、卽ち以て佛に施す。大家瞋恚り杖を以て打ち殺せり。是業緣に乘じて命終し天に生じ、又我所に於て法を聞き道を證せしなり。

七十　長者の佛の爲に講堂を造り報を獲て天に生ずるの緣

爾時に王舍城の頻婆娑羅王は佛の爲に浮圖僧房を造作せり。一長者あり亦佛の爲に好き房屋を作らんと欲せしも地を得ること能はず、便ち如來經行の處に於て一講堂を造り四門を開けり。後時命

終して天上に生じ、天宮殿に乘じ來りて佛を供養せり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たりき。

比丘問ふて言く、今此天子は何の業緣を以て天宮に生ずることを得たりやと。

佛言はく、本人中に在りしとき、佛講堂を造りし是因緣に由り、命終して天に生じ、我所に來至して恩を感じ供養し、重て說法を聞き須陀洹を得たるなり。

七十一　長者が王の造塔を見て亦復塔を造り報を獲て生天するの緣

爾時に[一]耆闍崛山にて南天竺の一長者あり、頻婆娑羅王の佛の爲に好き浮圖僧房を作りしを見て、亦如來を請じ爲に浮圖僧房の住處を造れり。其後命終して天上に生じ、佛の所に來至し、恩を報じ供養せしかば、佛爲に法を說きたまひて須陀洹を得たりき。

比丘問ふて言く、此天子は往日何の因緣を以て天宮に生ずることを得たるやと。

佛言はく、昔人中に在りしとき、王の塔を起すを見て心に隨喜を生じ、便ち如來を請して浮圖を造立せり。此善業に由りて天上に生ずることを得、又我所に於て法聞きて信じ悟り須陀洹を證せしなり。

七十二　賈客が舍を造り佛を供養し報を獲て生天せし緣

爾時舍衛國に一賈客ありしが、遠く行き商賈し、身死して還らざりき。母其子を養へり。其子長大して復遠く去らんと欲す、祖母語りて言く、汝の父は遠く去り、身死して還らざりしなり。汝遠く去ること莫れ、當に近處に於て市に在り肆に坐すべしと。卽ち其勅を奉じ、便ち市中に於て估肆を作して念言を作さく、此城の人民は悉く皆佛を請ぜり。我今新に舍を造りて亦當に如來を請ずべ

【一】梵語グルドラクータか寧ろ俗語ギッヂャクッタの漢訛音譯にして靈鷲山のこと、摩竭陀國王舍城五山の一なり。

しと。便ち往きて佛を請ぜしに、佛來至したまへり。而して佛に白して言さく、我此舍を以て如來に供養したてまつる、今より已後城に入りたまふ時は手を洗ひ鉢を洗びたまふに恒に我舍に向へと。其後命終して便ち天上に生じ、佛の所に來至せり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たりき。

比丘問ふて言く、此天は昔日何業の因緣を以て、天上に生ずることを得たりやと。

佛言はく、本人たりしとき新に肆舍を作り佛を請して中に著きたてまつれり、此善業に乘じて今天に生じ、又我所に於て法を聞きて報を獲たるなり。

雜寶藏經卷第五

七十三　帝釋事を問ふの緣

是の如く我聞く、一時佛〔一〕摩竭提國王舍城の南に婆羅門聚落あり〔二〕庵婆羅林と名く、此聚落の北に〔三〕毘提醯山の石窟の中に在しき。

爾時に帝釋は佛彼に在すと聞き、即ち〔四〕槃闍識企犍闥婆王子に告げて言く、摩竭陀國の婆羅門聚落あり庵婆羅林と名く、此聚落の北に毗提醯山あり、世尊は此中に在せり、今汝等と共に彼に詣るべしと。槃闍識企犍闥婆王子答へて言く、唯然り、此事最も善し歡喜して聞きたてまつらんとて、即ち琉璃琴を挾み帝釋に從ひて佛の所に往きぬ。

爾時に諸天は帝釋の犍闥婆王子等と共に佛の所に往かんと欲すと聞き、各自ら莊嚴し帝釋に隨從して天上に沒し、即ち毘提醯山に至れり。

爾時に山中は光明照曜し、彼に近づく仙人は皆火光なりと謂へり。帝釋即ち犍闥婆王子に告げて言く、此處は清淨にして諸惡を遠離せる阿練若處なれば安穩に坐禪せよ。當に今佛の邊は多くの尊勝諸天饒りて側塞がり其左右に滿てり。我等今は云何して世尊を見たてまつることを得べきや。帝釋即ち犍闥婆王子に告げたまはく、汝は我爲に佛所に往き向ひて我等の意を通じ、覲問したてまつることを得んと欲すべしと。犍闥婆王子は敎を受けて即ち往き、遠からず近からず尊顏を瞻仰し、琴を援けて彈じ佛をして聞くを得せしめ、偈を作り頌して曰く、

欲心をもつて戀著を生ぜば　象の淤泥に沒するが如く
亦象の醉ひ狂ひて　鉤の制する所に非ざるが如し。
譬へば阿羅漢の　妙法を戀慕するが如く

【一】梵語マガハーダの漢訛音譯。
【二】梵語アムバーラソナの漢訛音譯。
【三】梵語ヴヰデーハギリの漢訛譯にして此山は耆闍崛山の西方約一里現今ギリヤークと稱せり。
【四】梵語パンヂャシッキヒ・ガルダルバの漢訛音譯にして五髻乾闥婆天子なり。

亦我色を貪りて　恭敬して其父を禮するが如し。
貴勝の處に生ずるに由りて　情倍愛樂を生ぜり。
極めて能く我愛を生長せるものよ　熱き汗の涼風に遇へるが如似く
亦極めて渇けるもの丶冷飲を得たるが如し。汝の容體は甚だ嬉ぶべし
猶羅漢の法を愛樂するが如く　亦病者の好き藥を得たるが如く
彼飢えたる者の美食を得たるが如く　疾は清涼を以て我熱を滅せり
今我貪は尙馳奔を欲す　我心を捉へて去るを得ざるが如し。

佛言はく、善哉般闍識企よ、今此聲を作し絃管相ひ諧にす、汝近遠に於て歌頌を造れるとはと。卽ち佛に白して言く、我往時に於て一賢女に遇へり、[五]修利婆折斯と名く、是れ犍闥婆王[六]珍浮樓の女なり。[七]摩多羅天子あり[八]識騫稚と名くるもの先より彼女を求めたりしが、我も時に悅愛せり。卽ち其所に於て斯偈を說きしが、我今佛の前に重て本偈を說くなりと。

帝釋念じて言く、佛は定より覺めたまひしを以て、今般闍識企と言說す。帝釋復企に語りて言く、汝今我名を稱して佛足を頂禮し、世尊を問訊して、少病少惱にして起居輕利、飮食調適し氣力安樂、諸惡なきや不や、安樂に住するや不やと。卽ち報じて諸と言ひ、帝釋の教を受け重て佛の所に詣り、帝釋の名を稱し卽ち佛足を禮し、帝釋の語を以て世尊を問訊したてまつれり。

佛言はく、帝釋及び諸天皆安樂なりや不やと。重て佛に白して言さく、世尊よ、帝釋及び三十三天は佛を見たてまつらんと欲せり、來り見たてまつることを聽したまふや不やと。佛言はく、今正に是時なりと。帝釋及び三十三天は佛の教を聞き已り、卽ち佛の所に至り佛足を頂禮し、一面に在りて立ち、佛に白して言さく。世尊よ、當に何處に坐すべきやと。佛言はく、此座上に坐せよと。佛に白して言さく、此窟は極めて小なるに天衆は極めて多しと。是語を作し已りて石窟を見しに廣

【五】梵語シュリーワチャシーの漢訛音譯。
【六】梵語チンプルならんか。
【七】梵語マータラーの漢訛音譯。
【八】梵語シッケンチならんか。

博なりき。佛威神の力は容受する所多し。帝釋卽ち前に在りて坐し、佛に白して言さく。我長夜に於て常に佛を見たてまつらんと欲し、法を聞きたてまつらんと欲せり。我往時に於て佛は舍衞國に在して火光三昧に入りたまへり。爾時に當りて（九）毘沙門の侍女あり（一〇）步闍拔提と名けたり。步闍拔提合掌して佛に向ひたてまつれり。

我時に彼毘沙門の侍女に語りて言く、佛は今定に在り、我敢て亂さず、我爲に世尊の足を頂禮したてまつりて我問訊と稱せよと。彼女帝釋の語を以て禮拜問訊したてまつれり。

佛は帝釋に語りて言はく、我爾時に於て汝輩の聲を聞き、久しからずして定より起てりと。

帝釋は佛に白して言さく、我昔宿舊より聞くところによれば、（一一）如來・阿羅訶・三藐三佛陀の世間に出現したまへば、諸天衆增長して（一二）阿須倫衆減少すと。我今佛弟子を見るに天上に生ずることを得ば、三事諸天より勝れん、壽命勝れ、光勝れ、名勝れんかなと。

時に（一三）具毘耶寶女は忉利天に生ぜり。是より先佛弟子の帝釋の爲に子と作り、瞿或天子と名けたり。復三比丘あり佛前に於て梵行を修行し、心未だ欲を離れざりしかば、身壞命終して乾闥婆の家に生じ、日日三時諸天の爲に使を作せり。瞿或天子は是三人の而も給使を作すを見、卽ち言く、我心憙ばず忍びず。我昔先に人中に在りし時、而も彼三人は恒に我家に至り我供養を受けたりき。今日諸天の爲に給使す、我見るに忍びざるなり。此三天は本是佛の聲聞の弟子なり、我本人たりし時我恭敬・供養・飮食・衣服を受けたりしが、今日は下賤なり。汝等は佛口より法を聞き、佛の爲に開解せられたるに、云何してか此鄙陋の處に生ぜしや。我先に汝に奉事供養せしかども、我佛より法を聞きて施を修し、我信の因緣の故に今帝釋の子となり、大威德ありて勢力自在に、諸天皆我を名けて瞿或となせり。汝は佛の勝法を得しに、云何ぞ懃心修行すること能はずして此賤き處に生ぜしや。我今此惡事を見るに忍びず、是の如きの事は我見るを喜ばず。云何してか同一の法中に此下賤を生

【九】梵語ワェシラマナ漢譯に多聞天とす。
【一〇】梵語プーヂャワテイーならんか。
【一一】阿羅訶は應供、三藐三佛陀は正徧智の義なり。
【一二】梵語アスラ又阿修羅に同じ。
【一三】梵語ゴーピヤならんか。

ぜしや。是佛弟子の生ずべからざる所に處せりと。

渠或天子は是護論を作せしかば、此三人等深く自ら慚愧し厭惡の心を生じ、合掌して渠或に語りて言く、天子の說くところの如くんば實に是我過なり、今當に此如き欲惡を除斷すべしと。卽ち懃めて精進し定慧を修せり。三人は瞿曇の法を念じ、欲の過患を見て卽ち慾結を斷ぜり。譬へば大象の羈絆を絕つが如く、其貪欲を斷ずることも亦復是の如くなりき。

帝釋幷に[一四]商那天及び餘の諸の天衆護世四天王皆來り此座に就きをりしが、此三斷慾者は卽ち諸天の前に於て虛空の中に飛騰せり。

帝釋は佛に白して言さく、此三人は何法を得しが爲に、能く此種種の神變を作し、來りて世尊を見たてまつるや、彼所得を問ひたてまつらんと欲すと。佛言はく、此三人は既に彼處を捨てゝ梵天に生ずることを得たりと。唯願くは世尊よ、我爲に彼梵天に生ずる法を說きたまへと。善いかな賢帝釋よ、分別して疑ふところを問ひまつれりと。

時に佛是念を作さく、帝釋は諂僞なく眞實に所疑を問ひ我を惱亂せず、汝の所問の若く「我當」に分別して說くべしと。帝釋は佛に問ふて言く、是何の結使か能く人・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・摩睺羅伽を繫縛するやと。佛時に答へて曰はく、貪・嫉の二結使は人・天・阿修羅・乾闥婆等幷に一切類とを繫縛せしむるは、皆貪嫉の爲に自ら縛するなりと。此事實に爾り、天中天よ、貪・嫉の因緣は能く一切を縛せり。我今佛より聞きたてまつりて此義を解し、疑網卽ち除け深く歡喜を生ぜり。

更に餘の義を問ひたてまつらん、貪・嫉は何に因りて生ずるや。何の因何の緣か貪嫉を生ずることを得、何の因緣にて生じ、何の因緣にて滅するやと。[一五]憍尸迦よ、貪・嫉は憎愛に因りて生ずれば、憎愛は貪嫉の緣となれり。憎愛あれば必ず貪嫉あり、憎愛なければ貪嫉則ち滅すと。實に爾り、天中天よ、我今佛より聞きたてまつりて此義を解し、疑網卽ち除け深く歡喜を生ぜり。

【一四】梵語イシャナの漢訛音譯。

【一五】梵語カウシカの漢訛音譯にして帝釋天王の字なり。

更に餘の義を問ひたてまつらん、愛憎は何の因緣にて生じ、何の因緣にて滅するやと。答へて言はく、愛憎は慾よりして生ず、慾無くんば則ち滅せんと。實に爾り、天中天よ、我佛より此義を聞きたてまつりて信解し、疑網卽ち除け深く歡喜を生ぜり。

更に餘の義を問ひたてまつらん、欲は何の因より生じ、何の緣より增長し、云何にせば滅することを得るやと。佛言はく、欲は覺觀に因りて生じ、覺觀に緣じて增長す。覺觀有れば則ち慾有り、覺觀無くんば慾則ち滅せんと。實に爾り、天中天よ、我今佛より此義を聞きたてまつりて解し、疑網卽ち除け深く歡喜を生ぜり。

更に餘の義を問ひたてまつらん、覺觀は何に因りて生じ、何に緣じて增長し、云何にして滅するやと。覺觀は調戲より生じ、調戲に緣じて增長す。調戲無くんば覺觀則ち滅せんと。實に爾り、天中天よ、我今佛より此義を聞きたてまつりて解し、疑網卽ち除け深く歡喜を生ぜり。

更に餘の義を問ひたてまつらん、調戲は何に因りて生長し、云何にして滅するやと。佛憍尸迦に告げたまはく、調戲を滅せんと欲せば當に八正道を修すべし。正見・正業・正語・正命・正方便・正思惟・正念・正定なりと。帝釋聞き已りて佛に白して言さく、實に爾り、天中天よ、調戲は實に八正道に由りて滅すと。我今佛より此義を聞きたてまつることを得て、疑網卽ち除け帝釋歡喜せり。復餘の義を問ひたてまつらん、調戲を滅せんと欲して能く八正道を修し、此八正道は比丘復何の法に因りて增長することを得るやと。佛言はく、復三法あり、一は欲、二は正懃、三は多く習ふて心を攝するなり。帝釋言く、實に爾り、天中天よ、我等此義を聞きたてまつりて疑網卽ち除く。比丘能く正道分を修行するは實に此三事に因りて增長すと、聞き已りて歡喜せり。

帝釋復問ひたてまつらん、比丘調戲を滅せんと欲せば當に幾法を學ぶべきやと。佛言はく、當に三法を學ぶべきなり、當に增盛戒心を學ぶべし、當に增盛定心を學ぶべし、當に增盛智慧心を學

ぶべしと。帝釋聞き已りて、實に爾り、天中天よ、我此義を聞きたてまつりて疑網除くことを得踊躍歡喜せり。

復餘の義を問ひたてまつらん、調戲を滅せんと欲せば幾義を解すべきや、我聞きたてまつらん。佛言はく、當に六義を解すべし、一に眼は色を識り、二に耳は聲を識り、三に鼻は香を識り、四に舌は味を識り、五に身は細滑を識り、六に意は諸法を識るなり。帝釋聞き已りて、實に爾り、天中天よ、我此義を聞きたてまつりて疑網除くことを得歡喜踊躍せり。

復餘の義を問ひたてまつらん、一切衆生は皆同じく一貪・一欲・一向・一趣なりやと。佛言はく、帝釋よ、一切衆生は亦一貪・一欲・一向・一趣ならず。衆生無量なれば世界も無量なり、意欲趣向殊別にして同じからず各所見を執れりと。帝釋聞き已りて、實に爾り、天中天よ、我此義を聞きたてまつりて疑網除くことを得歡喜踊躍せり。

更に餘の義を問ひたてまつらん、一切の沙門・婆羅門は盡く一究竟を得るや、一無垢を得ずや、一究竟梵行を得ずや不やと。佛言はく、一切の沙門・婆羅門は盡く一究竟・一無垢を得ること能はず、亦一究竟梵行を得ず。若し沙門・婆羅門ありて無上斷滅愛結解脫を得ば、正解脫を得る者にして、此乃ち盡く一究竟・一無垢・一究竟梵行を得しなりと。佛の說きたまふ所の如く、無上斷滅愛結解脫し正解脫を得る者は、此乃ち盡く一究竟・一無垢・一究竟梵行を得たりと。今佛より聞きたてまつりて便ち此義を解し、此法を了ることを得、疑を彼岸に度ることを得、諸見の毒箭を拔くことを得、已に我見を除き、心退轉せざりき。

是經を說きたまひし時、帝釋及び八萬四千の諸天は遠塵離垢し、法眼淨を得たりき。

佛言はく、憍尸迦よ、汝頗し曾て此問を以て沙門婆羅門に問ひしや不やと。世尊よ、我昔時を憶ふに、曾て諸天と共に善法堂に集り、諸天に問はく、佛出世あるや未だしやと。諸各言く、未だ佛

の出でたまふことあらずと。諸天は佛未だ世に出でたまはずと聞き各自罷散せり。諸の大威德天福盡き命終せしかば、我時に恐怖し、有沙門婆羅門の閑靜處に在るを見て便ち其所に到れり。彼沙門婆羅門は我を是誰かと問ひしかば、我言く、是帝釋なりと。我彼を禮せざるに彼逆に我を禮せり。我亦未だ彼に問はざるに彼我に問ひしかば其無智を知る、是故に我彼に歸依せざりき。我今此より佛に歸依したてまつり佛弟子とならんと。即ち偈を說きて言く、

我先に常に疑を懷き　意想滿足せず
長夜に智者を求め　是の如き疑を分別せんとして
如來を推覓せり。　諸の閑靜處に
沙門婆羅門を見て　意に是世尊なりと謂ひ
即ち其所に往到し　禮敬して問訊し
我是問を作して言く　云何してか正道を修するやと
彼諸の沙門等は　道と非道とを解せざりき。
我今世尊を覩たてまつりて　疑網悉く皆斷ぜり
今日便ち佛有り　世間の大論師は
破壞して魔怨を降し　煩惱を盡して最勝なり。
世尊の世に出でたまふは　希有にして與に等しきもの無く
諸天梵衆に於て　佛に如く者あることなし。

世尊よ、我須陀洹を得たり、[一六]婆伽婆よ、我須陀洹を得たりと。世尊告げて言はく、善かな善かな憍尸迦よ、若し汝不放逸ならば當に斯陀洹を得べしと。佛は帝釋に語りたまはく、汝は何處に於て是不壞の信を得たりやと。帝釋白して言く、我此是處世尊の邊に於て得たり。我即ち此に於て更に

【一六】梵語バハガヴァンにして世尊の義なり、又薄伽梵とも音譯せり。

天の壽命を得ん、唯願くば此事を憶持覺了したまへと。帝釋言く、世尊よ、我今是念を作さく、人中豪貴の處に生れて衆事備足せることを得、卽ち其中に於て俗を捨てゝ出家し聖道に趣向し、若し涅槃を得ば甚だ大好と爲す、若し得ずんば淨居天に生ぜんと。

爾時に帝釋は諸天衆を集め、尋いで卽ち告げて言く、我三時に於て梵天を供養せしも、今より已後止めて此をなさず、當に三時に於て世尊を供養すべしと。

爾時に帝釋は槃闍識企乾闥婆子に告げて言く、汝は今我に於て其恩甚だ重し、汝好く佛世尊を覺悟せしが故に、我をして深法を見聞することを得せしめたればなり。我天上に還り當に珍浮樓の女賢修利婆折斯を以て汝が爲に妻と作すべし。復當に卿をして其父の處に代り乾闥婆王に作すべしと。

爾時に帝釋は諸天衆を將ひ、佛を遶ること三匝したてまつり、却て行き去り、靜處に至り皆三稱して南無佛陀と言して、便ち天上に還れり。帝釋去りて久しからざるに、梵天王是念を作して言く、帝釋已に去れり、我今當に佛の所に往至すべしと。壯士の臂を屈伸するが如き頃、卽ち佛の所に至り佛足を禮し已り、一面に在りて坐しぬ。梵天の光明は遍く毘提醯山を照せり。

爾時に梵天は卽ち偈を說きて言く、

利益する所多きかな　此義を顯現せしことや
〔一七〕舍脂の彼地なる　摩伽婆は
周匝皆賢なり　能く問難を作し
婆娑婆。

重て帝釋の所問を說き、卽ち天上に還れり。

佛晨朝に於て諸の比丘に告げて言く、梵天王昨日我所に來至りて上の偈を說きて卽ち天上に還れ

〔一七〕梵語シャチにして月世界なり。

りと。佛是語を說き已りしかば、諸の比丘歡喜し佛足を敬禮して去りにき。

七十四　阿若憍陳如等を度せし往日を說くの緣

佛王舍城に在しけるが、法を說きて阿若憍陳洲を度したまひしかば、釋提桓因・頻婆莎羅王各八萬四千の衆を將ひて悉く道を得。諸の比丘疑怪すらく、各爾許人ありて三惡道を拔けるやと。

佛言はく、但今日のみにあらず、往昔の時に於ても亦曾て濟ひ拔けりと。諸の比丘言く、過去に濟拔せりとは其事云何と。佛言はく、過去世の時諸の商賈の人あり海に入りて寶を採り還り來れる中路、大曠野に於て一蟒蛇に値へり。其身擧高さ六〔一〕拘樓舍なるが諸の商賈を遶り、四邊を周匝して出入する處無かりき。

時に諸の商人極めて驚怖を懷き、各皆唱へて言く、天神地神よ慈悲あるもの我等を拔濟せよと。時に白象あり師子と共に伴となれり。師子跳ね往きて蟒蛇の腦を壞り、諸の商人をして大難を脫ることを得せしめたり。

爾時に蟒蛇は口中の毒氣を以て師子及び白象を害し、命猶未だ斷ぜざりしかば、賈客語りて言く、汝は我を濟拔せり、何の願を求めんと欲するやと。答へて言く、唯佛と作りて一切の人を度せんことを求むるのみと。諸の商人言く、汝若し佛を得ば願くば我等の輩、最も初會にありて法を聞き道を得んと。師子と白象は卽便ち命終せしかば、商人は之を燒き骨を以て塔を起てたり。

佛言はく、知らんと欲するや爾時の師子とは我身是なり。爾時の白象とは舍利弗是なり。爾時の商主とは憍陳如・帝釋・頻婆莎羅王是なり。爾時の諸の商衆とは今得道の諸天人是なり。

七十五　差摩子目を患ひ三寶に歸依して眼淨きことを得たるの緣

〔一〕梵語クローシャにして一拘樓舍は距離にして五百弓の長さと傳ふれば大約五百間ならん。

是の如く我聞く、一時佛は[一]釋氏園に在しき。爾時[二]車頭城中に釋種あり、名を[三]差摩と名け、佛を淨信し、法を淨信し、僧を淨信し。佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依し。一佛に向ひ、一法に向ひ、一僧に向ひ。佛に於て疑無く、法に於て疑無く、僧に於て疑無く。苦諦に於て疑無く、集諦に於て疑無く、滅諦に於て疑無く、道諦に於て疑無く。見諦を得るを以て、道果を獲得し、須陀洹所知見の如き事は悉く知見を得、三菩提に於て期限を過ぎず、必定して之を得たりき。

差摩釋子は眼を患ふるを以ての故に、種種の色あるも之を見ることを得ず。差摩釋子卽ち世尊を念じて、南無與眼者・南無與明者・南無除闇者・南無執炬者・南無婆伽婆・南無善逝と。佛は淨き天耳の人耳に過ぎたるを以て其音聲を聞きたまひて、阿難に告げて言はく、汝去け、今章句を以て差摩釋を擁護し、爲に救を作し守を作し牧を作して災患を滅除し、四衆の爲に利を作し益を作し安樂住を作さしめんと。

爾時に世尊は差摩釋の爲に淨眼[四]修多羅を說きたまへり。

多折他　施利　彌利　棄利　醯醯多

此淨眼呪を以て差摩釋の眼をして清淨なることを得せしめ、眼膜除くことを得たり。

若しは是風翳、若しは是熱翳、若しは是冷翳、若しは是等分翳たりとも、燒くこと莫く、煮ること莫く、腫るゝこと莫く、痛むこと莫く、痒きこと莫く、淚を流すこと莫し。戒實・苦行實・仙實・天實・藥實・呪句實・因緣實・苦實・集實・滅實・道實・阿羅漢實・辟支佛實・菩薩實。

是の如く差摩釋をして名を稱へしめ、餘人も亦稱名せよ、眼淨きことを得ん。眼淨きことを得已りて、闇を除かしめ、膜を除かしめん。

若しは是風翳、若しは是熱翳、若しは是冷翳、若しは等分翳たりとも、燒くこと莫く、煮ること莫く、腫るること莫く痛むこと莫く、痒きこと莫く、淚を流すこと莫し。

【一】梵語シャーキャーラーマならんか。
【二】梵語シャッならんか。
【三】梵語クシャマならんか。
【四】梵語スートラにして經といふ意味なり。
【五】淨眼陀羅尼なり古來意義多含の故に翻ぜずとするものなり。

阿難よ、是の如き章句は、是の如く六佛世尊より我今第七も亦是說を作す。四天王も亦是呪を說き、帝釋も亦說き、梵王幷に諸梵衆も亦隨つて歡喜せり。阿難よ、我若しは天、若しは人、若しは魔、若しは梵、若しは沙門衆、若しは婆羅門衆、若しは人、若しは天を見ず。三是章句を說かん。若しは翳、若しは闇、若しは膜、若しは腫、若しは眼靑、若しは眼中瑕出、若しは是天作、若しは是龍作、若しは夜叉作、若しは阿修羅作、若しは究槃茶作、或は餓鬼作、或は毘舍作、或は毒所作、或は惡呪作、或は蠱道作、或は毘陀　作、或は是惡星作、或は諸宿作。

阿難卽ち到りて差摩釋の爲に三是呪を說きしかば、眼淨きこと本の如く諸の色を見ることを得たりけり。

此呪を以て人の名字を稱するに隨ひ、差摩釋の如く皆闇を除き膜・風・熱・冷・及び等分を除き、燒く莫く、煮る莫く、腫莫く、痛莫く、痒莫く、流淚莫し。[六]南無婆伽婆　南無多陀伽陀・阿羅呵・三藐三佛陀と。菩薩は此神呪章句を以て一切皆吉成を得せしめ。諸梵は隨喜して[七]娑呵せん。

七十六　七種施の因緣

佛說きたまふに、七種施あり、財物を損せずして大果報を獲ん。

一には眼施と名く、常に好眼を以て父母・師長・沙門・婆羅門を視るに惡眼を以てせず、名けて眼施となす。身を捨つるも身を受けて淸淨眼を得、未來成佛して天眼佛眼を得ん、是を第一の果報と名くるなり。

二には和顏悅色施と名く、父母・師長・沙門・婆羅門に於て、惡色をもつて顰蹙せず、身を捨つるも身を受けて端正色を得、未來成佛して眞金色を得ん。是を第二の果報と名くるなり。

三には言辭施と名く、父母・師長・沙門・婆羅門に於て柔軟の語を出し麁惡の言に非ざれば、身を捨

【六】陀羅尼神呪とせるも普通歸依佛の稱名にして歸命世尊、歸命如來、應供、正徧智の義なり。

【七】梵語スワハーにして、善言なるかなの義なり。

つるも身を受けて、言語の辯了を得ること言說すべからずして人の爲に信受せられ、未來成佛して四辯才を得ん。是を第三の果報と名くるなり。

四には身施と名く、父母・師長・沙門・婆羅門に於て、起ち迎へて禮拜す、是を身施と名く。身を捨つるも身を受けて、端正の身長大の身人に敬はるゝ身を得、未來に成佛して身は〔一〕尼拘陀樹の如く頂を見る者なけん。是を第四の果報と名くるなり。

五には心施と名く、上の事を以て供養すと雖、心和善ならずんば名けて施と爲さず。善心にして和善ならば深く供養を生ぜん、是を心施と名く。身を捨つるも身を受け、明了心を得て癡狂の心ならず。未來に成佛して一切種智心を得ん、是を名けて心施第五の果報となすなり。

六には床座施と名く、若し父母・師長・沙門・婆羅門を見ば、爲に床座を敷きて坐せしめ、乃至自ら已に自ら坐せる所を以て請ひ坐せしむるなり。身を捨つるも身を受け、常に尊貴なる七寶の床座を得。未來に成佛して師子法座を得ん、是を第六の果報と名くるなり。

七には房舍施と名く、前の父母・師長・沙門・婆羅門をして、屋舍の中に行來坐臥することを得せしむ、即ち房舍施と名くるなり。身を捨つるも身を受け、自然の宮殿舍宅を得、未來に成佛して諸の禪屋宅を得ん。是を第七の果報と名くるなり。

是を七施と名く。財物を損せずと雖大果報を得るなり。

七十七　迦步王國天旱し佛を浴して雨を得るの緣

若し少善を種ゆるも良福田に於てせば後必ず報を獲んと。

往古の昔無量無邊阿僧祇劫の如きに、爾時に王あり名を〔一〕迦步と曰け、閻浮提の內に八萬四千の國土を統領せり。王は二萬の夫人ありしが然も子息無かりしかば、神祇に禱祀して多年を經歷しき。

〔一〕梵語ニャグローダにして今はバニヤンといふ、榕樹の一種なり。

〔一〕梵語カブーならんか。

最大なる夫人太子を生み字して[二]栴檀と曰ふ、轉輪王となり四天下を領せしも、惡を厭ひて出家し正覺を成ずることを得たり。

時に彼國中の諸の相師等咸言く、大旱の十二年に應ぜん、何か方計を作して此災を攘却せんと。尋ひで共に議して言く、我等今は應に金瓮を造りて市上に置き、香水を盛滿し以用て佛を浴し香水を分布せん、而らば塔廟を起し災を除くことを得べけんと。卽ち如來を請したてまつり香水にて澡浴し、世尊洗浴の餘を分ち取り、八萬四千の寶瓶を作り、八萬四千の諸國に分與し、仰ぎて塔廟を造り福を作さしむ。塔廟を作る作福の因緣を以て、天卽ち大雨し五穀豐熟し人民安樂なりき。

時に一人あり是塔廟を見て心に歡喜を生じ、卽ち一把の華を以て塔上に散し大善報を獲たり。

佛言はく、我佛眼を以て彼久遠を觀るに、栴檀如來の香水塔廟にて彼化を受けたる者皆久しきに成し涅槃に入りたりける。一把の施者は我身是なり。我往日是因緣あるを以て今末後に於て自ら成佛を致せり。是故に行者當に懃心して諸の功德を作すべし。小善に於ても下劣の想を生ずること莫れ。

七十八　長者舍利弗・摩訶羅を請するの緣

昔舍衛城中に大長者ありき。其家巨富にして財寶無量なり。常に僧次に於て沙門を請し、家に就きて供養せり。

爾時に僧次は次に舍利弗及び[一]摩訶羅なりしかば長者の家に至れり。長者見て甚だ大に歡喜せり。時日に當りて海に入りし估客大に珍寶を獲て安穩に家に歸れり。時に彼國王は聚落を分賜して長者に封與し。其妻懷妊して復男兒を生めり。諸の歡ばしき慶事同時に集會したりき。

舍利弗等旣に其家に入り長者の供を受け、飯食し已訖り、長者水を行ひ尊者の前に在りて小床座

【二】梵語のチャンダナにして今はサンダルともいふ香木なり。

【一】梵語のマハラにして大者の義なり。

を敎けり。舍利弗呪願して言く、今日良き時好き報を得、財利の樂しさ事一切集り、踊躍歡喜して心悅樂なり、信心踊發して十力を念ぜば、今の如似く後常に然らんと。長者爾時に呪願を聞きて心大に歡喜し、卽ち上妙の好㲲二張を以て舍利弗に施せり。然るに摩訶羅獨り施與せざりき。

時に摩訶羅は寺に還り惆悵して是念言を作さく、今舍利弗の得し所以は正しく呪願の長者の意に適へるに由るが故に是施を獲たるなり。我今當に是呪願を求むべしと。卽ち舍利弗に語りて言く、向者の呪願願くば我に教授せよと。卽ち之に答へて言く、此呪願は常に用ふべからず、用ふべき時あり、用ふべからざる時ありと。摩訶羅慇懃に求め請ひ願くば必ず我に授けよと。舍利弗其意に免ぜざりしも卽ち呪願を授けたり。旣に教授を蒙り尋ひで卽ち讀誦し極めて通利せしめたり。是思惟を作さく、我當に何の時か次第して我に及び、上座となりて此呪願を用ふべきやと。時に僧次に因りて長者の家に到り上座と作ることを得たり。

時に彼長者の估客海に入りしも珍寶を亡失し、長者の婦は羅官の事に遭ひ、兒復死喪せり。而も摩訶羅は本の呪願を說きて後常に然るべしと言へり。

爾時に長者旣に是語を聞きて心に忿恚を懷き、尋ひで卽ち駈打し推して門を出さしむ。瞋り打たれて情甚だ懊惱し、卽ち王田の胡麻地の中に入り、胡麻を蹋踐して苗稼摧け折る。胡麻を守る者瞋ること其れ是の如く、復鞭打を加へられ極めて勞辱せられたり。

時に摩訶羅重て打たれて過を打つ者に問ふて言く、我何の愆ありてか打れること乃ち爾るやと。時に麻を守る者具に胡麻を蹊蹋するの狀を說き、其道處を示せり。路を涉り前進し未だ幾里をも經ざるに、他の麥を刈り積みて積と爲せるに値へり。時に彼俗の法に積を遶り右旋し飮食を施設し以て豐穰を求むるなり。若し左旋せば以て不吉と爲せり。時に摩訶羅は積を遶るに左旋せしかば、麥主之を忿りて復打棒を加ふ。時に摩訶羅復之に問ふて言く、我何の罪有りてか茲に打棒を加へ

らるゝやと。麥主答へて言く、汝麥の積を遶るに右旋して呪ひ、多入と言はざるや、我法に違ふが故に、是を以て汝を打ち卽ち其道を示せしなりと。

小しく復前み行くに葬埋あるに逢ひ、他の塚壙を遶るに向の麥積の如くし、之を呪願して多入多入と言へり。喪主之を忿り復捉へて撾打して之に語りて、汝死者を見ては當に愍み、今より已後更に是の如くなること莫れと言へ。云何ぞ返つて多入多入と言ふやと。摩訶羅言く、今より已後當に汝が語の如くすべしと。

又復前み行きしに他の嫁娶せるを見しかば、送葬者の敎へし如く、今より已後復是の如くなること莫れと言へり。時に嫁娶者瞋ること其れ是の如し。復笞打を加へられ、乃至頭破れたり。

遂に復前進せしが、打たれて狂ひ走り、他の鴈を捕ふに値ひ驚怖慞惶して他の羅網に觸る。是に由るが故に他の鴈は驚き散れり。獵師瞋恚り復榜を捉りて打てり。時に摩訶羅は打たれ困熟し獵師に語りて言く、我直道より行くに數躓頓せられ精神失錯し、行歩躁疾なりしかば君の羅網に觸れたり、願くば寬に放たれ我をして前進せしめよと。獵師答へて言く、汝極めて麁疎なれば併偃して乃ち爾るなり。何ぞ安徐匍匐して行かざるやと。

卽ち前みて道に著き、獵師の語りし如く匍匐して行きしに、復道中に於て浣衣者に遇ふ。其肘行するを見て、衣を偸まんと欲するなりと謂ひ、卽時に微し捉へ復打棒を加へられたり。時に摩訶羅卽に困急に遭ひ具に上の事を陳べて放ち捨つることを蒙り、祇園に至り諸の比丘に語らく、我先日に於て舍利弗の呪願を誦して大苦惱を得て、自ら打たれて膚體毀破し、幾か身命を失せりと。諸の比丘は摩訶羅を將ひて佛の邊に詣り、具に其人の打たれし因由を說きしに、佛言はく、此摩訶羅は但今日のみ是因緣あるにあらず。

乃至昔時に國王の女あり疾患に遭遇す、太史之を占ひ、須からく塚間に詣り其が爲に解除すべし

と。時に國王の女即ち導從を將ひ塚間に往詣せり。時に道行くに二估客あり、國王の女の侍從嚴飾せるを見て心に懼畏を懷き、走りて塚間に至れり。其一人は即ち王女の侍從の爲に耳鼻を割截せられ。其一人は急に驚怖を得て死尸中に伏し、詐りて死相を現ぜり。

爾時に王女は將に解除せんと欲し、新なる死人の膚未だ爛れざる者を選び、上に坐して澡浴し以て患ふる所を療せんとす。時に人を遣して看せしめしに、正に估客に値ひ手を以て之を觸るゝに其體尚暖なり、新に死せるなりと謂ひ、即ち芥末を以て身に塗り上に在りて洗浴せり。芥末の辛氣估客の鼻に入りしが、然りと雖自ら持ちたりしに、禁制すること能はず、即便ち大嚔欬然として起れり。時に侍從は起屍鬼なりと謂ひ、或は能く我爲に諸の災疫を作さんとて門を閉ぢて拒み逆ふ。王女は急急に捉ふることを得て放たざりき。時に估客は實を以て告げて言く、我實に鬼に非ざるなりと。王女即時に彼估客とともに往き城に詣り、喚ふて城門を開き具に情實を陳べたり。

時に女の父なる國王は其言を聞くと雖猶懷きて信ぜず、兵仗を莊嚴し門を啓き就て看、方に鬼に非ざるを知れり。時に父王の言く、女人の體形は再び現さずと。即ち其女を以て用て之を妻とす。估客歡喜し慶遇無量なりき。

佛言はく、爾時の估客の王女を得しは舍利弗是なり。耳鼻を割截せられし者は摩訶羅是なり。宿緣此の如し。但今日のみに非ず、今より已後諸の比丘等よ、若し說法・呪願せんと欲せば當に時宜を解すべし、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修習すべし、憂悲喜樂是時非時を知るべし、妄に說くことを得ざるなり。

雜寶藏經卷第六

卷の第七

七十九　婆羅門如意珠を以て佛に施し出家得道するの緣

佛舍衞國に在しき。爾時に南天竺國に一婆羅門あり善く如意珠を別てり。一如意珠を持ち南天竺より東天竺に至り、諸の國土に遍せるも能く別つ者なし。是の如く次第して波斯匿王の所に到り、而して是言を作さく、誰か能く分別して此珠を識るやと。波斯匿王は諸の群臣一切智人を集むるも識る者あることなかりき。波斯匿は共に佛の邊に至れり。佛は婆羅門に語りて言く、汝は珠の名字を識るや不や、珠の生出處を知るや不や、珠の力耐を知るやと。答へて言く、知らざるなりと。佛言はく、此珠は摩竭大魚の腦中より出でたり、魚の身長二十八萬里なり、此珠の名を金剛堅と曰ふなり。第一の力耐あり一切の毒を被むる人をして、見ば悉く消滅せしめ、又光を見身に觸るれば亦復毒を消すなり。第二の力とは熱病の人見れば則ち除愈し、光其身に觸るれば亦復差ゆることを得るなり。第三の力とは人無量百千の怨家あるとも、此珠を捉らば悉く親善なることを得るなりと。

時に婆羅門は此語を聞き已りて甚だ用て歡喜せり。如來は眞實一切の智人なり、卽ち此珠を以て佛に奉上して出家を求む。佛言はく、善來比丘と。鬚髮自ら落ち、法服身に著きぬ。爲に法要を說きたまひしかば卽ち羅漢を得たり。

諸の比丘言く、如來は善く能く此珠を分別し、復能く法を說きて道證を得せしめたまへるかなと。佛言はく、但今日のみにあらず過去も亦爾りしなり。

昔迦尸國の仙人山中に五通仙ありき。時に婆羅門あり一樹葉を持ちて仙人に問ふて言く、此は何の樹葉なりやと。仙人答へて言く、此樹は金頂と名く、若し人毒せられて命死なんとするに垂んとせば、此樹の下に坐せば卽ち消滅することを得ん。熱病の人此樹に依らば亦復除くことを得ん。此

樹葉を以て人身に觸るればあらゆる毒氣及び熱病悉く皆除くことを得んと。婆羅門歡喜して仙人に與へて弟子と作り、其法を修習して亦五通を得んことを求めたり。

爾時の五通の仙人とは我身是なり。爾時樹葉を持ちし婆羅門とは今此婆羅門是なり。我其時に於て其を教へて五神通を具することを得せしめ、今亦其生死の難を免かれて阿羅漢を得たるなり。

八十　十力迦葉實言を以て佛足の血を止むるの緣

爾時に如來は[一]迦陀羅に刺られ其脚足を刺し、血出でゝ止まず、種種の藥を以て塗るも差ゆること能はざりき。諸の羅漢は香山中に於て藥を取りて塗治せしかども亦復降らざりき。十力迦葉は世尊の所に至り、是言を作して曰く、若し佛如來は一切衆生に於て平等心あること、羅睺羅・提婆達多に於けるがごとく等しくして異あることなくんば、脚の血は止るべしと。即時に血止み瘡も亦平復したりき。比丘歎じて言く、種種の妙藥塗治せしも止まざりしに、迦葉の實言に血則ち尋ひて止るとはと。

佛言はく、但今日のみにあらず、過去世の時にも亦復是の如くなりき。

昔一婆羅門ありて一子を生み名を無害と曰へり。而して父に白して言く、田中行く時は衆生を害することを莫れと。父は子に告げて言く、汝は仙人と作らんと欲するや、生活の法云何して虫を避けんやと。子言く、我今現世の安樂と後世の安樂とを得んと望めり、我語を用ひずんば、是を用て活きよと。即ち毒龍の泉の邊に向ひて坐し、求めて死を取らんと求せしなり。世に毒龍なるものあり之を見れば人を害すといふ。

時に婆羅門の子は即ち毒龍を見て、毒身體に遍く命即ち斷ぜんと欲せり。父時に憂惱して兒の處を知らざりしが、尋ね即ち求覓し、兒の死せんと欲するを見て、父は兒の所に到りて是言を作さく、

【一】梵語カドラ木なり。

我子從來害心なくんば此毒應に消ゆべしと。是語を作し已りしかば毒氣卽ち消え平復して故の如くなりき。

爾時の父とは十力迦葉是なり。爾時の子とは我身是なり。過去世の中に於て能く實語を作して我病を消除し、今現世に於ても亦實言を以て我病を愈せるなり。

八十一　佛菩提樹下に在り魔王波旬來り佛を惱さんと欲すの縁

昔如來菩提樹の下に在せしが、惡魔・波旬は八十億の衆を將ひ來りて佛を壞らんと欲し、如來の所に至りて是言を作さく、瞿曇よ、汝獨一身にして何ぞ能く此に坐せんや、急ぎ起ち去るべし、若し去らずんば我汝の脚を捉へて海外に擲げ著かんと。佛言はく、我世間を觀るに能く我を擲げて海外に著く者なけん。汝は前身に於て但曾て一寺を作り、一日に八戒を受け辟尸佛に一鉢の食を施せしが故に六天に生れて大魔王と爲れり。而るに我は三阿僧祇劫に於て廣く功德を修せり。一阿僧祇劫には我曾て無量の諸佛を供養し。第二第三阿僧祇劫にも亦復是の如く、聲聞緣覺の人を供養せしこと數を計ふべからず、一切の大地は針の許も我身の骨に非ざることあることなしと。魔の言く、瞿曇よ、汝は道ふ、我昔一日戒を持ち辟尸佛に食を施すと、信ず眞實あり我も亦自ら知り汝も亦我を知れり、汝は自導者なりとは誰か證知せんやと。佛手を以て地を指して言く、此地は我を證せんと。是語を作したまふ時、一切の大地は六種に震動し、地神は卽ち金剛際より出で、合掌して佛に白して言さく、我爲に證を作さん、此地ありてこのかた我恒に中に在り、世尊の說きたまふところは眞實にして虛しからずと。佛は波旬に語りたまはく、汝今先に能く此澡瓶を動かし、然して後能く我を海外に擲ぐべきやと。

爾時に波旬及び八十億の衆は動かしむること能はざりければ、魔王の軍衆は顚倒し自ら墮ち破壞

し星のごとく散れり。

諸の比丘言く、波旬は長夜に如來を惱亂せしも勝つこと能はざりきと。

佛言はく、但今日のみにあらず過去も亦爾りしなり。昔迦尸國仙人山中に五通仙ありき。波羅捺城中の諸の年少輩を敎化し、皆度して出家し仙道を修せしむ。

爾時に城神は極めて大に瞋恚し、仙人に語りて言く、汝若し城に入りて更に人を度せば、我は汝が脚を捉へて海外に擲げんと。彼仙人一澡瓶を捉り城神に語りて言く、先づ此瓶を動かし然る後我を擲げよと。其神力を盡すも動かすこと能はず、慚愧して歸伏せり。

爾時の仙人とは我身是なり、爾時の城神とは波旬是なり。

八十二　佛諸比丘の爲に利養の災患を說くの緣

爾時に如來は舍衞國に在して、利養を厭患したまへり。一深林あり會莊嚴と名く、林中に往至きたまふに林中に寺あり。時に一羅漢の那弋迦と名くるもの此寺主たり。佛は彼林に至りたまひて後日中に到れるに、諸人等あり衣を持ちて供養するもの林中に滿てり。是言を作して曰はく、我利養を用ひざるに而も此利養常に我後を逐ふとはと。

萬二千の比丘あり亦彼處に至れり。佛諸の比丘に語りたまはく、利養は是大災害なり能く障難を作さん。乃至羅漢も亦利養に障難せられんと。比丘問ふて言く、何の障を作し能ふやと。佛言はく、利養の害は皮を破り肉を破り骨を破り髓を破るなり。云何にして破るとなすやとなれば、持戒の皮・禪定の肉・智慧の骨・微妙なる善心の髓を破るなりと。

萬二千の比丘は齊しく三衣六物を畜へ、阿練若を作して餘物を受けざりしかば、佛即ち讚歎して善いかな善いかな能く阿練若法を作すことや。我の此法は是少欲の法にして多欲の法にあらず。是

足ることを知る法にして足ることを知らざるものにあらず。是静を樂む法にして憒鬧を樂むにあらず。是精進の法にして懈怠の法にあらず。是正念の法にして邪念の法にあらず。是定心の法にして亂心の法にあらず。是智慧の法にして愚癡の法にあらずと。

時に諸の比丘は此語を說きたまふを聞きて皆阿羅漢を得たり。諸の比丘佛に白して言さく、希有なるかな世尊よと。

佛言はく、適今日のみにあらず、過去も亦爾りしなり。昔迦尸國に輔相あり名を[一]夜叉と曰ひき。夜叉の子を[二]夜兒達多と名く、深く非常を覺り出家して仙を學びぬ。諸仙は多欲にして皆菓草を諍へり。夜兒達多は彼をして少欲ならしめんと欲するが故に、其濡草を捨てゝ彼鞭草を取り。此甘菓を捨てゝ彼酢菓を取り。己が新菓を捨てゝ他の陳菓を取り。取りし菓を捨つるのみにして即ち五通を得たり。萬二千の仙人は其此の如くなるを見て便ち少欲を學び、復多く求めざりしかば亦皆五通を得たりき。夜兒達多は漸く方便を作し諸仙を致化しき。命終の後不用處に生じたりける。

爾時の達多は我身是なり、爾時の萬二千の仙人は今の萬二千の比丘是なり。

八十三　賊殺さるゝに臨み遙に佛を見歡喜して生天するの緣

爾時に舍衞國の波斯匿王は鼓を擊ち令を唱へて是言を作さく。若し賊を作せし者捉へ得ば當に殺すべしと。時に一人あり賊を捉へて將ひ來れり。王便ち人を遣し將に出でゝ殺し去らんとす。城外に在り會道中に於て如來を逢ひ見たてまつり、心に歡喜を生ぜり。殺處に至り卽ち王法に伏せしが、尋ひで生天を得たり。具に三念を修し、是殺すに垂んとせし時佛を見たてまつり歡喜せしに由り命終して天に生ぜしことを知り已りて、佛の恩德を感じ來り下りて供養せしかば、佛爲に法を說きたまひて須陀洹を得たりき。

【一】梵語ヤクシャ鬼神なり。
【二】梵語ヤヂュルダッタならんか。

比丘問ふて言く、何の業緣を以て天宮に生ぜしやと。佛言はく、昔人中に在りて王の爲に殺されんとして死に臨む時佛を見て歡喜せり、此善因に乘じて彼天宮に生じ、重て我所に於て法を聞き解悟して須陀洹を證せしなり。

八十四　手足を刖せられし人佛恩を感念して生天を得るの緣

昔舍衞國に人あり王法を犯して其手足を截られ道頭に擲て著かれたり。佛行きて之を見卽ち其邊に往到り問ひて言はく、汝今日に於て何を以て苦となすやと。刖人答へて言く、我最も餓に苦むと。卽ち阿難に勅して彼に食を與へしめたまへり。

其刖人命終して天に生じ、佛の厚恩を感じ來り、下りて供養せしかば、佛爲に法を說きたまひて須陀洹を得たり。

比丘問ふて言く、何の業行を以て天に生ぜしやと。佛言はく、昔人中に在りて手足を刖られ道頭に擲てられしとき、佛其所に到り勅して其食を與へしかば、心歡喜を生じ命終して天に生じ、重て我所に於て法を聞きて道を得たるなり。

八十五　長者好蜜漿を以て行人に供養し生天を得るの緣

昔舍衞國に一長者ありき。祇洹林に於て空閑の地を求め、房舍を造らんと欲せしも、須達長者の遍く已に作し竟りて、復空處なし。便ち祇洹大門の中に於ける好き淨水を以て、種種の蜜種種の麨を以て漿を作り、一切の行く人に供給せり。九十日の後佛も亦之を受けたまへり。是に於て命終して天上に生じ、大威德あり天宮殿に乘じ、來りて佛を供養し、佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たり。

比丘問ふて言く、何の業行を以て天上に生ずることを得、威徳此の如くなるやと。佛言はく、本人たりし時、祇洹門に於て種種の漿を作りて一切に施與し、佛も亦受けたり。是因緣を以て天に生じ、又其所に於て法を聞き道を得たるなり。

八十六　波斯匿王の人を遣し佛を請せし王使を爲すに由り生天する緣

昔舍衞國の波斯匿王と須達長者は久しく佛を見たてまつらざりしかば、心に渇仰を生じ、夏坐の後に於て使を遣し佛を請す。使は佛の所に至り恭敬して佛に白して言く、王と長者は如來を見たてまつらんと欲せり、唯願くば世尊よ、此車上に乘りて舍衞に往き到りたまへと。佛言はく、我車を用ひず自ら神足あり。是語を作すと雖、其をして福を得せしめんが爲に、車上空中に於て行きたまふ。使は便ち前に在りて王及び長者に告げしかば、王と長者とは躬自ら出で迎へ、使も亦王とともに還り來りて佛を見たてまつれり。

命終して天上に生じ、即ち寶車に乘じて佛の所に來至り。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たり。

比丘問ふて言く、何の因緣を以て天宮に生じ、此寶車に乘ずるやと。佛言はく、昔人中に在りて王の爲に使はれ、佛の所に到り車を奉じて乘らしむ。是業緣に由り今天に生ずることを得て恒に寶車に駕せり。重て我邊に於て法を聞き、悟を得て須陀洹を證せり。

八十七　波斯匿王勸化乞索の時貧人あり氎を以て王に施し生天せし緣

昔舍衛國の波斯匿王は是言を作して曰く、須達長者は尙能く一切の人民を勸化して諸の福業を作せり。我も今亦當に衆生の爲の故に、敎導乞索し其をして福を得せしむべしと。是に於て行化し處處に乞索せり。時に一人あり貧窮多乏にして唯一㲲あるのみなるを、卽便ち持ちて波斯王に施せり。王は㲲を得て轉以て佛に奉ぜり。

其後貧人は命終して天に生じ、佛の大恩を感じて來り供養す。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を獲たり。

比丘問ふて言く、昔何の業を作して彼天に生ぜしやと。佛言はく、人中に在りし時、王の勸化に値ひ卽ち白㲲を以て之を布施せり。此善因に乘じて今天に生ずることを得、遂に我所に於て法を聞き果を證せり。

八十八　兄常に弟を勸め三寶を奉修せしむるも弟敬信せず兄は生天を得る緣

昔舍衛國に兄弟二人ありき。而して第一の者は佛法を奉修し。第二の者は[一]富蘭那に事へたり。兄常に弟を勸めて三寶に事へしめしも、弟は隨順せざりしかば恒に共に鬪諍し、情和合せず各便ち分活したりき。

第一の者佛を供養せしは後遂に命終して天上に生じ、卽ち佛の所に來りて報恩供養せり。佛は爲に法を說き須陀洹を得たり。

比丘問ふて言く、昔何の業を爲してか此天王に生ぜしやと。佛言はく、往昔人中に在りて心に正法を樂しみ三寶を奉修せり。是福因を以て今生天することを得、又我所に於て法を聞き信解して道果を證せるなり。

【一】梵語プールナにして六師外道の一派なり。

八十九　父は子の得道を聞き歡喜し卽ち生天を得るの緣

昔舍衞國に兄弟二人ありき。恒に鬪諍を喜び更に相怨惡す。便ち共に王に詣り斷決を求めんと欲せしが、道中にて佛に値ひたてまつれり。佛爲に法を說きたまひしかば阿羅漢道を得たり。

父其子の佛に遇ひたてまつりて道を得たりと聞き、心に歡喜を生じき。遂に卽ち命終して天上に生じ佛の所に來至れり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たり。

比丘問ふて言く、何の業を作してか今生天することを得たりやと。佛言はく、昔人中に在りしとき、我其子等の爲に法を說き得度すと聞き踊躍歡喜し、命終して天に生じ、重て我所に於て法を聞き信解して道果を證せるなり。

九十　子其父の爲に逼られ出家し生天の緣

昔舍衞國にて有人子をして出家し佛に事へしめ、佛卽ち之を度して恒に地を掃かしめしに、辛苦に堪へずして道を罷め俗に還れり。其父語りて言く、汝但出家せよ、今より已後汝に代りて地を掃かんと。父卽ち子と共に彼祇洹精舍に往きけるに、兒精舍の其中清淨なるを見て心に歡喜を生じ、便ち是言を作さく、我寧ろ身を殺すとも出家して地を掃かんと、復還俗せざりき。其後命終して天上に生じ、卽ち佛の所に來れり。佛爲に法を說きたまひしかば須陀洹を得たりき。

比丘問ふて言く、何の業緣を以て天上に生じたるやと。佛言はく、往昔人中に在りて辛苦に堪へず家に還らんと欲せしが、其父聽さず其に代りて使役し、强ひて驅りて出家せしめ、遂に便ち歡喜し命終して天に生ぜり。又我所に於て法を聞きて道を得たるなり

九十一　羅漢祇夜多惡龍を驅りて海に入るの緣

昔尊者阿羅漢ありき[一]祇夜多と字す。佛時に世を去りたまひて七百の後、罽賓國に出でたり。時に罽賓國に一惡龍ありて[二]阿利那と名く、數災害を作して諸の賢聖を惱し、國土の人民悉く皆之を患ひたり。時に二千の阿羅漢あり、各神力を盡して此龍を驅遣し國界を出さしむ。其中に百の羅漢あり、神通を以て地を動かし。又五百人あり大光明を放ち。復五百人あり禪定に入りて經行し。諸人各各其神力を盡せしも動すこと能はざりき。

時に尊者祇夜多最後に往至し、龍池の所に到り三彈指して言く、龍よ汝今出で去れ、此に住することを得ずと。龍卽ち出で去り敢て停住せざりき。

爾時に二千の羅漢は尊者に語りて言く、我尊者と倶に漏盡を得、解脫法身悉く皆平等なり、而るに我等各各其神力を盡すも動すこと能はざりしに、尊者云何してか三彈指を以て、阿利那龍をして遠く大海に入らしめたりしやと。

時に尊者答へて言く、我凡夫已來禁戒を受持し、[三]突吉羅に至るも等心に護持して四重の如く異ることなし。今諸人等此龍を動すこと能はざる所以は神力同じからず、故に動すこと能はざるなりと。

時に尊者祇夜多諸の弟子とともに北天竺に向ふ、道中にて一烏を見仰ぎて微笑せり。弟子白して言く、不審なるかな、尊者よ、何の緣にて微笑せるや、願くば其意を說けと。尊者答へて言く、時至らば當に說くべしと。是に於て前行し石室城に到る、既に城門に到り慘然として色を變へらる。食時已に至りしかば城に入りて乞食し、既に食を得已りて還り城門を出でんとせしに復慘然として色を變ぜり。諸の弟子等長跪し白して言く、不審なるかな、向には何の緣にて微笑し、復慘然として色を變じたりしやと。

時に尊者祇夜多は諸の弟子に答へて言く、我往昔九十一劫[四]毘婆尸佛入涅槃の後に於て長者と作りき。爾時に求めて出家せんと欲せしが父母聽さずして子に語りて言く、我家業の事重し、汝若し

【一】梵語ギヤタ尊者なり。
【二】梵語アールナ龍王なり。
【三】梵語トキラ罪なり。
【四】梵語ヴヰパシ佛過去七佛の第一佛なり。

出家せば誰か後嗣を繼がんや。吾當に汝が爲に婦を取るべし、一子の胤を産まば汝の出家を聽さんとて、卽便ち娶を爲せり。旣に婦を娶り已りて、復出家を求めしに、父母復言く、若し一の息を生ぜば汝の出家を聽さんと。其後久しからずして一男兒を生めり。兒旣に能く語る。復父母に白して言く、願くば尊よ、先に許したまへる我出家を聽きたまへと。

爾時に父母は前の言に違ふを恐れて、密に乳母に敎へて孫兒に語らしめて言く、汝が父若し出家し去らんと欲する時、汝當に門に在りて父を捉へ言ふべし、旣に我を生育せしに今我を捨てゝ出家し去らんと欲するや。若し去らんと欲せば、願くば父よ今我を殺し然る後當に去るべしと。其父卽時に慘然として情變じて子に語りて言く、我今當に住すべし復更に去らずと。是に由りての故に生死に流浪せしなり。

我道眼を以て宿命を觀察するに、天上人中及び三惡道にて相ひ値ふこと甚だ難く、相値ふこと甚だ難し。今乃ち一見る、向の一鳥は卽ち是彼時の孫兒なり。我向に慘然として色を變ぜし所以は、我城の邊に於て餓鬼の子を見る、而して我に語りて言く、我此城の邊に在ること已に七十年、我母は我爲に城に入りて食を求むるも、未だ曾て一も得來らず、我今飢渴し甚だ大に困厄せり。願くば尊者城に入りて我母を見ば、願くば我爲に語れ、速に我を看に來れと。時に我城に入りしが、餓鬼の母を見て之に語りて言く、汝が兒外に在りて飢渴甚だ危し、思ふて相ひ見んと欲せよと。時に餓鬼の母之に報じて言く、我來りて城に入ること七十餘年なるも、我自ら薄福にして加ふるに我新に飢羸を生じて力無し。膿血涕涶糞穢不淨の食ありと雖、諸の大力なる者先に於て持ち去り我得ること能はず。最後に一口の不淨を得、持ちて門を出で子に與へて分ち食せんと欲するも、門中復諸の大力鬼ありて復出づることを聽さず。惟願くば尊者よ、慈愍し我を將ひて母子相ひ見え此不淨を食せしめよと。時に尊者は卽ち餓鬼の母を將ひて城門を出で、母子相見え不淨を分ち食せしむるこ

とを得たり。

爾時に尊者此鬼に問ふて言く、汝此に於て住すること幾時となすやと。時に鬼答へて言く、我此城の七返成壞せしを見たりと。時に尊者歎じて言く、餓鬼の壽長ければ甚だ大苦となすなり。

時に諸の弟子は此語を說を聞き、皆生死を厭患して即ち道迹を得たり。

九十二　二比丘の祇夜多を見て生天を得るの緣

時に南天竺に二比丘あり、祇夜多大威德ありと聞き、來りて罽賓に向ひ其住處に到りしに、道に樹下に由りて一比丘を見る、形體甚だ悴へて竈の前に火を然せり。彼二比丘は之に問ふて言く、汝は尊者祇夜多を識るや不やと。答へて言く、我識れりと。彼比丘言く、今何處に在りやと。語りて言く、上の第三窟中に在りと。彼二比丘即便ち山に上り窟の所に往到きしに、向の然火比丘を見たり。時に二比丘所以を疑怪して、比丘の言く、尙此の如き名德あらんや、何ぞ能はざるを變へて先に此に來れるやと。時に一比丘即ち決疑を求めて之に問ふて言く、尊者此の如き威德あるに自ら火を然すことを爲すやと。尊者答へて言く、我往昔生死の苦を念ひ、我頭手脚の之を然すべき者の若く、猶衆僧の爲に而も用て火を然すなり、況や復薪を然さんやと。

時に二比丘即便ち問ふて言く、不審なり往昔生死の苦とは、其事云何、願くば之を聞かんと欲すと。尊者答へて言く、我往昔を念ふに、五百世の中、狗の中に生れ常に飢渴に困れり。唯二時に於て自ら飽滿することを得たり。一は醉人の酒を吐きて地に在るに値へば安樂に飽くことを得。二には夫婦二人共に生活をなすに値ふ、夫は便ち田に向ひ、婦は後に住りて食を作せり。時に彼婦人事の緣にて小出せり。我時に即ち入り彼飯食を盜み、彼食器の口小なるに値ひ、初め頭を入ることを得と雖、後に出すことを得ること難し。一飽を得と雖然も辛苦を受くるなり。夫田より還り即便ち頭

を剪りて器中に在りしと。

時に二比丘は其說法を聞き、生死を厭惡して須陀洹を得たりき。

九十三　月氏國王の阿羅漢祇夜多を見る縁

月氏國に王あり、[一]栴檀罽尼吒と名けたり。罽賓國に尊者阿羅漢の祇夜多と字し大名稱あるを聞き、相ひ見えんと欲することを思へり。卽ち自躬餝して諸の臣從とともに彼國に往き造れり。其中路に於て心竊に念を生ずらく、我今王たり、天下に王たらば一切人民敬伏せざるものなし。大德有る者にあらざるよりは何ぞ能く我供養を受くるに堪任せんやと。是念を作し已りて遂に便ち前進し、徑に彼國に詣れり。

有人尊者祇夜多に告げて言く、月氏國王栴檀罽尼吒と名くるもの諸の臣從とともに遠く來りて相ひ見えんとす。唯願くば尊者其衣服を整へ共に相ひ待接せよと。時に尊者答へて言く、我佛語を聞くに出家の人は道として俗表を尊ぶも唯德を是務むるのみ、豈に服飾を以て出で迎へ接せんやと。遂に便ち靜に默し端坐して出でざりき。

是に於て月氏國王は其住處に往き、尊者祇夜多に見ゆ。其威德を覩て倍敬信を生じ、卽ち前みて稽首し却て一面に住せり。時に尊者唾せんと欲す、月氏國王覺えず前に進みて唾器を授けたり。時に尊者祇夜多卽ち王に語りて言く、貧道今は未だ王の爲に福田と作るに堪へざるなり、胡爲ぞ躬自ら神駕を枉屈げたりやと。時に月氏王は深く慚愧を生じ、我向には竊に微念を生じ、我心に以知らく、神德にあらざるよりは何ぞ能く爾らんやと、尊者の所に於て重く恭敬を生ぜりと。

時に尊者祇夜多は卽便ち王の爲に略して教法を說き。王來りし時も道好かりき、去らんにも來りし時の如くせよと。王は教を聞き已りて卽便ち國に還る、其中路に至り群臣怨みて言く、我等遠く

【一】梵語チャンダラ・カニタ王にして迦膩色迦王に同じ。

大王に從ひ彼國に往至れるも竟に聞くところなし、然も空しく國に還るとはと。

時に月氏王は群臣に報じて言く、卿今我を責めて得るところなしとや。向の時尊者我爲に說法して、王來りし時も道好かりき、去らんにも來りし時の如くせよと。卿等此を解せざるや、我往昔持戒布施し僧坊を修造し塔寺を造立し、種種の功德を以て王種を植ゑしかば今斯位を享く。今復福を修して廣く衆の善を積まば、當來の世も必ず重く福を受けんと。故に我を誡めて言く、王來りし時も道好かりき、去らんにも來りし時の如くせよと。群臣聞き已りて稽首し謝して言く、臣等斯下にして智慧愚に淺ければ竊に妄解を生ずらく、行き來りしところの道と謂ふは、大王の神德妙に言旨に契ひ、積德種ゆるところの故に斯國位を享けたりと。群臣歡喜し言ひ已りて退きぬ。

九十四　月氏國王三智臣と善親友と作る緣

時に月氏國に王あり栴檀罽尼吒と名く、三智人とともに以て親友たり。第一は[一]馬鳴菩薩と名け、第二は大臣にして摩吒羅と字し、第三は良醫にして遮羅迦と字す。此の如き三人は王の親善する所、待遇隆厚にして左右に進止せり。

馬鳴菩薩而も王に白して言く、當に我語を用ふべくんば、王をして來生の世常に善と俱に、永く諸難を離れ長く惡趣を辭せしめんと。

第二の大臣復王に白して言く、王若し臣の密語を用ひ漏泄せずんば四海の內都て尅ち獲べしと。

第三の良醫復王に白して言く、大王若し能く臣の語を用ひば、王をして一身の中終に橫死せしめず、百味も心に隨ひ調適して患なからんと。

王其言の如くせしかば未だ曾て微病だにもせざりき。是に於て王は大臣の言を用ひ、軍威擬るところ摧伏せざることなく、四海の內三方已に定る。唯東方あるのみ、未だ來り歸伏せざりしかば、

【一】梵語にてはアシヴァゴーシャといふ。

卽便ち軍を嚴にし往き討罰せんと欲し、先づ諸胡及び白象を先導首に遣し、王は後より引き、葱嶺に至り關嶮を越へ度らんと欲せしに、先に乘る所の象馬肯て前進せず、王甚だ驚き怪みて馬に語りて言く、我前後汝に乘りて征伐し三方已に定る。汝今云何してか肯じ路を進まざるやと。

時に大臣白して言く、臣先に啓すところ、密語を泄すこと莫れと、今漏泄したりき、命も將に遠からじと。大臣の言の如く、王卽ち自ら定んで死せんこと久しからずと知れり。是王は前後して征伐し三億餘人を殺せしかば、自ら將來の罪重く必ず受けんこと疑ひなきを知り心に怖懼を生ぜり。卽便ち懺悔し、檀を修し戒を持ち、僧房を造立して衆僧を供養し四事乏しからしめず。諸の功德を修し精懃して惓まざりき。

時に諸臣あり自ら相ひ謂ふて言く、王は廣く諸の罪を作して無道を殺戮せり、今福を作すと雖、何ぞ往の咎を益せんやと。

時に王は之を聞き、將に其疑の意を解かんと欲し、卽ち方便を作し勅して臣下に語らく、汝當に一の大鑊を然し七日七夜なるべし、極めて沸かさしむべく斷絕することを得る莫れと。王便ち一の指環を以て鑊の中に擲げ、命じて諸臣に向ひ、仰ぐらくば卿よ鑊の中より此鐶を得來れと。臣は王に白して言く、願くば更に餘罪を以て死に就かしめよ、此鐶は得ずと。王は臣に語りて言く、頗し方便して取るを得べきことありや不やと。時に臣答へて言く、下は其火を止め、上より冷水を投げよ、此方便を以てせば人の手を傷けずして之を取るべきのみと。

王答へて言く、我先に惡を作せしは彼熱せる鑊に喩へ、今諸善を修し慚愧懺悔し更に惡をなさずんば胡爲ぞ滅せざらんや、三途も止むべく、人天も得べしと。卽時に解悟せり。群臣聞き已りて歡喜せざるはなし、智人の言は用ひざるべからず。

雜寶藏經卷第七

卷の第八

九十五　拘尸彌國の輔相夫婦は佛に惡心なりしが佛卽ち化導し須陀洹を得る緣

佛は拘尸彌國に在しけるが、輔相の婆羅門あり、人となり狂暴にして動もすれば道を以てせず。其婦邪謟にして亦復異りなし。夫は婦に勅して言く、瞿曇沙門此國界に在り、若し其れ來らば門を閉ぢて開くこと莫れと。

一日中に於て如來忽然として其屋中にあり。婆羅門の婦は見已りて默然として與に語らざりき。佛便ち說き言はく、汝婆羅門よ愚癡邪見にして三寶を信ぜずと。婦此語を聞きて大に瞋恚り。自ら瓔珞を絕ち垢膩ける衣を著地に在りて坐せり。夫外より來り問ふて言く、何を以て爾るやと。答へて言く、瞿曇沙門我を罵辱して是の如き言を作せり。汝婆羅門は邪見にして信ぜずと。夫の言く、且く明日を待て、明日は門を開き以て佛の來るを待つべしと。

後の日中に於て佛其家に現出せしかば、婆羅門は卽ち利劍を捉りて佛を斫らんとせしも著ること能はず、佛を見るに虛空の中に在り。便ち自ら五體を地に投じて佛に白して言さく、唯願くば世尊來り下りて其懺悔を受けよと。爲に法要を說きたまひしかば、夫婦倶に須陀洹道を得たりき。

時に諸の比丘は佛の是の如き惡人を降し化せりと聞き、各此言を作さく。世尊の出世は甚奇甚特なりと。

佛は比丘に告げて言はく、但今日のみにあらず、過去の時も亦曾て調伏せりと。比丘白して言く、不審なるかな過去の調伏とは云何ぞや。

佛言はく、昔迦尸國に王あり名を惡作となす、極めて非法を作し百姓を苦惱せり。殘賊無道に

して四遠の賈客の珍琦の勝物は皆稅として奪ひ取り其直に酬ひず、是に由るが故に國中の寶物は遂に大に貴きに至り、諸人稱し傳へて惡名流布せり。

爾時に鸚鵡王あり、林中に在りて行路の人の王の惡を說くを聞き、卽ち自ら思念すらく。我は是鳥なりと雖尙其非を知れり、今當に彼に詣り爲に善道を說くべし、彼王若し我語を聞かずんば必ず是言を作さん、彼鳥の王なるも猶善言あり、奈何ぞ人王をやと。彼は譏り責められ儻は能く改修せんと。尋ひで卽ち高く飛び王の園中に至り、廻翔し下降して一樹の上に在り。王夫人の園に入り遊觀するに値へり。時に鸚鵡は翼を鼓し嚶鳴して之に語りて言く、王は今暴虐にして無道之れ甚し、萬民を殘害して毒鳥獸に及ぶ、含氣嗷嗷として人畜憤結し、呼嗟の音周く天下に聞えたり。夫人も苛刻たること王と異無し、民の父母なるもの豈に是の如くなるべけんやと。夫人聞き已りて瞋毒熾盛なり、此何の小鳥ぞや、我を罵り口を溢するやと。人を遣し伺ひ捕へたり。

爾時に鸚鵡は驚かず畏れず捕者の手に入れり。夫人之を得て卽ち用て王に與ふ。王は鸚鵡に語らく、何を以て我を罵るやと。鸚鵡答へて言く、王の非法を說きて乃ち相ひ益せんと欲するなり、敢て罵らざるなりと。時に王問ふて言く、何の非法ありやと。答へて言く、七事の非法あり、能く王の身を危くせんと。

問ふて言く、何等か七となすや。答へて言く、一には女色に耽り荒みて貞正を務めず。二には酒を嗜みて醉亂し國事を恤へず。三には碁博に貪著して禮敎を修せず。四には遊獵殺生して都て慈心無し。五には好く惡言を出して初より善語なし。六には賦役謫罰して常則を倍加す。七には義理を以てせずして民財を劫奪す。此七事あらば能く王の身を危くせん。

又三事ありて王國を傾敗せんと。王復問ふて言く、何をか三事と謂ふや。答へて言く、一には邪佞諂惡の人に親近し。二には賢聖に附かずして忠言を受けず。三には好く他國を伐ちて人民を養は

す。此三を除かずんば傾敗の期旦にあらずんば夕ならん、夫れ王たる者は率土の歸仰にあり。王は當に橋の如く萬民を濟渡すべし、王は當に秤の如く親も疎も皆平にすべし、王は當に道の如く聖蹤に違はざるべし、王は日の如く普く世間を照すべし、王は月の如く物に清涼を與ふべし、王は父母の如く恩育慈矜せよ、王は天の如く一切を覆蓋せよ、王は地の如く萬物を栽養せよ、王は火の如く諸の萬民の爲に惡患を燒除せよ、王は水の如く四方を潤澤し、過去の轉輪聖王の如く十善道を以て衆生を教化すべしと。

王は其言を聞きて深く自ら慚愧せり。鸚鵡の言く、至誠至款ならば我人王の爲に所行無道なるとも請ふ其教に遵ひ、奉じ以て師と爲し正行を受け修せんと。

爾時に國内の風教既に行はれ、夫人臣佐皆忠敬を生じ、一切の人民歡喜せざるものなし。譬へば牛王の水を渡るに導く者既に正しければ從ふ者も亦正しきが如し。

爾時の鸚鵡とは我身是なり。爾時の迦尸國王惡受とは今の輔相是なり。爾時の夫人とは輔相の夫人是なり。

九十六　佛弟の難陀佛の爲に逼られ出家得道するの緣

佛[一]迦比羅衛國に在して城に入り乞食し難陀の舍に到りたまひしが、會難陀は婦とともに粧を作し香を眉間に塗るに値へり。

佛門中にありて聞き外に出でゝ看んと欲す。婦共に要言して言く、出でゝ如來を看ば我額上の粧未だ乾かざるの頃便ち還り入り來らしめよと。難陀卽ち出で、佛を見たてまつりて禮を作し、鉢を取りて舍に向ひ食を盛りて佛に奉るに、佛爲に取らず阿難に過ぎ與ふ。阿難も亦爲に取らず。阿難語りて言く、汝誰より鉢を得るや、還りて本處に與へよと。

【一】梵語カピラワスツの漢訛音譯なり。

是に於て鉢を持ち佛を逐ひたてまつりて[二]尼拘屢精舍に至れり。佛即ち剃師に勅して、難陀に剃髪を與へよと。難陀肯ぜず怒り拳して剃髪の人に語りて言く、迦毘羅衛の一切人民を汝今盡く其髪を剃るべきやと。佛は剃髪者に問ひたまはく、何を以て剃らざりしやと。答へて言く、畏るゝが故に敢て剃ることを爲さずと。佛は阿難と共に自ら其邊に至りたまへり。難陀畏るゝが故に剃ざることを敢てせざりき。剃髪することを得と雖恒に家に還らんと欲せり。佛常に將ひ行きたまひて去ることを得る能はず。

後一日に於て次して房舍を守ることゝなれり。而して自ら歡喜し、今眞に便を得たり家に還り去らんかな。佛衆僧都て去るの後を待ち我當に家に還るべしと。佛の城に入りたまひし後是念を作して言く、當に爲に水を汲み澡瓶を滿さしめ然る後還歸すべしと、尋ひで時に水を汲みしに、一瓶適滿つれば一瓶復翻る、是の如く時を經給へしも瓶に滿すること能はざりしかば、便ち是言を作さく、俱に滿すべからざらん。諸の比丘來り還らば自ら汲むべし、我今但瓶屋中に著きて之を棄て去らんと。即ち房門を閉ぢんとし、適一扇を閉づれば一扇復開き、適一戸を閉づれば一戸復開く、更に是念を俱に閉づべからず、且く置きて去らん。縱使諸比丘の衣物を失ふとも我財寶饒なれば償ふべくあるに足らんと。即ち僧房を出でゝ自ら思惟すらく、佛は必ず此より來りたまはん、我則ち彼異道より去らんと。

佛其意を知りて亦異道より來りたまへり。遙に佛の來りたまふを見て大樹の後に藏れしに、樹神を擧げて虛空の中に在らしめしかば露地に立てり。佛は難陀を見て將ひ精舍に還りたまひ、而して之に問ふて言はく、汝は婦を思ふやと。答へて言く、實に思へりと。即ち難陀を將ひて[三]阿那波那山上に向ひたまひ。又難陀に問ひたまはく、汝が婦端正なりや不やと。答へて言く、端正なりと。山中に一の老ひたる瞎の獼猴ありしかば、又復問ひたまはく、汝が婦の[四]孫陀利の面首端正なる

【二】梵語ニャグローダアーラーマにして迦毘羅衛城南外の寺なり。

【三】阿那波那山或は阿那波山とせり、梵語アナパナならんか、想ふに舍衛城外ヒマラヤ連山の一ならん、

【四】梵語スンダリーの漢訛音譯なり。

は何ぞ此獼猴に如かんやと。難陀懊惱して便ち念言すらく、我婦端正なること人中に雙ぶもの少し、佛今何故に我婦を以つて此獼猴に比したまふやと。

佛復將ひて忉利天上に至りたまひ、諸の天宮を遍くして共に觀看し、諸の天子と諸の天女と共に相ひ娛樂するを見、一宮中を見るに五百の天女ありて天子有ることなし。來り還りて佛に問ふ。佛の言はく、汝自ら往き問へと。難陀往き問ふて言く、諸の宮殿中盡く天子あるに、此中何を以てか獨り天子無きやと。天女答へて言く、閻浮提の內に佛弟の難陀あり、佛逼りて出家せしむ、出家の因緣を以て命終して此天宮に生じ我が天子となるべしと。難陀答へて言く、卽ち我身是なり、便ち卽に住せんと欲すと。天女語りて言く、我等は是天にして汝は今是人なり、還りて人壽を捨て更に此間に生ぜば便ち住することを得べしと。使ち佛の所に還り上の如き事を以て具に佛に白しければ。佛は難陀に語りたまはく、汝が婦の端正は何ぞ天女に如かんやと。難陀答へて言く、彼天女に比するは、瞎なる獼猴を我婦に比ぶるが如しと。

佛は難陀を將ひて閻浮提に還りたまひ、難陀よ天に生ぜんが爲の故には懃に持戒を加へよと。

阿難爾時に爲に偈を說きて言く、

譬へば羝羊の　　將に前まんとして更に却くが如く
汝は欲の爲に戒を持てり　　其事も亦是の如し

佛は難陀を將ひて復地獄に至り、諸の鑊湯を見たまふに悉く皆人を煮る。唯一鑊のみ炊き沸くも空しく停れるを見、其所以を怪みて來り佛に問ひたてまつる。佛之に告げて言はく、汝自ら往きて問へと。難陀卽ち往き獄卒に問ふて言く、諸の鑊は盡く皆煮て罪人を治せるに、此鑊は何故に空しく煮るところなきやと。答へて言く、閻浮提の內に如來の弟あり難陀と名く、出家せし功德を以て當に天に生ずることを得べし。欲を以て道を罷むる因緣の故に天壽命終して此地獄に墮ちんとす。

是故に我今鑊を炊きて待てりと。難陀恐怖し獄卒の留むるを畏れ、即ち是言を作さく、南無佛陀唯願くば擁護し、我を將ひて閻浮提の內に至らしめたまへと。

佛は難陀に語りたまはく、汝懃めて戒を持ち汝の天福を修せよと。難陀答へて言く、天に生ぜんことを用ひず、唯願くば我をして此地獄に墮ちざらんことをと。佛爲に法を說きたまひしかば、一七日の中に阿羅漢と成れり。諸の比丘歎じて言く、世尊の世に出でたまふは甚奇甚特なりと。佛言はく、但今日のみにあらず、乃往過去も亦復是の如しと。諸の比丘言く、過去も亦爾りとは其事云何、請ふ我爲に說きたまへと。

佛言はく、昔迦尸國に名を滿面と曰ふものありき。比提希國に一婬女あり端正殊妙なりき。爾時に二國常に相ひ怨嫉せり。傍に佞臣あり迦尸王に向ひ、彼國に婬女あるを說き端正なること世の希有とするところなりと歎ぜり。王は此語を聞きて心に惑著を生じ、使を遣し從つて索めしが彼國にて與へざりき。重ねて使を遣し語らく、暫く相ひ見ることを求む四五日間のみ、還し當に發遣すべしと。時に彼國王は婬女に約勅すらく、汝の姿態あらゆる伎能好く悉く具備すれば、迦尸王をして惑著せしめよ、須臾の間のみ遠離すること能はじとて即ち遣し去らしめたり。四五日を經て尋ひで復喚びて言く、大祀を設けんと欲すれば須からく此女を得んとす、暫く還し放ち來らしめよ、後當に更に遣すべしと。迦尸王即ち遣し歸還せり。大祀已に訖りしかば、使を遣し還れと索む。答へて言く、明日當に遣すべしと。既に明日に至りしも亦復遣さざりき。是の如く妄語して多日を經歷せり。王は心に惑著して單に數人を將ひ彼國に往かんと欲せしが、諸臣勸め諫めて受け用ふることを肯ぜざりき。

時に仙人山中に獼猴王あり、聰明博達にして多く知るところあり。其婦適死せしかば一雌獼猴を取れり。諸の獼猴衆皆共に瞋呵すらく、此婬獼猴よ、衆の共有するところなるに何に緣りてか獨

り當るやと。

時に獼猴王は雌獼猴を將ひて迦尸國に走り入り王の所に投ぜり。諸の獼猴衆は皆共に追ひ逐ふて既に城内に到り、屋を發き牆を壞りて料理すべからず。迦尸國王は獼猴王に語りて言く、汝今何ぞ雌獼猴を以て諸の獼猴に還さざるやと。獼猴王言く、我婦死去して更に復婦無し、王今云何ぞ我をして歸らしめんと欲するやと。王之に語りて言く、今汝獼猴よ我國を破亂するや、那ぞ歸らさることを得んやと。獼猴王言く、此事好からずやと。王答へて言く、好からずと。是の如く再三王の好からずと言ふが故に、獼猴王の言く、汝の宮中には八萬四千の夫人あり、汝樂愛せずして敵國に至り婬女を追逐せんと欲するや。我今婦無し唯此一を取りしに、汝好からず言ふとは。一切萬姓は汝を視て活く、一婬女の爲に云何して捐棄するや。大王當に知るべし、婬欲の事は樂少くして苦多し、猶風に逆ひて熾炬を執るが如く、愚者は放たずして必ず燒害せらる。欲は不淨と爲す彼屎糞の如し。欲は外形に現る薄皮の覆ふ所なり。欲は返復なし屎塗毒蛇の如し。欲は怨賊の如く詐りて人に親附す。欲は假借の如く必ず當に還歸すべし。欲は惡むべしと爲す廁に生ぜる華の如し。欲は疥瘡して火に向ふが如く之を爬けば轉劇し。欲は狗の枯骨を嚙むが如く、涎唾共に合ふて謂ひ味有りとなし、脣齒破れ盡すも厭き足ることを知らず。欲は渇ける人の鹹水を飲みて逾其渇を增すが如し。欲は段肉の衆鳥競ひ逐ふが如し。欲は魚獸の味を貪りて死に至るが如く、其患甚だ大なりと。

爾時の獼猴王は我身是なり。爾時の王は難陀是なり。我爾時に於て欲の淤泥中より難陀を拔出せり。今も亦其生死の苦を拔けり。

九十七　大力士曠野の群賊を化する緣

爾時に佛王舍城に在しき。王舍城と毘舍離との中間に於て五百の群賊あり。頻婆娑羅王は慈仁寬

善なれば恩法を以て世を治し物命を害せず。即ち募を出して言く、誰か能く往きて五百の群賊を化し、賊を作さしめざれば當に爵賞を重くすべしと。

時に一力士あり、來りて王募に應じ、彼曠野に往き群賊を綏化し、即ち能く其をして復賊を作さざらしむ。既に能く調伏せしかば大城池を作りて之を安置せり。漸漸に聚集し多人依附して遂に大國を成せり。

其國の人民各是言を作さく、我等今は大力士養育の恩を蒙りて便ち共に聚集せり。是要言を作さん、今より已後新に婦を取らば先づ力士に奉ぜんと。即ち力士の所に到り力士に語りて言く、我等要を作せり。新に婦を取らば力士に奉上せんとす、二事の爲の故なり。一には好き子を得て力士に似せしめんと欲し。二には以て力士の恩に報ぜんとすと。力士答へて言く、何ぞ是を用ひなさんやと。衆人慇懃なりしかば即ち其意に從ひ唯此法を行へり。漸く多事を經しに一女人あり、此事を樂まず、衆人の前に於て裸にて立ち小便せり。衆皆呵りて言く、汝慚愧なし、云何ぞ婦女の衆人の前に在り立ちて小便するやと。女人答へて言く、女人が還つて女の前に在りて裸にて小便するに何等恥あらんや。一國は都て是女人なり、唯大力士のみ是男子なり。若し彼の前に於ては當に慚愧すべし、汝等の前に於ては何の羞恥あらんやと。是より衆人相語りて言く、此女の說くところ正に是道理なりと。

時に舍利弗・目連は共に五百の弟子を將ひて曠野の中を經過ぎたりしを、力士は之を知り、二尊者幷に五百の弟子を請し、安置止宿せしめて衣食を供給せり。三日を過ぎし後、國中の人民は聚集して會を作し、酒を飲み過醉し、群り共に大力士の舍を圍遶し火を以て焚燒す。力士問ふて言く、何の故に是の如くなるやと。衆人答へて曰く、婦女初めて嫁するに都て汝を經由す、我等は是人なり此事を忍びず、故に來りて汝を燒くなりと。力士答へて言く、我先に肯ぜざりしが、汝等强ひたり

しかば爾るなりと。諸人聽さずして便ち燒き死せしめ命終らんとするに垂んとし、誓願を發して言く、我舍利弗・目連を供養せし功德の因緣を持てり、此曠野の中に生れて大力の鬼神と作り諸人等を滅さんと。是語を作し已りて其命卽ち斷ぜり。便ち曠野に於て化生して鬼と作り、大毒氣を放ちて多く人衆を殺せり。

中間に往至りし有智の人共に鬼に求めて言く、汝今自ら無量の人民を殺し食肉盡きず唐く臭爛せしむるのみ。願くば我等を聽し諸の牛馬を殺せ。日に一人を以て汝に供給せんと。是に於て國中皆共に籌を拔き一人一日に當れり。

是の如く次第して一長者 須拔陀羅に到れり。須拔陀羅は一男兒を生み福德端正なるが、次に鬼食に應ぜり。長者念言すらく、如來世に出でたまふて一切苦惱の衆生を拔濟したまふと。唯願くば世尊我子今日の厄を救護したまへと。

佛王舍城に在して長者の心を知りたまひ、卽便ち曠野鬼神の宮殿中に來り向ひ坐したまへり。曠野鬼神は來れる世尊を見て極めて大に瞋恚し、而して佛に語りて言く、沙門よ出で去れと。佛便ち出で去らる。鬼適宮に入れば佛復還りたまへり。是の如くすること三返して第四過に至り、佛出でたまはざりき。鬼此言を作さく、若し出でずんば汝が心を顚倒せしめ、當に汝が脚を捉へて恒河の裏に擲ぐべしと。佛之に語りて言はく、我世間にて若しは天魔梵の能く我を捉へて是の如く作す者あるを見ずと。曠野鬼の言く、是の如し是の如し、如來は我に聽すに四事を問はしめよと。當に我爲に說くべし。一には誰か能く駛流を渡るや。二には誰か能く大海を流るや。三には誰か能く諸苦を捨つるや。四には誰か能く淸淨を得るやと。佛卽ち答へて言く、信は能く駛流を渡り。不放逸は能く大海を渡り。精進は能く苦を捨て、智慧は能く淸淨を得と。是語を聞き已りて卽ち佛に歸依し佛弟子となり、手から小兒を捉りて佛鉢中に著き、遂に小兒を名けて曠野手となせり。漸漸に長大

【一】梵語スバハッドラなり。

せしかば佛爲に法を説きたまひて阿那含道を得たりき。

諸の比丘言さく、世尊の出世は甚だ希有と爲す、此の如き大惡なる曠野鬼神を佛は能く降伏したまひ優婆塞と作したまへり。

佛言はく、但今日のみにあらず、過去世の時も亦復迦尸國・比提醯國二國の中間に於て大曠野ありて、惡鬼の沙吒盧と名くるあり、道路を斷絶し一切人民過ぐることを得る者なかりき。一商主あり名を師子と曰ふ。五百の商人を將ひて此路を過ぎんと欲す、諸人恐怖し畏れて過ぐべからず。商主語りて言く、愼みて怖畏すること莫れ、但我後に從へと。是に於て前み行き、鬼の所に到り、而して鬼に語りて言く。汝は我名を聞かずやと。答へて言く、我汝の名を聞くが故に來りて戰はんと欲するなりと。問ふて言く、汝何をか能くするところなりやと。卽ち弓箭を捉りて此鬼を射んとして五百の箭を放ちしも皆鬼の腹に沒す、弓刀器仗も亦鬼の腹に入る。直に前みて拳にて打つも、拳復入り去れり。右の手を以て托すれば右の手も亦著き。右の脚を以て蹋すれば右の脚も亦著き。左の脚を以て蹋すれば左脚も亦著く。又頭を以て打てば頭も亦復著けり。鬼は偈を作りて言く、

汝は手脚及び頭を以てするとも　一切の諸物悉く以て著けり
餘も又何物か著かざらんや。

商主偈を説きて答へて言く、

我今手足及び頭　一切の財錢及び刀仗を以てせるも
唯精進のみありて汝に著かず　精進若し休息せざるべくんば
汝と鬪諍して終に廢せじ　我今精進して休息せずんば
終に汝に於て怖畏を生ぜず。

時に鬼答へて言く、今汝等が爲の故に五百の賈客は盡く皆放ち去らんと。

爾時の師子とは我身是なり。爾時の沙吒盧とは曠野鬼是なり。

九十八　輔相法を聞きて欲を離るゝの縁

佛王舍城に在せしとき。頻婆娑羅に大輔相ありき。數其王と共に佛の所に往き至りて、如來の離欲の法を說きたまふを聽き、後婦の所に於て大に往返せざりしかば婦惡心を生じ、毒藥を推求して飲食の中に著き、佛を請して與へんと欲せり。夫は其婦の惡意を懷けるあるを覺り、從ひて飲食を索めしに、婦は肯じて與へず、更に異る食を與へたりき。

佛已に來至したまひしかば、夫は佛に白して言さく、此食は食したまふべからずと。佛言はく、何を以て食すべからざるや。答へて言さく、毒あればなりと。佛言はく、世間に毒あるも三毒に過ぎざらん、我尙消除せり、何の小毒か能く我を中傷するものあらんやと。佛卽ち其食を食したまふに都て異あることなし。

時に輔相の婦は信心を生ぜり。佛爲に法を說きたまひしかば、夫婦二人須陀洹道を得たりき。諸の比丘等は未だ曾て有らざるところなりと歎ぜり。佛言はく、但今日のみにあらず、過去世に於ても亦曾て彼を化せり。

昔迦尸國王に一智臣あり【一】比圖醯と名く、常に道法を以て國王に輔相たり、及び諸の群臣をして悉く善を修せしめたり。時に龍王あり名を明相と曰ふ。數數比圖醯の所に往來して法言を聽受し、亦其婦に於て往返すること希簡なりき。龍の婦は瞋恚りて是言を作さく、比圖醯の心を得て火を祀り、血を得て飲み、然る後活くべしと。

時に夜叉鬼あり、此龍王并に其婦と往返して親善せり。龍婦の語を聞き卽便ち答へて言く、我能く之を得んと。龍婦の邊に於て如意珠を擔ひ、現に賈客と作りて迦尸國に往詣し、王の邊に至り王

【一】梵語ビヅヘイならんか。

と共に樗蒲し如意珠を賭け、王は國土庫藏を以てし、比圖醯等復一分を作し以て其珠に對せしが、夜叉勝つことを得たり。求めて其國土庫藏を用ひず、單に比圖醯を取らば珠を以て王に與へんと。王は比圖醯に問ひ去らんと欲することを爲すや不やと。答へて言く、去らんと欲すと。夜叉は將ひ去れり。比圖醯は夜叉に問ふて言く、我來るを索むるは何の意あるが故にやと。夜叉答へず。是の如く慇懃に更に問ふて已まざりしかば、便ち之に語りて言く、龍王の夫人は汝が心を得て以て火を祀らんと欲し、汝が血を得て以て之を飮まんと欲すと。比圖醯言く、若し其れ我を殺さば心血を擔ひ去れ。一切は之人にして心血は一種なり、是を知るは誰許ぞや、汝今我を殺すこと莫れ、爲に我を將ひ去れ。我心を須ひば我智を得んと欲せよ、我血を須ひば我法を得んと欲せよと。此語を聞き已りて夜叉心に念ずらく、實に是智人なりと。卽ち將ひて龍の所に至りしかば、龍は見て歡喜せり。卽ち爲に法を說きしかば、龍王夫婦及び諸の眷屬は敬信の心を生じて盡く五戒を受け、幷に夜叉衆も亦五戒を受けたりき。

爾時に閻浮提の龍と夜叉とは大に珍寶を齎し比圖醯に送れり。比圖醯は是珍寶を得用て王に上り幷に人民に與へたり。是に於て閻浮提の人及び龍鬼は五戒を受持し、十善を修行しけり。

爾時の比圖醯とは我身是なり。爾時の明相龍王とは善見輔相是なり。爾時の龍婦とは輔相の婦是なり。爾時の王とは舍利弗是なり。爾時の夜叉とは目連是なり。

九十九　尼乾子火聚を投じて佛の爲に度せらるの緣

佛舍衛國に在しき。爾時に如來は外道邪見六師及び其眷屬を降化し悉く破り盡さしめたまへり。五百の尼乾子は是念を作さく、我等徒衆は都て破散し盡せり。火を燒きて早く後世に就くに如かずとて、卽ち薪草を集め便ち身を燒かんと欲せり。如來大悲は彼苦を拔かんと欲し、火をして然えざ

【三】樗蒲は博奕の一種にして、さいころによりて勝負を決す。

らしめたまひき。佛其邊に在して火光三昧に入りたまひしかば、尼乾子は大火聚を見て心に歡喜を生じて是言を作さく、我等火を然すことを須ひず、皆共に中に投ぜんとて、既に火裏に到りしに、身體清涼にして極めて大快樂なり。佛の中に在すを見て倍復慶悦し出家を求欲せり。佛爲に法を說きたまひしかば阿羅漢を得たりき。

諸の比丘の言く、希有なるかな世尊は、乃ち能く此尼乾子等の自燒の苦を拔き、羅漢を得せしめたまひしとは。

佛言はく、但今日のみに非ず、往昔の時、舍衞國中に五百の賈客あり海に入りて寶を採る。時に商主あり比舍佉と名く、諸の商衆を將ひ風に順ひて往き即ち寶所に到れり。船上に集著せる諸の賈客の輩は珍寶を貪り取りて船上極めて重し。

時に比舍佉は諸の商賈に語りて言く、重て寶を著くこと莫れ、汝が身命を喪はんと。時に諸の賈客は其言を用ひず、寧ろ寶と共に死せんも減却すること能はずと。商主は即ち船寶を以て水中に投じ著き、諸の賈客を上せて己は船上に著けり。是諸の寶船に都て海に投じたり。海神は是商主の能く珍寶を捨て諸の商賈を救ひしを見、心に歡喜を生じ、是商主棄つる所の珍寶を取り擔ひ飛びて前に在り、既に海を出ずることを得たりしかば以て商主に還せり。諸の商人の言く、我等何すれぞ寶所に於て得ず即ち身幷に命の是苦惱を見ざるやと。

時に比舍佉は深く悲愍を生じて所得の珍寶も悉く亦分與せり。便ち外道出家の法を修して五神通を得たり。諸の商人言く、此の如き大士は財寶を貪らず、自ら其志を修して大利益を得たり。我等も學ぶべしと各珍寶を捨てゝ仙人の所に向ひ、其法を修習して皆五通を獲たり。爾時の比舍佉とは我身是なり。爾時の五百の賈客とは五百の尼乾子是なり。

一百　五百の白鴈法を聽きて生天せし縁

佛舍衞國に在しき。爾時に[一]般遮羅國に五百の白鴈を以て波斯匿王に獻ぜり。波斯匿王は送りて祇洹精舍に著けり。衆僧の食時には人人に乞食す。鴈は僧の聚るを見れば來り前に在りて立つ。佛一音を以て法を說きたまへば、衆生各類に隨ひて解を受くるなり。當時群鴈も亦佛語を解し、法を聞きて歡喜し、鳴聲相和して池水に還れり。後毛羽轉た長く飛びて餘處に至りしかば、獵師網を以て都て覆ひ之を殺せり。網に著ける時に當りて一鴈聲を作せしかば諸鴈皆和せり。謂く聽法の時の聲なり。是善心に乘じて忉利天に生じける。

生天の法として法に三念あり、一には本の從來する所を念ひ。二には定んで何處に生ぜるかを念ひ。三には先に何の業を作して天に生れ來り得たるかを念ふなり。便ち自ら思惟すらく、自ら宿因を見るに更に餘の善なし、唯佛僧の邊にて法を聽きしのみ。是念を作し已りて五百の天子は卽時に來下して如來の邊に在り。佛爲に法を說きたまひしかば悉く須陀洹を得たりき。

[二]波斯匿王遇佛所に到りしに、常に五百の鴈の佛前に羅列せしを見たるに是日に見えざりしかば、便ち佛に問ふて言く、此中の諸鴈は何處に向ひ去りしやと。佛言はく、諸鴈を見んと欲するやと。王言く見んと欲すと。佛言はく、先に鴈飛び他處に去りしに獵師の爲に殺され、命終して天に生ぜり。今此五百の諸の天子等の好き天冠を著けたる端正殊特なる者是なり。今日法を聽きて皆須陀洹を得たりと。

王は佛に問ふて言く、此諸の群鴈は何の業緣を以て畜生に墮し、命終して天に生じ、今日道を得たるやと。佛言はく、昔迦葉佛の時五百の女人盡く共に戒を受けしが、用心堅からず受くる所の戒を破れり。犯戒の因緣にて畜生の中に墮して此鴈の身と作り、戒を受くるを以ての故に如來に値ふ

【一】梵語パンチャーラの漢訳音譯なり。

【二】梵語プラセーナヂットにして舍衞城主なり。

ことを得、法を聞きて道を獲たるなり。鴈身中に法を聽きし因緣を以て天上に生ぜるなり。

一百一　提婆達多の護財醉象を放ちて佛を害せんと欲する緣

佛王舍城に在しき。爾時に提婆達多は護財醉象を放ちて佛を害せんと欲せしかば、五百の羅漢は皆虛空に飛び、唯阿難のみありて獨り佛後に在り。佛時に右手を擧げたまひしかば、護財白象は五百の師子と見、象時に恐怖し卽便ち調順せり。五百の比丘は盡く佛を棄て去りしに、唯阿難のみありて佛の後に在り。

佛言はく、但今日のみにあらず過去も亦爾り。昔迦尸國に五百の鴈ありて共に群侶をなせり。爾時の鴈王名を賴吒と曰ふ。鴈王に臣あり名を素摩と曰ふ。時に此鴈王は獵者の爲に捕得られたりしかば、五百の群鴈は皆棄てゝ飛び去り、唯素摩のみあり隨逐して捨てず。獵師に語りて言く、請ふ我王を放て、我今日に於ては身を以て之に代らんと。獵師聽さず遂に鴈王を以て梵摩曜王に獻ぜり。王は鴈王に問ふならく、安隱に爲さるゝや不やと。鴈王答へて言く、王の大恩を蒙り、王の清水を得、又好草を得以て性命を活し常に平安を得國土に在りて住せり、唯願くば大王よ、一切の鴈を放ちて畏るゝところなからしめよと。五百の群鴈は王の殿上に在りて聲を作せり。時に王問ふて言く、此は是何の鴈ぞやと。鴈王答へて言く、是我眷屬なりと。王は卽ち無畏を施し、內外に宣令して鴈を殺すことを聽さざりき。鴈王は王に白して言く、今當に正治を以て國を活すべし。世間は無常なり四方山の如し、譬へば東方の大山の上無邊際なるが如き一時に來至し。南西北方も亦復是の如く、世間の一切衆生及び人鬼を磨碎し、悉く皆微滅して逃避すべきなく恃怙すべきなくして救濟すべからず。爾時に當りて何の恃賴ところあらんやと。惟念すること是の如し。宜しく慈心にて普く一切を育てゝ正法を修行し、諸の功德を作すべし。大王よ、當に知るべし、一切の富貴は皆衰滅の爲に

摧碎せられ、四方よりして至り喪失に歸することを爲す。一切の强壯も又諸病あり、四方より來りて强健を破滅す。一切の壯年も病羸の山あり四方より來りて壯年を破壞す。一切の有命も大死の山あり四方よりして來り生命を壞滅す。是の如き四山は一切の共有にして、天龍人鬼有生の類も免ることを得る者なし、此義を以ての故に常に慈心を修し正法を勸行せよ。若し能く爾らば死の時にも悔ひず、心悔ひざるが故に善處に生ずることを得て必ず賢聖に遇はん。賢聖に遇ふことを得ば生死を脫することを得んと。

王は素摩に問はく、何を以て默然たるやと。素摩答へて言く、今鴈王と人王との二王共に語る、若し參言すべくば是儀禮に非ず、便ち上下恭恪の心なければなりと。王言く、實に是希有なるかな、汝は鴈の身となりて能く是の如き忠臣の節を行ふは人の及ばざるところなり。能く身命を以て鴈王に代らん。又復謙順して言說を參せず、汝鴈王の如きは君臣の義世の希有とするところなり。悉く金鋞瑕を與へて其頭際に約し、好き白絹を以て鴈王の首に著け之を發遣して言ふて曰く、往時我爲に善法を說きしかば。卽便ち放ち去るなりと。

爾時の鴈王は我身是なり。爾時の素摩とは阿難是なり。爾時の人王とは我父王淨飯王是なり。爾時の獵師とは提婆達多是なり。

雜寶藏經卷第八

卷の第九

百〇二　迦栴延惡生王の爲めに八夢を解くの緣

昔[一]惡生王、殘暴を行ぜんとして、悲愍の心なく、邪見熾盛なり。如來大に悲み、諸の弟子を遣はし、遍く諸國を化す。[二]迦栴延は、卽ち是れ惡生王國の婆羅門種なり。佛尋で迦栴延を遣はし、還て其の國王及び人民を化す。時に尊者迦栴延、佛の敎を受け已て、尋で本國に還る。時に惡生王、正眞を御ず、邪道を奉事す。常に晨朝に於て、人を見るを欲せず。先づ天を拜して祠る。時に迦栴延、惡生王を開化せんと欲するをもつての故に、淸朝に早起し、異人に化作す。狀遠使の如く、形貌端正にして、王門の中に到る。當に王見んとする時、還て本形に服し、沙門の像を作す。王道士剃髮の人に於て、特に復た憎惡す。王大に恚て言はく、汝今定んで死すと。尋で便ち人を遣はし、迦栴延に害を加へんと欲す。迦栴延王に白して言はく、我れに何の過あつて、乃ち害せられんと欲する。王復た語て言はく、汝は剃髮の人、見る者吉ばず。是を以て今汝を殺さんと欲すと。尊者迦栴延卽ちこれに答へて言はく、今吉ばざるは、乃ち我れに在て、王に在らず。所以は何ん、王我れを見ると雖も、都て損減なし。我れ王に見へて、王に殺されんと欲す。此を以て之を推すに、吉ばずと言ふは、正しく我れに在り、王素聰明なり、其の語を聞き已て、卽ち其の意を領し、迦栴延を放ち、惡心を興さず。密かに二人を遣はし、尋で其の後を逐ひ、其の住止と、何の飲食を食するかを觀る。迦栴延を見るに、樹下に坐し、乞食して食し、若食を得る時は、分て二人に與へ、小しく餘殘有れば、瀉いで河中に著く、二人旣に還る。王卽ち尊者の住處及び飲食を問ふ。二人上の所見の如く、具さに王に白す。王後日に於て、尊者迦栴延を請し、麁澁の飲食を與へ、人を遣はし問ふて言はく、今この食、意に稱適や不や。尊者答へて言はく、食の勢力は、便ち以て充つれば足る

【一】惡生王はアバンテイ國王なり。
【二】梵語カッタナーヤナは南印度阿槃提國（アバンティ）の剪剃種婆羅門にして算數論理に達せし人なり。

と。後上味の細食を與へ、復た人を遣はし問ふて言はく、意に適ふべきや不や。答へて言はく、食の勢力は便ち充足の爲なり。後王尊者に問ふて言はく、我が施す所の食、麁細を問はず、皆充足すと言ふこの事何の謂ぞや。尊者迦栴延即ち王に答へて言はく、夫れ身口は、譬へば竈の如く、栴檀も亦燒き、糞穢も亦燒く。身口亦爾り。食に麁細無く、飽足を限りとす。即ち偈を說いて言はく、

この身猶車の如く　　好惡擇ぶ所無し。
香油及び臭脂、　　調利に等同なり。

王其の語を聞いて深く大德を知る。便ち麁細の食を以て、婆羅門に與ふ。諸の婆羅門、初め麁食を得咸く、皆忿恚し、色を作して罵詈す。後細食を與ふるに、歡喜讃嘆す。王婆羅門等を見て、飲食の中に於て、心に喜怒を生じ、迦栴延に於て、倍ゝ信敬を生ず。爾の時尊者、外生女なり。先きに城外に在て、婆羅門の聚落に住す。甚だ好髮あり、安居の時至るを以て、心に供養を懷き、己が髮を剪て賣る。五百の金錢を得て、迦栴延を請し、夏坐供養す。尊者迦栴延、夏安居訖て、還て城中に至る。時に惡生王の宮門の中、卒に死雉あり。轉輪王食する所の雉の如し。而して惡生王、即ちこれを食せんと欲す。時に一智臣、王に白して言はく、然るに此の雉便ち食すべからず。先づこれを試むべしと。王其の言を用ふ。時に即ち人を遣はして、小臠を割き以て狗に與ふ。狗肉を得已て、肉味に貪著し、舌を合せて倶に食し、遂に死に至る。又復た少肉を割き、用て一人に試む。人肉を食し已て、亦滋味に著し、遂に自ら其の手を噉ふに至て死す。王これを見已て、深く怖畏を生じ、有る人の言を聞く。而して此の肉は、唯轉輪聖王、無漏智ある得道の人、乃ちこれを食す可し。便ち人を遣はし、美食を調和し、送て尊者迦栴延に與ふ。時に迦栴延、是の食を食し已て、身體便ち安し。王後日に於て、人を遣はして伺ひ看る。迦栴延、顏色和悅にして、常に倍勝するを見る。時に王聞き已て、深く奇特を生じ、益ゝ尊重を加へ、外道諸の婆羅門等を輕賤す。王迦栴延に

問ふて言はく、尊者此の夏、何處に安居し、今方に來るや。尊者具さに外生女髮を賣り錢に貿へ、衆僧を供養するを說く。王是の語を聞いて、是の言を作さく、我が宮中の人、極めて美髮の者、然も銅錢に直すること數枚に過ぎず。今彼の女の髮、五百の金錢に直するは、彼の女人、美髮常に非ず、容儀必ず妙ならん。卽ち其の女の父母の姓名を問ふ。尋で使人を遣はし、彼に往至して親ら女人を見るに、姿貌超絕せること、果して所量の如し。王卽ち使を遣はし、娉て婦と爲さんとす。而るに彼女の家、大に寶物城邑聚落を索む。王復た思惟すらく、若し彼に與へば、女來るの時還て當に我れに屬すべしと。便ちこれを與へ、納れて夫人と爲す。初めて迎ふる日、國を擧げて欣慶し、咸大吉と稱す。其の後日に於て復た大赦を放つ。卽ち號して、[三]尸婆具沙夫人と爲す。王甚だ悅敬す。後太子を生み、[四]喬婆羅と字く。時に王寢に於て夢に八事を見る。一に頭上火然す。二に兩蛇腰を絞る。三に細き鐵網身を纏ふ。四に二つの赤魚に其の雙足を呑まる。五に四つの白鶴有り飛び來て王に向ふ。六に血泥の中を行くに泥其の膝を沒す。七に大白山に登る。八に鸛雀頭に屙す。夢寤め已て、以て不祥と爲し、愁憂慘悴す。尋で卽ち往いて諸の婆羅門に問ふ。婆羅門王の此の夢を聞く。素に王を嫌ひ、兼て尊者を嫉む。王の此の夢に因んで言はく、大王吉びならず、若し禳厭せずんば、禍王が身に及ばんと。王其の語を聞き、信じて以て然りとし、益〻憂惱を增す。卽ちこれに問ふて言はく、若し禳厭の時、何物を須ゆべき。諸の婆羅門言はく、用ゐる所は、王の珍愛する所、我れ若し說かば、王必ず能はざらん。時に王答へて云はく、此の夢甚だ惡し、但だ大なる禍殃の我が身に及ばんことを恐る。我れを除く以外、餘は惜む所なし。請ふ我が爲めに所須の物を說け。諸の婆羅門等、其の慇懃なるを見て、其の心至れるを知り、卽ち王に語て言はく、用ゆべき所は、此の夢八つあり、要ず八種を須て災を禳ふを得べし。一には王敬ふ所の夫人尸婆具沙を殺す。二には王愛する所の太子喬婆羅を殺す。三には輔相大臣を殺す。四には王所有の烏臣を殺す。五に

【三】梵語シヮーゴォーシャならんか。
【四】梵語ガゥパーラならんか。

は王の一日に能く三千里を行く象を殺す。六には王の一日に能く三千里を行く駝を殺す。七には王の良馬を殺す。八には禿頭迦栴延を殺す。却後七日に、若し此の八つを殺し其の血を聚集して、中に入れて行かば、災を消すことを得べしと。王其の言を聞き、己が命重きを以て、便ち許可し、還て宮中に至り、愁憂懊惱す。夫人王に問ふ。何故に是の如きや。王夫人に答へ、具さに上の不祥の夢を陳說し、並に婆羅門夢を禳ふ所須を道ふ。夫人聞き已て、而して是言を作さく、但だ王の身を平安にして患へ無からしめば、妾の賤身豈道ふに足らんや。卽ち王に白して言はく、却後七日にして、我れ當に死に歸すべし。我れに彼の尊者迦栴延の所に往くことを聽せ、六日の中に齋を受け法を聽かん。王言はく得ず。汝若し彼に至り、或は其の實を語り、彼若し知らば、我れを捨てゝ飛び去らん。夫人慇懃にして、王免るゝこと能はず、便ち往くことを聽す。夫人彼の尊者の所に到り已て、禮拜問訊し、遂に三日を經たり。尊者怪み問ふ。王の夫人、未だ曾て此に至て經停信宿せしことあらず。何故に今常に同じからざるや。夫人具さに王の惡夢を說き、却後七日、當に我等を殺し、用て災患を禳ふべし。餘命幾ばくならず、故に來て法を聽くと。因て尊者に向て王の夢みる所を說く。尊者迦栴延言はく、此の夢甚だ吉し。當に歡慶有るべし。憂ひと爲すに足らず。頭上火然は、寶主の國、當に天冠有るべし。直十萬兩金、來て王に貢ぐ、正に斯の夢と爲す。夫人心急ぐ。七日滿に向はゞ、王の爲めに害せらる。其の來ることの晩きを懼れ、尊者に問ふて言はく、何れの時か來到す。尊者答へて言はく、今日晡時必ず當に來至すべし。兩蛇腰を絞るは、月支國の王、當に雙劍を獻ずべし。價直十萬兩金、日入當に至るべし。細き鐵鋼身を纏ふとは、大秦國の王、當に珠瓔珞價直十萬兩金を獻ずべし。後の明晨當に至るべし。赤魚足を呑むとは、師子王國、當に毘琉璃寶屐價直十萬兩金を獻ずべし。後日食時當に至るべし。四つの白鵠來るとは、跋耆國の王、當に金の寶車を獻ずべし。後日日中當に至るべし。血泥中とは、安息國の王、當に鹿毛[五]欽維衣價直十

【五】梵語カンバラにして細毛布衣なり。

萬兩金を獻ずべし。後日日昳當に至るべし。太白山に登るとは、曠野國の王、當に大象を獻ずべし。後日晡時當に至るべし。鶴雀頭に屣すとは、王と夫人と、當に私密の事あるべし。事は後日に至て自ら當にこれを知るべしと。果して尊者言ふ所の如く、期限既に至り、諸國獻ずる所一切皆到る。王大に歡喜す。尸婆具沙夫人、先きに天冠あり、重ねて寶主國獻ずる所の天冠を著く。王因て交戲して尸婆具沙夫人著くる所の一重の天冠を脫し、金鬘夫人の頭上に著く。時に尸婆具沙夫人、瞋恚して言はく、若し惡事あれば、我れ先にこれに當る。今天冠を得れば彼に與へて著く。尋で酪器を以て、王の頭上を擲ち、王の頭盡く汚る。王大に瞋忿し、劍を拔いて夫人を斫らんと欲す。夫人王を畏れ、走て房中に入り、卽ち房戶を閉づ。王前むことを得ず。王尋で自ら尊者夢を占て、私密ありと云ふは、正しく此れ是れのみと悟る。王夫人と、尋で尊者迦栴延の所に至り、具さに上來を論じ、非法邪惡の言を信じて、幾ど尊者妻子大臣所愛の物に於て、大惡事を行ずるにちかし。今尊者眞實を演說して、盲冥を開示するを蒙り、正道を覩るを得て、惡事を離る、卽ち尊者を請して敬奉供養し、諸の婆羅門等を驅て、其の國界に遠ざく、卽ち尊者に問ふ。何の因緣有て、此くの如く、諸國各〻所珍を以て、我れに奉獻するや。尊者答へて言はく、乃往過去九十一劫、爾の時佛あり、毘婆尸と名く。彼の佛出づる時、一國あり、名けて槃頭と曰ふ。王の太子、信樂精進にして、彼の佛の所に至り、供養禮拜し、卽ち著くる所の天冠・寶劍・瓔珞・大象・寶車欽婆羅衣を以て、用て彼の佛に上つる。是の慶福に緣て、生生尊貴にして、欲する所の珍寶、求めざるに自ら至る。王是れを聞き已て、三寶の所に於て、深く敬信を生じ、禮を作して宮に還る。

百〇三　金猫の因緣

昔惡生王、林苑に遊觀し、園中堂上、一つの金猫、東北の角より、西南の角に入るを見る。王卽

ち人を遣はし、尋て復た發掘し、一つの銅瓮を得たり。瓮は三斛を受け、中に金錢を滿つ。漸漸深く掘るに、復た一瓮を獲たり。是くの如く次第に三重の瓮を得、各〻三斛を受く。漸く復た傍を掘り、亦た銅瓮を得、輙掘して已まず。五里の中に滿ち、盡く銅瓮を得、金錢を盛滿す。時に惡生王、深〻奇怪を生じ、即ち尊者迦栴延の所に詣り、即ち尊者に向て、具さに錢を得る所由の因縁を論じ、我れ適に輙ち用ゐんと欲す。將た我れ及び國人に災患無きや。尊者答へて言はく、此の王宿因の獲る所の福報、但だ用ふるに苦なし。王即ち問ふて言はく、往因を審かにせず、其の事云何。尊者答へて言はく、諦かに聽け諦かに聽け。乃往過去九十一劫、毘婆尸佛の遺法の中なりき。爾の時に諸の比丘あり。四衢の道頭に於て、大高座を施け鉢を置て上に在り。而して是の言を作さく、誰か世人有て、能く堅牢藏の中に於て、錢財を擧ぐる者なる。若し此の藏に入れば、水も漂はすこと能はず。火も燒くこと能はず。王も奪ふこと能はず。賊も劫かすこと能はず。時に貧人あり。先に薪を賣るに因て、適〻三錢を得たり。此の語を聞き已て、歡喜の心を生じ、即ち此の錢を以て、重て鉢中に著き、誠心に願を發しぬ。舍を去ること五里、家に還る時に當り、歩々歡喜し、旣に其の門に到り、勸化の處に向て、至心に發願し、然して後舍に入りぬ。尊者言はく、爾の時の貧人は、今の王是れなり。往昔三錢施縁に因るを以て、世々に尊貴にして、常に是くの如き三重の錢瓮を得、五里の中歩歩に歡喜せるに緣て、恒に五里に於て此の金錢ありと。王宿緣を聞き、歡喜して去りにき。

百〇四　惡生王五百の鉢を得るの縁

昔惡生王、[一]鬱禪延城に住しき。時に守門の者、晨朝に門を開く。門外忽然として五百の乘車有て、各寶鉢を載せ、金粟を盛滿す。皆印封あり、題して言はく、此の鉢惡生王に與ふと。時に守門

【一】梵語ウッヂャイナにして今のビンドヤ山脈の南方ウッヂャインなり。

の者、告げて王に白して言はく、外に寶鉢有り、鉢に題して王に與ふと言ふ。不審今取るべしと爲すや不や。王自ら思惟すらく、此の寶忽ち至る、或は是れ不祥ならん。我れ若し取らば、我が家國の災害たらざらんとす。是の念を作し已て、卽ち尊者迦栴延の所に往詣してこれを問ふて言はく、今晨門を開くに、忽ち寶鉢を見る。其の上印題して云はく、惡生王に與ふと。未だ吉凶を知らず、取るべしと爲すや不や。尊者答へて言はく、是れ王が宿福の果報、但だ取て疑ふこと勿れ。王尊者に白さく、我れ往因に於て何なる功德を修して、此の報を致すや。尊者答へて言はく、汝昔日九十一劫に於て、仙人山の中に一つの辟支佛有り。雨に値ふて脚跌れ、卽ち瓦鉢を破る。時に辟支佛、瓦師の家に詣り、從て瓦鉢を乞ふ。瓦師尋で五器を以て、皆水を盛滿し、歡喜して辟支佛に施與す。得已て鉢を空中に擲ち、身を踊らして虛に騰り、十八變を作す。瓦師妻子、並びに瓦を買ふ者、此の神變を見て、咸く皆踊悅歡喜すること無量なり。爾の時の瓦師とは王が身是れなり。爾の時の婦とは、尸婆具沙夫人是れなり。爾の時の兒とは、喬波羅太子是れたなり。爾の時瓦を買ふ者とは、輔相富盧闍是れなり。瓦を買ふ婦とは輔相の婦是れなり。王復た問ふて言はく、不審此の鉢、自然に出づとやせん、從來ありとやせん。尊者答へて言はく、而るに此の鉢は自然に有るに非ず。恒河の水龍宮の中より來れり。何を以てこれを知る。乃往過去、羅摩王の舅婆羅門、淸淨の行を修して、恒河の側に在り。時に羅摩王、日々寶鉢を以て、食を送りて舅に與ふ。婆羅門の法、器を重ねて用ゐず。食し竟て鉢を彼の恒河の中に棄つ。盲龍寶鉢を收取して、金粟を盛滿し、己が宮中に著く。是くの如く棄つる所、日日漸く多し。是れに由て五百車の鉢を獲得す。盲龍命終して、又兒子の此の鉢を賞領するもの無し。天帝王が往昔鉢を施す因緣を知る。故に以て王に遺る。王是の語を聞き、尋で寶鉢を取り以て用て福と作し、廣く布施を修し、三寶を供養す。此の因緣に從て後善處に生す。

百〇五　毘摩天を求め大富を得んことを望む縁

昔兄弟二人あり。家計貧困にして・兄は常に日夕精懃禮拜して[一]毘摩天を求め、大富を得んことを望む。而して其の弟を遣はし、田を耕し殖を種ゆ。是の如く求請して、多時を經歷す。時に毘摩天、化して其の弟と作り、其の兄の邊に至る。兄弟に瞋つて言はく、何ぞ犂殖せざる。此に來て何爲るものぞ。時に弟答へて言はく、兄は天寺に在て、晝夜に祈請して、大富を得んことを望み、弟は今日に於て、亦た兄に効さんと欲す。齋戒求願して、大富を獲んことを望む。兄弟に語て言はく、卿田を耕して種子を下さず。財榮の富有、何に由て獲べき。弟兄に答へて言はく、實は種を以ての故に收獲せずや。兄報ゆること能はず。是こに於て毘摩天、還て天像に復し、而してこれに語て言はく、今我が力、正しく汝を助くべし。今日に及び、布施を修行せば、然る後富むべし。而して汝が往因、布施を修せず。故に貧窮ならしむ。今日夜精懃して、我れに富饒財寶を求むと雖も、何を將てか得べき。菴婆羅樹の若し多時に於て、復た百千の天神に奉事して、菓を求めんと欲すと雖も、菓得べからざるが如し。汝亦た是くの如し。先きに因を修せずして、我が所に於て、大富を求めんと欲するも、亦た得べからず。菓若し熟する時、求めざるに自ら得ん。而して偈を說いて言はく、

福業は菓の熟するが如く、　祠祀を以て得ず。
人は持戒の車に乘じて後　天上に至るを得ん。
定智は燈の滅するが如く、　無爲に至るを得。
一切行に由て得。　天に求むるも何爲る所ぞ。」

【一】梵語ビヒーマの漢音譯。

百〇六　鬼子母子を失ふ緣

[一]鬼子母は是れ老鬼神王[二]般闍迦の妻なり。子一萬あり。皆大力士の力あり。其の最小の子を嬪伽羅と字く。此の鬼子母凶妖暴虐にして、人の兒子を殺し、以て自ら噉食す。人民これを患へ、仰いで世尊に告ぐ。世尊爾の時即ち其の子[三]嬪伽羅を取りて、鉢底に盛著す。時に鬼子母、天下を周遍し、七日の中推求して得ず、愁憂懊惱す。他の言を傳聞するに、云はく佛世尊は一切智ありと。即ち佛所に至り、兒の所在を問ふ。時に佛答へて言はく、汝萬子あり、唯一子を失ふて何故に苦惱愁憂して推覓するや。世間の人民、或は一子あり、或は五三子なり。而るを汝殺害す。鬼子母佛に白して言さく、我れ今若し嬪伽羅を得ば、終に更に世人の子を殺さずと。佛即ち鬼子母をして、嬪伽羅を見せしめたまふ。鉢下に在り、其の神力を盡すも、得取すること能はず、還て佛に求む。佛言はく、汝今若し能く三歸五戒を受け、壽盡くるまで殺さざれば、當に汝が子を還すべしと。鬼子母即ち佛勅の如く三歸及び五戒を受く。受持し訖りて、即ち其の子を還す。佛言はく、汝好く戒を持て、汝は是れ迦葉佛の時、羯膩王第七の小女なりき。大に功德を作すも、戒を持たざるを以ての故に、是の鬼形を受くと。

百〇七　天祀主の緣

昔日一婆羅門あり。摩室天に事へて、晝夜に奉事す。天即ち問ふて言はく、汝何等をか求むる。婆羅門言はく、我れ今此の天祀主と作らんことを求む。天言はく、彼に群牛あり。汝最も前に在て行く者に問へ。即ち天語の如く、往いて彼の牛に問ふ。汝今何を以て苦と爲し樂と爲すや。牛即ち答へて言はく、極めて大苦と爲すは、刺刺兩肋、柴戾脊破、車載を駕挽し、重きこと休息なし。時

【一】鬼子母の梵語は訶梨帝(ハリティー)にして羅刹女なり。
【二】梵語パンチャカにして夜叉神王なり。
【三】梵語ピンガラの漢訛音譯なり。

に復た問ふて言はく、汝何の縁を以て、是の牛形を受くるや。牛これに答へて言はく、我れは是れ彼の天祀主なり。自恣意を極め、天祀の物を用ひ、命終して牛と作り、是の苦惱を受く。是の語を聞き已て、卽ち天の所に還る。天卽ち問ふて言はく、汝今天主と作らんと欲するや不や。婆羅門言はく、我れ此の事を觀て、實に敢て作さず。天言はく、人は善惡を行じて、自ら其の報を得。婆羅門過を悔ゐて、卽ち諸善を修しぬ。

百〇八　樹神を祀る緣

昔老公あり、其の家巨富なり。而して此の老公肉食を得んことを思ひ、詭りて方便を作し、田頭の樹を指して、諸子に語りて言はく、今我が家の業、諧富する所以は、此の樹神の恩福に由るが故に爾り。今日汝等宜しく、群中の羊を取り、以て用て祭祠すべし。時に諸子等、父の敎勅を承け、尋で卽ち羊を殺し、此に樹に禱賽す。卽ち樹下に於て天の祠舍を立つ。其の父後時に壽盡き命終す。行業の追ふ所、還て己が家の群羊の中に生る。時に諸子樹神を祀らんと欲するに値ふ。便ち一羊を取る。遇ゝ其の父を得て、將にこれを殺さんと欲す。羊便ち啞啞として笑て言て曰はく、而るに此樹に何の神靈ありや。我れ往時に於て、肉を思ふが爲の故に、妄りに汝をして祀らしむ。皆汝等と共に、同じく此の肉を食し、今殃罪を償ふに獨り先づこれに當る。時に羅漢あり、遇ゝ到りて乞食し、其の亡父の羊身を受くるを見て、卽ち主人に道眼を借し、自ら觀察せしむ。乃ち是れ父なるを知て心に懊惱を懷く。卽ち樹神を壞ち過を悔ゐ、福を修して、復た殺生せず。

百〇九　婦女欲を厭ひ出家するの緣

昔一婦女あり、端正殊妙なり。外道法の中に於て出家修道す。時人問ふて言はく、顏貌是くの如

し、應當に俗に在るべし。何故に出家するや。女人答へて言はく、我れ今日の如き、端正ならざるに非ず。但だ小來婬欲を厭惡するを以て、今故に出家す。我れ家に在るの時、端正を以ての故に、早に分處を蒙り、早に男兒を生む。兒遂に長大、端正無比なり。轉た羸損を覺え、病者の如し。我れ卽ち兒が病の由狀を問ふ。兒敢て道はず。問ひを爲して止まず。兒已むことを獲ずして、母に語りて言はく、我れ正しく道はざるは、命の全からざるを恐るゝたり。正に具に道はんと欲するは、無顏甚し。卽ち母に語りて言はく、我れ母を得て私かに情欲を以てせんと欲し、得ざるを以ての故に、是れを以て病むのみ。母卽ち語て言はく、古より以來何ぞ此事あらん。復た自ら念言すらく、我れ若し從はざれば、兒或は能く死せん。今寧ろ理に違ひ以て兒命を存せんにはと、便ち兒を喚びて、兒が意に從はんと欲す。兒將に床に上らんとして、地卽ち劈裂し、我が子卽時に生身に陷入す。我れ卽ち驚怖し、手を以て兒を挽き、兒が髮を捉へ得たり。而して我が兒の髮、今日猶ほ我が懷中に在り。是の事を感切す、是の故に出家す。

百十　不孝の子苦報を受くるの緣

昔迦默國、鳩陀扇村の中、一老母あり、唯一子あり。其の子勃逆にして仁孝を修せず。母瞋るを以ての故に、手を擧げて母に向ひ、適打一下して、卽日出で行く。遇ゝ賊に逢ふて、其の一臂を斬らる。不孝の罪、尋で卽ち現報苦痛是くの如し。後地獄の苦、稱計すべからず。

百十一　難陀王那伽斯那と共に論ずるの緣

昔〔一〕難陀王、聰明博通にして、事に練せざることなし。己が所知を以て、謂敵するもの無しと謂ひ、因て群臣に問ふ。頗し智慧聰辯の人有りて、疑事を諮詢するに、能く我れに對ふるや不や。時に

〔一〕難陀王は梵語ナンダなるもギリシャ人バカトリヤ王ミリンダのことなること已に世に知られたることなり、

一臣あり、家先に一老比丘を供養す、履行清淨なるも然も廣學ならずと。即ち王に談る。王これに問ふて言はく、夫れ道を得るは、家に在て得ると爲すや、家を出でゝ得と爲すや。時に老比丘、即ちこれに答へて曰はく、二俱に道を得と。王復た問ふて言はく、若し二俱に得ば、何ぞ出家を用ゐん。彼の老比丘便ち默然として、何の對ふる所を知らず。時に難陀王轉た復た憍慢なり。時に諸臣等、即ち王に白して言さく、[二]那伽斯那は聰慧倫を絕す。今山中に在り。王爾の時に於て之を試みんと欲するが故に、即ち使人を遣はし、一瓶の酥を齎らし、湛然として盈滿す。王意に以て我が智滿足せりとなし、誰か復た能く我れに益を加ふるものあらんと。那伽斯那其の酥を獲已つて、即ち其の意を解し、弟子の中に於て針五百を撿し、用て酥中を刺すに酥亦溢れず。尋いで王に遣歸す。王既に獲已つて、即ち其意を知り、尋いで使を遣はして那伽斯那を請す。即ち王命に赴く。那伽斯那身體長大にして、諸の徒衆を將ゆる中に於て特出す。王の心驕豪、詭つて遊獵に因み、路次相逢ふ。其姝長を見て、即ち自ら搖し異道を指して去る。竟に共に語らず、默して之を非せんと欲せば、一切の長者、都て知る所無し。時に那伽斯那、尋いで己が指を以て、自ら胸を指して言はく、我れ獨り知ると。難陀王將に延て宮に入らんとす。即ち小屋を鑿ち、戶極めて卑下ならしめ、斯那をして躬を曲し、向伏せしめんことを望む。然るに此斯那己を陷れんと欲するを知り、即ち自ら入らずして其屈を受けず。時に難陀王即ち飯食を設け、麁食數種の食を與ふ。五三匙を食して便ち已に足れりと言ふ。後細美を與ふるに方に乃ち復た食す。王復た問ふて言はく、向きには已に足んぬと云ふ、何故に今故の如く復た食するや。斯那答へて言はく、我れ向きに麁に足り未だ細に足らず。即ち王に語つて言はく、今王の殿上盡く人を集め、其の上に滿たしむべしと。尋いで即ち人を喚び、充塞遍滿し、更に容るゝ處なし。王後に在つて來り、將に殿に上らんと欲す。諸人畏るゝ故に盡く皆匍伏す。其中轉た寬く、乃ち多人を容る。斯那爾の時即ち王に語つて言はく、麁飯は民の如

【二】梵語ナーガセーナにして龍軍比丘又は那先比丘ともいふ。

く、細者は王の如し。民王を見て誰か路を避けざらんと。王復た問ふて言はく、出家在家何れか道を得ん。斯那答へて言はく、二俱に道を得と。王復た問ふて言はく、若し俱に道を得ば、何ぞ必ずしも出家せん。斯那答へて言はく、譬へば此を去ること三千餘里の如し、若し少使を遣はし、馬に乘り糧を齎らし、器仗を捉らしめば、速かに達することを得るや不や。王答へて言はく得と。斯那復た言はく、若し老人を遣はし、瘦馬に乘り、復た糧食無くば、達すべしと爲すや不や。王言はく、縱ひ糧を齎らすも猶恐らくは達せず。況や糧無きをや。斯那言はく、出家得道は喩へば少壯の如く、在家得道は彼の老人の如し。王復た問ふて言はく、今我れ身中の事を問はんと欲す。我が常無常とたす。我意に隨ふや。斯那返問して、王の宮中の如き、菴婆羅樹上に菓あり。甜しと爲るや醋しと爲るや。王言はく、我が宮中の如き都て此樹無し。云何が我れに菓い甜酢を問ふや。斯那言はく、我今亦爾り。一切の五陰既に自ら我無し。云何が我の常無常を以て問ふや。時に王復た問ふ。一切の地獄は、刀劍形を解き、處處に分散して、其命猶存す。實にこれ有るや不や。斯那答へて言はく、譬へば女人の如し、餠肉瓜菜を噉食するに、飮食悉く皆消化す。懷妊に至つて[三]歌羅羅の時、猶微塵の如し。云何が轉た大にして消化せざるや。王言はく此は是れ業力なり。斯那答へて言はく、彼の地獄の中、亦是れ業力にして命根存することを得。王復た問ふて言はく、日の上に在るや、其體是れ一なり、何を以て夏時に極熱にして冬時に極寒なるや。夏は則ち日長く、冬は則ち日短し。斯那答へて言はく、須彌山に上下の道有り、日夏時に於て上道を行く、路遠く行くこと遲し。金山を照す、是の故に長くして暑熱なり。日冬時に於て下道を行く。路近くして行くこと速し。大海水を照す、是故に短くして極寒なり。

百十二　不孝の婦其姑を害せんと欲して反て其夫を殺す緣

[三] 梵語カラランにして受胎當初の細胞をいふ。

昔一婦あり、稟性佷戾にして、禮度に順はず。每に云爲する所、常に姑と反す。姑の瞋責を得て、恒に不分を懷き、瞋心轉た盛にして、規つて姑を殺さんと欲す。後方計を作し、其夫主をして、自ら其母を殺さしむ。其夫愚癡にして卽ち婦の語を用ひ、便ち其母を將ひて曠野の中に至り、手足を縛結して、將に害を加へんと欲す。逆罪の甚だしき上天に感徹し、雲霧四合して、爲めに霹靂を下し、霹其兒を殺す。母卽ち家に還る。其婦門を開き、是れ夫主なりと謂ひ、問ふて言く未だ殺さざるや。姑已に殺せりと答ふ。明日に至り、方に夫の死を知る。不孝の罪、現報是くの如し。後地獄に入り、苦を受くること無量なりき。

百十三　波羅奈王塚間の喚を聞くの緣

凡そ一切の法、求むべき處に於て、若し方便を以てせば得べし。若し求むべからざるに、强て得んと欲すと雖も、都て獲べからず。譬へば沙を壓して油を責め、氷を攢めて酥を求むるが如く、旣に得べからず、徒に自ら勞苦せん。昔波羅奈國に王あり、梵譽と名く。常に夜半に於て、塚間に喚聲を聞く。喚で言はく、咄王咄王と。是の如く一夜に三たび其聲を聞く。王異聲を聞き、情甚だ驚怕す。音聲絕えざること多時を經歷す。王諸の婆羅門太史相師を集めて、與に議して言はく、我れ常に夜に於て、耳に塚間我れを喚ぶ聲を聞く。我れ常に恐懼し、怖れて敢へて應へず。諸人答へて言はく、彼の塚墓の間、必ず妖物あつて、是の音聲を作さん。今宜しく膽勇ある者をして塚に詣つて往いて看せしむべしと。王卽ち人を募る。若し夜能く塚間に至る者あらば、吾れ當に五百の金錢を賞賜すべしと。時に一人あり、甇獨にして父なく、家甚だ貧寒なり。大膽力あつて、便ち募に應じ、身に鉀冑を著け、手に刀杖を捉つて、夜塚間に至り、王を喚ぶ聲を聞く。便ち喊つて言はく、叱汝は是れ誰ぞ。答へて言はく、我れは是れ貝耳伏藏と、募人に語つて言はく、汝は健丈夫、

我れ夜に於て常に彼王を喚ぶ。彼王若し當に我れに應和せば、我れ往て其庫藏の中に至らんと欲す。然るに彼王怯ぢて未だ曾て我れに應へず、我れ今、將徒七あり、明日清晨、當に汝が家に至るべし。募人問ふて言はく、明日來る時、我れ當に何事を以て共に相承迎すべき。貝耳答へて言はく、汝但だ舍內を灑掃して糞穢を除去し、香華嚴飾、極めて清淨ならしめ、蒱・桃麩粲酥乳之糜各八器に盛れ。八道人あり、當に杖を以て上座の頭を打ち、語つて角を入れよと言ふべし。是の如く次第に盡く角を駈り入れよ。募人知り已つて便ち家に還り、王より五百の金錢を請け取り、用て供設を俟つ。王之に問ふて言はく、彼音聲は是れ何物なりや。募人詭り答へて言はく、是れ鬼魅なりと。募を受くるの人、貝耳の言を聞き、私かに歡喜を懷き、剃髮師に請ふて以て自ら莊嚴す。明日至り已つて供設具を備ふ。八道人あり、來つて其食に就き、飲食既に訖つて、上座の頭を打ち、駈つて角を入らしむ。卽ち變じて金錢一瓮と作り、次でを以て駈け入り金八瓮となる。時に剃髮師、門孔の中に在て、其寶を得るを見て、默して自ら念言すらく、我れ此法を解す、試みに効ふて之を爲さんと。便ち後時に於て具を備ふること前の如くす。八道人を請し、食を設け訖つて、門を閉ぢ戶を遮り、上座の頭を打ち、前者と同じく、珍寶聚を得んことを望む。然るに此道人、頭破れて血灑ぎ、床座を沾汚す。駈つて角を入らしむ。急を得て糞を失す。次第に七人皆打棒せられ、地に宛轉す。中に一人あり、氣力盛壯にして、卽時手を擘いて突出して外に至る。聲を揚げて大に叫ぶ。云はく某の主人我等を害せんと欲すと。時に彼の國王人を遣はして往て視せしむ。卽ち主人を捉へ具さに事狀を問ふ。時に剃髮師具さに上の事を以て王に白す。王尋いで人を遣はし、募人の舍に到り、其金寶を看て、正に稅奪せんと欲するに、化して毒蛇と爲り、變じて火聚と爲る。王卽ち語つて言はく、此は是れ汝が福なり。世間の凡愚亦復た是くの如し。具さに精進あつて八戒を受持し、善果報を獲、漸く八正を行じて無漏の果を得。便ち他效はんと欲するも、八戒を受持して、內に誠信なく

んば利樂を悕求するに、既に善果なく、反つて殃咎を獲たり。彼の愚人の如き、等しくして差別なし。

百十四　老比丘四果を得る緣

佛法は寛廣にして、濟度涯りなし。至心に道を求むれば、果を獲ざることなく、乃至戲笑も福唐捐ならず。往昔の時の如き、老比丘あり。年已に朽邁して神情昏塞せり。諸の年少の比丘、種種に法を說くを見、四果を說くを聞いて、心に羨尙を生ず。少比丘に語つて言はく、汝等聰慧なり。願はくは四果を以て用つて我れに與へよと。諸の年少の比丘嗤つて語つて言はく、我れに四果あり、好食を得て然る後相與ふべし。時に老比丘、其れ此語を聞いて歡喜中に發す。卽ち欽婆を解いて用つて所須に貿へ、尋いで卽ち種種の餚饍を施設し、少比丘を請して四果を求乞す。諸の少比丘、其食を食し已つて、更に相指摩し、老比丘を弄び語つて言はく、大德汝此舍の一角頭に在つて坐せよ。當に爾に果を與ふべし。時老比丘聞き已つて歡喜し、語の如くにして坐しぬ。諸の少比丘卽ち皮毱を以つて其頭上を打ち、之に語つて言はく、此は是れ須陀洹果なりと。老比丘聞き已つて、念に繫けて散せず、卽ち初果を獲たり。諸の少比丘復た之を弄んで言はく、向きに爾須陀洹果を得と雖も、然もそれなほ七生七死あり、更に一角に移れ。次いで爾に斯陀含果を與ふべしと。時に老比丘初果を獲る故に、心轉た增進す。卽ち復た坐を移す。諸の少比丘復た毱を以つて頭を打ち、之に語つて言はく、爾に二果を與ふと。時に老比丘益加念を專らにし、卽ち二果を證す。諸の少比丘復た之を弄んで言はく、汝今已に斯陀含果を得るも、猶往來生死の難あり。汝更に移り坐せ。我れ當に爾に阿那含果を與ふべしと。時に老比丘言の如く移坐す。諸の少比丘復た毱を以つて打ち、之に語つて言はく、我れ今爾に第三の果を與ふと。時に老比丘聞き已つて歡喜し、倍至心を加へ、卽時に復た阿那含果を證す。諸の少比丘復た之を弄んで言はく、汝今已に不還の果を得、然もなほ色

無色界に於て有漏身を受け、無常遷壊にして念念是れ苦なり。汝更に移り坐せ。次いで常に爾に阿羅漢果を與ふべしと。時に老比丘語の如く移り坐す。諸の少比丘復た皮毱を以つて其頭を撩打して、之に語つて言はく、我れ今爾に彼の第四果を與ふと。時に老比丘一心に思惟して、即ち羅漢を證し第四果を得已つて甚だ大に歡喜す。諸の餚饍種種の香花を設けて少比丘を請し、其恩徳を報ず。少比丘と共に道品無漏の功徳を論ず。諸の少比丘言を發するに滯塞す。時に老比丘方に之に語つて言はく、我れ已に羅漢果を證得し已ると。諸の少比丘其此言を聞いて、咸く皆先の戲弄の罪を謝悔す。是の故に行人、宜く善を念ずべし。乃至戲弄猶實報を獲たり。況や至心をや。

百十五　女人の至誠道果を得る縁

若人道を求む、要は精誠に至り。精誠相感じて能く道果を獲。往昔の時の如き、一女人あり、聰明にして智慧あつて深く三寶を信じ、常に僧次に於て一比丘を請じ、舍に就て供養す。時に一老比丘あつて、次いで其舍に到る。年老い根鈍にして素と知曉なし。時に彼の女人、齋食已に訖つて、老比丘に我が爲めに說法せんことを求め、獨り一座を敷き、目を閉ぢて靜默す。時に老比丘、自ら愚闇を知りて法を說くことを知らず。其泯眼を伺つて、棄走して寺に還る。然るに此女人至心に有爲の法は無常苦空にして、自在を得ざることを思惟し、深心に觀察して即ち初果を獲、既に果を得已つて老比丘を求め、其恩を報ぜんと欲す。此老比丘已が無知にして、他を棄てゝ走避せるを審かにし倍ゝ更に慚恥し復た棄てて藏避す。而るに此女人苦求して已まず、方に自ら出現す。女人時に具さに上來道果を得るを蒙るを論じ、故らに齋し供養し、用つて大恩を報ず。時に老比丘慚愧を以つての故に深く自ら剋責し、即ち復た果を獲たり。是の故に行者應當に至心なるべし。若し至心なれば求むる所必ず獲ん。

雜寶藏經卷第九

卷の第十

百十六　優陀羨王の緣

昔優陀羨王盧留城に住し、聰明解達にして大智慧あり。其一夫人、名を有相と曰ふ。姿容奇特、兼ねて德行あり。王甚だ愛敬し、情最寵厚なり。時に彼の國法、諸の王たる者は自ら彈琴せず。爾の時夫人己が愛寵を恃み、王に白して言さく、願はくは爲めに琴を彈ぜよ、我れ王の爲めに舞はんと。王意に免さず、琴を取つて彈ず。夫人卽ち手を擧げて舞ふ。王素相を善くす、夫人の舞を見て、其死相を覩、尋いで卽ち琴を捨て、慘然として長歎す。夫人卽ち王に白して言さく、我が今の如きは王の恩寵を受け、敢て曲室に於て王に求めて琴を彈じ、我れ自ら起つて舞ひ、用つて共に樂みを爲す。何の不適あつてか琴を放ちて歎ずるや。願はくは王隱すなく告語せられよと。時に王答へて言はく、我が長歎する所、爾婦人の聞くべき所に非ず。夫人白して言さく、我が今王に奉ずること至誠無二、若し理はざるあれば、宜く應に告勅すべし。慇懃にして已まず。王實を以つて答ふ。我が爾に於ける豈異りあるを容さん。爾向きに起つて舞ふ。死相外に現はる。其餘命を計るに七日に過ぎず、是れに由るが故に琴を捨てゝ歎ずと。夫人聞き已つて甚だ憂懼を懷き、卽ち王に白して言さく、王の所說の如くば命遠しと云はず。我れ石室比丘尼の說を聞くに、若し能く信心出家を一日すれば、必ず天に生ずることを得と。是れに由るが故に、我れ出家せんと欲す。願はくは王聽許せよ、道次に及ぶを得んと。時に王情重く恩愛息まず、夫人に語つて言はく、六日の頭に至つて乃ち當に爾の出家入道を聽すべし。意相免れず、遂に六日に至る。王夫人に語る。爾善心あつて出家せんことを求む。若し天に生ずるを得ば、必ず來つて我れを見よ、我れ乃ち爾に聽して出家せしむるを得ん。是の誓を作し已つて、夫人に許可し、便ち出家を得八齋戒を受く。卽ち其日に於て多

く石蜜漿を飲み、腹中絞結し、七日の晨に至つて便ち命終す。是の善緣に乘じて天上に生ずるを得て卽ち三念を生ず。一に本是れ何の身たるかを念憶す。二に本緣何の功德を修するかを念ひ、三に現今定んで是れ天身を念ず。是の念を作し已つて具さに本緣並に王との誓を知る。先誓を以つての故に王の所に來詣す。爾の時に光明王宮に遍滿す。時に王問ふて言はく、今此光瑞、是れ誰が爲めなりや。願はくは告示せられよ。時に天答へて言はく、我れは是れ王の婦有相夫人なり。王是の語を聞き、願はくは來つて座に就け。天之に答へて言はく、我が今の如き、王を觀るに臭穢にして親近すべからず、我れ先誓を以つての故に來つて王を見ると。王之を聞き已つて、心卽ち開悟して是の言を作さく、今彼の天は本是れ我が婦なり。善心あるに由つて道に入ることを求索し、出家一日、尋いで卽ち命終す。是の功德に由つて天に生ずるを得たり。神志高遠にして鄙賤せらる。我れ今何が故に出家せざる。我れ曾て天の一爪甲は閻浮提に直ひすと說くを聞く。況んや我が一國、何ぞ貪惜するに足らん。是の語を作し已つて、子の王軍を立て用つて王位を嗣ぎ、出家學道して阿羅漢を得たり。爾の時に王軍王國に統臨し已つて讒佞を信用し、國事を恤へず。優陀羨王、其子及び國人を愍念し、來つて敎化し、勸めて善を修せしめんと欲す。時に王軍王、父の將に至らんとするを聞き、踊悅無量なり。一切に勅して路に往いて迎へしめんと欲す。時に諸の佞臣遣はさるゝを畏懼し、卽ち王に白して言さく、王の如き今は首に天冠を戴き、師子座に坐す。師子の座、法に再坐なし。若し父王を迎へば、還て王位に復し必ず王を殺さん。王若し立たば父王を害すべし。時に王軍王心に憂愕を懷き、疑惑轉た生ず。勸諫して已まず。遂に惡意を作し、梅陀羅を慕り往いて其父を殺さんと。時に梅陀羅旣に募を受け已つて、父王の所に到り、頭面に頂禮して之に白して言さく、我れ昔より來た亦恩遇を受け父王の所に於て實に逆心なし。今遣はされ來つて父王を殺さんとす。若し害を加へざれば必ず誅罸を受けんと。父王答へて言はく、我が今來るは爾が王を化せんと

【一】梵語チャダラにして屠殺者の種族なり。

欲す、豈身を愛す可けんや。爾に誅せられしめん。便ち項を引いて長さ十餘丈ならしめ、梅陀羅に語り、爾が斫截に隨はんと。時に梅陀羅力を極めて之を斫るに、刀傷くること能はず。父王愍むが故に神力を借て梅陀羅に語る。爾今我が爲に往いて爾が王に語れ。爾今父を殺し復た羅漢を害し、二逆罪を作る。好く懺悔を加へば罪輕きを得べし。時に梅陀羅既に勅を受け已つて、刀を擧げて復た斫り、父王の首を斬り、齎らして其國に向ふ。時に王軍王父の頭を見已る。顏色變ぜず、父の得道して王位を貪らざるを知る。悔情既に生じ、心に懊惱を懷き、啼哭悶絶すること良久うして乃ち蘇り、梅陀羅に父王の所説を聞く。時に梅陀羅父王の勅を以つて王に白うす。爾既に父を殺し復た羅漢を害し、是の二逆罪を作る。須く好く懺悔すべしと。是の語を聞き已つて倍增斷絶す。而して是の言を作す。今我が父王羅漢道を得たり。何ぞ國を貪る有らん。而るを我れ父を殺さしむと。時に彼の佞臣、王の害を加ふるを懼れ、王に白して言さく、世界の中何ぞ羅漢あらん、王空語を信じ、用つて自ら苦惱すと。時に王答へて言はく、今我が父の頭、死來多日顏色變ぜず、道を得るに非るよりは何に由てか是れ有らん。又我が父の時、大臣婆咗師、優波咗師、普く皆出家して羅漢道を得、種種の神變は我等の見る所、此に於て涅槃し、骨を收め塔を造る今現在の如し。云何が無しと謂ふや。佞心答へて言はく、世の幻呪術及び藥力亦能く神變す。彼の二臣は是れ羅漢の比に非ずと。更に數日にして王に證驗を示さんと、是の語を作し已つて便ち塔所に於て二孔を造作し、各一猫を置き、塔に於て養食す。喚ばつて咗師出でよと言へば、猫出でゝ肉を食し、語つて還り去らしむれば、還つて孔に入る。是の如く教へ猫を便ち調伏す。而して王に白して言さく、今王咗師等を見んと欲するや。願はくは往いて共に看んと。王卽ち駕を命じ、往いて塔所に至る。時に彼の佞人便ち咗師出で來れと喚ぶ。猫卽ち孔を出づ。語つて還り去らしむれば猫便ち孔に入る。王既に見已つて迷心遂に盛にして意の所作に任じ罪福を信ぜず。時に王軍を出し遊戲迴還、其路次に於て尊

者迦栴延を見るに、靜處に端坐し、坐禪入定す。時に王之を見て便ち惡心を生じ、手自ら土を把り、用つて尊者を坌す。左右に語つて言はく、爾等我が爲めに各各土を以つて迦栴延を坌せと。時に土聚つて遂に尊者を沒す。一大臣あり、心に三寶を信じ、後に至つて斯事を聞見し大懊惱を極む。卽ち尊者の爲めに其土を除去し復た諸人に語る。我を念ふ者あらば此土を除けと。爾時に尊者琉璃寶窟に坐し、神儀鮮澤にして汚坌の色なし。大臣歡喜して頭面に足を禮し、尊者に白して言さく、今王無道にして是の惡逆を作す、善惡必ず報ぜん、何ぞ患なきを得ん。尊者答へて言はく、却後七日、天當に土を雨して、其城內に滿ち、積んで土山と爲り、王及び人民盡く皆覆滅すべしと。大臣聞き已つて心に憂惱を懷き王に白す。又自ら計を設け、地道を造作して城外に出向す。七日旣に滿ち、天香華珍寶衣服を雨らし、其城內歡喜せざるは無し。佞心王に白す、今此瑞は皆王の德に由る。無智の人反つて誹謗を生じて當に土を雨すべしと云ふ。而して珍寶を獲、此の如き誑惑前後一に非ず。惡緣の後、善瑞あるを聞き、皆來り雲集す。時に城の四門、冥緣力の故に盡く鐵關を下し、逃隱するに地なし。天便ち土を雨し、滿城山積す。然るに彼の大臣、心ある者と共に地道を出で、尊者の所に向ひ、之に白して言さく、惟ふに此城一日に覆沒す。土を雨して山と成り君民命を拜す。先に何の緣あつて同じく此害を受くるや。爾の時尊者、大臣に語つて言はく、諦かに聽け、諦かに聽け。當に爾が爲めに說くべし。乃往過去若干劫、時に其國內に長者の女あり、樓上に住し淸朝洒掃するに、掃糞を除棄して、比丘の頭に置き、懺悔を知らず。會好夫を得たり。爾時に諸女、女に問ふて言はく、爾ぢ何の緣に因つて此良匹を得るやと。時に女答へて言はく、更に異事なし、我れ樓を掃ひ、比丘の頭を坌すに由る。是れに由るが故に好壻に値遇す。諸女聞き已つて謂はく、其言の如くば競ふて共に土を聚め、用つて比丘を坌し、是の業緣に由て普く斯報を受けんと。是の語を作し已つて功德天と共に花氏城に向ふ。昔より以來盧留城と彼の城と迭互に盛衰し、此國

既に滅びば、彼城復た盛なり。是れに由るが故に尊者等花氏城に向ふ。好音聲の長者、其界首に於て尊者を供養す。爾時長者素自ら殷富なり。尊者家に到るに財寶豐溢して前より殊勝なり。既に城に至り已る。尊者迦栴延佛に白して言さく、好音聲長者は何の因緣あつて好音聲あり、巨富無量財寶盈溢せるや。佛言はく、乃往過去一長者あり。日日人を遣はして五百の辟支佛を請じ、家に就て食を設く。彼の使人常に狗を將いて往く。會事の緣あつて、往いて請ずるを得ず、狗時節に依り、獨り僧坊に詣り、僧に向つて吠ゆ。時に辟支佛等是の言を作す。俗內事多く能を脫し過ぎ忘る。向きの狗來り吠え、以つて我等を喚ぶ。便ち相將ひて長者の家に詣る。爾時長者甚だ大に歡喜し、如法に供養す。爾時の長者は我身是れなり。爾時の使人は阿那律是れなり。爾時の狗は好音長者是れなり。是れに由るが故に世世好聲にして財寶多し。是の故に智者、應に福田所に於て懃力供養すべし。

百十七　羅睺羅の因緣

我れ昔曾て聞く。佛初めて出家の夜、佛子[一]羅睺羅始めて胎に入る。悉達菩薩六年苦行して菩提樹下に於て四魔を降伏し、諸の陰蓋を除き、豁然大悟して無上道を成じ、十力四無所畏を具足し、十八不共の法を成就し、四辯才を具し、諸度を悉くして彼岸に到ることを得、一切諸佛の法を解了し、諸の聲聞緣覺の上に過ぐ。初成道の夜羅睺羅生まる。擧宮の婇女咸く皆慚恥し、大憂惱を生じて是言を作す。怪哉大惡耶輸陀羅、是非を慮らず、輕しき所作あり。自ら愛愼せずして、我が擧宮をして都て染汚せられしむ。悉達菩薩久く已に出家す。今に於て卒かに此子を生む。甚だ恥辱と爲す。時に釋女あり、名を電光と曰ふ。是れ[二]耶輸陀羅が姨母の女なり。胸を椎ち髀を拍つて瞋恚呵罵す。耶輸陀羅汝尊長の所親として、何を以つて自損するや。悉達太子出家學道して、已に六年を

【一】梵語ラーフラにして日蝕より名を得たり。

【二】梵語ヤショーダラーにして悉達太子の妃なり。

經て此小兒を生む。甚だ時に非ずとたす。誰に從つて得るや。爾ぢ慚愧なくして、我が種族を辱しむ。種族を數へざれば惡名を獲ず。悉達菩薩大功德あり、名稱遠く聞ゆ。汝今云何ぞ彼を護惜せずして方に恥辱するや。淨飯王爾時に當り、樓閣の上に在り、此大地六種に震動し奇異の相現ずるを見る。白淨王是の相を見已つて菩薩の死を謂ひ憂箭心に入る。大苦惱を生じて是の言を作す。我が子戒香四遠に充塞し、相好莊嚴蓮花の鬘の如し。今死日の爲に乾枯せらる。戒深く根を固め、慚愧の枝葉、名譽の香、大悲厚蔭なり。我が子は樹の如し。死象の爲めに蹋まる。大さ金山の如く衆寶莊嚴す。我が子は金山の王相好莊嚴身、無常金剛杵の爲めに碎壞せらる。猶大海の中に衆寶を滿つるが如く、摩竭魚の海水を擾亂するが如し。我が子の大海亦復た是くの如く、死摩竭魚の爲めに擾惱せらる。猶滿月を衆星圍遶するが如し。我が子是くの如き無量の功德、相好莊嚴す。今無常羅睺羅の爲めに呑まる。我が種大丈夫丈夫盧越眞淨是くの如き等の王より相續して此に至る。今日將に種が種を斷絕せざらしめんとす。特に我が子の轉輪聖王とならんことを望む。或は佛道を成じて今に於て寧ろ死すべきや。設し我子を失はば憂愁憔悴して、命必ず全からざらん。其出家法服持鉢して、甘露を敷演せんことを冀ふ。此の如き種種の諸事、必ず見ることを得ず。子を憶ふを以ての故に種種の愁思之を思惟す。時に宮中に聲を擧げて大に哭するを聞き、王倍驚怖し、太子の死を謂ひ、前走の使女に問ふて言はく、是れ何の哭聲ぞ、我が子の死に非ずとするや。女王に白して言さく、太子死せず、耶輸陀羅今一子を產む。宮を擧げて慚愧す。是れを以つて哭するのみ。王是の語を聞いて倍憂惱を增し、聲を發して大哭し、聲を揚げて大喚す。唱へて言はく、怪哉極めて醜辱たり。我が子出家して以つて六年を經たり。云何ぞ今日方に子を生むや。時に彼の國法、擊鼓一下すれば一切の軍集る。九萬九千の諸釋悉く會す。即ち耶輸陀羅を喚ぶ。時に耶輸陀羅白淨の衣を著け、兒を抱いて懷に在り、都て驚怕せず。面に小垢あり、親黨の中に兒を抱いて立つ。時に杖を執

る釋、色を作し瞋忿して耶輸陀羅を罵る。叱爾ち凡鄙愧づべきの甚し。我が種族を辱しめ、何の面目あつて我等が前に立つや。釋あり[三]毘紐天と名く。是れ耶輸陀が舅、耶輸陀羅に語る。凡鄙嬰愚爾ちに過ぎたるはなし。舅種族に宜く好く實を語るべし。竟に何處にして此子を得たりや。耶輸陀羅都て慚恥なく正直にして言はく、彼の出家釋種に從ふ、名を悉達と曰ふ。我れ彼の邊に從つて此子を得たりと。[四]悅頭檀王是の語を聞き已つて瞋恚して言はく、所生を護らず、便ち異語を作す、若は實若は虛、諸釋の知る所なり。我が子悉達本家に在る時五欲あるを聞くも耳尙聽かず。況や欲あつて子を生ずべきをや。斯くの如きの言言、深く鄙媟と爲す。誰に從つて子を得て、我等を毀辱するや。實に是れ諂曲にして正直の法に非ず。我が子悉達、昔家に在りし時、衆の珍寶餚饍都て染著なし。況んや今苦行し日に麻米を食するをや。此謗毀を以つて、淨飯王極めて大に瞋恚し、諸釋に問ふて言はく、今云何して苦毒殺害すべきや。復た釋あつて言はく、我が意の如くば當に火坑を作りて、火中に擲置き、其母子をして都て遺餘なからしむべしと。諸人皆言はく、此事最も良しと。卽ち火坑を掘り、[五]佉陀羅木を以つて坑中に積み、火を以つて之を焚く。卽ち耶輸陀羅を將ひて火坑の邊に至る。時に耶輸陀羅火坑を見已つて、方に大に驚怖す。譬へば野鹿の獨り園中に在つて四向顧望するに、恃怙すべき無きが如し。耶輸陀羅便ち自ら呵責す。旣に自ら罪なくして斯の禍患を受く。遍く諸釋を觀るに己を救ふ者なく、兒を抱いて長嘆す。菩薩を念じて言はく、汝慈悲あつて一切を憐愍し、天龍鬼神咸く汝を敬ふ。今我れ母子祐助薄く、過なくして苦を受く。云何ぞ菩薩見て意を留めざる。何が故に我が母子を救はさるや。今日の危厄は諸天善神我れを憶ふ者なし。菩薩昔日、衆釋の中に處するに、猶滿月の衆星に在るが如し。而も今は更に一見せず。卽時に佛の方所に向つて一心に敬禮し、復た諸釋を拜し、合掌して火に向ふ。而して實語を說く。我が此兒は實に他に從つて斯子あるにあらず、若し實にして虛しからず、猶六年我が胎中に在らば、火當に消滅して、

【三】梵語ヴヰシヌデーワなり。

【四】梵語スドーダハーナにして淨飯王のことなり。

【五】梵語カハディラにして檐木のことなり。

火に我が母子を燒害せざるべしと。是の語を作し已つて即ち火中に入る。而るに此火坑變じて水池と爲る。自ら已身を見るに、蓮花の上に處して都て恐怖なく、顏色和悅なり。掌を合せ諸釋に向つて言はく、若し我れ虛妄ならば應に即ち燒死すべし。今此兒實に菩薩の子なるを以つて、我が實語を以つて火患を免るるを得たりと。復た釋あつて言はく、其形相を視るに、驚かず畏れず。此を以つて之を推すに、必ず是れ實なるを知る。復た釋あつて言はく、而も此火坑變じて清池となる。是を以つて之を驗するに、其過なきを知る。時に諸釋等、耶輸陀羅を將いて宮中に還歸し、倍恭敬讃嘆を加へ、爲めに乳母を索めて其子に供事すること猶生るる時の如く、等くして異りあることなし。祖の白淨王、愛重深厚にして、羅睺羅を見ざれば終に食すること能はず。若しは菩薩を憶ひ、羅睺羅を抱き、用つて愁念を解く。略して之を言ふ。六年を滿じ已つて、白淨王佛を渴仰し、使を遣はして佛を請す。佛憐愍し給ふが故に本國に還歸し、釋の宮に來到す。佛千二百五十の比丘に變じ、皆佛身の如く、光相異ることなし。耶輸陀羅羅睺羅に語る。誰れか是れ汝が父、往て其邊に到れ。時に羅睺羅佛を禮すること已に訖つて、正に如來左足の邊に在つて立つ。如來即ち無量劫の中に修する所の功德相輪の手を以つて、羅睺羅の頂を摩す。時に諸釋等咸く是の念を作さく、佛今猶愛私の心ありと。佛諸釋の心の所念を知ろし召して、即ち偈を說いて言はく、

我れ王眷屬及び所生の子に於て、　偏愛の心あることなし。
但だ手を以つて頂を摩するも　我れ諸の結使を盡し、
愛憎永く除こり盡きぬ。　汝等疑ひを懷くこと勿れ。
子に於て猶頂を生ず、　此亦當に出家して
重ねて我が法子となるべし。　略して其功德を言はば、
出家して眞の道を學び、　當に阿羅漢と成るべし。

百十八　老婆羅門諂僞を問ふ緣

一切の狡猾諂僞詐惑は外狀直きに似て、內に姦欺を懷く。是の故に智者應に眞僞を察すべし。往昔の時の如き、婆羅門あり、其年既に老ひて少婦を娉娶す。婦夫の老ゐたるを嫌ひ、傍婬して已まず。欲心既に著しく、夫を誑かして會を設け、諸の少壯婆羅門等を請ず。夫姦あるを疑つて、肯へて延致せず。時に彼の少婦種種の計を設け、用つて其夫を惑はす。老婆羅門の前婦の子火中に墜つ。爾時少婦眼に隨ちしむる看て、而も捉取へず。婆羅門言はく、兒今火に墜つ、何故に捉へざるや。婦卽ち答へて言はく、我れ少きより來、唯已が夫に近づき、曾て他の其餘の男子を捉へず。云何が卒かに我れに此男子の小兒を捉へしめんと欲するや。老婆羅門是語を聞き已つて、其言の如く謂ひ、信を婦に明す。故に便ち其家に於て大會を設け、婆羅門を集む。爾時少婦便ち共に交通す。老婆羅門は此事を聞き已りて心に忿恨を懷き、卽ち寶物を取りて衣褊に盛り裹み婦を棄てゝ去れり。舍を離れて既に遠し、其路中に於て一婆羅門を見便ち共に伴をなし、其日暮に於て一處に共宿し、明清旦に至り復共に前行し主人の舍を離るゝこと漸漸に遠からんと欲す。彼婆羅門は老婆羅門に語りて言く、昨の宿處に於て一草葉ありて我衣裳に著けり、我少より以來世の物を侵すことなし、葉の衣に著き來るは我甚だ愧となす、草葉を還し彼主人に歸せんと欲す、爾らば並に停住して我往還を待てと。老婆羅門は是語を聞き已りて深く其言を信じ、倍愛敬を生じて住し待つべきことを許せしかば、彼婆羅門は詐りて草葉を捉り主人に還さんと欲し、未だ遠からざる間の一灌壑に入り腹を偃して臥し、良久しくして乃ち還り、云く草葉を以て主人に還し竟ぬと。老婆羅門は信じ以て然りとなし、倍增して愛重せり。老婆羅門時に便利し大小便を洗ふに因り、卽ち寶物を以て用て之を寄せたり。此人尋ひで後其珍寶を齎し便ち棄て走り去りにける。老婆羅門は己が物を偸めるを見て、彼

人を嘆惋し、又自ら感傷し憂愁懊惱惆悵して路を進めり。

小しく復前行して一樹下に憩ひしに、一鸛雀の口中に草を銜めるを見、諸鳥に語りて言く、我等當に共に相ひ憐愍すべしと、一處に集會して共に住止せり。

爾時に諸鳥は皆其言を信じて來り聚集したりき。時に此鸛雀は衆鳥等を伺ひしが、一切行きし後、他の巢窠に就き卵を啄き汁を飲み他の子を殺し食せり。諸將に至らんとせしかば更に復草を銜めり。衆鳥既に還り此事あるを見て咸く皆瞋り責むるに、而も此鸛雀は言を拒み我不なりと。時に諸の鳥輩は其諂欺を知り悉く捨て去れり。

此樹下に於て更に少時を經て、一外道出家の人を見る、身に納衣を服し安に行き徐に歩み、去れ去れ蟲生よ。老婆羅門之に問ふて言く、何を以て並に行き口に去れ去れと唱ふるやと。外道答へて言く、我出家の人なれば一切を憐愍し蟲蟻を傷くることを畏る、是故に爾るのみと。時に波羅門は其出家の口より此言を吐くを見て深く篤信をし、卽時に尋ひで逐ひ往き其家に至り、其暮に於て宿り、婆羅門に語らく、我は須らく閑靜にして自ら心を修すべし、爾れば別屋に止り彼に於て臥せり。時に婆羅門は行道を聞くを喜び、心に慶悅を懷けり。夜の後分に至り但作樂歌舞の聲を聞きしかば便ち出でゝ之を看るに、乃ち出家外道の室に住するを見る、一の地孔あり中より婦女出でゝ與に共に交通し、若し女人舞へば外道琴を彈じ、若し外道舞へば女人琴を彈ぜり。此事を見已りて自ら念言すらく、天下の萬物は人獸を問はず一も信ずべき者なし。偈を說き言ふて曰く、

他の男子を捉へず　草を以て主人に還し
鸛雀詐りて草を銜み　外道虫を傷くるを畏る
是の如き諂僞の語は　都て信ずべき者なし。

爾時に國內に一長者あり、居家巨富にして諸の珍寶多かりしが、其一夜に於て多く財物を失せり。時に王聞き已りて長者に問ふて言く、誰か有りて來去し亡失せしむることを致せしやと。長者は王に白さく、初より姦雜してともに往返するものなし、唯一婆羅門のみ長く共に出入せり。身を清め己を潔くして世の物を犯さず、草葉すら衣に著かば猶其主に還せり。此より已外は更に異人無しと。王是を聞き已りて婆羅門に攝して之を詰問す。爾時に長者は往きて王に白して言さく、彼人の淨行は世に之れ比無し、如何してか一旦に拘し執へらるゝや、寧ろ財物を失するとも願くば王放ち捨てよと。

時に王答へて言く、我昔曾て聞きし是の如き比あり、外清淨を詐りて內に姦惡を懷くことあり。爾憂惱すること勿れ、我覈實を聽けと。是語を作し已りて卽便ち檢究せしに、辭窮し理屈し實に依りて首に伏せり。

是故に智者は世に處すること鏡の如く、善く眞僞を別ちて世の導師となれ。

百十九　婆羅門の婦が姑を害せんと欲する緣

昔婆羅門ありき。其婦少壯にして姿容艷美なり。欲情深く重くして志婬蕩に在り、姑在るを以て意を遂ぐることを得ず。密に姦謀を作して姑を傷害せんと欲す。詐りて孝養をなし以て夫の意を惑し、朝夕恪懃し供給乏きことなかりき。其夫歡喜し其婦に謂ふて言く、爾今供給して孝婦となることを得たり。我母の老を投ずるは爾の力を得と。婦は夫に答へて言く、今我世の供は資養幾もなし、若し天の供を得ば是願足らん。頗し妙法あらば天に生ずべきや不や。夫は婦に答へて言く、婆羅門の法は巖に投じ、火に赴き、五熱にて身を炙る。是の如き事を行ずれば便ち天に生ずることを得んと。婦は夫に答へて言く、若し是法あらば姑は天に生じて自然供を受くべし、何ぞ必ず孜々とし

て世の供養を受けんやと。是語を作し已りて、夫は其言を信じ、便ち野田に於て大火坑を作り、多くの薪柴を積み極めて然え熾ならしめ、乃ち坑の上に於て大會を設け、老母の扶け將ひて親黨を招集し、婆羅門衆盡く會所に詣り、鼓樂絃歌し歡を盡くして日を竟ふ。賓客既に散じ獨り母と共に住す。夫婦母を將ひて火坑の所に詣り、母を推して坑に投じ、顧ずして走る。時に火坑の中に一小隥あり、母は隥上に墮ちて竟に火に墜ちず。母は尋ひで坑を出でたりしが日已に闇に逼れり。來りし時の跡を按じて還り家に向はんと欲し、路に叢林を經て所在陰黒なり、虎狼羅刹鬼等を畏懼れて卑樹に攀ぢ上り、以て畏るゝところを避く。會賊人多くの財寶を偸み群黨相ひ隨ひ樹下に在りて息ふに遇ふ。老母畏懼れ怖れて敢て動かざりしが、自ら制すること能はずして樹の上にて欬す。賊欬聲を聞き、謂へらく是惡鬼ならんと、財物を捨棄てゝ各皆散り走れり。

既に天明に至りしかば老母は泰然として畏懼するところなく、卽便ち樹を下りて財寶を選み取り、香瓔珠璣金釧耳璫など眞に奇なる雜物を滿ち負ふて家に向へり。夫婦は母を見て愕然と驚懼し、是起尸鬼なりと謂ひ敢て來り近づかざりき。母卽ち語りて言く、我死して天に生じ多くの財寶を獲たりと。而して婦に語りて言く、香瓔珠璣金釧耳璫は是汝が父母姑姨姉妹用て來り汝に與へよと。吾老弱なるに由り多く負ふこと能はず、汝に語り來らしめよ、意を恣にして與ふべしと。婦は姑の語を聞き欣然として歡喜し姑の法の如くし身を火坑に投ぜんことを求め、而して夫に白して言く、老姑今は火坑に投ぜしに緣りて此財寶を得たり、其力弱きに由りて多く負ふこと能はざりきと、若し我去らば必定得ること多からんと。夫は其言の如く爲に火坑を作り、身を投じて燋爛し卽ち永く沒せり。

爾時に諸天而も偈を說きて言く、

夫人の貪ぶ所に於て　　惡意を生ずべからず

婦の姑を害せんと欲するが如く　反つて自ら焚きて身を滅せり。

百二十　烏梟怨を報ずるの緣

昔烏と梟とありき。共に相ひ怨憎せり。烏は晝日を待ち梟の見ること無きを知り、群梟を踏み殺して其肉を噉み食ひ。梟は便ち夜に於て烏の眼闇なるを知り、復群烏を啄きて其腸を開き穿ち亦復噉食せり。晝を畏れ夜を畏れ竟に已むこと有ること無かりき。

時に群烏中に一智烏あり衆の烏に語りて言く、已に怨み憎みの爲に救ひ解くべからず、終に相ひ誅滅せば勢ひ兩ながら全からじ、宜しく方便を作して諸の梟を殄滅せん、然る後我等は歡樂を得べし。若し爾らずば終に爲に敗られんと。衆の烏答へて言く、汝が說くところの如くんば當に何方を作して讎賊を滅すことを得べきやと。智烏答へて言く、爾等衆烏よ但共に我を啄き我羽毛を拔き我頭を啄き破れ、我當に計を設くべし、要す殄滅せしめんと。卽ち其言の如く、燋悴せる形容にて梟の穴の外に向ひて自ら悲鳴せしかば、梟は聲を聞きて卽ち出で語りて言く、今爾は何故に頭惱を破り傷き毛羽毀ひ落ち、我所に來至りて悲しき聲にて極めて苦しめるや。何を說かんと欲するやと。烏と梟に語りて言く、衆の烏は我に讎して生活することを得ず、故に來りて相ひ投じ以て怨惡を避くるなりと。時に梟は憐愍して養畜せんと欲せり。衆の梟は皆言く、此は是怨家なり親近すべからず、何に緣りて養畜し、以て怨敵を長ずるやと。時に梟は答へて言く、今困苦を以て來り見投じ造り、一身孤單なり竟に何をか能く爲さんやと。遂に便ち畜養し殘肉を給與せり。

日月轉久しくせしかば毛羽平復せしかば、烏は詐りて歡喜し微に方計を作し、乾ける樹の枝幷に諸の草木を銜みて梟の穴の中に著き、恩を報ずるが如きに似たり。梟は烏に語りて言く、何を用て是をなすやと。烏卽ち答へて言く、孔穴の中純ら是冷石なれば、此草木を用ひ以て風寒を御ぐなり

と。梟は以て爾りと爲し默然として答へず。而るに烏は是に於て卽ち、求めて孔穴を守り、詐りて使令に給し用て恩養に報ひたり。時に會暴雪寒風猛く盛なりしかば、衆の梟は率爾に來りて孔の中に集れり。烏は其便を得尋ひで歡喜を生じ、牧牛の火を銜み用て梟の孔を燒きしかば、衆の梟は一時に是に於て殄滅せり。

爾時に諸天は偈言を說きて曰く、

諸の宿嫌ある處には　　體信を生ずべからず
烏の詐りて善に託し　　衆の梟の身を焚き滅すが如し。

百二十一　婢の羊と共に鬪ふの緣

昔一婢あり稟性廉謹にして、常に主人の爲に麨麥豆を典せり。時に主人の家に一羯羝あり、空を伺ひ逐ひ便ち麥豆を噉食せしかば、斗量折損し主の爲に瞋られ、已に信を取らざること皆羊噉に由る、是に緣るが故に婢常に嫌ふに因りて每に杖を以て捶し、用て羯羝を打てり。羝も亦怒を含み來りて婢を觝觸す。此の如く想ひ犯すこと前後一にあらず。婢因つて一日空手に火を取れり、羊は杖無きを見て直に來り婢に觸る。婢は急に緣るが故に、取る所の火を用つて羊の脊の上に著けしかば、羊は火熱を得て所在に觸れ突き村人を焚燒し、延びて山野に及べり。

時に山中の五百の獼猴は火來り熾盛なりしかば避け走るに及ばず、卽ち皆一時に火に燒かれて死せり。

諸天見已り而も偈を說きて言く、

瞋恚し鬪諍せるの間　　中に於て止るべからず
羝羊の婢と共に鬪ひしに　　村人獼猴も死したりき。

雜寶藏經卷第十（終）

修利婆折斯 232
十奢 125
十二頭陀行法 6
上界 10
淨眼陀羅尼 240
眞檀木 134
嘶 108
盡 12

—ス—

隨信行 (Saddhānusāri) 107
隨法行 (Dhammānusāri) 107

—セ—

施羅 (Sela) 14
蛇旬 75
刹利衆 (Khattiyaparisa) 106
旃遮婆羅門 165
旃陀羅 296
旃檀罽尼吒 259
栴檀 243
扇羅 125
善生 (Sujatā) 89
善來 22

—ソ—

梳頭の侍者 49
蘇馱夷 206
想知滅 93
象舍利弗 (HatthiSāriputta) 8
孫他利 172
孫陀利 265

—タ—

多羅 (Tāla) 45
多薩阿竭 (Tathā gata) 5
蚍旬 96
馱驃 158
大愛道 92. 207
大天園 (Makhādevanbavana) 44
提婆達多 185
提婆延 141
噡蔔 184
斷事 200
彈指之頃 37

—チ—

長生 (Dīghāyu) 49
調達 55
珍浮樓 232
痛 12
頭陀苦行 166
甝 61

—ト—

突吉羅 256
兜術天 140
甝 61
饕餮 119

—ナ—

那伽斯那 289
那術他 (nahuta) 97
那羅延 125. 190
南方山 151
難陀王 288

—ニ—

二果 5
尼拘陀樹 242
尼拘屢精舍 265
莅 (Nimi) 52

—ノ—

禯厭 117

—ハ—

波斯匿王 275
波頭摩華 185
波羅奈 144
婆伽婆 237
婆伽 173
婆伽梵 173
婆羅含 (Valāhaka) 47
婆羅陀 125
婆羅門衆 (Brāhmaṇaparisa) 106
婆羅門之行 (Brahumaṇakaraṇa) 27
八關 52
跋耆 (Vajjī) 44
跋提婆羅 (Bhaddāli) 23
般遮干瑟 200
般遮羅國 275
般闍迦 286
槃骂讖企犍闥婆王子 231
盤頭 164

—ヒ—

比像 22
比提醯國王 155
比圖醯 272
毘沙門 233
毘離舍摩訶婆那園 (Vesāli-mahāvana) 106
毘多羅樹 151
毘提訶 (Videha) 44
毘提醯山 231
毘提醯王家 148
毘婆尸 164
毘紐天 301
毘婆尸佛 256
毘摩天 285
白、黒 15
白衣の行 8
嬪伽羅 286

—フ—

浮圖 220
富蘭那 254
弗迦羅城 201

弗奢 223
弗那 206
分陀拔華 187

—ホ—

步闍拔提 233
法行城 8
放畑 1
放牛兒・放牛人 (Gopa-laka) 1
胞胎 11
梵摩達王 129.148

—マ—

摩訶優池地獄 174
摩訶羅 243
摩刷 1
摩多羅天 232
摩利 (Mallikā) 117

—ミ—

彌多比丘 159
彌勒 208
蜜喉羅 (Mīthila) 48

—ム—

無有愛 (abhavataṇhā) 13
無垢 206

—メ—

馬鳴菩薩 260
馬邑村 (Assapura) 27
滅怨惡 125
面王比丘 (Mogharāja) 26

—モ—

茂羅破群比丘 (Moliyaphaggana) 63
網 45

—ヤ—

耶奢 206
耶輸陀羅 299
夜叉 251
夜兒達多 251

—ユ—

舐 61

—ヨ—

欲愛 (Kāmataṇhā) 13

—ラ—

羅睺求 128
羅睺羅 299
羅摩太子 125
羅漫王子 125
賴提 160

—リ—

離越 (Revata) 6
離越阿羅漢 159

—ロ—

六齋之日 52
六十二見 52

——阿含部十本緣部一索引終——

索　　引

（頁數は通頁を表す）

—ア—

阿闍梨 153
阿須倫衆 233
阿那波那山 265
阿那律 166
阿難 127
阿恕伽華 218
阿羅訶 233
阿利那 256
阿練行 171
庵婆羅林 231
惡生王 278

—イ—

維那 198
一食 (ekāsanabhojana) 23
一商那天 234

—ウ—

于婆賀 (uposatha) 46
有愛 (bhavatauhā) 13
烏耆延 145
烏提延王 141
優塡王 166
優陀夷 (Udāyī) 23.24
優鉢羅 217
優鉢羅華 187
鬱單越 191
鬱羅延城 283

—エ—

悦頭檀王 301
睒摩迦 129
閻浮提 139

—オ—

應器 (Patta) 56
鴦伽村 (Aṅga) 27

—カ—

迦葉佛 137
迦栴延 278
迦旃延 (Kaccāyana) 6
迦尸國 129
迦尸國王 155
迦步 242
迦陀羅 248
迦留陀夷 (Kaludāyī) 23
迦比羅衞國 264
歌羅羅 290
過差 34
學地 88
姟 97
歡喜園 207

—キ—

危脆 113
祇夜多 256
耆闍崛山 229
吉利鳥 191
佉陀羅 301
經籍 14
喬婆羅 280
憍尸迦 234
憍陳如 208
憍梵波提 206
行愚 1
形壽 11
欽羅衣 281

—ク—

仇伽離 174
拘伽離 158
拘物頭華 187
拘留沙 (Kurū) 8
拘屢者 144
拘樓舍 239
瞿曇 207
瞿 61
犂牛 1

—ケ—

灰河地獄 (Kharodakānadi-niraya 115
罽夷羅 201
罽賓 159
罽那 200
劍磨瑟曇 (Kammāsa-dhamma) 8
乾陀衞國 168. 200
賢 148
賢劫 (bhaddakappa) 36
諦苦之法 5

—コ—

居荷羅國 136
五の逆惡 32
向阿羅漢 107
更樂 12
劫婆育衣 (Kappāsacīvara 76
劫比 (Kappaka) 49
恒河 (Gangā) 69
恒水 69
黑優陀夷 (Kaludāyī) 23
穀 45
獄卒 (Nirayapāla) 57
金毘羅鬼 (Kumbhīra) 33

—サ—

作門師 171
齊畔 66
三十二相 19

—シ—

尸婆具沙天人 280
四受 13
翅甯 (Keṇiya) 15
師子大將 (Sihasenāpati) 106
慈心解脫 (mettā cetovimutti) 41
食眞 102
識癡稚 232
七生往返 107
悉達 31
沙呵 241
沙彌尼 (Sāmaṇerī) 95
沙門衆 (Samaṇa parisa) 106
舍衞國 127
舍指 238
舍利弗摩提 219
車頭城 240
差錯 92
差摩 240
釋氏國 240
釋種子 9
釋提桓因 128
釋摩男 211
宿行 9
須陀味 191
須拔陀羅 270
修多羅 240

昭和六年五月二十五日印刷
昭和六年六月　一　日發行

不許複製

國譯一切經 阿含部十 本緣部一

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝(二)一一六番
(三)〇四〇番

製本所　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 4470